
桶川市

前領家遺跡

一般国道17号上尾道路新設工事に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告

2017

国土交通省 関東地方整備局

公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



1 前領家遺跡出土の縄文土器



2 前領家遺跡出土の平安時代の土師器甕類

序

埼玉県の中央部を南北に縦貫する一般国道17号は、県民生活に欠かすことのできない主要幹線道路の一つです。国土交通省では、その機能を最大限に発揮できるよう、各所で改良工事やバイパス化などを進めています。その一つである上尾道路は、一般国道17号の渋滞緩和、圏央道へのアクセスの利便化を目的として、平成元年に計画され、平成28年にさいたま市西区宮前町から桶川市川田谷までのI期区間全線が開通しました。

上尾道路の建設地内には、周知の埋蔵文化財包蔵地が多数存在しております。桶川市川田谷に所在する前領家遺跡もその一つです。発掘調査は上尾道路新設事業に伴う事前調査であり、関係機関での協議の結果、国土交通省関東地方整備局の委託を受け、当事業団が実施しました。

前領家遺跡の発掘調査では、縄文時代から近世に至る多くの遺構や遺物が見つかりました。中でも平安時代の15軒の住居跡は、当地域では数少ない集落跡の調査例として注目されます。鍛冶炉を伴う住居跡も多く、平安時代の当地における鉄製品生産の様相を知るうえで貴重な発見と言えます。また、縄文時代では、土器が埋設された炉跡や埋甕を伴う中期の住居跡が調査されました。さらに中・近世では、溝跡によって区画された内側から、建物跡が検出されました。

本書は、これらの発掘調査成果をまとめたものです。埋蔵文化財の保護並びに普及・啓発の資料として、また学術研究の基礎資料として、多くの方々に活用していただければ幸いです。

最後に、本書の刊行にあたり、発掘調査の諸調整に御尽力いただきました埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課をはじめ、国土交通省関東地方整備局大宮国道事務所、桶川市教育委員会、並びに地元関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

平成29年2月

公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理 事 長 塩 野 谷 孝 志

例　　言

1. 本書は埼玉県桶川市大字川田谷に所在する前領家遺跡の発掘調査報告書である。

2. 遺跡の代表地番、発掘調査届に対する指示通知は、以下のとおりである。

前領家遺跡 (No. 15 – 183)

桶川市大字川田谷字王子 4426 – 2 番地他

平成 20 年 10 月 1 日付け教生文第 2 – 52 号

3. 発掘調査は、一般国道 17 号上尾道路新設工事に伴う埋蔵文化財記録保存のための事前調査であり、埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課が調整し、国土交通省関東地方整備局の委託を受け、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団（当時）が実施した。

4. 各事業の委託事業名は、下記のとおりである。

発掘調査事業（平成 20 年度）

「一般国道 17 号（上尾道路）新設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査」

整理・報告書作成事業（平成 28 年度）

「一般国道 17 号上尾道路新設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の平成 28 年度契約」

5. 発掘調査・整理報告書作成事業は、I – 3 の組織により実施した。

発掘調査は、平成 20 年 10 月 1 日～平成 21 年 3 月 24 日まで実施し、木戸春夫・渡辺清志・坂田敏行・大和田瞳・松本美佐子・植田雄己・篠田泰輔が担当した。

整理報告書作成事業は、平成 28 年 6 月 1 日から 12 月 31 日まで実施し、村山卓が担当した。

6. 発掘調査における基準点測量は吉田測量設計株式会社に、空中写真撮影は株式会社シン技術コンサルに委託した。巻頭図版の遺物写真撮影は、合資会社池澤に委託した。

7. 発掘調査における写真撮影は各担当者が行い、遺物写真撮影は村山が行った。

8. 出土品の整理・図版作成は村山が行い、石器については西井幸雄、縄文土器については上野真由美、古墳時代の土師器については福田聖、平安時代の遺物については富田和夫、滝澤誠、鍛冶関連遺物については赤熊浩一、金属製品については瀧瀬芳之の協力を得た。

9. 本書の執筆は、I – 1 を埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課が、IV – 1 のうち縄文時代の土器を上野が、他は村山が行った。

10. 本書の編集は村山が行った。

11. 本書に掲載した資料は平成 29 年 3 月以降、埼玉県教育委員会が管理・保管する。

12. 発掘調査や本書の作成にあたり、下記の機関・方々から御教示・御協力を賜った。記して感謝致します。（敬称略）

桶川市教育委員会 北本市教育委員会

加藤恭朗 佐々木由香 末木啓介 関根 真

粒良紀夫 手島英美子 由布憲昭

凡 例

1. 本書におけるX・Yの座標は、世界測地系による国土標準平面直角座標第IX系（原点北緯 $36^{\circ} 00' 00''$ 、東経 $139^{\circ} 50' 00''$ ）に基づく座標値を示す。また、各挿図に記した方位は、全て座標北を示した。

E-8グリッド北西杭の座標及び標高は、X = -540.000 m、Y = -27860.000 m（北緯 $35^{\circ} 59' 41.04''$ 、東経 $139^{\circ} 31' 27.58''$ ）、標高20.100 mである。

2. グリッドの設定は 10×10 mの基本グリッドを設定した。表記は、北西隅を起点として、北から南方向にアルファベット、西から東方向に数字を付した。

3. 本書の本文・挿図・表中・写真図版に記した遺構の略号は、以下のとおりである。

S J …住居跡 S B …掘立柱建物跡

S E …井戸跡 S D …溝跡

S T …火葬遺構 S K …土壙

P …小穴・柱穴

4. 本書における挿図の縮尺は以下のとおりである。例外は、図中に縮尺とスケールを示した。

調査区全体図 1:800

調査区区割図 1:400

遺構平面図・断面図 1:60 1:80

縄文土器・陶磁器実測図・拓影図 1:3

土師器・須恵器・鍛冶関連遺物実測図 1:4

石器・石製品実測図 2:3 1:3 1:4

金属製品実測図 1:2 2:3 (錢貨)

5. 測量図内の各種網掛け部分表示は以下のとおりである。

……地山

……硬化面

……焼土

また、遺物については、須恵器は断面黒塗り、灰釉陶器は断面・釉範囲10%、綠釉陶器は断面・釉範囲50%のトーンをかけて

示す。平安時代の石製品については、研磨範囲を30%、滓化鉄分付着範囲を20%、鉄分付着範囲を15%、被熱範囲を5%のトーンで示す。轍羽口については、滓化鉄分付着範囲を20%、還元部分を10%、被熱赤色化部分を5%のトーンで示す。

6. 遺構断面図に表記した水準数値は、すべて海拔標高（単位m）を示す。

7. 遺物観察表の表示は以下のとおりである。

・口径・器高・底径はcm単位である。

・（ ）内の数値は推定値を示す。

・〔 〕内の数値は残存高を示す。

・胎土は土器中に含まれる鉱物等のうち、特徴的なものを記号で示した。

A - 雲母 B - 片岩 C - 角閃石

D - 長石 E - 石英 F - 軽石

G - 砂粒子 H - 赤色粒子

I - 白色粒子 J - 白色針状物質

K - 黒色粒子 L - その他（小礫）

・焼成は良好・普通・不良の3段階に分けた。

・残存率は器形に対する大まかな遺存程度を%で示した。

・色調は、『新版標準土色帖』を基準とし、最も近い色調を記した。

・備考欄には、出土位置、産地、年代等を記した。

8. 中・近世の溝跡、土壙については、非掲載遺物を一覧表に示した。表中では次の略称を用いた。

肥磁…肥前系磁器 濑美磁…瀬戸美濃系磁器

肥前…肥前系陶器 濑美…瀬戸美濃系陶器

京信…京都信楽系陶器

9. 本書に使用した地形図は、桶川市都市計画図1:2,500と国土地理院発行の1:50,000（上尾）地形図を編集の上使用した。

10. 遺構番号は、原則調査時のものを用いた。変更については各遺構一覧表の備考欄に記した。

目 次

卷頭図版

序

例言

凡例

目次

I	発掘調査の概要	1	(3) グリッド出土遺物	41
1.	発掘調査に至る経過	1	2. 古墳時代の遺構と遺物	45
2.	発掘調査・報告書作成の経過	2	(1) 住居跡	45
(1)	発掘調査	2	3. 平安時代の遺構と遺物	47
(2)	整理・報告書の作成	2	(1) 住居跡	47
3.	発掘調査・報告書作成の組織	2	(2) 土壙	93
II	遺跡の立地と環境	3	(3) グリッド出土遺物	96
1.	地理的環境	3	4. 中・近世の遺構と遺物	97
2.	歴史的環境	4	(1) 堀立柱建物跡	97
III	遺跡の概要	7	(2) 井戸跡	105
1.	遺跡の概要	7	(3) 地下式坑	107
2.	遺跡の基本層序	7	(4) 火葬遺構	107
IV	遺構と遺物	13	(5) 溝跡	108
1.	縄文時代の遺構と遺物	13	(6) 土壙	116
(1)	住居跡	13	(7) グリッド出土遺物	136
(2)	土壙	40	V 調査のまとめ	139

挿図目次

第1図	埼玉県の地形図	3	第36図	グリッド出土遺物（1）	42
第2図	周辺の遺跡	6	第37図	グリッド出土遺物（2）	43
第3図	前領家遺跡の基本層序	7	第38図	グリッド出土遺物（3）	44
第4図	調査区の位置	8	第39図	第2号住居跡（1）	45
第5図	前領家遺跡全体図	9	第40図	第2号住居跡（2）・出土遺物	46
第6図	前領家遺跡区割図（1）	10	第41図	第1号住居跡（1）	47
第7図	前領家遺跡区割図（2）	11	第42図	第1号住居跡（2）・出土遺物（1）	48
第8図	前領家遺跡区割図（3）	12	第43図	第1号住居跡出土遺物（2）	49
第9図	第9号住居跡（1）	13	第44図	第3号住居跡	51
第10図	第9号住居跡（2）	14	第45図	第3号住居跡出土遺物	51
第11図	第9号住居跡出土遺物（1）	15	第46図	第4号住居跡（1）	52
第12図	第9号住居跡出土遺物（2）	16	第47図	第4号住居跡（2）	53
第13図	第9号住居跡出土遺物（3）	17	第48図	第4号住居跡出土遺物（1）	54
第14図	第14号住居跡（1）	19	第49図	第4号住居跡出土遺物（2）	55
第15図	第14号住居跡（2）	20	第50図	第5号住居跡（1）	56
第16図	第14号住居跡出土遺物	21	第51図	第5号住居跡（2）	57
第17図	第19号住居跡	22	第52図	第5号住居跡（3）・出土遺物（1）	58
第18図	第19号住居跡出土遺物	23	第53図	第5号住居跡出土遺物（2）	59
第19図	第20号住居跡	24	第54図	第6号住居跡（1）	61
第20図	第20号住居跡出土遺物	25	第55図	第6号住居跡（2）	62
第21図	第21号住居跡	26	第56図	第6号住居跡出土遺物（1）	63
第22図	第21号住居跡出土遺物	27	第57図	第6号住居跡出土遺物（2）	64
第23図	第22号住居跡（1）	28	第58図	第7号住居跡（1）	66
第24図	第22号住居跡（2）	29	第59図	第7号住居跡（2）・出土遺物（1）	67
第25図	第22号住居跡出土遺物（1）	30	第60図	第7号住居跡出土遺物（2）	68
第26図	第22号住居跡出土遺物（2）	31	第61図	第8号住居跡・出土遺物	70
第27図	第22号住居跡出土遺物（3）	32	第62図	第10号住居跡	71
第28図	第22号住居跡出土遺物（4）	33	第63図	第10号住居跡出土遺物	72
第29図	第23号住居跡	34	第64図	第11号住居跡・出土遺物	73
第30図	第23号住居跡出土遺物	35	第65図	第12号住居跡（1）	74
第31図	第24号住居跡（1）	36	第66図	第12号住居跡（2）・出土遺物	75
第32図	第24号住居跡（2）	37	第67図	第13号住居跡（1）	76
第33図	第24号住居跡出土遺物（1）	38	第68図	第13号住居跡（2）	77
第34図	第24号住居跡出土遺物（2）	39	第69図	第13号住居跡出土遺物	78
第35図	縄文時代の土壙・出土遺物	41	第70図	第15号住居跡（1）	80

第71図	第15号住居跡(2)	81
第72図	第15号住居跡出土遺物	82
第73図	第16号住居跡(1)	83
第74図	第16号住居跡(2)	84
第75図	第16号住居跡(3)	85
第76図	第16号住居跡(4)	85
第77図	第16号住居跡出土遺物	86
第78図	第17号住居跡(1)	88
第79図	第17号住居跡(2)・出土遺物(1)	89
第80図	第17号住居跡出土遺物(2)	90
第81図	第18号住居跡・出土遺物	91
第82図	平安時代の土壙	94
第83図	土壙・グリッド出土遺物	95
第84図	第1号掘立柱建物跡・出土遺物	98
第85図	第2号掘立柱建物跡	99
第86図	第2号掘立柱建物跡出土遺物	99
第87図	第3号掘立柱建物跡	100
第88図	第4号掘立柱建物跡・出土遺物	101
第89図	第5号掘立柱建物跡	102
第90図	第6号掘立柱建物跡・出土遺物	103
第91図	第7号掘立柱建物跡・出土遺物	104
第92図	井戸跡	105
第93図	井戸跡出土遺物	106
第94図	第1号地下式坑・第1号火葬遺構	107
第95図	溝跡分布図・第13・14号溝跡硬化範囲	109
第96図	溝跡土層断面(1)	110
第97図	溝跡土層断面(2)	111
第98図	溝跡出土遺物(1)	112
第99図	溝跡出土遺物(2)	113
第100図	溝跡出土遺物(3)	114
第101図	土壙(1)	116
第102図	土壙(2)	117
第103図	土壙(3)	118
第104図	土壙(4)	119
第105図	土壙(5)	120
第106図	土壙(6)	121
第107図	土壙(7)	122
第108図	土壙(8)	123
第109図	土壙(9)	124
第110図	土壙(10)	125
第111図	土壙(11)	126
第112図	土壙(12)	127
第113図	土壙(13)	128
第114図	土壙(14)	129
第115図	土壙出土遺物	130
第116図	グリッド出土遺物	137
第117図	平安時代の遺物の様相	140

表 目 次

第1表	周辺の遺跡一覧表	6
第2表	第9号住居跡出土石器観察表	18
第3表	第14号住居跡出土石器観察表	20
第4表	第22号住居跡出土石器観察表	33
第5表	第24号住居跡出土石器観察表	40
第6表	グリッド出土石器観察表	44
第7表	第2号住居跡出土遺物観察表	46
第8表	第1号住居跡出土遺物観察表	49
第9表	第3号住居跡出土遺物観察表	51
第10表	第4号住居跡出土遺物観察表	55
第11表	第5号住居跡出土遺物観察表	59
第12表	第6号住居跡出土遺物観察表	64
第13表	第7号住居跡出土遺物観察表	69
第14表	第8号住居跡出土遺物観察表	70
第15表	第10号住居跡出土遺物観察表	72
第16表	第11号住居跡出土遺物観察表	73
第17表	第12号住居跡出土遺物観察表	76
第18表	第13号住居跡出土遺物観察表	79
第19表	第15号住居跡出土遺物観察表	82
第20表	第16号住居跡出土遺物観察表	87

第21表	第17号住居跡出土遺物観察表	90	第29表	井戸跡一覧表	106
第22表	第18号住居跡出土遺物観察表	92	第30表	井戸跡出土遺物観察表	106
第23表	住居跡土壤サンプルの鍛冶関連遺物抽出量	93	第31表	溝跡一覧表	108
第24表	平安時代の土壤一覧表	95	第32表	溝跡出土遺物観察表	114
第25表	平安時代の土壤出土遺物観察表	96	第33表	溝跡出土遺物一覧表	115
第26表	グリッド出土遺物観察表	96	第34表	土壤出土遺物観察表	131
第27表	掘立柱建物跡一覧表	97	第35表	土壤一覧表	132
第28表	掘立柱建物跡出土遺物観察表	100	第36表	土壤出土遺物一覧表	135
			第37表	グリッド出土遺物観察表	138

写真図版目次

卷頭図版	1	前領家遺跡出土の縄文土器	8	第1号住居跡	
	2	前領家遺跡出土の平安時代の土器 甕類	図版4	1	第2号住居跡
図版1	1	調査区遠景（上から）	2	第2号住居跡遺物出土状況	
	2・3	調査区遠景	3	第3号住居跡	
	4	調査区（南部）	4	第3号住居跡カマド	
	5	調査区（中央部～北部）	5	第4号住居跡	
	6	第9号住居跡	6	第4号住居跡カマド1	
	7	第9号住居跡埋甕1	7	第4号住居跡カマド2	
	8	第9号住居跡埋甕2	8	第4号住居跡炉壁材出土状況	
図版2	1	第9号住居跡炉跡	図版5	1	第5号住居跡遺物出土状況
	2	第14号住居跡	2	第5・6号住居跡遺物出土状況	
	3	第19号住居跡	3	第5号住居跡カマド2	
	4	第19号住居跡埋甕	4	第6号住居跡遺物出土状況	
	5	第20号住居跡	5	第6号住居跡カマド	
	6	第20号住居跡埋甕	6	第7号住居跡遺物出土状況	
	7	第21号住居跡炉跡	7	第7号住居跡カマド	
	8	第22号住居跡	8	第8号住居跡	
図版3	1	第22号住居跡遺物出土状況	図版6	1	第8号住居跡遺物出土状況
	2	第22号住居跡炉跡検出状況	2	第10号住居跡	
	3	第22号住居跡埋甕1	3	第10号住居跡遺物出土状況	
	4	第23号住居跡	4	第11号住居跡	
	5	第23号住居跡炉跡	5	第11号住居跡カマド	
	6	第24号住居跡	6	第12号住居跡	
	7	第24号住居跡埋甕	7	第12号住居跡カマド	
			8	第13号住居跡	

図版 7	1・2	第 13 号住居跡遺物出土状況	4	第 3 号井戸跡
	3	第 13 号住居跡炭化材出土状況	5	第 4 号井戸跡
	4・5	第 15 号住居跡遺物出土状況	6	第 5 号井戸跡
	6	第 16 号住居跡	7	第 6 号井戸跡
	7・8	第 16 号住居跡ピット 5・10	8	第 7 号井戸跡
	1	第 16 号住居跡ピット 5	9	第 1 号火葬遺構
	2	第 16 号住居跡ピット 6 上面	10	第 1 号地下式坑
	3	第 16 号住居跡ピット 6	11	第 1 号溝跡
図版 8	4	第 17 号住居跡	12	第 2 号溝跡
	5・6	第 17 号住居跡カマド	13・14	第 2 号溝跡遺物出土状況
	7	第 18 号住居跡	15	第 3 号溝跡
	8	第 18 号住居跡カマド	16	第 4 号溝跡
	1	第 151 号土壙	17	第 5 号溝跡
	2	第 154 号土壙	18	第 6 号溝跡
	3・4	第 154 号土壙遺物出土状況	図版 12	1
	5	第 239 号土壙		第 7 号溝跡
図版 9	6	第 262 号土壙		2
	7	第 324 号土壙		3
	8	第 352 号土壙		4
	9	第 23 号土壙		5
	10	第 53・54 号土壙		6
	11	第 56 号土壙		7
	12	第 57 号土壙		8
	13	第 60 号土壙		9
	14	第 61 号土壙		10
	15	第 63 号土壙		11
	16	第 64 号土壙		12
	17	第 78 号土壙		13
	18	第 91・92 号土壙		14
	1	第 1・2 号掘立柱建物跡		15
	2	第 3 号掘立柱建物跡		16
	3	第 4 号掘立柱建物跡		17
	4	第 5 号掘立柱建物跡	図版 13	1～16
図版 10	5	第 5 号掘立柱建物跡焼土	図版 14	1～3
	6	第 6 号掘立柱建物跡		4・5
	7・8	第 6 号掘立柱建物跡焼土		6
	1～3	第 1 号井戸跡		7
				第 20・21 号住居跡出土遺物

図版 15	1 ~ 14	第 22 号住居跡出土遺物	3	第 53 号土壙出土遺物
図版 16	1 ~ 8	第 22 号住居跡出土遺物	4 ~ 6	第 172 号土壙出土遺物
	9 ~ 11	第 23 号住居跡出土遺物	7 ~ 13	グリッド出土遺物
	12 ~ 16	第 24 号住居跡出土遺物	図版 32 1 ~ 2	第 1 号住居跡出土遺物
図版 17	1 ~ 2	第 24 号住居跡出土遺物	3	第 3 号住居跡出土遺物
	3	土壙・グリッド出土遺物	4 ~ 5	第 4 号住居跡出土遺物
図版 18	1 ~ 8	グリッド出土遺物	6 ~ 12	第 6 号住居跡出土遺物
図版 19	1 ~ 15	グリッド出土遺物	13 ~ 14	第 7 号住居跡出土遺物
	16 ~ 18	第 2 号住居跡出土遺物	15	第 8 号住居跡出土遺物
図版 20	1 ~ 10	第 1 号住居跡出土遺物	16	第 12 号住居跡出土遺物
図版 21	1 ~ 4	第 1 号住居跡出土遺物	17 ~ 18	第 13 号住居跡出土遺物
	5 ~ 6	第 3 号住居跡出土遺物	19	第 15 号住居跡出土遺物
	7	第 4 号住居跡出土遺物	20	第 16 号住居跡出土遺物
図版 22	1 ~ 8	第 4 号住居跡出土遺物	21	第 17 号住居跡出土遺物
	9 ~ 10	第 5 号住居跡出土遺物	図版 33 1	鉄滓
図版 23	1 ~ 9	第 5 号住居跡出土遺物	2	輔羽口
	10 ~ 13	第 6 号住居跡出土遺物	3	第 1 号住居跡出土遺物
図版 24	1 ~ 5	第 6 号住居跡出土遺物	4 ~ 5	第 4 号住居跡出土遺物
	6 ~ 12	第 7 号住居跡出土遺物	6	第 5 号住居跡出土遺物
図版 25	1 ~ 12	第 7 号住居跡出土遺物	7	第 6 号住居跡出土遺物
図版 26	1 ~ 4	第 7 号住居跡出土遺物	図版 34 1	第 7 号住居跡出土遺物
	5 ~ 6	第 8 号住居跡出土遺物	2	第 13 号住居跡出土遺物
	7 ~ 12	第 10 号住居跡出土遺物	3	第 8 号住居跡出土遺物
図版 27	1 ~ 4	第 11 号住居跡出土遺物	4 ~ 6	第 13 号住居跡出土遺物
	5 ~ 12	第 12 号住居跡出土遺物	7 ~ 8	第 15 号住居跡出土遺物
図版 28	1 ~ 8	第 13 号住居跡出土遺物	9 ~ 16	第 16 号住居跡出土遺物
	9	第 15 号住居跡出土遺物	図版 35 1 ~ 10	掘立柱建物跡出土遺物
図版 29	1 ~ 7	第 15 号住居跡出土遺物		11 ~ 13 井戸跡出土遺物
	8 ~ 11	第 16 号住居跡出土遺物		14 ~ 23 溝跡出土遺物
	12 ~ 17	第 17 号住居跡出土遺物	図版 36 1 ~ 18	溝跡出土遺物
図版 30	1 ~ 4	第 17 号住居跡出土遺物		19 ~ 22 土壙出土遺物
	5 ~ 9	第 18 号住居跡出土遺物	図版 37 1 ~ 21	土壙出土遺物
	10	第 23 号土壙出土遺物	図版 38 1 ~ 22	グリッド出土遺物
図版 31	1 ~ 2	第 23 号土壙出土遺物		

I 発掘調査の概要

1. 発掘調査に至る経過

埼玉県では、『埼玉県 5 か年計画—安心・成長・自立自尊の埼玉へ—』において「埼玉の活力を高める道路整備」という基本目標を掲げている。こうした中で国土交通省関東地方整備局大宮国道事務所は、県内において、一般国道 17 号（上尾道路）建設工事を進めている。

埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課（以下、当課）では、一般国道 17 号（上尾道路）建設事業に係る埋蔵文化財の保護について、国土交通省と事前協議を重ね、調整を図ってきたところである。

本書で報告される箇所については工事計画に先立ち、国土交通省関東地方整備局大宮国道事務所長より平成 16 年 1 月 26 日付け大工第 149 号において、一般国道 17 号（上尾道路）建設事業に伴う埋蔵文化財の所在の有無及び取り扱いについて県教育委員会教育長（以下「県教育長」）あての照会があった。

当課は、平成 19 年 12 月 19 日～21 日及び、平成 20 年 3 月 31 日に試掘調査を実施し、遺構及び遺物を検出した。その結果を受けて平成 20 年 4 月 10 日付け教生文第 122 号にて国土交通省関東地方整備局大宮国道事務所長あて以下の通り回答した。

1 埋蔵文化財の所在

名称	種別	時代	所在地
前領家遺跡 (県遺跡番号 No. 15 - 183)	集落跡	縄文・ 平安	桶川市大 字川田谷 地内

2 取扱いについて

「発掘調査を要する区域」については、計画上やむを得ず現状を変更する場合には、記録保存のための発掘調査を実施して下さい。

発掘調査については、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団（現在は公益財団法人）と国土交通省関東地方整備局大宮国道事務所、当課の三者により調査方法、期間、経費等の問題を中心に協議が行われた。その結果、平成 20 年 10 月 1 日から平成 21 年 3 月 24 日までの期間で発掘調査を実施することになった。

文化財保護法第 94 条による発掘通知は国土交通省関東地方整備局長から平成 20 年 3 月 14 日付け大工台第 347 号で提出された。それに対する埋蔵文化財の保護上必要な勧告は県教育長から平成 20 年 3 月 19 日付け教生文第 4-1098 号で行われた。

文化財保護法第 92 条の規定による発掘調査届については財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から県教育長あてに提出された。これに対する発掘調査の指示通知は以下の通りである。

平成 20 年 10 月 1 日付け教生文第 2-52 号
(生涯学習文化財課)

2. 発掘調査・報告書作成の経過

(1) 発掘調査

前領家遺跡は、一般国道 17 号上尾道路新設工事に先立ち、平成 20 年 10 月 1 日から平成 21 年 3 月 24 日にかけて発掘調査を実施した。調査面積は 11,709 m²である。

発掘調査は、平成 20 年 10 月上旬に事務所を設置後、重機による表土掘削を行った。調査区が広範に及ぶため、表土掘削は 2 回に分けて実施した。表土掘削後、人力による遺構確認と精査を開始した。調査区内からは縄文・古墳・平安時代の住居跡と中・近世の溝跡・土壙等が検出された。10 月中旬に基準点測量を行い、その成果に基づいて順次遺構の土層断面図・平面図を作成した。並行して写真撮影も適宜行い、11 月と平成 21 年 3 月に空中写真撮影を行った。2 月には遺跡見学会を開催した。3 月下旬に事務所等を撤収し、調査を終了した。

(2) 整理・報告書の作成

整理・報告書の作成事業は、平成 28 年 6 月 1

日から 12 月 31 日まで実施した。

6 月から出土遺物の水洗・注記の後、接合復元を開始した。復元を終えた遺物は、順次実測・トレース・採拓を経て、印刷用の版下作成を行った。また 11 月に図版用の遺物写真を撮影した。発掘調査で記録した遺構の断面図や平面図などは、照合・修正を加えた第二原図を作成し、スキャナでコンピュータに取り込んだ。その後、画像編集ソフトを用いて遺構ごとにトレース、土層説明などのデータを組み込み、印刷用版下を作成した。

10 月下旬までに遺構・遺物に係る各種挿図・図版を整えた。引き続き 12 月中旬まで報告書の執筆・編集を行った。その後、選定された印刷業者に入稿した。3 回の校正を経て、平成 29 年 2 月末に埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 430 集『前領家遺跡』を刊行した。

なお、図面や写真などの記録類や遺物は、12 月に整理、分類を行い、埼玉県文化財収蔵施設の収蔵庫へ仮収納した。

3. 発掘調査・報告書作成の組織

平成 20 年度（発掘調査）

理 事 長	刈 部 博
常務理事兼総務部長	萩 元 信 隆
総務部	
総務部副部長	昼 間 孝 志
総務課長	松 盛 孝
調査部	
調査部長	村 田 健 二
調査部副部長	磯 崎 一

調査監兼調査第一課長	金 子 直 行
主 査	木 戸 春 夫
主 査	渡 辺 清 志
主 事	坂 田 敏 行
主 事	大 和 田 瞳
主 事	松 本 美 佐 子
主 事	植 田 雄 己
主 事	篠 田 泰 輔

平成 28 年度（報告書作成）

理 事 長	塩 野 谷 孝 志
常務理事兼総務部長	木 村 博 昭
総務部	
総務部副部長	黒 坂 穎 二
総務課長	曾 川 浩 二

調査部	
調 査 部 長	金 子 直 行
調 査 部 副 部 長	細 田 勝
主幹兼整理第二課長	山 本 靖
主 事	村 山 卓

II 遺跡の立地と環境

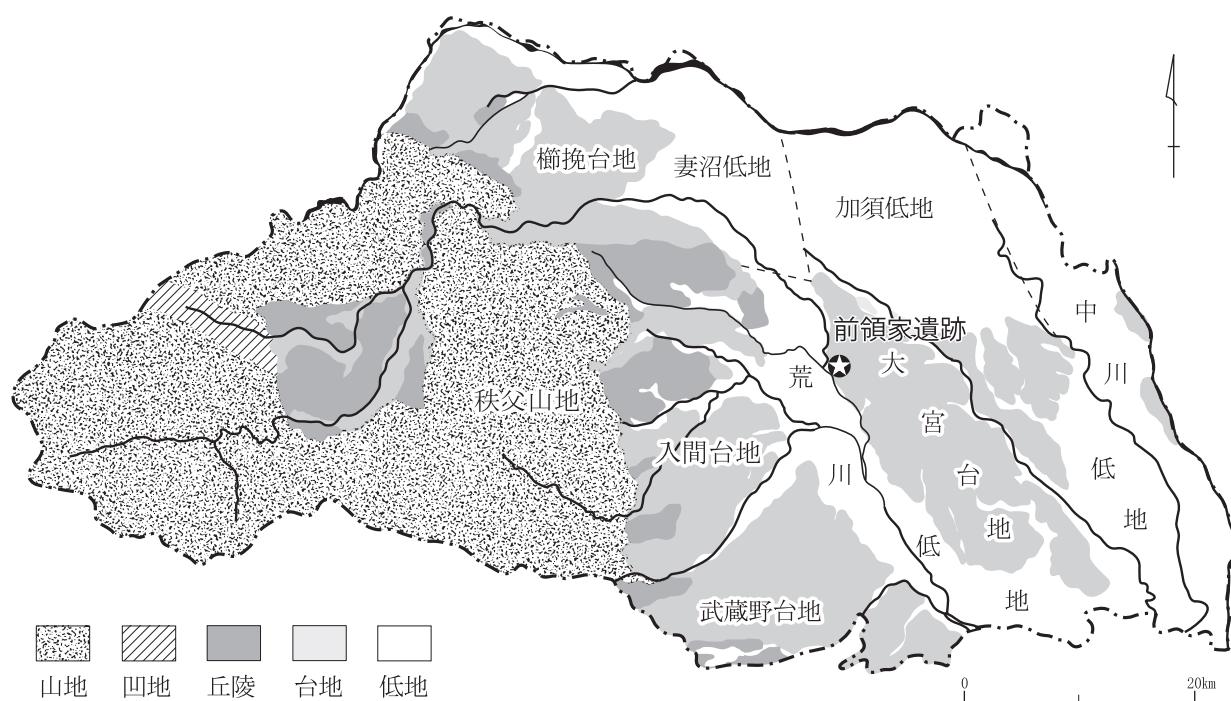
1. 地理的環境

前領家遺跡は、大宮台地北部にあたる桶川市川田谷字王子に所在し、JR桶川駅から西方約4kmに位置する。遺跡周辺には畠地が広がり、一部に住宅地が散在するという大宮台地特有の景観が展開する。

大宮台地は北足立台地とも呼ばれ、利根川の右岸に発達した加須低地・中川低地と、荒川流域に発達した荒川低地に挟まれた南北約38km、東西18kmほどの長大な台地である。西縁部は荒川水系の低地に面して比高差10mを超える急崖を成し、北東部は元荒川水系の低地部に面している。両者の分水界は、旧中山道あるいは現在のJR高崎線付近に存在する。大宮台地の標高は、北本市高尾付近が標高26m前後と最も高い。北方と南方に向かって順次低くなり、前領家遺跡付近では標高20m前後である。

桶川市周辺の台地は、いくつかの台地内河川によって樹枝状に開析される。中でも全長9km程の江川は、遺跡の東方から南方に流下して荒川へと合流する比較的大きな河川である。鴻巣市原馬室に源を発して北本市西部を南流し、石戸宿・日出谷地区周辺からは数多くの支流を集めて湿地帯を形成する。

前領家遺跡は、この江川と荒川低地に東西を挟まれた支台の、両河川から1kmほど離れたほぼ中央部に位置する。遺跡の周囲には浅い谷地が複数入り込んでいるが、これは荒川水系の石川堀が形成する谷地の末端である。特に調査区南東隅には、南から入り込む谷地の傾斜部が及んでおり、遺跡は主にその北側台地上に展開するものと考えられる。



第1図 埼玉県の地形図

2. 歴史的環境

旧石器時代

旧石器時代の遺物は、石川堀流域の桶川市狐塚遺跡(59)・大沼遺跡(49)・大平遺跡(51)、江川流域では桶川市高井東遺跡(84)や諏訪野遺跡(80)等で出土している。赤堀川支流の北本市提灯木山遺跡(82)では、立川ローム層第4層下部で検出された礫群とともに、4ヶ所の石器集中が検出され、ナイフ形石器と多量の角錐状石器が出土している。

縄文時代

縄文時代早期の遺跡は少なく、桶川市西台遺跡(39)・楽中遺跡(62)で撚糸文土器が、江川中流左岸の桶川市愛宕遺跡(87)や高井遺跡(85)で有舌尖頭器が出土している。早期後葉では、大平遺跡や楽中遺跡で炉穴群が調査されたほか、石川堀左岸の桶川市小在家遺跡(60)や荒川本流側の北本市宮岡遺跡(22)で条痕文土器が出土している。江川上流域には、かつて荒川最奥の貝塚である桶川市谷津貝塚(45)が所在していた。

前期に入ると、江川流域を中心に遺跡数が増加する。桶川市滝の宮坂遺跡(88)で花積下層式期の住居跡が調査されている。石川堀流域でも関山式～黒浜式期の住居跡が検出された大平遺跡のほか、荒川本流側の桶川市前原遺跡(40)で前期末の甕被り葬とみられる例が報告されている。この頃の遺跡は荒川低地でも確認され、川島町東野遺跡(44)や芝沼堤外遺跡(32)では現地表下約5mから前期後葉～末葉の住居跡が発見された。

中期の集落は前期に引き続き、江川・石川堀及びその支谷の奥に集中している。江川中流部の川田谷・上日出谷地区周辺ではいくつかの支谷が合流して広い沖積地が形成され、桶川市諏訪野遺跡・高井遺跡・北本市デーノタメ遺跡(79)等の大宮台地西部にも屈指の環状集落が集中する。いずれも中期中葉から後葉にかけて営まれたもので、江川の本流からやや奥まった支谷沿いに立地

する。こうした大規模集落を取り巻く小規模集落として、桶川市諏訪南遺跡(48)・諏訪北II遺跡(47)・大平遺跡等が出現している。下流の荒川との合流点付近には上尾市中井遺跡(92)が所在し、70軒を超える住居跡が検出されている。

後期は、荒川流域の他地域と同様に遺跡数の減少が著しい。大規模集落は姿を消し、周辺地域に数軒単位の小規模な集落が営まれるようになる。後期中葉以降には、拠点的な大集落が再び営まれるようになり、その多くは晚期中葉まで継続する。江川の支谷奥の台地上には、学史的に著名な桶川市高井東遺跡があり、近隣の低地部には高井泥炭層遺跡(90)が所在する。赤堀川流域の桶川市後谷遺跡では、中期から晚期の遺構が発見されたが、低地部からは土偶・木製品が多く出土した。荒川本流沿いでは北本市宮岡氷川神社遺跡(25)から土製品や石製品が多量に出土し、周辺の地形から環状盛土遺構の存在が推定されている。

弥生時代

弥生時代の遺跡は後期以降に出現するが、調査例が乏しい。砂ヶ谷戸I遺跡(55)や八幡耕地遺跡(64)では住居跡が確認され、後者では吉ヶ谷式系の土器が出土した。砂ヶ谷戸II遺跡(56)では住居跡と方形周溝墓が検出されているが、方形周溝墓は若干後出する可能性がある。なお、桶川市楽上遺跡(58)のように古墳時代前期に集落が継続する遺跡も多い。

古墳時代

古墳時代前期の遺跡は、荒川・江川・元荒川に面した台地縁辺部に点在しており、遺跡数は前段階から飛躍的に増加する。桶川市西台遺跡や領家・宮下遺跡(95)では住居跡と方形周溝墓が検出されている。前領家遺跡の近隣では三ツ木遺跡(53)が南西台地上に位置しており、東海西部系の土器を伴う集落跡が調査されている。古墳としては、碧玉製石製品をはじめ豊富な副葬品が出土

した桶川市熊野神社古墳（63）が4世紀半ばに位置付けられる。荒川低地の自然堤防上には川島町元宿遺跡（11）・尾崎遺跡（8）・西谷遺跡（16）・富田後遺跡（17）等がみられ、低地部の開発が大きく進展したことを窺わせる。中期の遺跡は減少傾向を示し、桶川市愛宕遺跡・高井遺跡・狐塚遺跡等が確認されている。後期には台地部でも桶川市八幡耕地遺跡・北本市庚塚遺跡（36）などの遺跡が出現する。荒川沿いの台地縁辺には後期古墳が数多く分布し、川田谷古墳群（41）と呼ばれている。支群の一つである桶川市原山古墳群は、6世紀後半から7世紀にかけての群集墳として知られている。

奈良・平安時代

律令制下の桶川市周辺は、武藏国足立郡に属する。『和名類聚抄』によれば、足立郡には堀津・殖田・稻直・郡家・大里・餘戸・発度の七郷があったとされる。このうち稻直郷が、伊奈町を中心に上尾市から桶川市にまたがる地域に比定されている。足立郡の郡家については、さいたま市大宮氷川神社周辺に所在したとされている。一方、荒川旧流路に沿ったさいたま市大久保領家周辺では8世紀初頭以降の瓦が出土していることから、この地域に初期の郡家を比定する説もある。

前領家遺跡周辺における奈良・平安時代の遺跡の検出例は極めて少ない。江川流域では、荒川との合流地点を臨む台地上に上尾市領家・宮下遺跡が位置し、住居跡が多数検出されている。9世紀後半から10世紀初頭頃に位置付けられる3軒の住居跡からは、鍛冶炉や輔羽口・鉄滓の出土が認められる。周辺では、上尾市中井遺跡と石神III遺跡（94）で8世紀中葉、石神遺跡（93）で8世紀後葉の住居跡が検出されており、この時期の遺跡が比較的集中している。荒川低地の自然堤防上でも、川島町元宿遺跡・堂地遺跡・三竹遺跡等で当該期の遺構・遺物が認められる。古墳時代から引き続き、低地部の土地利用が行われていたとみら

れるが、集落跡の検出事例は少ない。

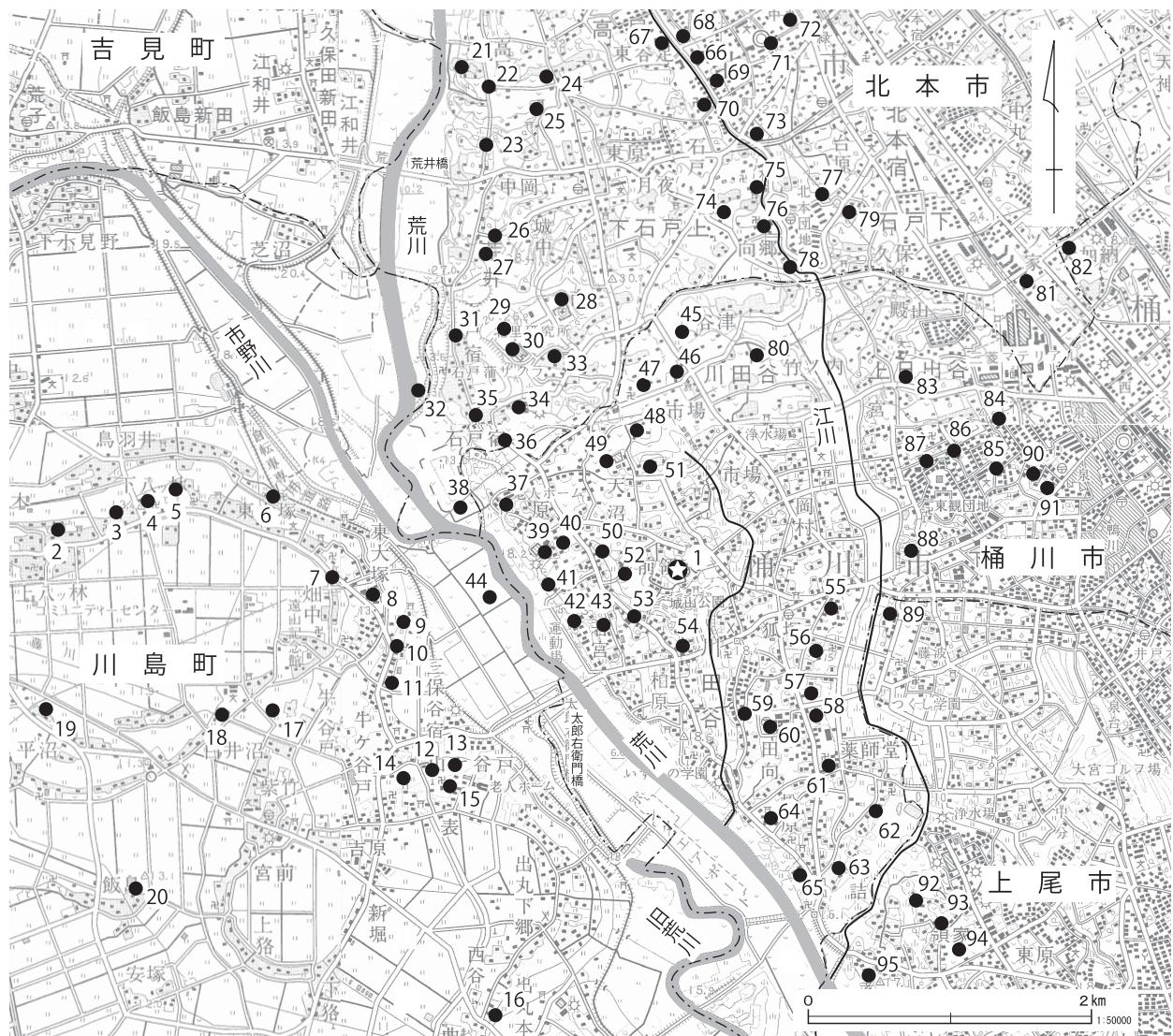
大宮台地北東部側では、元荒川水系の赤堀川右岸に宮ノ脇遺跡が所在する。8～9世紀に帰属する20軒以上の住居跡が調査され、8世紀半ばの製鉄炉も確認されている。元荒川を下った伊奈町大山遺跡周辺では製鉄炉が集中的に検出されており、両者の関連性が注目される。なお、宮ノ脇遺跡の北側に所在する姫宮神社は、『延喜式』神名帳記載の足立郡四座の一つ、多気比売神社に比定されている。

中・近世

前領家遺跡の所在する川田谷周辺は、中世の河田郷に比定されている。少なくとも15世紀半ばまでは、円覚寺塔頭黄梅院領であったとみられる。桶川市諏訪北II遺跡では、中世の大規模な薬研堀が検出され、15世紀前半の遺物が出土した。周辺には城館跡も多く、戦国期に岩附太田氏の支城であった北本市石戸城跡（31）は、その中心的な存在である。前領家遺跡南西の「城山」には三ツ木城跡（54）が所在し、土塁・堀の痕跡が残る。このほか、上尾市石神遺跡では、中世の火葬遺構、桶川市諏訪北I遺跡（46）・薬師堂遺跡（61）・大平遺跡・北本市諏訪山南遺跡（30）では、中世の地下式坑が検出されている。

天正18年（1590）に、徳川家康が関東に入国すると石戸領5000石は牧野康成に与えられる。牧野氏の陣屋は大平遺跡付近に置かれたとされ、調査で陣屋の一部と寺院跡が検出されている。寺院跡は牧野氏所縁の「見樹院」とみられ、陣屋に付属する寺院としては稀有な調査例である。

石戸領の北東部には五街道の一つ、中山道が通り、桶川宿や鴻巣宿等の宿場町も形成されていた。北本市二ツ家下遺跡（81）では、旧中山道に直交ないし並行する屋敷地や畠跡が検出されており、街道沿いの景観を窺い知る調査成果が得られている。



第2図 周辺の遺跡

第1表 周辺の遺跡一覧表（第2図）

1	前領家遺跡	2	上ハツ林遺跡	3	宮ヶ谷戸遺跡	4	柳町遺跡 A 区	5	柳町遺跡 B 区	6	大塚古墳
7	村並遺跡	8	尾崎遺跡	9	富士浅間塚古墳	10	愛宕塚遺跡	11	元宿遺跡	12	廣徳寺古墳
13	慶徳寺遺跡	14	養竹院内古墳	15	慶徳寺古墳	16	西谷遺跡	17	富田後遺跡	18	白井沼遺跡
19	平沼一丁田遺跡	20	森谷稻荷古墳	21	阿弥陀堂遺跡	22	宮岡遺跡	23	雷電遺跡	24	高尾遺跡
25	宮岡氷川神社遺跡	26	市場 I 遺跡	27	間屋坂遺跡	28	八重塚遺跡	29	諏訪山北遺跡	30	諏訪山南遺跡
31	石戸城跡	32	芝沼堤外遺跡	33	堀ノ内館跡	34	元屋敷遺跡	35	下宿遺跡	36	庚塚遺跡
37	台原遺跡	38	東台 I 遺跡	39	西台遺跡	40	前原遺跡	41	川田谷古墳群	42	若宮台遺跡
43	バチ山遺跡	44	東野遺跡	45	谷津貝塚	46	諏訪北 I 遺跡	47	諏訪北 II 遺跡	48	諏訪南遺跡
49	大沼遺跡	50	中台 II 遺跡	51	大平遺跡	52	永久保 I 遺跡	53	三ツ木遺跡	54	三ツ木城跡
55	砂ヶ谷戸 I 遺跡	56	砂ヶ谷戸 II 遺跡	57	楽上 II 遺跡	58	楽上遺跡	59	狐塚遺跡	60	小在家遺跡
61	薬師堂遺跡	62	楽中遺跡	63	熊野神社古墳	64	八幡耕地遺跡	65	宮遺跡	66	東谷足 I 遺跡
67	東谷足 II 遺跡	68	東谷足 III 遺跡	69	勝林山中遺跡	70	両大師裏遺跡	71	下石戸下遺跡	72	北本宿遺跡
73	勝林遺跡	74	月夜遺跡	75	氷川神社北遺跡	76	大蔵寺裏遺跡	77	台原遺跡	78	向郷遺跡
79	デーノタメ遺跡	80	諏訪野遺跡	81	二ッ家下遺跡	82	提灯木山遺跡	83	愛宕西遺跡	84	高井東遺跡
85	高井遺跡	86	高井北遺跡	87	愛宕遺跡	88	滝の宮坂遺跡	89	後山遺跡	90	高井泥炭層遺跡
91	高井南遺跡	92	中井遺跡	93	石神遺跡	94	石神 III 遺跡	95	領家・宮下遺跡		

III 遺跡の概要

1. 遺跡の概要

前領家遺跡は、大宮台地北西部の桶川市川田谷字王子に所在する。遺跡の東西には石川堀が形成した支谷が入り込んでおり、緩やかな起伏によって遺跡の立地する台地が画されている。一方、遺跡南側の谷地は湿地状の土地で、遺跡の立地する台地と3m程の比高差があったとされるが、現在は公園に造成されている。

発掘調査の範囲は、遺跡の中央部をほぼ南北に縦断し、縄文時代、古墳時代、平安時代、中・近世の遺構・遺物が検出された。

縄文時代の遺構は、住居跡8軒、土壙6基が検出された。住居跡はいずれも中期末～後期初頭(加曽利E III～IV式期)のもので、平面形態が柄鏡形を呈するものが多い。土壙は調査区域内に散在して確認されている。

2. 遺跡の基本層序

調査区は、南側に向かって緩やかに低くなっている。調査区北部と南部の堆積状態を第3図に示す。

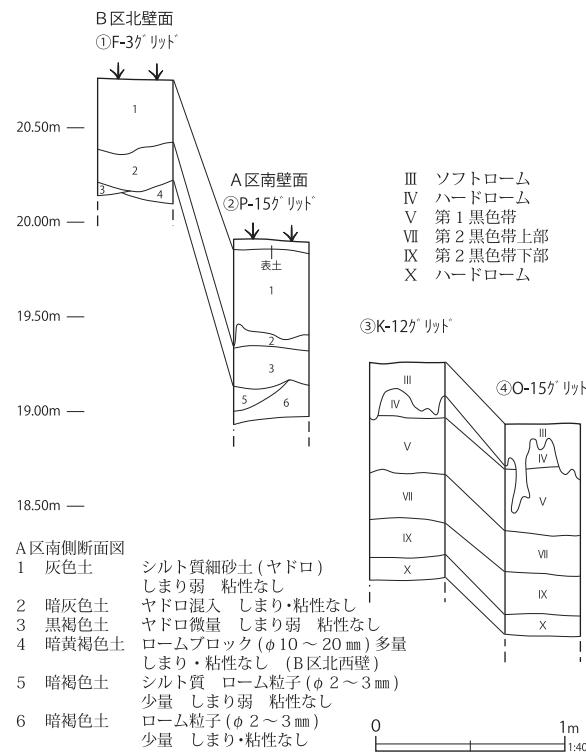
表土層直下には、40～50cmのヤドロ層(1層)の堆積が認められる。場所によっては少量の浅間A輕石が含まれていたが、調査区南部の壁際では浅間A輕石の包含は確認されなかった。その下には、中・近世の耕作土と考えられる暗灰色土(2層)・暗褐色土(3層)が30cm程度堆積している。僅かに粒子状のヤドロを含むが、深耕による混入であろう。その下のソフトローム上面が、遺構確認面である。ただし、調査区南端では3層下にシルト質土(5層)が認められ、南側から入り込む浅い谷地地形に堆積したものと考えられる。このシルト質土には僅かに縄文土器が含まれていた。

遺構検出面下のローム層の堆積順序は、調査区内各所でほぼ共通しており、武藏野標準層序と対応するローマ数字(III～X層)で図示した。

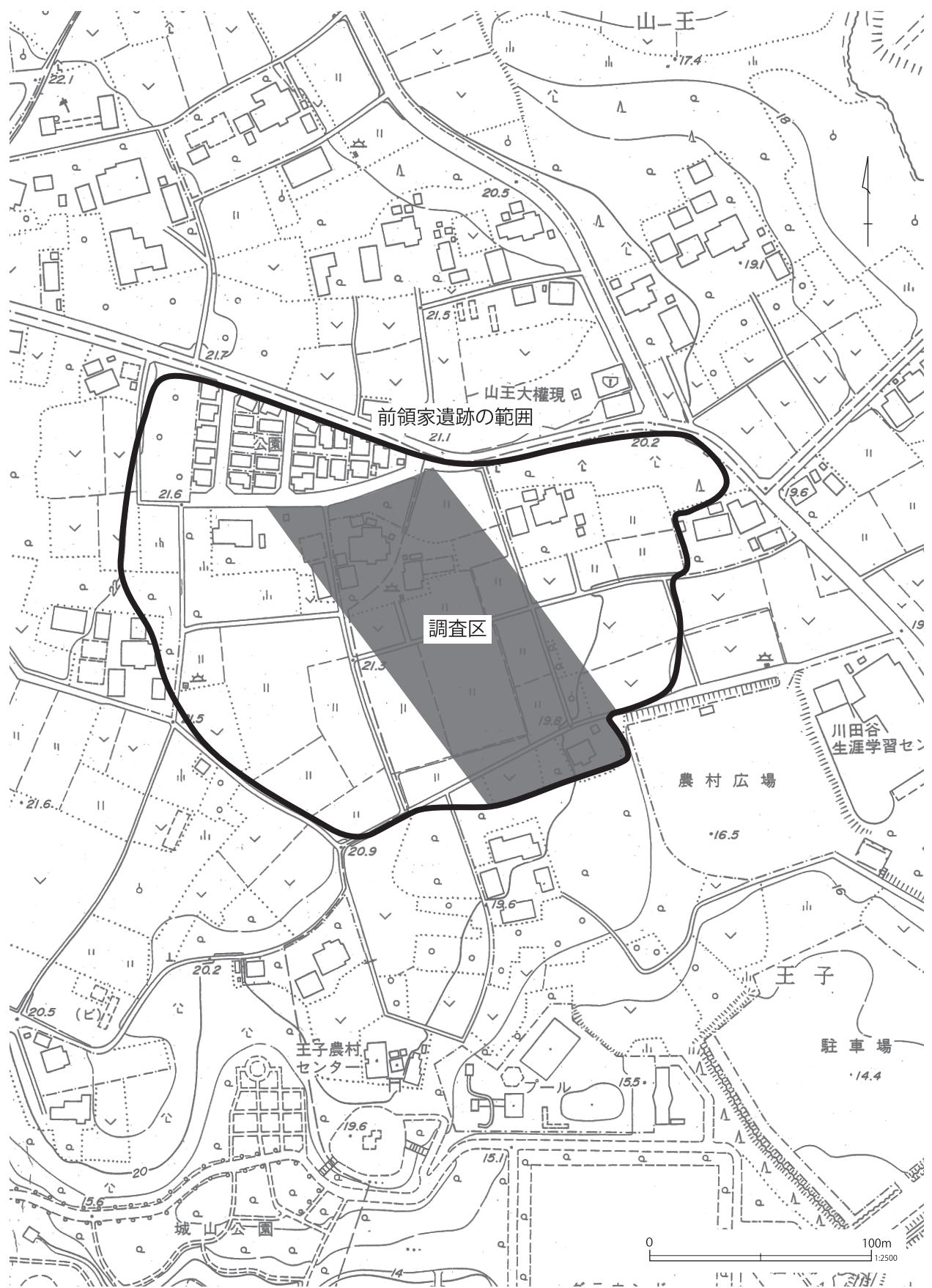
古墳時代前期の遺構は住居跡1軒で、調査区南東部から検出された。古墳時代の遺構は他に認められず、遺物の出土も全体的に僅かであった。

平安時代の遺構は、住居跡15軒、土壙19基と多い。住居跡には鍛冶炉を伴う例が多いのが特徴である。また、カマド構築材に緑泥片岩を使用する住居が多く、大宮台地においては特異である。時期的には、9世紀後葉～10世紀前葉の限定された時期に営まれたものと考えられる。

中・近世の遺構は、掘立柱建物跡7棟、井戸跡6基、地下式坑1基、火葬遺構1基、溝跡24条、土壙315基、ピット1439基が検出された。掘立柱建物跡・溝跡は遺物等から近世の所産と考えられるが、地下式坑・火葬遺構のように中世の所産と考えられる遺構も認められる。



第3図 前領家遺跡の基本層序



第4図 調査区の位置



第5図 前領家遺跡全体図



第6図 前領家遺跡区割図（1）



第7図 前領家遺跡区割図 (2)



第8図 前領家遺跡区割図（3）

IV 遺構と遺物

1. 繩文時代の遺構と遺物

縄文時代の遺構は、住居跡8軒、土壙6基が検出された。遺構は調査区南側を中心に散在する傾向にあり、南側から入り込む浅い谷地に規制された分布状況と捉えられる。

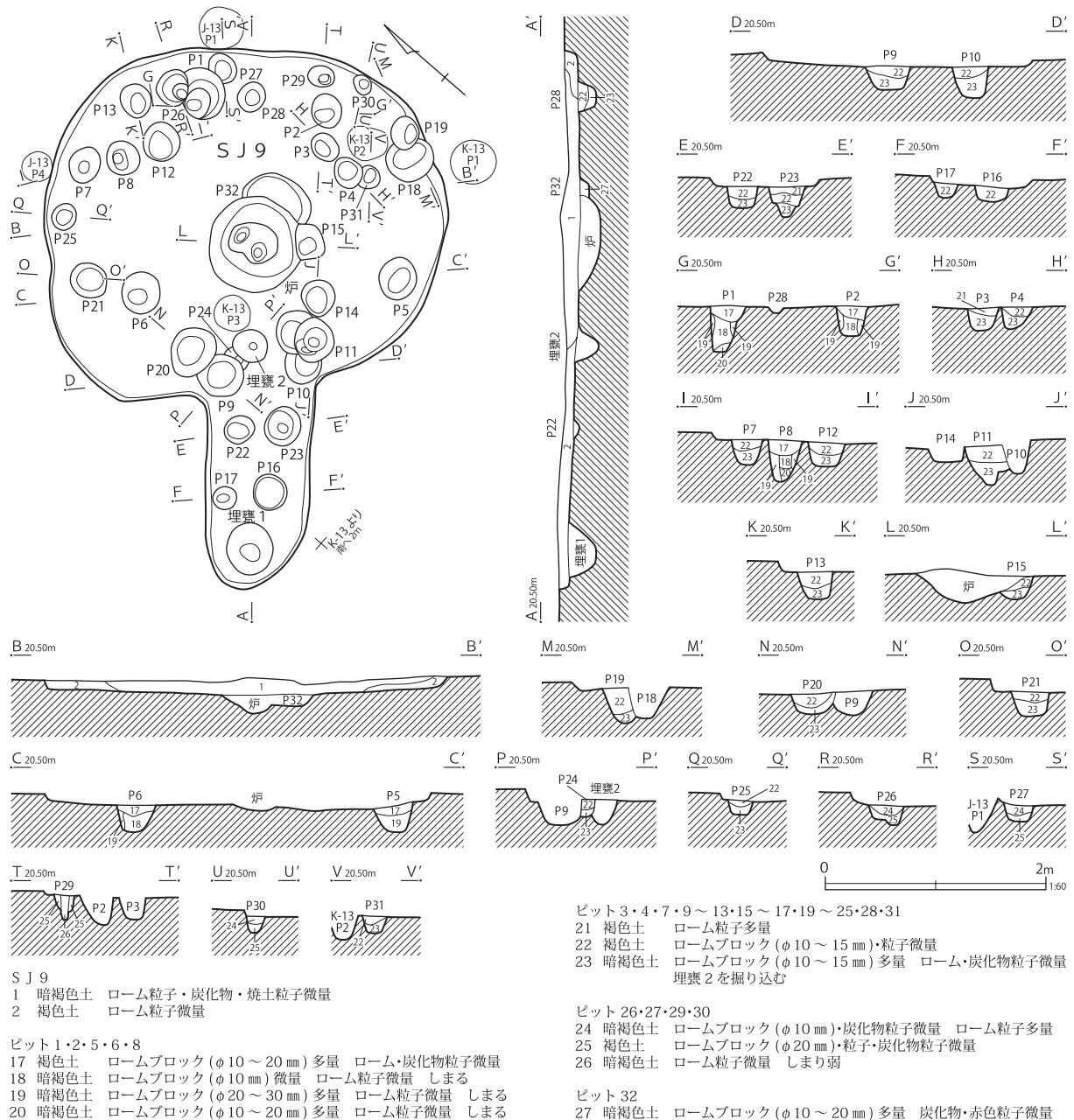
(1) 住居跡

縄文時代の住居跡8軒は、中期末葉～後期初頭

の所産である。平面形態が柄鏡形の住居跡が多く、張り出し部は南～西に付属する傾向がある。炉体土器や埋甕を伴う住居跡が多い。

第9号住居跡（第9・10図）

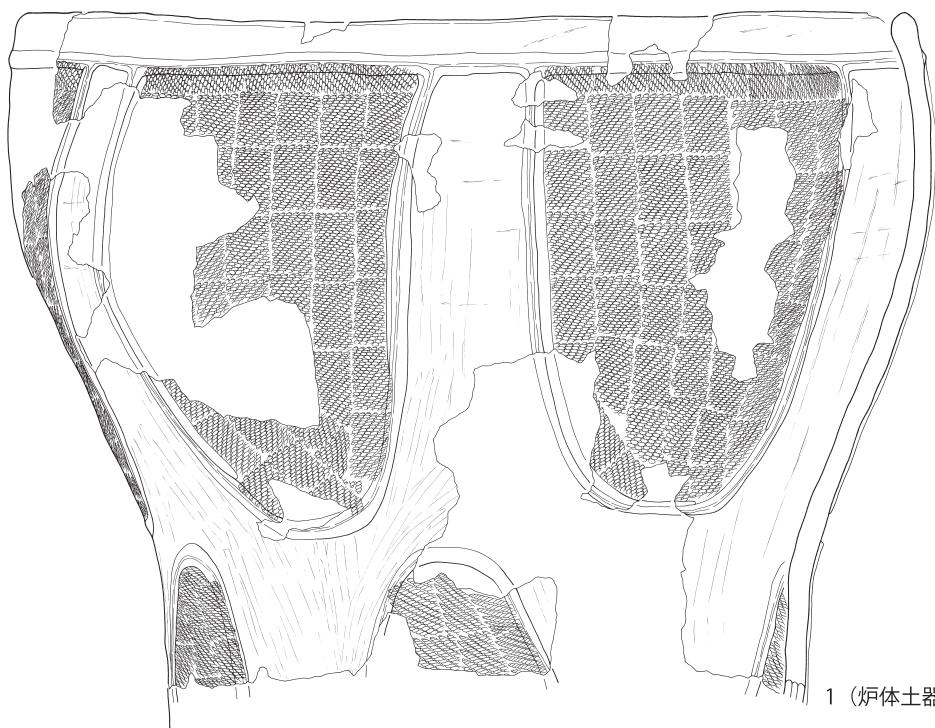
調査区中央部のJ・K-12・13グリッドに位置する。平面形態は柄鏡形で、規模は長軸



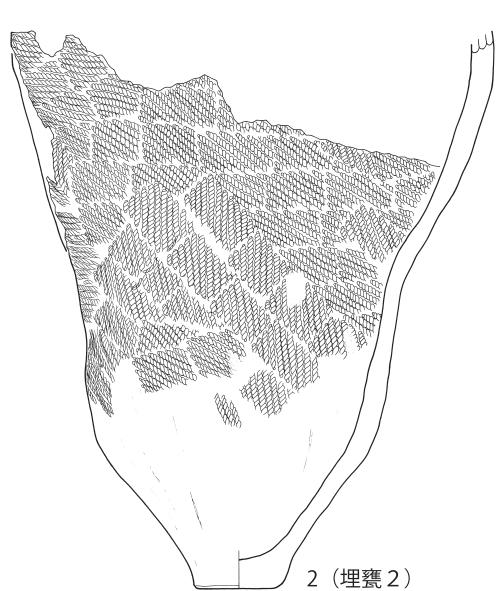
第9図 第9号住居跡（1）



第 10 図 第 9 号住居跡 (2)



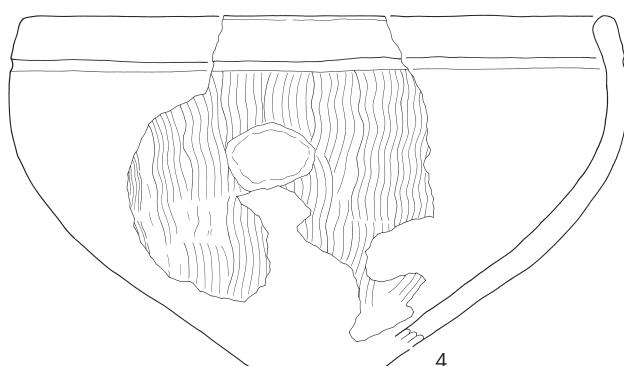
1 (炉体土器)



2 (埋甕 2)



3 (埋甕 1)



第 11 図 第 9 号住居跡出土遺物 (1)



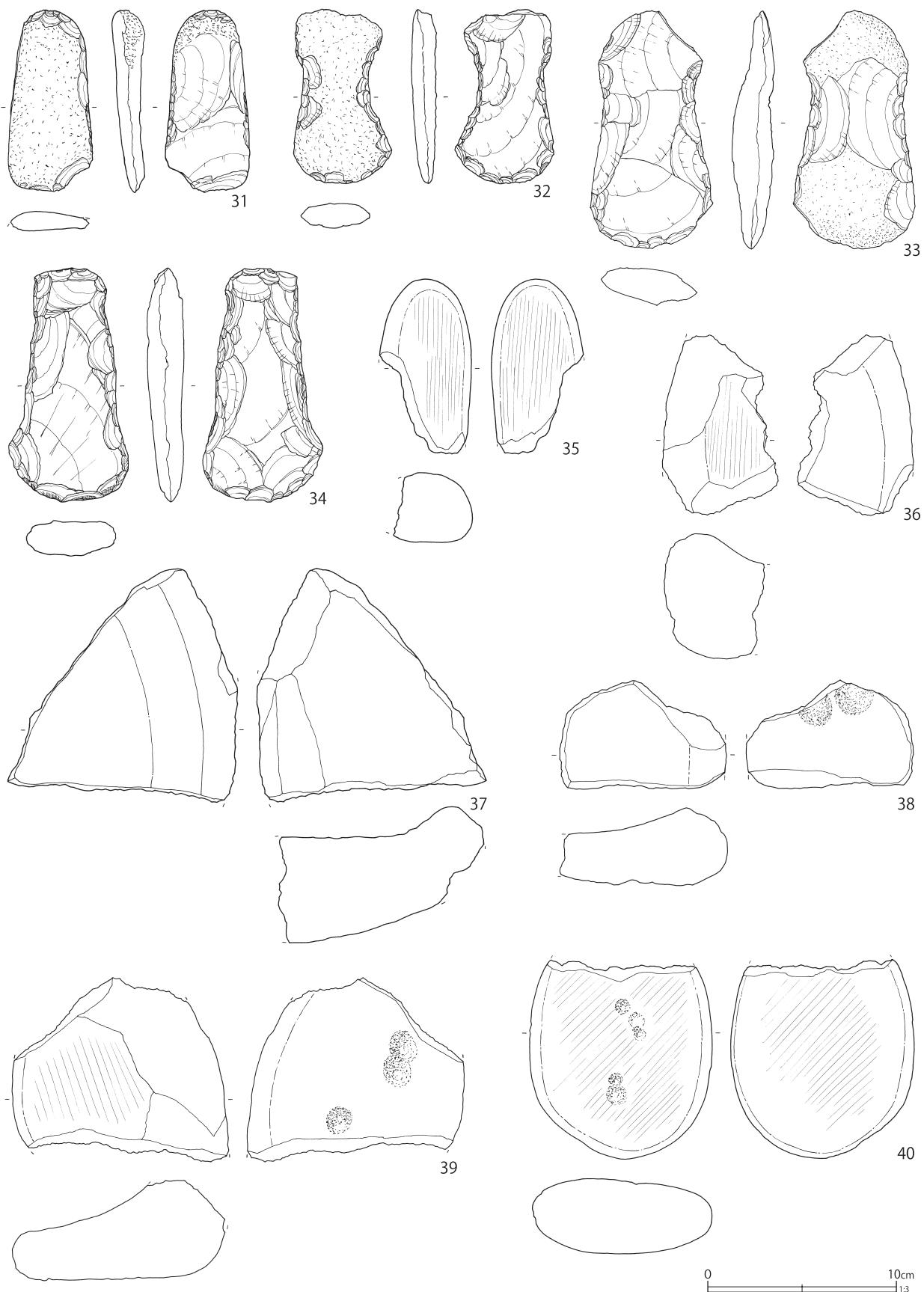


第12図 第9号住居跡出土遺物（2）

4.95m、短軸3.70m、深さ0.12mである。主軸方向はN-50°-Eを指す。

覆土は薄く堆積状況を観察し難いが、自然堆積

とみられる。ピットは住居壁際に廻るものが多い。P 9・10・11・20は出入口施設に係るものであろう。住居中央部には土器埋設炉が検出された。



第13図 第9号住居跡出土遺物(3)

径 85cm 前後の掘り方に深鉢形土器を設置したものの、土器の下面是被熱・硬化していた。土器上端部の破片が炉跡より北西側に散って出土しており、住居埋没過程で炉体土器が破損している状況が窺われる。

炉跡の南西側から埋甕 2 基が検出された。埋甕 1 は張り出し部南西端に位置し、掘り方の径 42 ~ 47cm、深さ 39cm、埋甕 2 は炉跡の約 1m 南西側に位置し掘り方の径 30cm、深さ 30cm であった。いずれも深鉢形土器を正位で埋設していた。

出土した遺物を第 11 ~ 13 図に示した。

第 11 図 1 ~ 4 は器形復元した土器である。

1 は炉体土器として使用された大型の深鉢形土器である。口縁から胴上部が利用されている。やや内傾する口縁で、胴上部で膨らみ、胴中央付近で括れ底部に至る器形である。口縁は狭い無文帶となっている。文様は微隆起線状の隆帶で施文されている。胴部文様は、上下に分かれ、胴上部は口縁部区画に連結して U 字状区画文を 6 単位、胴下部は逆 U 字文を 6 単位施文される。地文は区画文内に施文し、胴上部は単節 RL、胴下部は単節 LR が施文される。口径は 46.0cm、残存高は 36cm である。

2 は埋甕 2 に使用された深鉢形土器で、口縁部を欠損している。胴上部に最大径を持ち、中央やや下で括れる器形である。地文である単節 RL の縄文のみが施文されるが、粗雑に施されており、括れより下は様々な方向に施文される。胴下半は

無文である。残存高は 30cm、底径は 4.5cm である。

3 は埋甕 1 に使用された深鉢形土器で、地文のみが施文される粗製の土器である。口唇はやや内湾し、その直下に最大径を持ちそのまま底部に至る器形である。底部の直上はやや直立気味に作られている。地文は細かい櫛歯状の条線で、口縁部周辺と胴下部には施文されない。口径は 26.8cm、底径は 5.0cm、器高は 36cm である。

4 は浅鉢形土器である。口縁は狭い無文帶となっている。胴部は櫛歯状の条線が、流水文状に施文されるが、粗雑である。推定口径は 31.2cm、残存高は 17.5cm である。

第 12 図 5 ~ 30 は破片資料の土器である。5 ~ 22 は深鉢形土器である。口縁部に文様を持つものではなく、5・6 のように沈線で区画された無文帶となっている。胴部には磨消懸垂文が垂下される。主に沈線で文様が施文されるが、12・16 のように、微隆起状の隆帶が施文されるものもある。10 は蕨手文と円形刺突文が施文される。地文は単節の縄文が施されるものがほとんどであるが、6 は上部に無節 R の縄文、下部に櫛歯状の条線と、2 種類の地文が用いられている。23 ~ 29 は浅鉢形土器である。23 は肩部で区画し上部は単節 RL の縄文が、下部は条線が流水文状に施文されている。30 は瓢箪形の注口土器の口縁部の破片である。第 13 図 31 ~ 40 は出土した石器である。

出土した土器は加曾利 E IV 式土器である。時期は後期初頭に下る可能性がある。

第 2 表 第 9 号住居跡出土石器観察表（第 13 図）

番号	器種	石材	長さ/cm	幅/cm	厚さ/cm	重さ/g	備考	図版
31	打製石斧	緑色岩	9.5	4.4	1.7	87.5	短冊形	13-7
32	打製石斧		9.2	5.1	1.3	72.6	分銅形 完形	13-8
33	打製石斧	礫岩	12.5	6.5	2.2	174.2	分銅形	13-9
34	打製石斧	ホルンフェルス	12.3	6.3	1.9	179.9	完形	13-10
35	磨石	砂岩	[9.2]	[4.8]	3.8	229.5		13-11
36	石皿	安山岩	[9.5]	[6.1]	[6.8]	421.7	欠損 一部残存	13-12
37	石皿	安山岩	[12.3]	[12.1]	7.6	975.3	欠損 一部残存	13-13
38	石皿		[5.7]	[8.8]	[4.1]	185.6	欠損 一部残存	13-14
39	石皿	安山岩	[9.7]	[11.4]	[5.4]	627.0	欠損 一部残存	13-15
40	磨石		[10.4]	9.6	4.0	657.0	欠損 一部残存	13-16

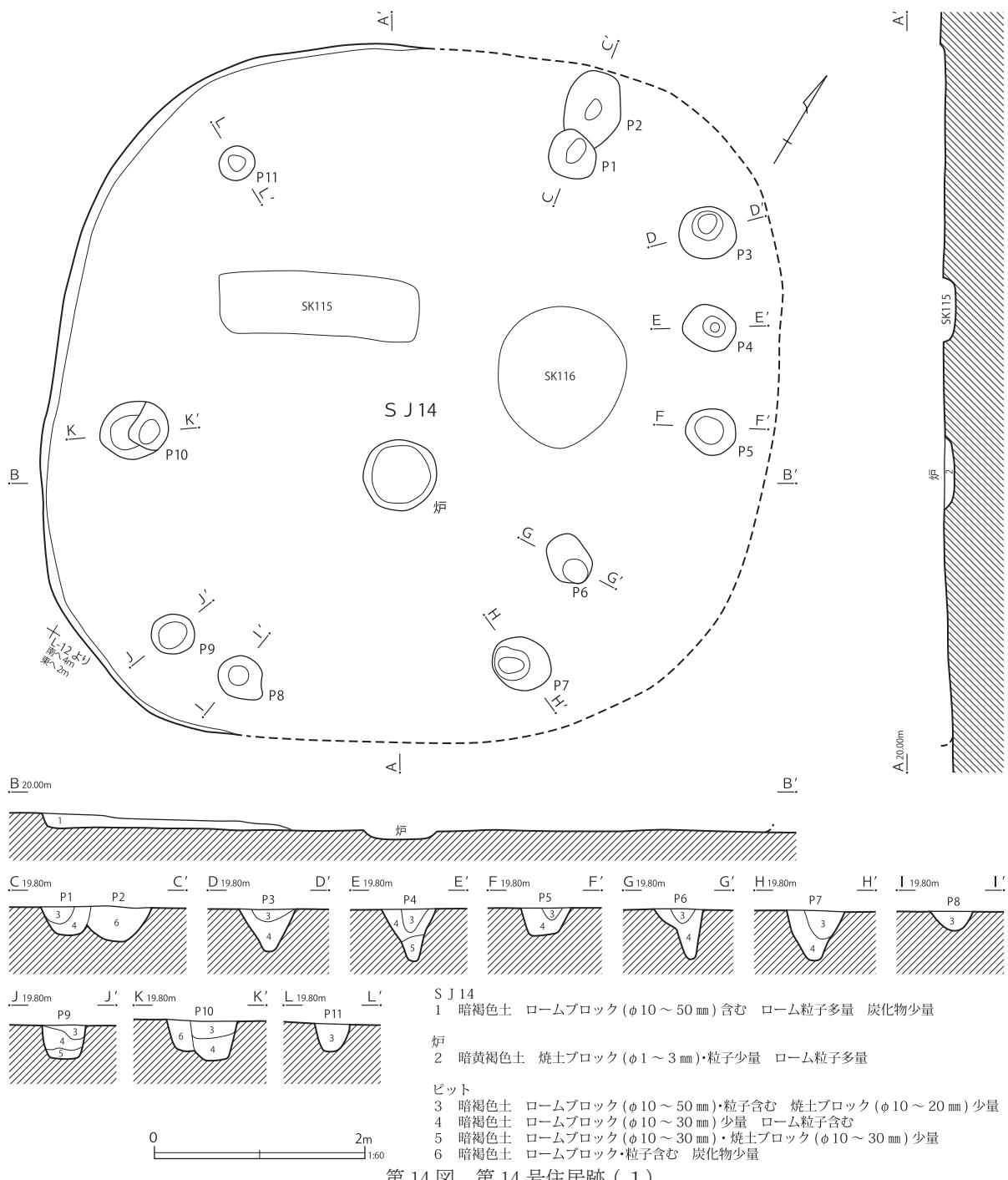
第14号住居跡（第14・15図）

調査区南寄りのK・L-12グリッドに位置する。遺存状態は不良で、特に東半部はほぼ削平された状態であった。遺存部分での径は6.68mであり、ピットの配列等から、径7.00m弱の円形プランを呈するものと想定される。

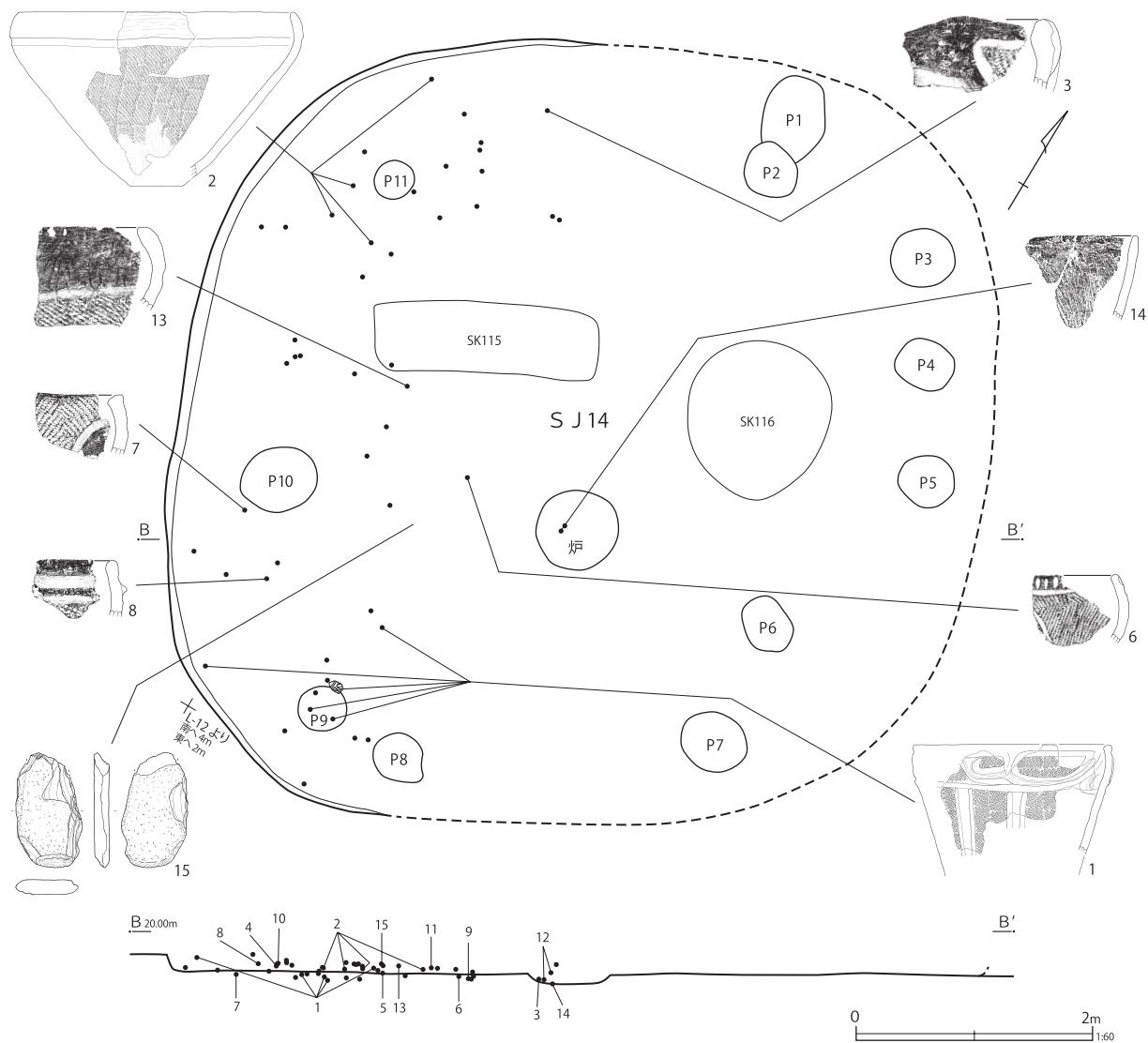
壁は西側のみ遺存し、深さ0.13m程であった。

柱穴は壁から40～60cm程内側を廻っていたよう、深さ30～50cmのピットが11基検出された。住居跡中央部南寄りからは、径70cm、深さ10cmの円形の掘り込みが検出された。被熱は確認されていないが、炉の痕跡と考えられる。

第16図1～14は出土した土器である。1・2は器形復元が可能なもので、他は破片資料であ



第14図 第14号住居跡(1)



第15図 第14号住居跡（2）

第3表 第14号住居跡出土石器観察表（第16図）

番号	器種	石材	長さ/cm	幅/cm	厚さ/cm	重さ/g	備考	図版
15	打製石斧	緑泥片岩	9.6	5.6	1.3	119.0		14-2

る。

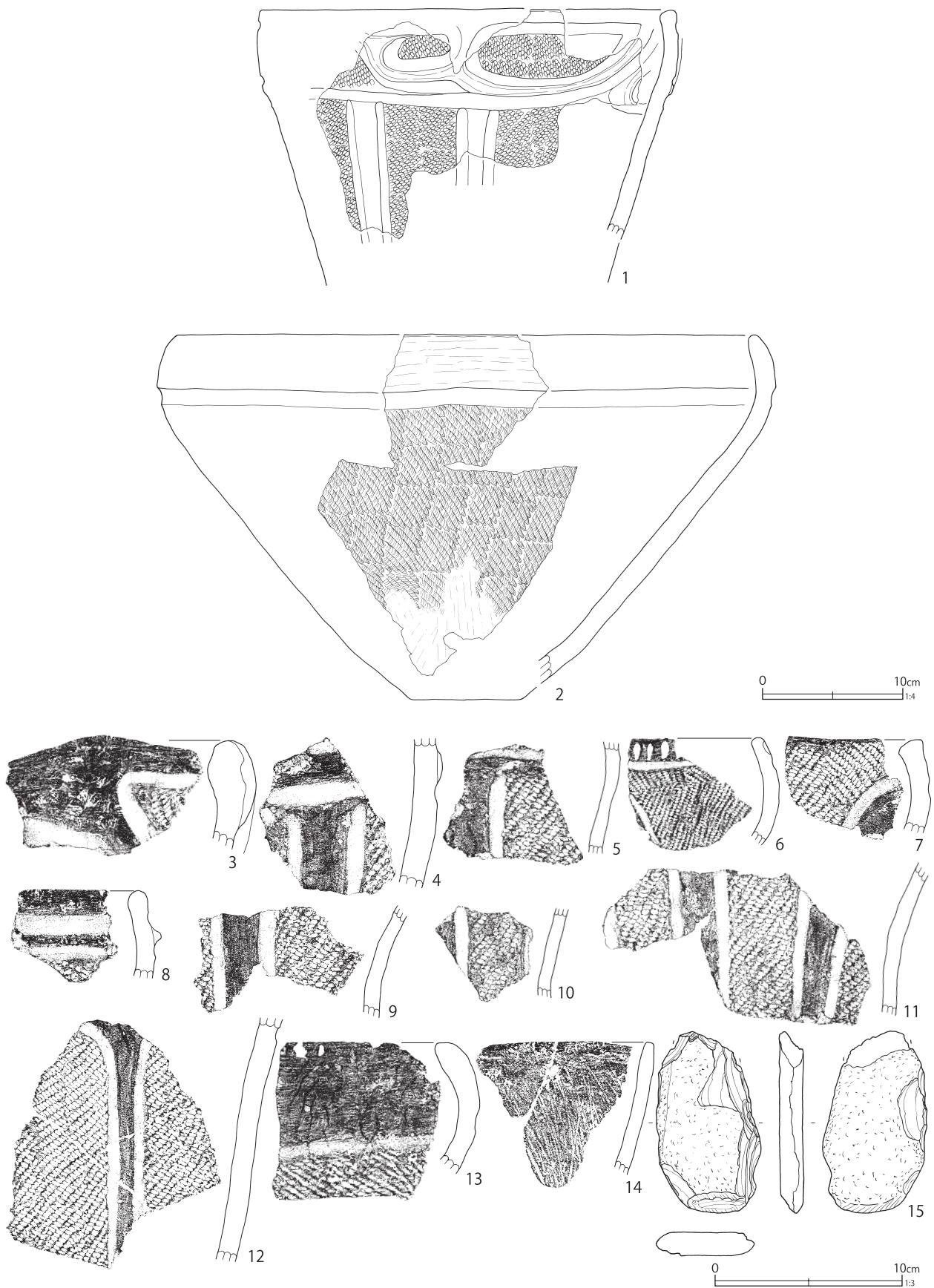
1は深鉢形土器で、口縁から胴上部が残存している。頸部の括れはなく、直線的に底部に至る器形である。口縁部文様帶は、隆帶の渦巻文や区画文が施文されている。胴部は浅い幅広の沈線で磨消懸垂文を垂下させている。地文は複節R L Rで、口縁は横方向、胴部は縦方向の施文である。推定口径は29.6cm、残存高は16cmである。

2は浅鉢形土器である。口縁は狭い無文で、胴

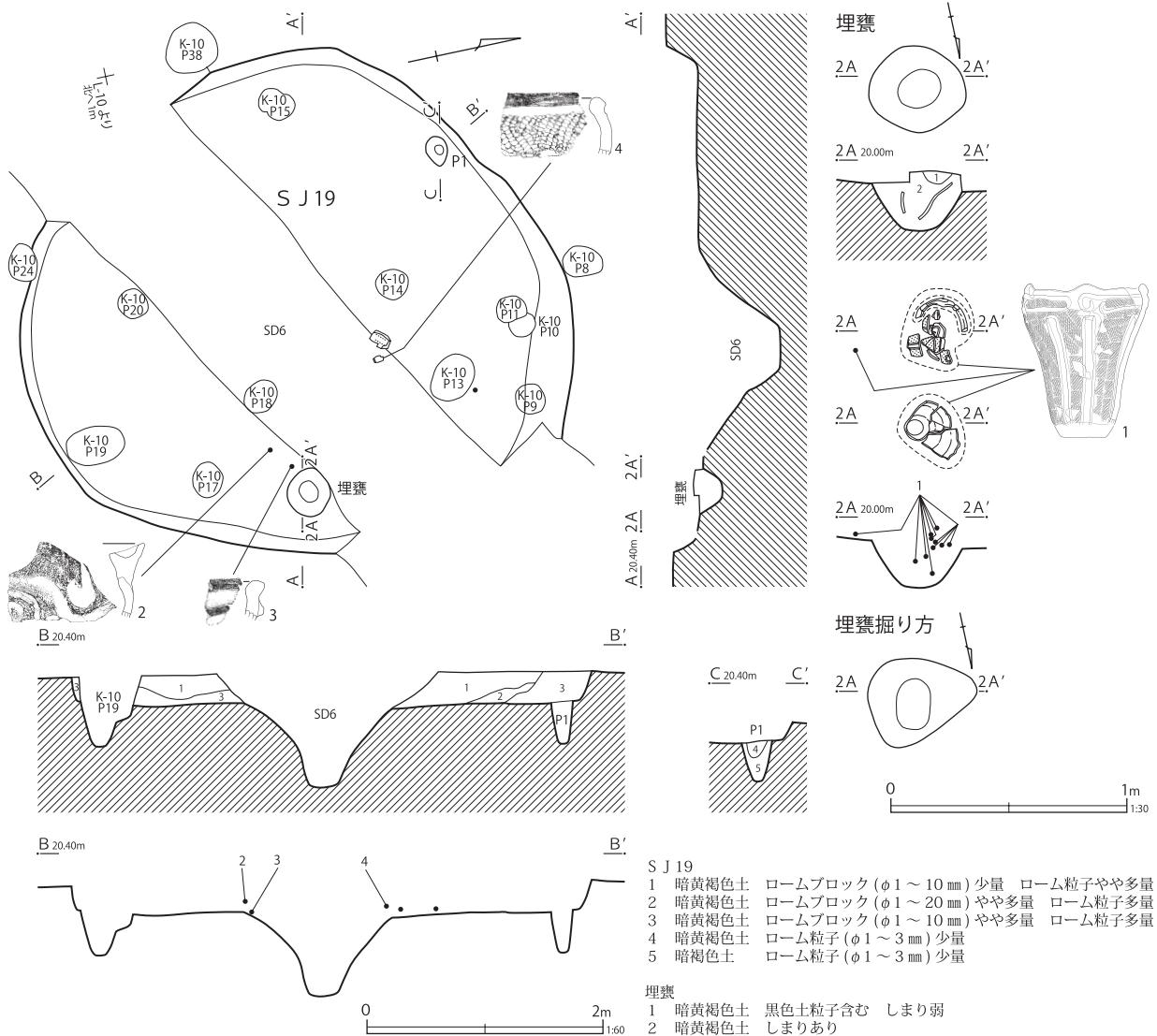
部とはナゾリ状の幅広の浅い沈線で区画されている。胴部は無節Lの縄文が縦方向に施文される。推定される口径は41.0cm、残存高は24cmである。

3～12は深鉢形土器である。3～5・8は口縁部文様が残るもの、6・7は口縁部文様のないものである。9～11は胴部で、磨消懸垂文が施文される。13は浅鉢形土器、14は鉢形土器である。第16図15は出土した打製石斧である。

時期は中期末葉の加曾利E III式期である。



第16図 第14号住居跡出土遺物



第17図 第19号住居跡

第19号住居跡（第17図）

調査区中央部のK-10グリッドに位置し、第6号溝跡によって住居中央部が東西に分断されている。平面形は、長軸4.70m、短軸4.30m、深さ0.26mの円形である。埋甕の位置から主軸方向はN-78°-Eと想定される。

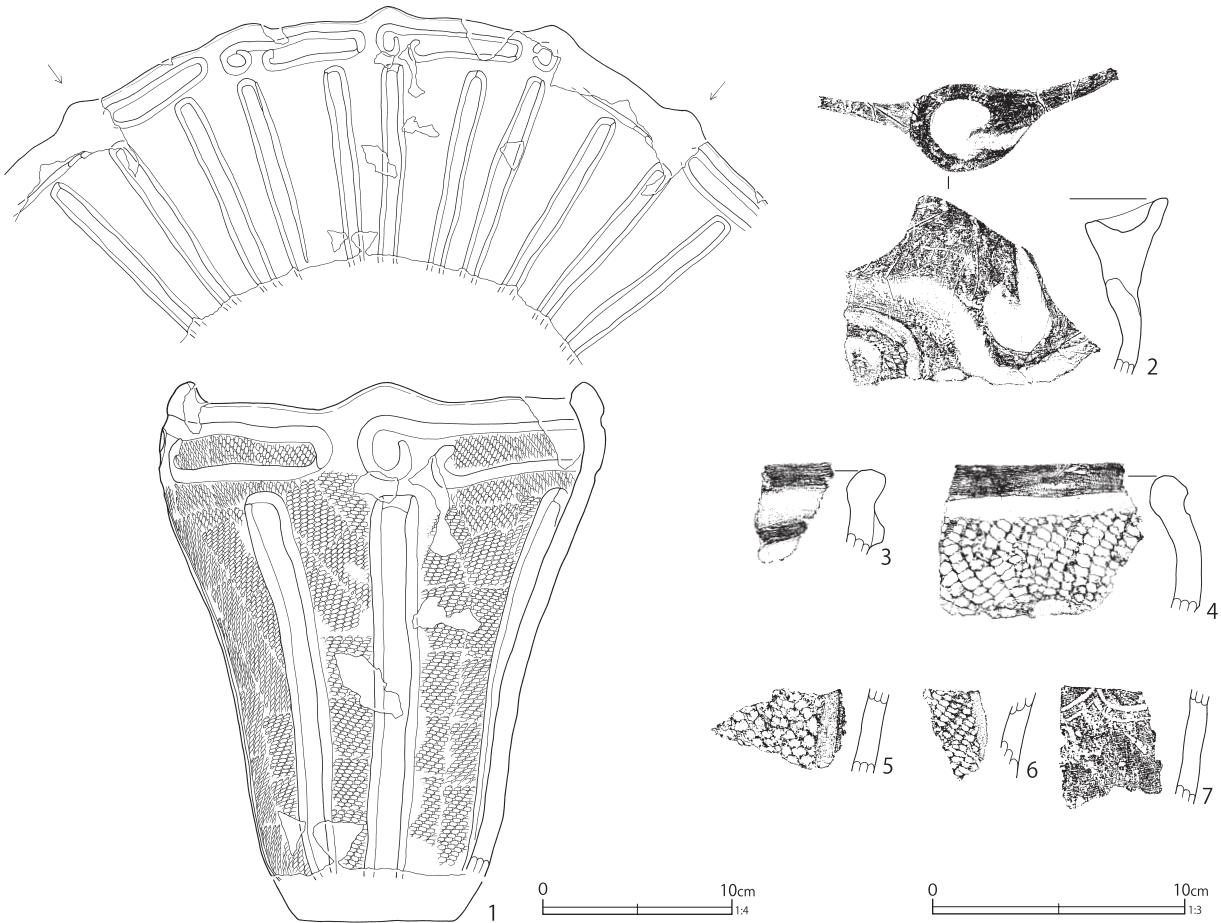
覆土は大きく3層に分かれ、自然堆積を示す。住居範囲にはいくつかのピットが存在するが、覆土等の特徴から確実に住居に帰属すると考えられたのは、北西壁際の1基のみであった。炉跡は確認されなかつたが、住居跡東部に埋甕1基が遺存していた。径36~40cm、深さ21cmの掘り方に

正位で深鉢を据えたものであり、底部を除いてほぼ全体が復元された。

出土した遺物を第 18 図に示した。

第18図1～7は出土した土器である。

1は埋甕に使用された深鉢形土器である。キヤリパー形であるが、胴部の括れはほとんどない。口縁は4単位の小突起を持つ。口縁部文様帶には、端部が渦巻く横長の橢円区画文を2単位施文され、突起下に渦巻文がくるように施文される。1単位は、単独の渦巻文が突起下に施文される。破損している1単位分は不明である。胴部は磨消逆U字文が8単位に施文されている。口唇直下は無



第18図 第19号住居跡出土遺物

文だが、他は地文が施文される。地文は口縁部文様帯相当部分まで横方向に、他は文様に合わせるように斜めや縦方向に施文され、地文は単節R Lの縄文である。口径 21.0cm、残存高 26cm である。

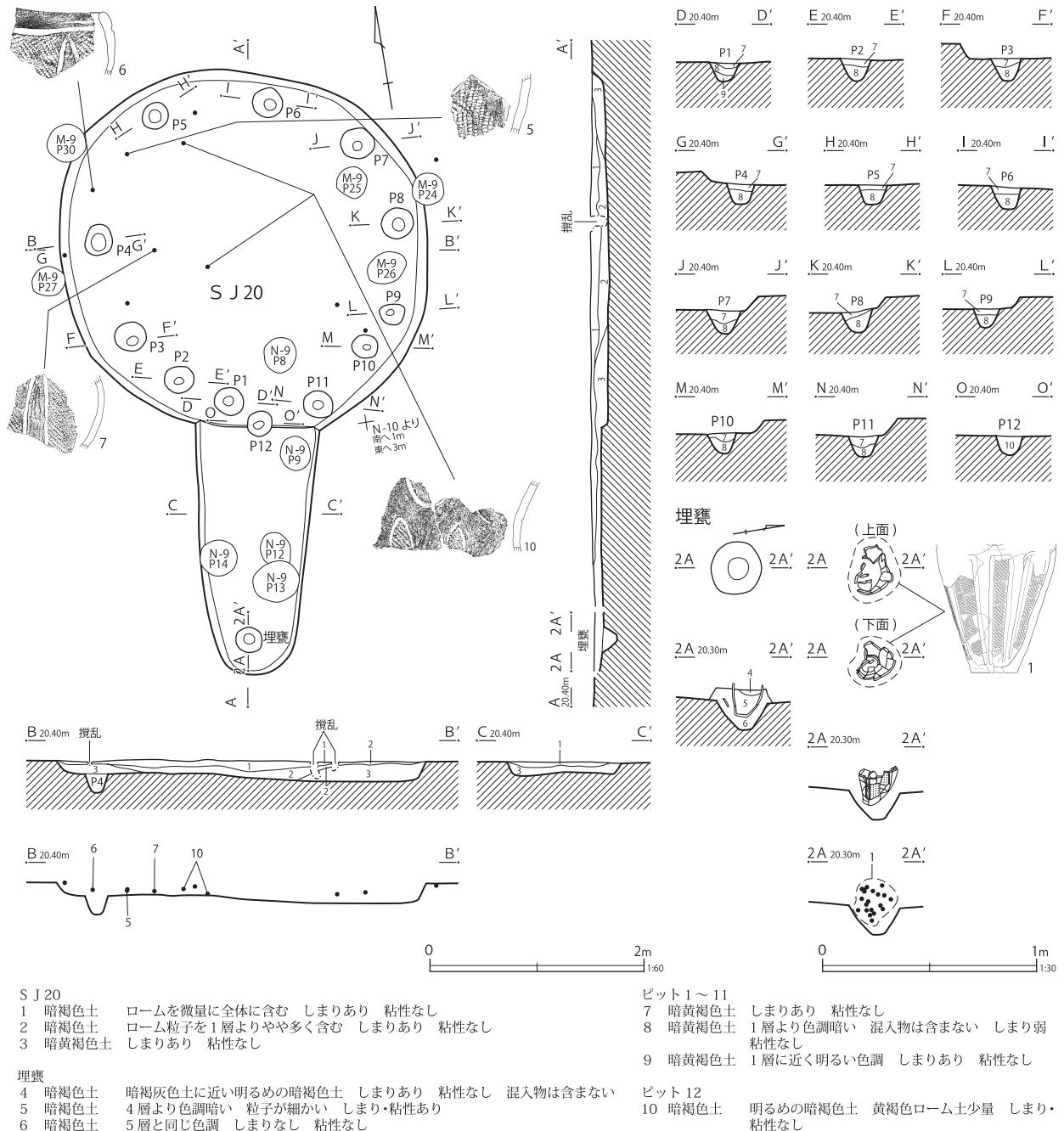
2～7は、深鉢形土器の破片資料である。2～4は口縁部である。2は把手部分で、頭頂面から口縁部にかけて渦巻文が施文される。地文は無節Lの縄文である。3は隆帯とそれに沿わせた沈線で文様が施文される。4は口縁部文様を持たない土器である。地文は単節R Lの縄文で、縦方向と横方向の施文が残されている。5・6は胴部で、沈線による磨消懸垂文が施文される。5の地文は複節R L Rの縄文、6は単節L Rの縄文である。7は連弧文系土器の胴部と考えられる。

時期は中期末葉の加曾利E III式期である。

第20号住居跡（第19図）

調査区南寄り西側のM・N-9グリッドに位置する。南側に張り出し部を伴う柄鏡形の住居跡で、長軸 5.66m、短軸 3.45m、深さ 0.13～0.20m である。主軸方向はN-10°-Eを指す。

覆土は大きく3層に分かれ、自然堆積を示す。柱穴は壁際に沿うように12基検出されており、いずれも深さ 18～21cm と規格的である。炉跡は確認されなかったが、張り出し部南端に埋甕1基が検出された。径 23cm、深さ 29cm の掘り方に深鉢が正位で据えられており、口縁部を除くほぼ全体が復元可能であった。張り出し部は、住居本体の南側に長軸 2.26m、幅 0.23m の規模で付属する。全体的にやや浅く掘り窪められ、確認面からの深さは 0.13m であった。



第19図 第20号住居跡

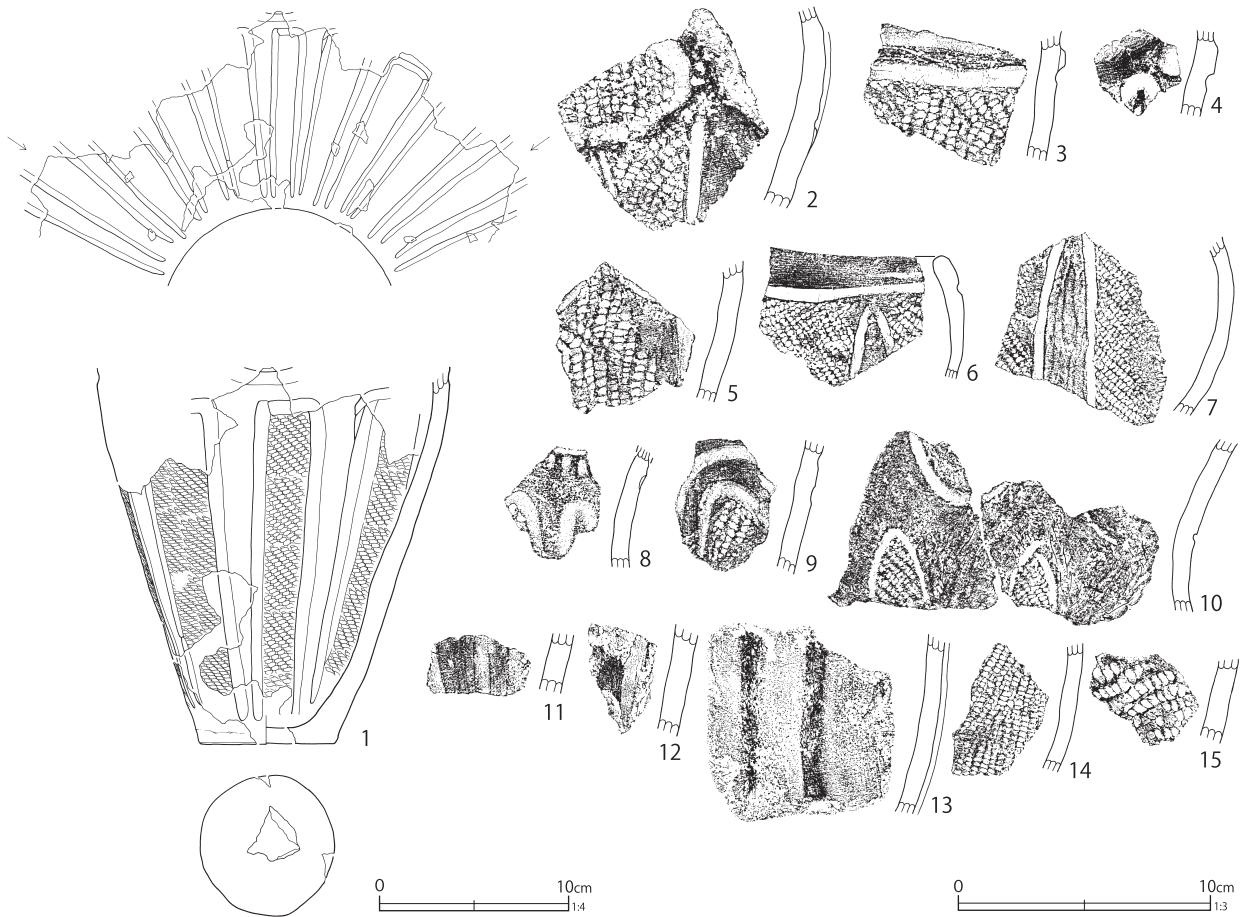
出土した遺物を第20図に示した。

第20図1~15は出土した土器である。

1は埋甕に使用された深鉢形土器である。口縁部は欠損する。口縁部直下から残存すると考えられる。上端部には、口縁部と胴部を区画する沈線文の一部が残っている。胴部には逆U字文を8単位施文する。区画された文様内には、地文が充填

される。地文は撫りが緩い単節LRの縞文で、縦方向に施文される。底面中央には穴が穿たれており、故意である可能性が高い。底径は7.5cm、残存高は20cmである。

2~15は深鉢形土器の破片資料である。2~4は口縁部文様が残る土器である。5は連弧文系土器である。6~10は口縁部文様を持たない土



第20図 第20号住居跡出土遺物

器で、6・7・10の胴部文様は鋸歯状となってい。11～13は胴部で、11・12は磨消懸垂文が施文される。13は隆帯を2本垂下させている。大型土器の胴部の一部と考えられる。14・15は地文のみが施文される。

出土土器の主体は加曾利E III式新段階で、時期は中期末葉である。

第21号住居跡（第21図）

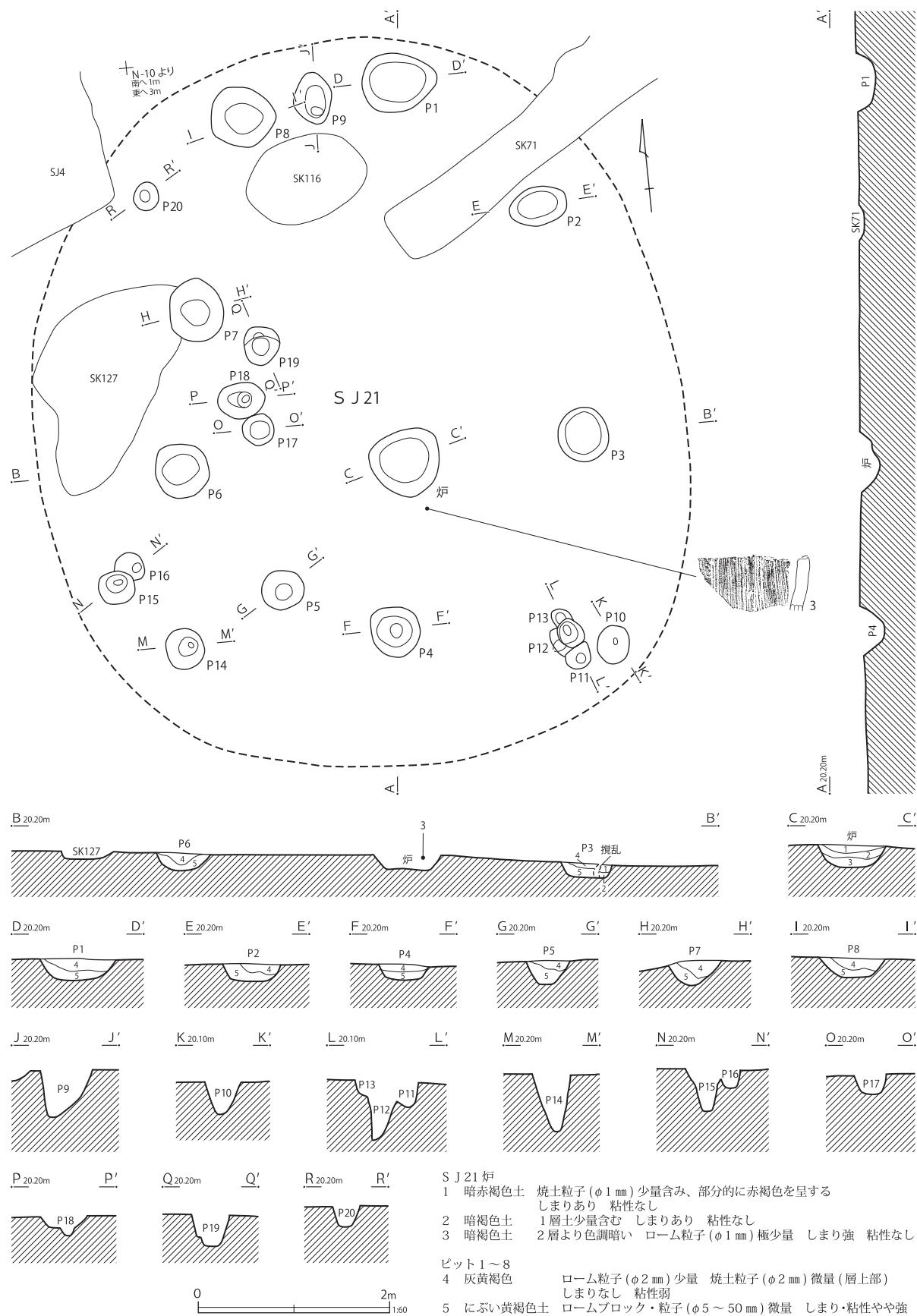
調査区南寄りのM・N-11グリッドに位置する。覆土はほぼ削平されていたが、炉跡の存在から住居と想定した。

ピットの分布から長軸7.60m、短軸6.90m程度の円形プランの住居である可能性が高い。炉跡は確認面で焼土が散っており、橙色に変色していたが、被熱の状態は弱い。炉跡の規模は、長軸68cm、短軸74cm、深さ22cmである。

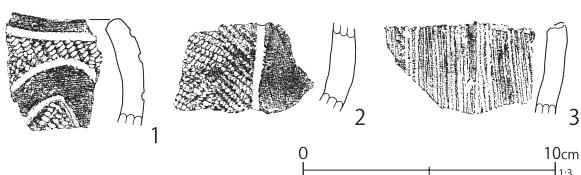
ピットは、P 1～8までが住居に係るものとして調査時に捉えられたものである。炉跡近接範囲に認められたグリッドピットについても、P 9～20の住居ピット番号を付して断面図を示した。

第22図1～3は出土した土器である。いずれも小破片である。1・2は深鉢形土器である。1は口縁部である。口縁部文様はなく、沈線を巡らせて狭い無文部としている。胴部には、波状の磨消懸垂文が施文される。地文は単節R Lの縄文で、口縁部直下は横方向、他は縦方向に施文される。2は胴部で、幅広の磨消懸垂文が垂下する。地文は単節L Rの縄文で、向きは乱雑である。3は浅鉢形土器の胴部である。端部が擦り減っており、砥石などに破片が使用された可能性がある。

出土した土器は加曾利E III式で、時期は中期末葉である。



第21図 第21号住居跡



第22図 第21号住居跡出土遺物

第22号住居跡（第23・24図）

調査区中央部のI-11グリッドに位置する。南側に張り出し部を伴う柄鏡形住居で、長軸5.04m、短軸3.23m、深さ0.28mである。主軸方向はN-15°-Eを指す。平面プラン検出の際、住居南側～東側にかけても僅かに暗褐色土の広がりが確認された。別の住居が重複している可能性もあったが、土層堆積や遺物出土状況から1軒の住居跡と判断された。

覆土は大きく3層に分かれ、ローム粒子・ブロックを比較的多く含む。

ピットは壁際に沿った位置を中心に15基検出されており、深さ10～20cm程度の浅いものが主体であった。P1・2のみ深さが20cmを越え、出入口施設に伴うと考えられる。

炉跡は住居跡中央部から検出された土器埋設炉で、大型の深鉢を埋設する。被熱面は明確では無かった。土器埋設に係る掘り方は、径63cm、深さ34cmであった。

埋甕は2基検出された。埋甕1は張り出し部南西端に位置し、掘り方の径32～35cm、深さ37cm、埋甕2は炉跡の約1.2m南側に位置し、掘り方の径31～34cm、深さ8cmであった。いずれも深鉢形土器を正位で埋設していた。

出土した遺物を第25～28図に示した。

第25図1～4、第26図5は器形復元が可能な土器である。1は埋甕2に使用された深鉢形土器である。口縁部文様を持たない、いわゆる吉井城山類型の土器である。口縁に1本の幅広の沈線を巡らし、狭い無文部を作り出している。口縁

の一部には剥がれた痕があり、突起が貼付されていた可能性がある。胴中央で大きく括れる器形で、そこを境界に文様が上下に分割されている。胴上部には、1本沈線で波状文が12単位に施文される。胴下部には、沈線の逆U字状の文様が胴上部の波底部に合わせて、12単位に施文される。地文は文様内に充填するように施文される。地文は単節RLの縄文で、口縁直下は横方向に1段施文され、他は縦方向に施文される。口径は29.0cm、底径は6.8cm、器高は36.5cmである。

2・3は深鉢形土器で、口縁と胴部の一部が残存している。いわゆる梶山類型の土器で、胴部上半には隆帶による大柄な渦巻文が施される。胴下半には懸垂文が施文されると考えられる。隆帶は微隆起状となっている。地文は、2に単節RLの縄文、3に単節LRの縄文が施文される。2の推定される口径は25.8cm、残存高は17cmである。3の推定口径は22.8cmで、残存高は7cmである。

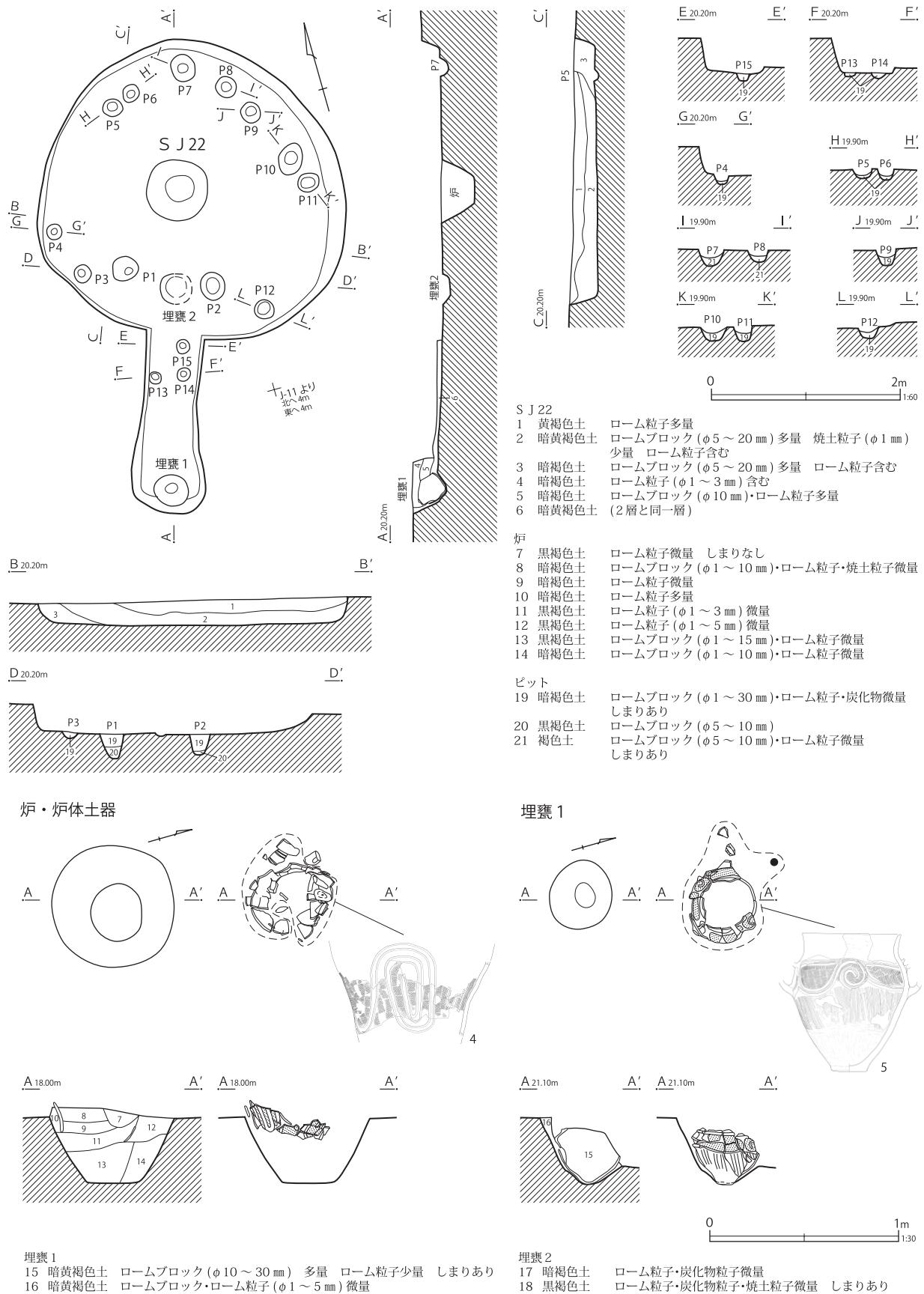
4は炉体土器として使用された深鉢形土器の胴部である。胴部には横S字文の端部が相反する大型の渦巻文を施文する文様が、2単位に施文される。地文は単節RLの縄文である。

5は埋甕1の両耳壺である。無文の口縁部が直立気味に立ち上がる。土器の両側には、把手の根元部分が残存している。文様は肩部に隆帶で施文され、渦巻文を中心半円形状の区画文が施される。文様内には単節RLの縄文が充填される。肩部より下の胴部には、櫛歯状の条線を縦方向に施文される。下半部は無文である。推定口径は、27.6cm、底径は10.0cm、器高は39cmである。

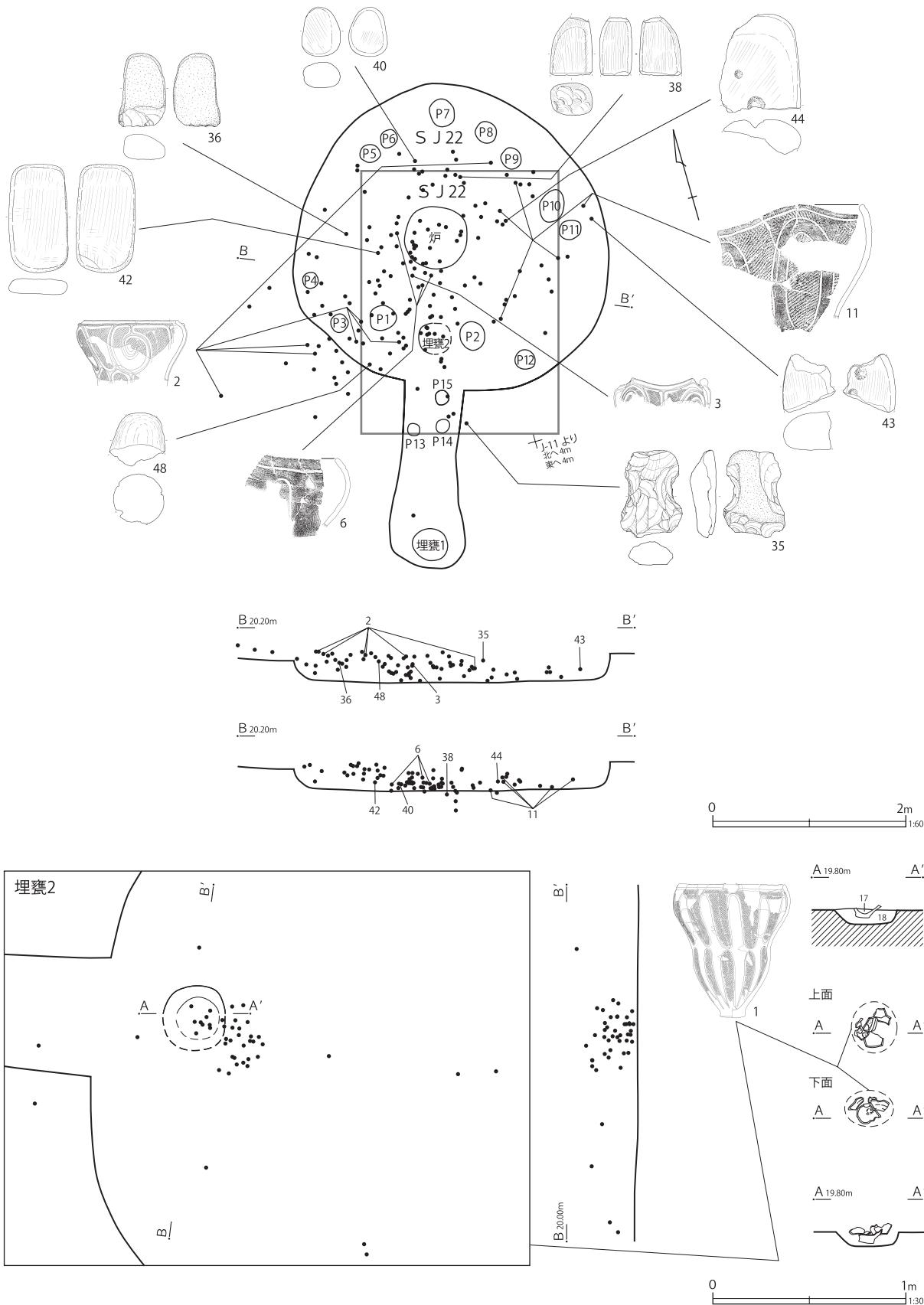
第26図6～24、第27図25～34は破片資料で、磨消縄文で文様が描かれる吉井城山類が主体である32は浅鉢形、33は有孔鍔付土器である。

第27図35～44、第28図45～49は出土した石器である。48・49は石棒で、破碎している。

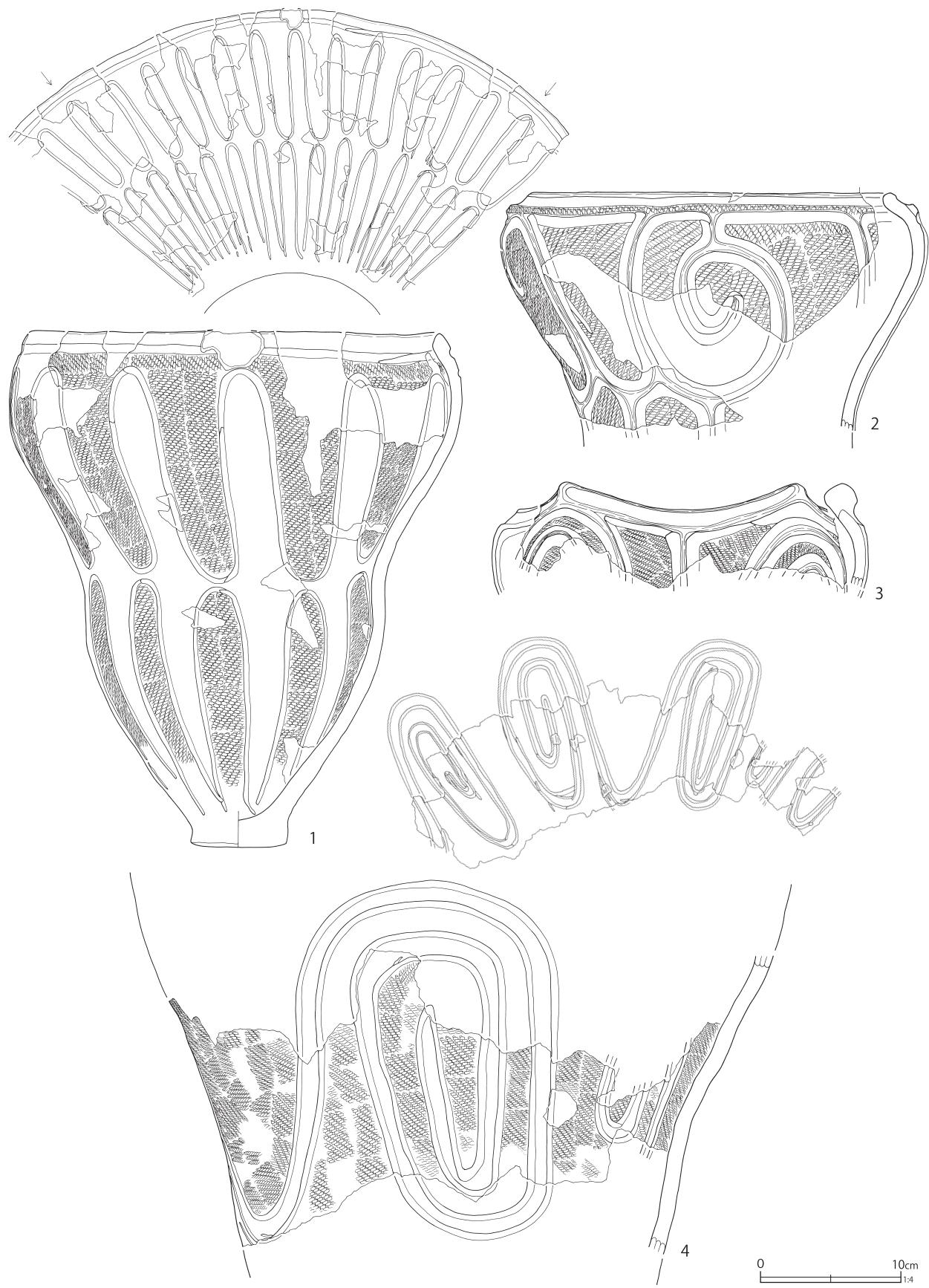
出土土器は加曽利EIV式で、時期は中期末葉と考えられる。



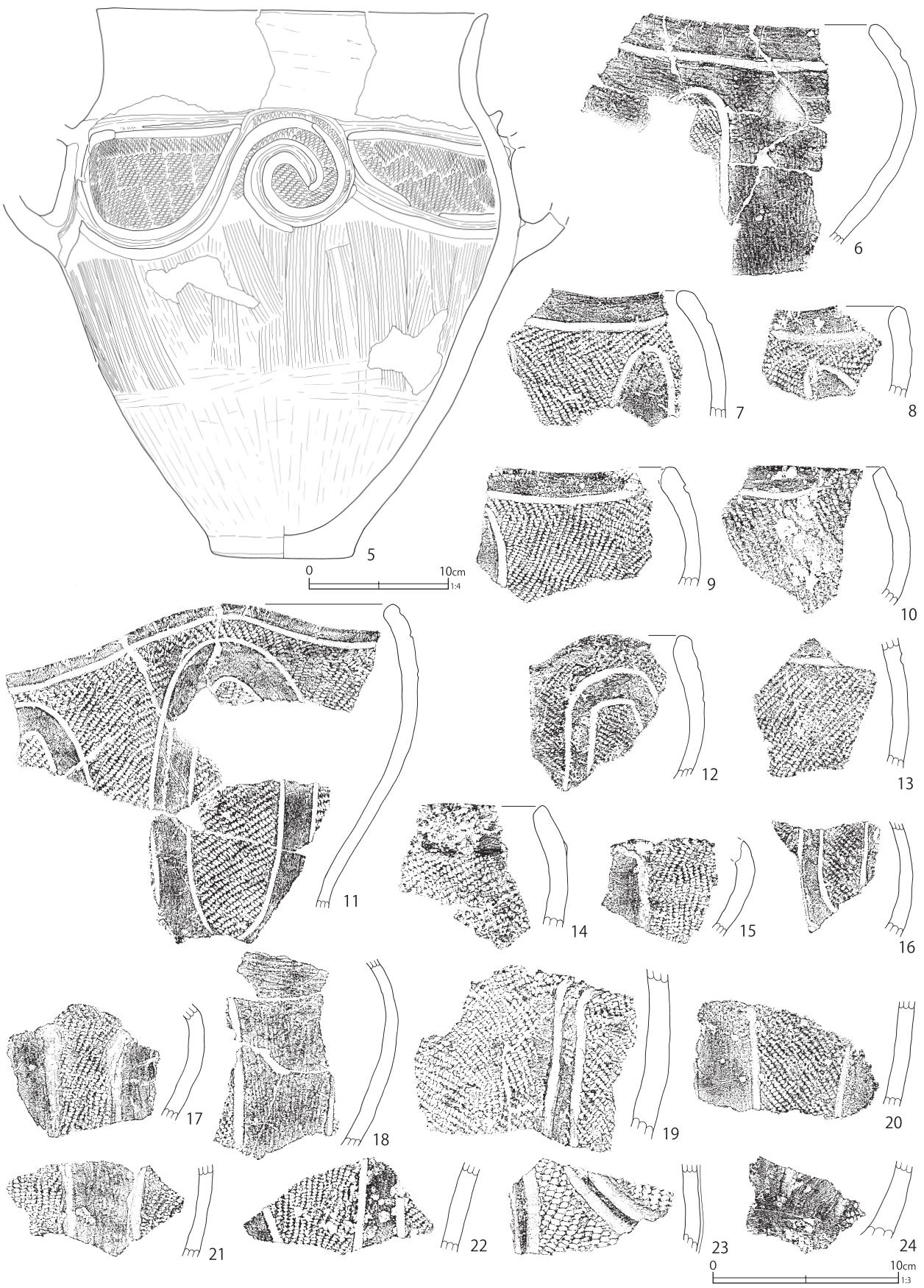
第 23 図 第 22 号住居跡 (1)



第24図 第22号住居跡（2）



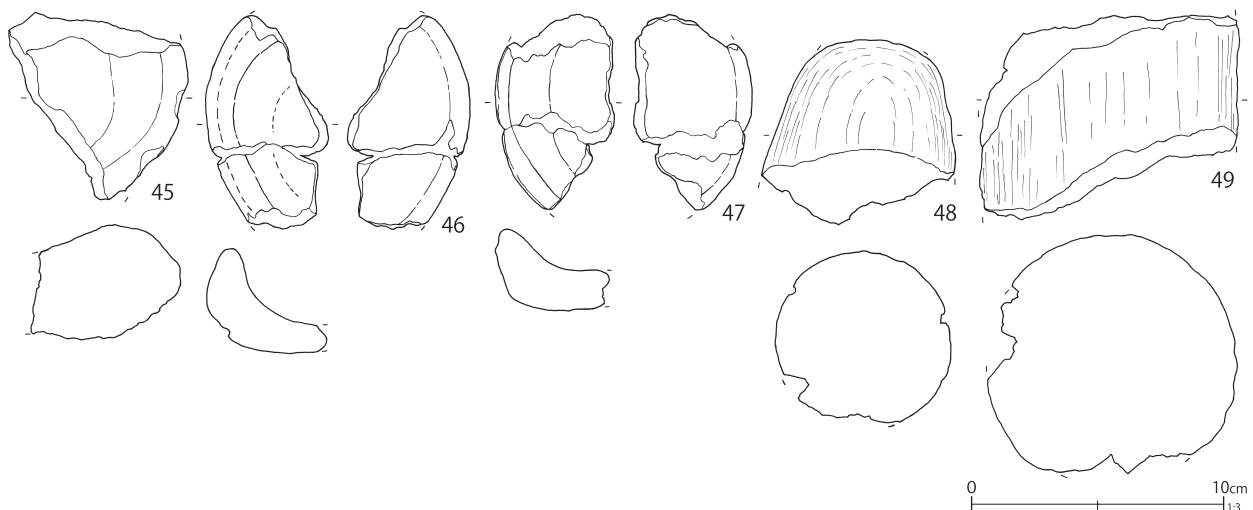
第25図 第22号住居跡出土遺物（1）



第 26 図 第 22 号住居跡出土遺物 (2)



第 27 図 第 22 号住居跡出土遺物 (3)



第28図 第22号住居跡出土遺物(4)

第4表 第22号住居跡出土石器観察表(第27・28図)

番号	器種	石材	長さ/cm	幅/cm	厚さ/cm	重さ/g	備考	図版
35	打製石斧	ホルンフェルス	12.0	8.5	3.6	373.6	完形	15-8
36	磨石	ホルンフェルス	10.1	6.5	3.6	312.7		15-9
37	敲石	砂岩	[11.5]	[4.0]	2.0	141.2	欠損 一部残存	15-10
38	磨石	安山岩	[8.1]	[5.8]	4.4	373.5		15-11
39	磨石	安山岩	[5.7]	[3.4]	3.0	38.2		15-12
40	磨石	安山岩	6.7	5.3	3.5	327.3		15-13
41	敲石	流紋岩	8.0	6.3	6.0	415.7	完形	15-14
42	砥石	砂岩	14.9	8.3	2.4	440.1	完形	16-1
43	磨石	安山岩	[8.0]	[7.2]	5.5	327.3		16-2
44	凹石	閃綠岩	[13.5]	[11.2]	[5.5]	819.4		16-3
45	石皿	安山岩	7.4	7.1	[5.2]	249.2		16-4
46	容器型石	軽石	[8.5]	[4.9]	4.6	38.5		16-5
47	容器型石	軽石	[7.8]	[4.8]	3.8	33.1		16-6
48	石棒類	安山岩	[7.3]	[7.7]	[7.1]	317.1		16-7
49	石棒類	安山岩	[8.0]	[10.3]	[9.6]	783.7	欠損 一部残存	16-8

第23号住居跡(第29図)

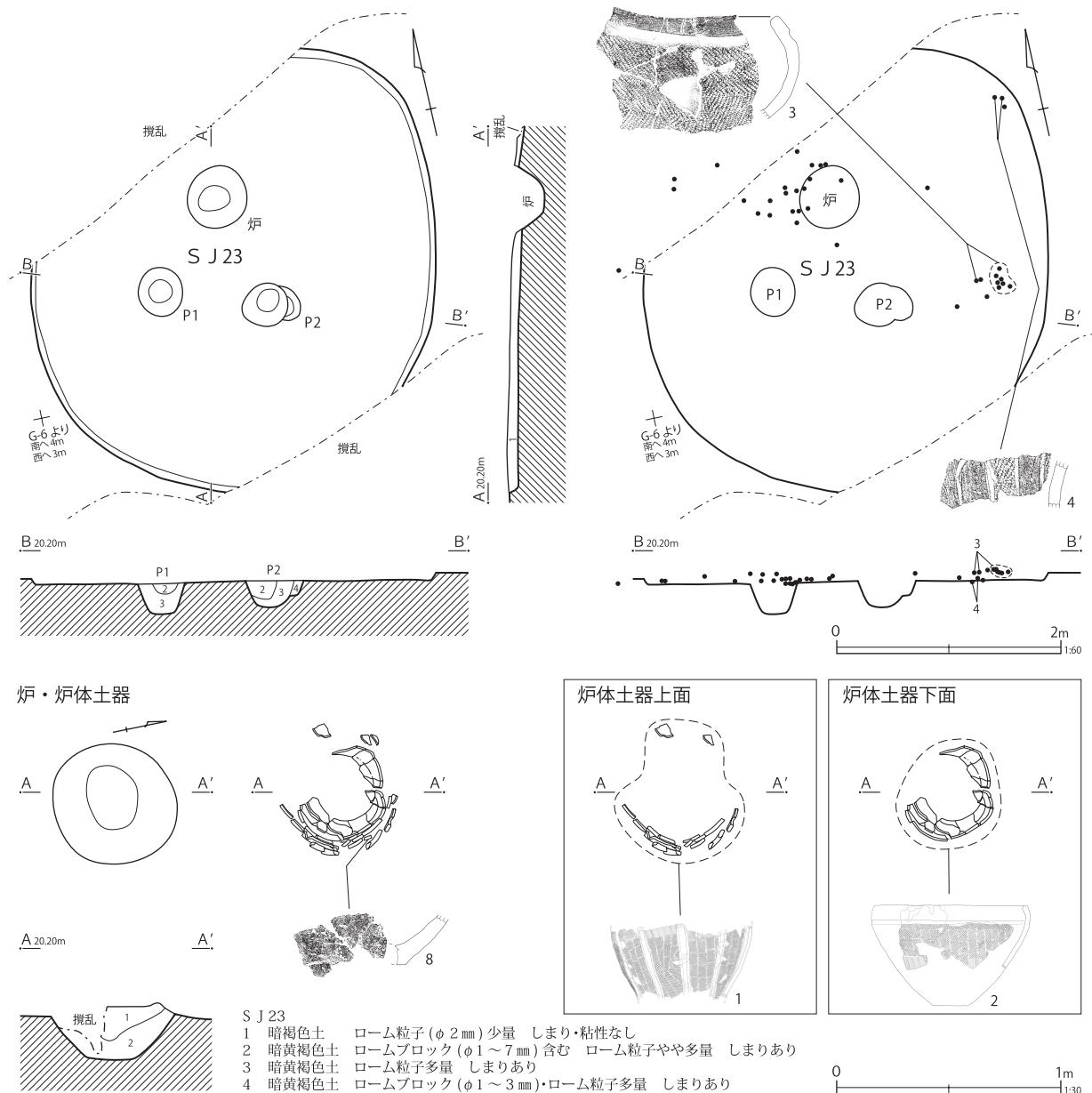
調査区中央部西寄りのG-5・6グリッドに位置する。長軸4.02m、短軸3.60m、深さ0.10mの橢円形を呈するが、北西部・南東部は攪乱により壊されていた。覆土は暗褐色土の単層であった。

炉跡は住居跡中央部やや北寄りに検出され、炉体土器を伴っていた。径54cm、深さ28cmの掘り込みに、口縁部・底部を欠く深鉢形土器が据えられていた。また、南側にはこれを側面から包むように別の浅鉢形土器の大形破片が添えられていた。掘り方の底面中央部は被熱して硬化しており、土器埋設部の下端が火床面となっていた。

出土した遺物は第30図に示した。

1~8は出土した土器である。1・2は復元可能な土器で、他は破片である。

1・2は炉体土器である。1は外側に埋設された深鉢形土器の胴部で、2は内側の浅鉢形土器である。1の口縁は失われているが、沈線で区画された無文の狭い口縁部が想定できる。口縁直下は条線を地文とし、その下は単節LRの縄文が縦方向、部分的に斜め方向に施文される。胴部には沈線で逆U字文が6単位に施文されていたと考えられる。残存高は22cmである。2は口縁から胴上部が残存していたが、8の底部が同じ場所から



第29図 第23号住居跡

出土しており、接合はしなかつたが同一個体と考えられる。口縁部は無文で、胴部とは沈線で区画されている。胴部上半部には単節R Lの縄文、下半部には条線が施される。縄文は、口縁部直下では横方向に、他では縦方向に施文される。推定口径は44.6cm、残存高は19cmである。

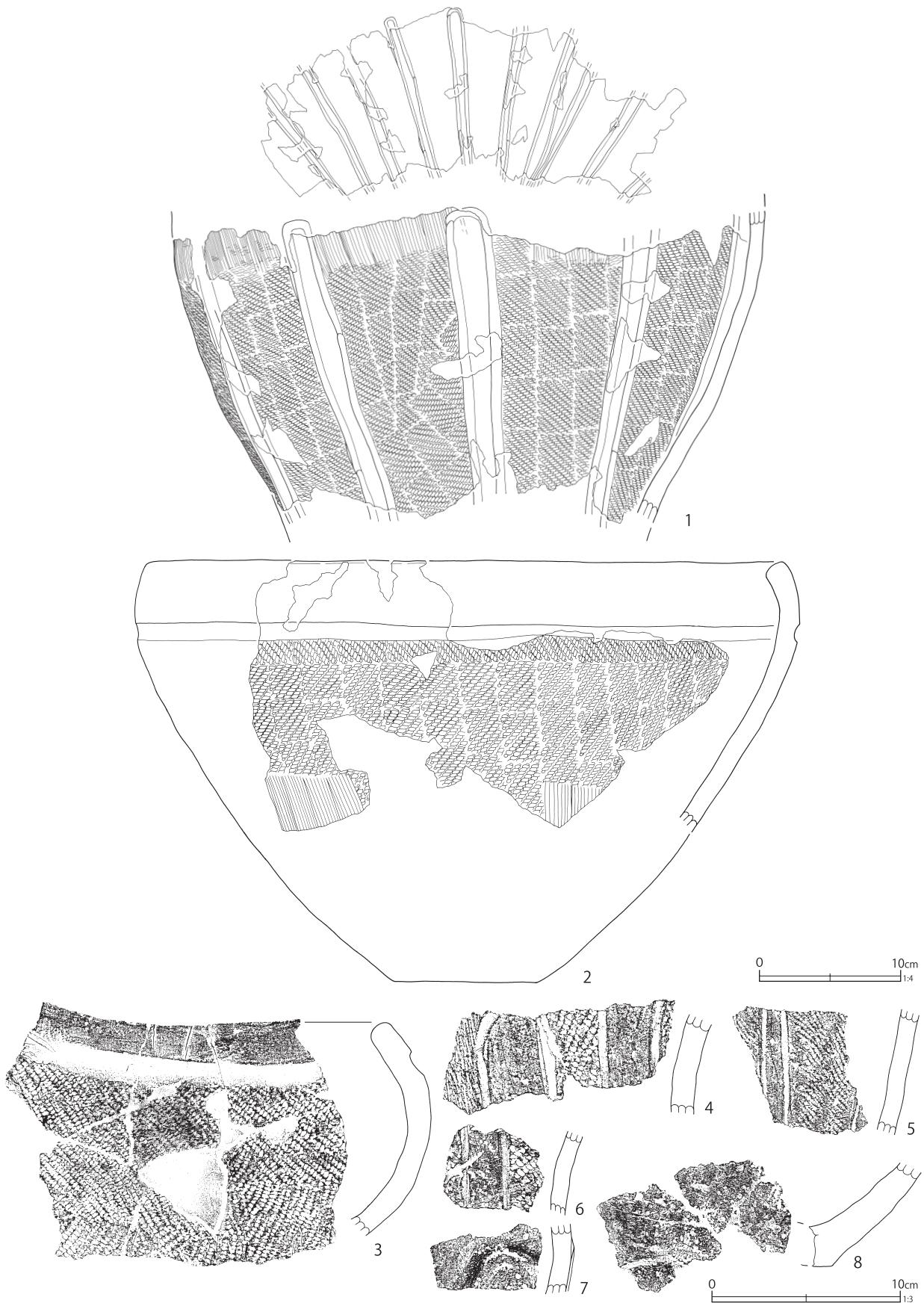
3～7は深鉢形土器である。4は単節R Lの縄文と条線が、地文として交互に施文される。

出土土器は加曾利E IV式で、時期は中期末葉と考えられる。

第24号住居跡（第31・32図）

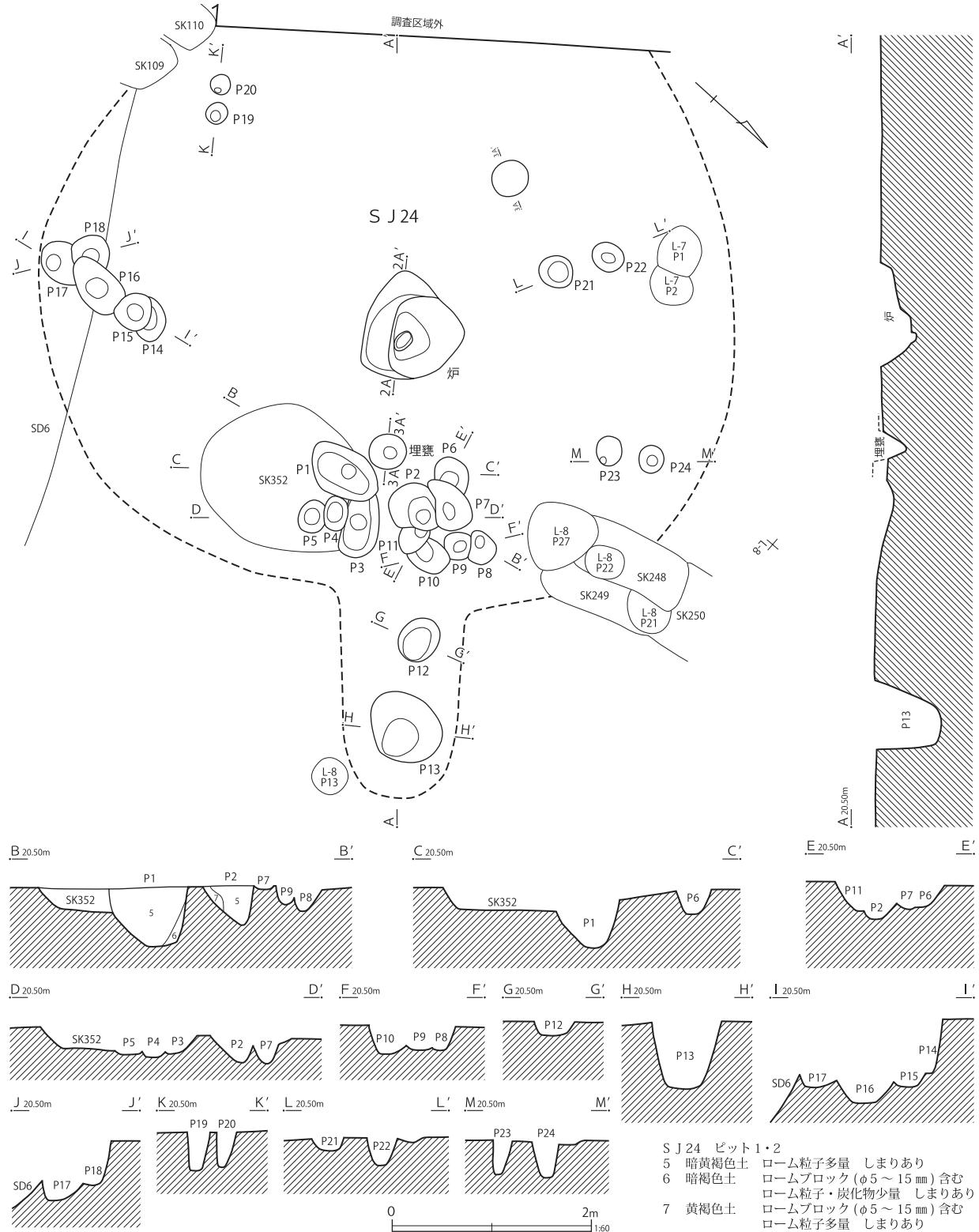
調査区南西部のL-7・8グリットに位置する。覆土は完全に削平された状態であったが、炉跡と埋甕が確認され、住居跡であることが判明した。平面形は不詳だが、炉跡と埋甕の北東側に検出されたP 13を埋甕の痕跡と捉え、主軸長7.80m以上、副軸長7.00m程の柄鏡形住居と推定した。主軸方位はN-15°-Eと考えられる。

柱穴の配列も判然としないが、埋甕に隣接するP 1・2は出入口施設に伴う可能性がある。炉跡

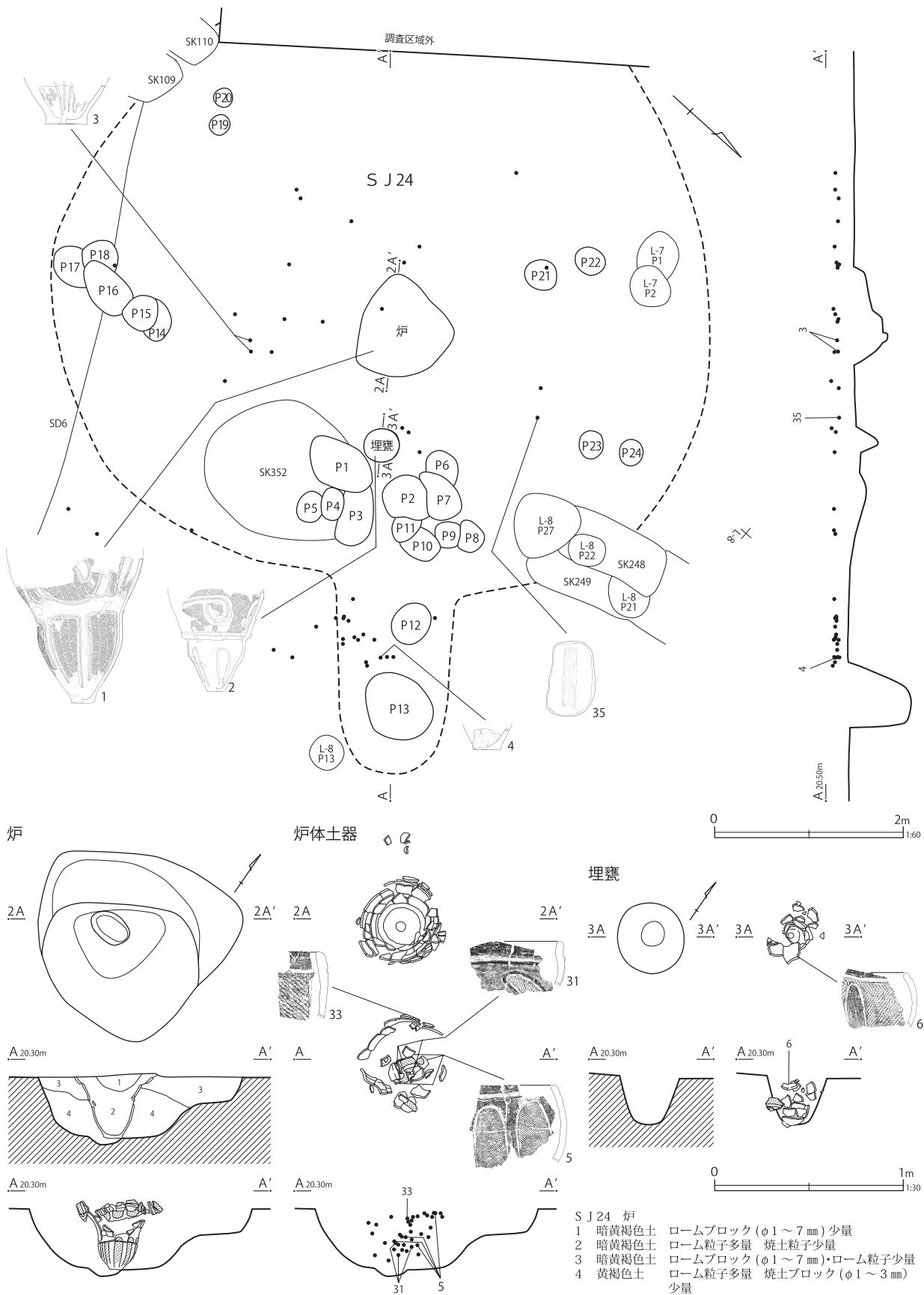


第30図 第23号住居跡出土遺物

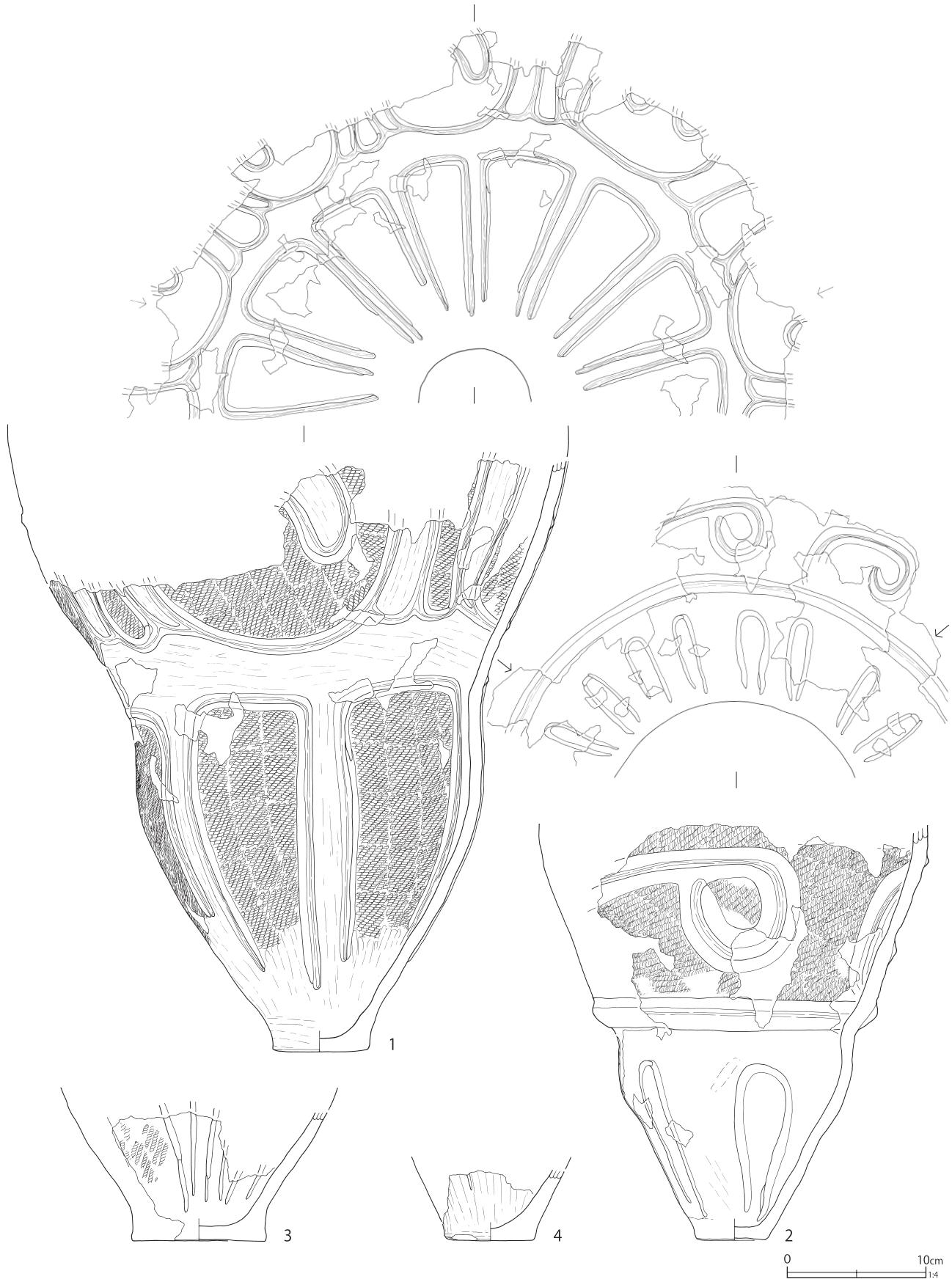
は径 100cm、深さ 36cm 程の掘り方の中心に、深鉢形土器 1 個体が埋設されていた。埋甕は炉跡の約 1m 北東に 1 基が遺存しており、深鉢形土器 1 個体を正位で据えられていた。



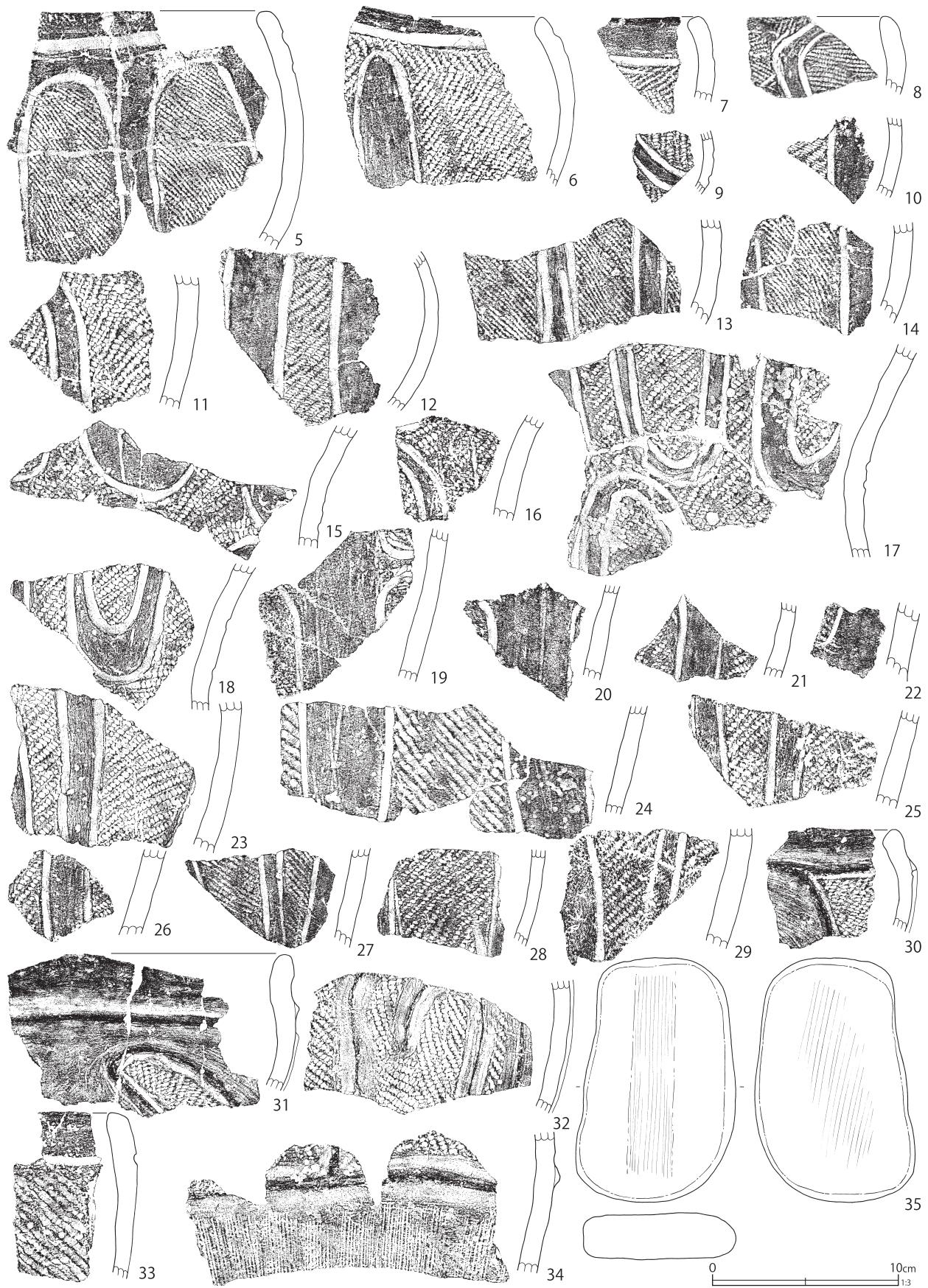
第 31 図 第 24 号住居跡 (1)



第32図 第24号住居跡（2）



第33図 第24号住居跡出土遺物（1）



第34図 第24号住居跡出土遺物（2）

第5表 第24号住居跡出土石器観察表（第34図）

番号	器種	石材	長さ/cm	幅/cm	厚さ/cm	重さ/g	備考	図版
35	砥石	砂岩	13.1	8.6	2.6	385.3	完形	16-16

である。微隆起状の隆帯で文様が施文される梶山類の土器だが、胴部の括れで上下に文様が分割される。胴部上半には、大柄な渦巻文が施文される。胴下半には、上端が方形に近い逆U字文が6単位に施文される。区画文内には、地文が充填される。地文は単節RLの縄文である。底径は7.0cm、残存高は43cmである。

2は埋甕に使用された深鉢形土器で、口縁部は欠損している。器形は不定形で、胴部は中央よりやや下で隆帯を巡らし、細い胴部を作り底部にいたっている。胴上部には地文上に隆帯の渦巻文が施文され、胴下部は無地文上に、沈線の逆U字状文が粗雑に6単位施文される。地文は無節Lが、横や斜め方向に施文される。底径は5.0cm、残存高は30cmである。

3・4は深鉢形土器の胴下部から底部である。3は胴部に沈線による磨消懸垂文が施文され、粗く地文が施されている。地文は単節RLの縄文で縦方向に施文される。推定底径は9.6cm、残存高7cmである。4は、沈線による懸垂文の一部が認められる。地文は残っていない。底径6.5cm、残存高5cmである。

第34図5～34は土器の破片資料である。5～33は深鉢形土器である。口縁部は無文となり、文様帶を持つ土器はない。5～29・33は沈線で磨消懸垂文様が施文されるもので、胴部の括れ部分で上下に文様が分かれるものが大半を占める。胴上部は波状文や玉抱文、胴下部は逆U字文などが施文される。30～32は微隆起状の隆帯で文様が施文されるもので、30・31は口縁部、32は胴部である。34は浅鉢形土器の胴部である。35は出土した砂岩製の砥石である。

出土土器は加曽利EIV式で、時期は中期末葉である。

（2）土壙

縄文時代の土壙は6基検出された。

第151号土壙（第35図）

N-9グリッドに位置し、長軸1.50m、短軸1.12m、深さ0.19mの楕円形である。

第154号土壙（第35図）

L-10グリッドに位置する。第153号土壙と重複しており、本跡のほうが古い。長軸0.90m以上、短軸0.83m、深さ0.21mの楕円形と考えられる。集石土壙のように覆土中から礫と縄文土器がまとまって出土した。第35図1～3は出土した縄文土器である。勝坂式末葉の深鉢形土器の破片である。

第239号土壙（第35図）

I-11グリッドに位置する。長軸1.45m、短軸1.18m、深さ0.20mの楕円形である。第35図4は深鉢形土器の破片で、加曽利EIV式である。

第262号土壙（第35図）

K・L-7グリッドに位置する。長軸1.00m、短軸0.90m、深さ0.14mの円形である。

第324号土壙（第35図）

J-8グリッドに位置する円筒状の土壙である。第11号溝跡に南東部上面を壊されている。長軸1.34m、短軸1.30mの平面形円形で、深さ0.94mと掘り込みも深い。第35図5・6は出土した縄文土器である。いずれもキャリパー形の深鉢形土器の破片である。口縁部文様帶を持ち、胴部には磨消懸垂文が施文される。加曽利EIII式である。

第352号土壙（第35図）

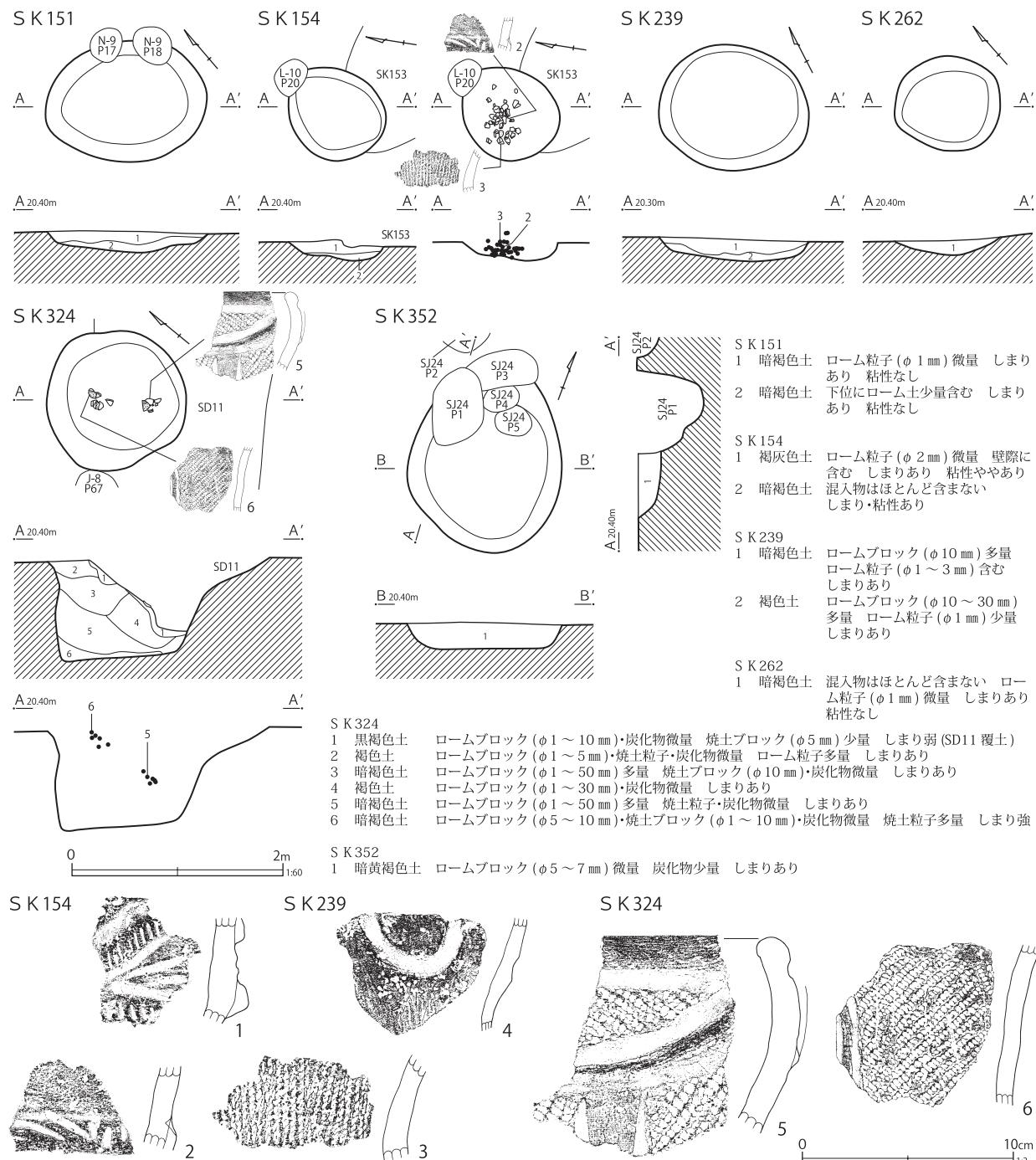
L-8グリッドに位置する。加曽利EIV式期の第24号住居跡と重複し、本跡のほうが古い。長軸1.62m以上、短軸0.52m、深さ0.51mの円形である。

(3) グリッド出土遺物 (第36~37図)

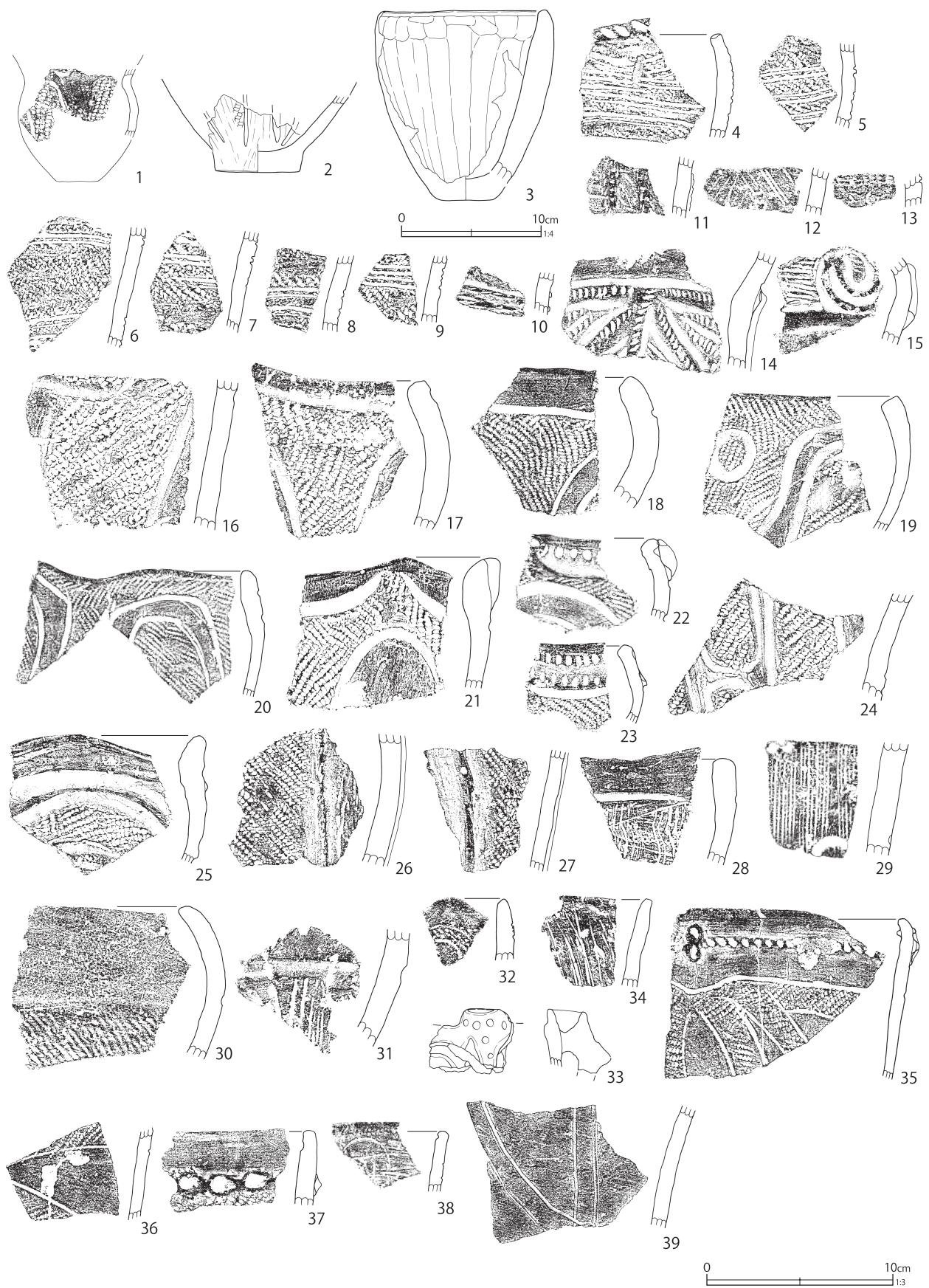
遺構に伴わない縄文時代の土器、石器類をグリッド出土遺物として一括した。

第36図1~39、第37図40~42は出土した土器である。4~13は前期後葉で、4~10は諸磯b式土器、11~13は諸磯c式土器である。

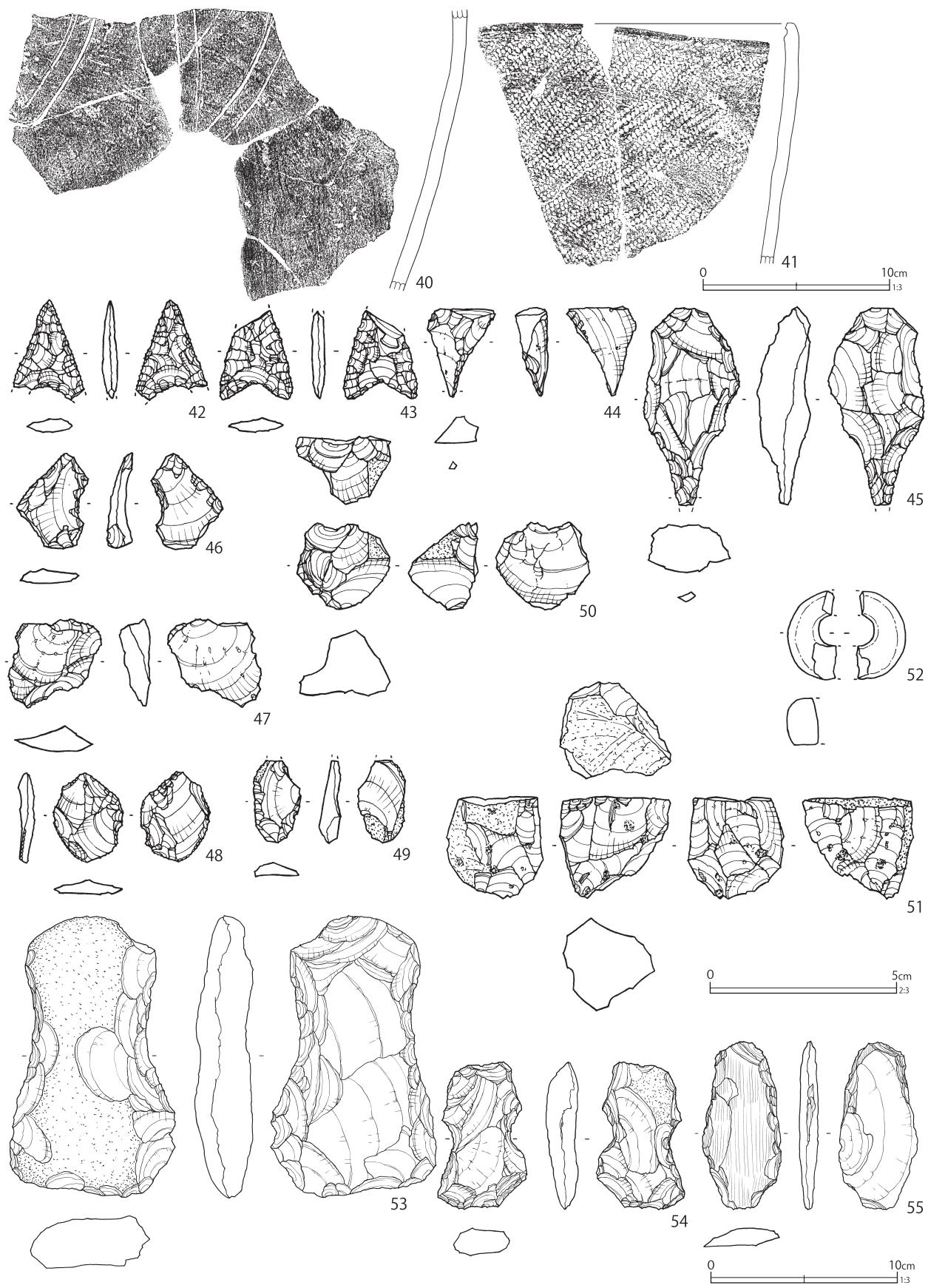
14は中期中葉の勝坂式土器、15は中期後半の加曾利E I式土器、16~31は中期末葉~後期初頭の加曾利E III~IV式土器である。32~41は後期前葉で、32~34は堀之内1式、35~41は堀之内2式土器である。第37図42~55、第38図56~62は出土した石器・石製品である。



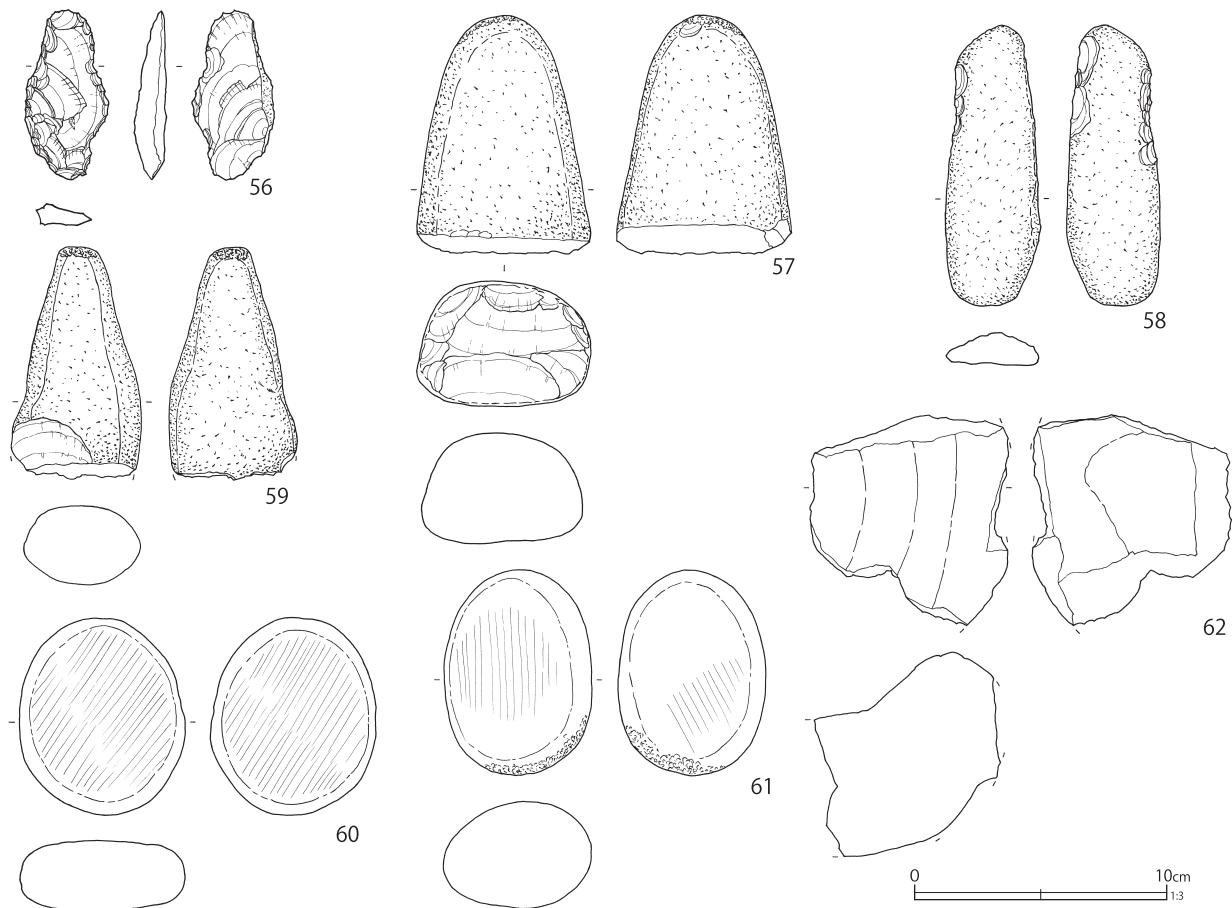
第35図 縄文時代の土壤・出土遺物



第36図 グリッド出土遺物（1）



第37図 グリッド出土遺物 (2)



第38図 グリッド出土遺物（3）

第6表 グリッド出土石器観察表（第37・38図）

番号	器種	石材	長さ/cm	幅/cm	厚さ/cm	重さ/g	備考	図版
42	石鏃	チャート	[2.6]	[1.9]	0.4	1.3	N-15G	18-3
43	石鏃	黒曜石	[2.3]	1.9	0.4	1.4	SD13・14(F-7G)	18-4
44	石錐	黒曜石	2.3	1.8	0.9	1.9	SJ2 掘り方	18-5
45	石錐	チャート	5.2	2.5	1.4	14.5	SK240	18-6
46	スクレイパー	チャート	2.5	1.9	0.7	2.7	SK16 抜り入りスクレイパー	18-7
47	スクレイパー	黒曜石	2.3	2.5	0.8	3.1	SD2	18-8
48	スクレイパー	黒曜石	2.3	1.8	0.4	1.7	K-12G	19-1
49	使用痕のある剥片	黒曜石	2.2	1.2	0.6	1.1	SJ13	19-2
50	石核	黒曜石	2.3	2.5	1.8	7.1	M-10G	19-4
51	石核	黒曜石	2.7	2.9	2.5	19.6	M-10G	19-3
52	臼玉か	滑石	2.4	1.3	1.3	5.1	L-10G 推定径 2.1cm 孔径 0.8cm	19-5
53	打製石斧	ホルンフェルス	15.1	8.9	3.1	484.7	C-44G 分銅形 完形	19-6
54	打製石斧	ホルンフェルス	7.8	4.8	1.7	63.9	SK19 分銅形 完形	19-7
55	打製石斧	頁岩	9.0	4.2	1.0	45.7	SD1 L・M-16G 楊円形 欠損あり	19-8
56	打製石斧	ガラス質黒色安山岩	6.7	3.3	1.3	23.6	N-14G 分銅形 完形	19-9
57	敲石	閃緑岩	[9.4]	[7.0]	5.0	384.1	SK237 欠損あり	19-10
58	敲石	チャート	11.1	3.8	1.3	74.6	SK16 完形	19-11
59	敲石	砂岩	[9.3]	[5.1]	3.25	204.5	M-15G 欠損あり	19-12
60	磨石	閃緑岩	7.8	6.6	2.7	226.1	SK143 完形	19-13
61	敲石	砂岩	8.1	5.9	4.1	295.9	SK237 完形	19-14
62	石皿	安山岩	[8.1]	[8.3]	[6.8]	464.0	L-13G 欠損あり	19-15

2. 古墳時代の遺構と遺物

古墳時代では前期の住居跡1軒が検出された。このほか後世の遺構覆土や表土からも、同時期の土師器高坏・甕等が僅かに出土している。

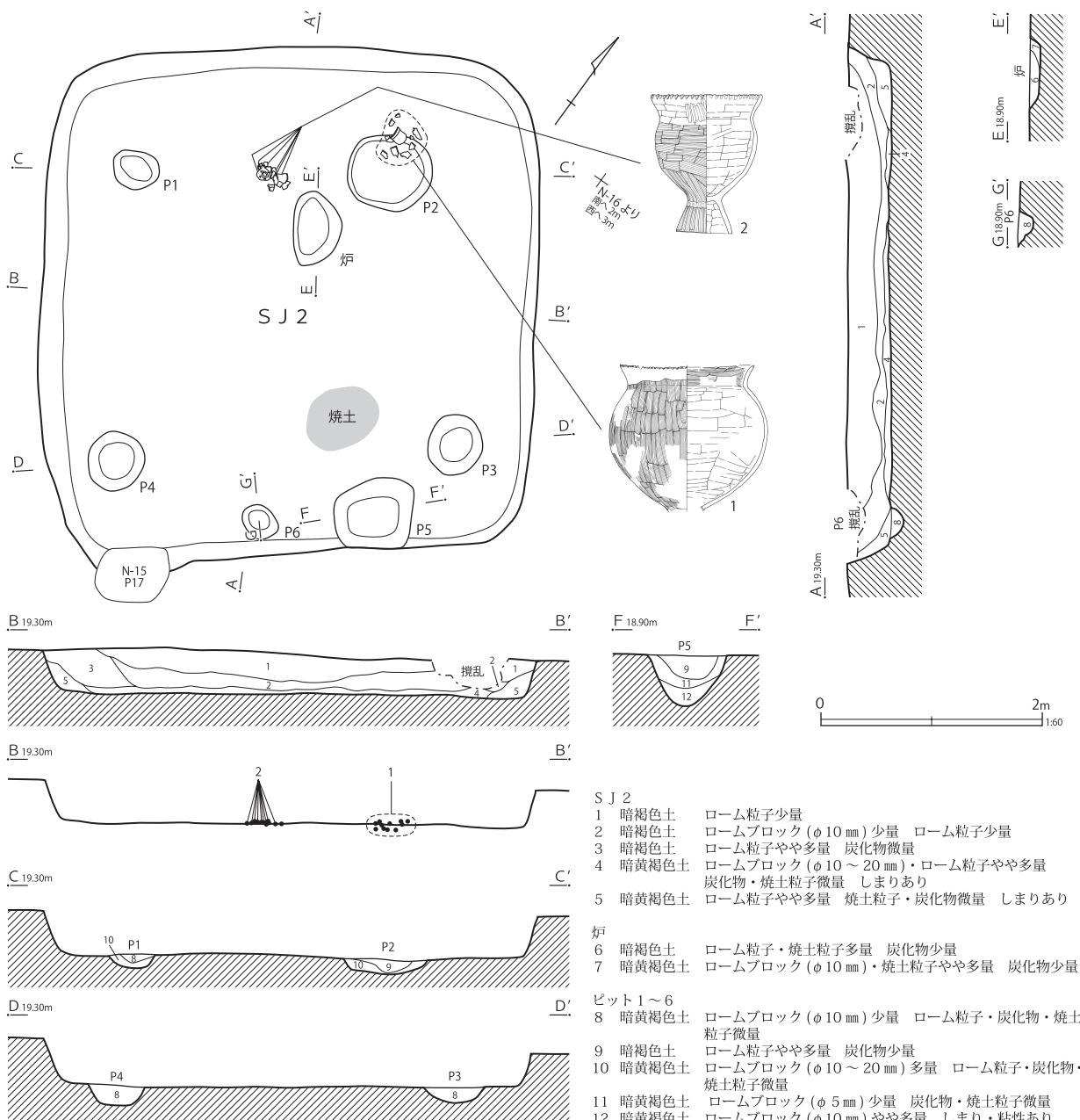
(1) 住居跡

第2号住居跡（第39・40図）

調査区南東部のN-15グリッドに位置する。平面形は、長軸4.52m、短軸4.44mのほぼ方形であり、深さは0.40mである。主柱穴はP1～4と

考えられ、このうちP2の覆土上面から床面上にかけて、土師器台付甕が1個体分出土した。炉跡は北西部に検出され、主軸方向はN-39°-Wである。南西部床面上から、焼土範囲が検出された。床面はロームブロックが混入する暗褐色土で貼り床され、中央部の地山は高く掘り残されている（第40図）。P7は貼り床を除去した後に検出された。

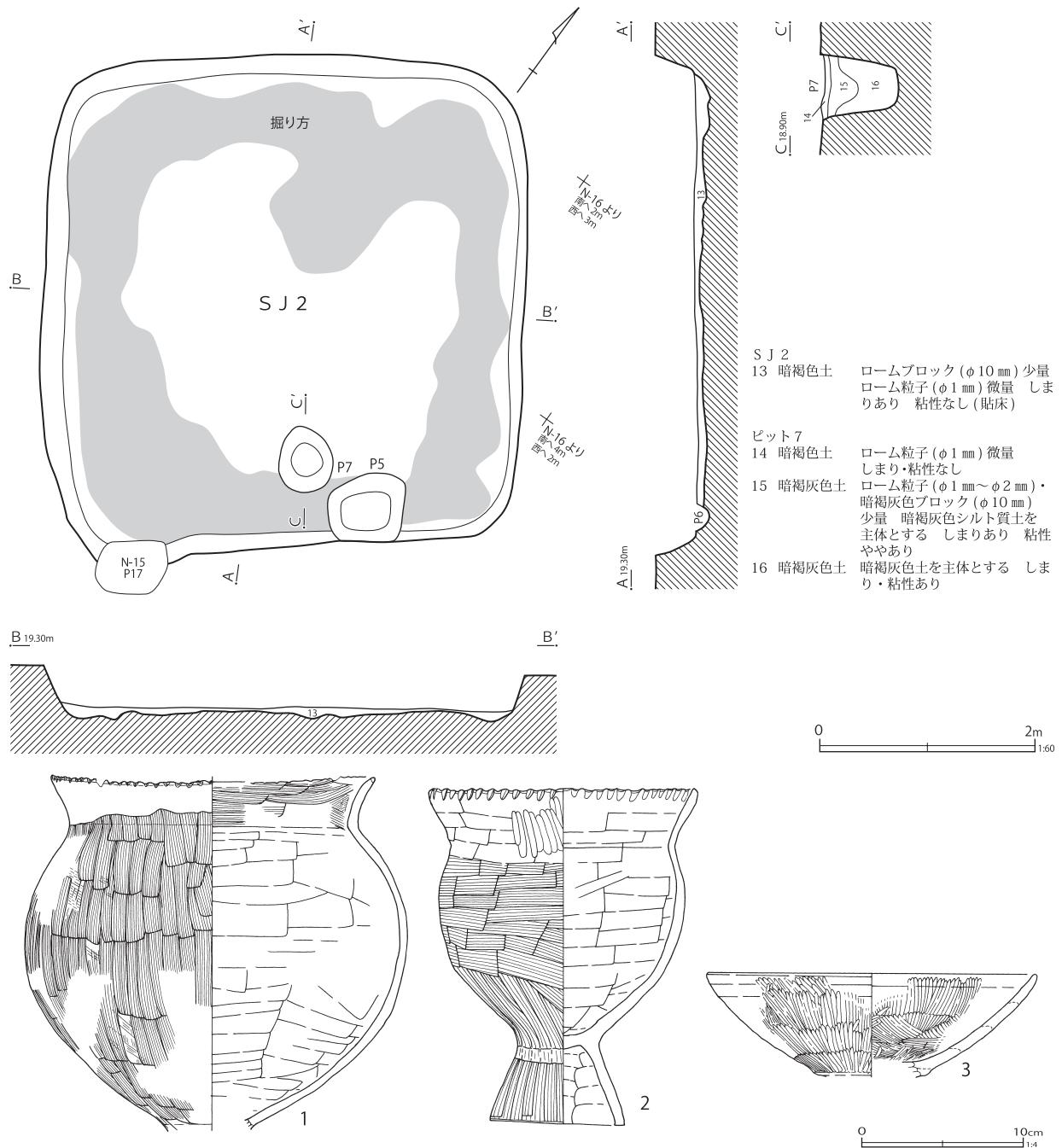
遺物は床面直上から土師器台付甕・高坏が出土



第39図 第2号住居跡（1）

した。第40図1・2は、外面にハケメが施された大小の台付甕である。2はハケメの筋の間隔がやや粗い。1の頸部にはヨコナデ、2の頸部には

ヘラナデが施される。3は高坏の破片で、全体が赤彩される。直接接合しない2破片から復元して図示した。



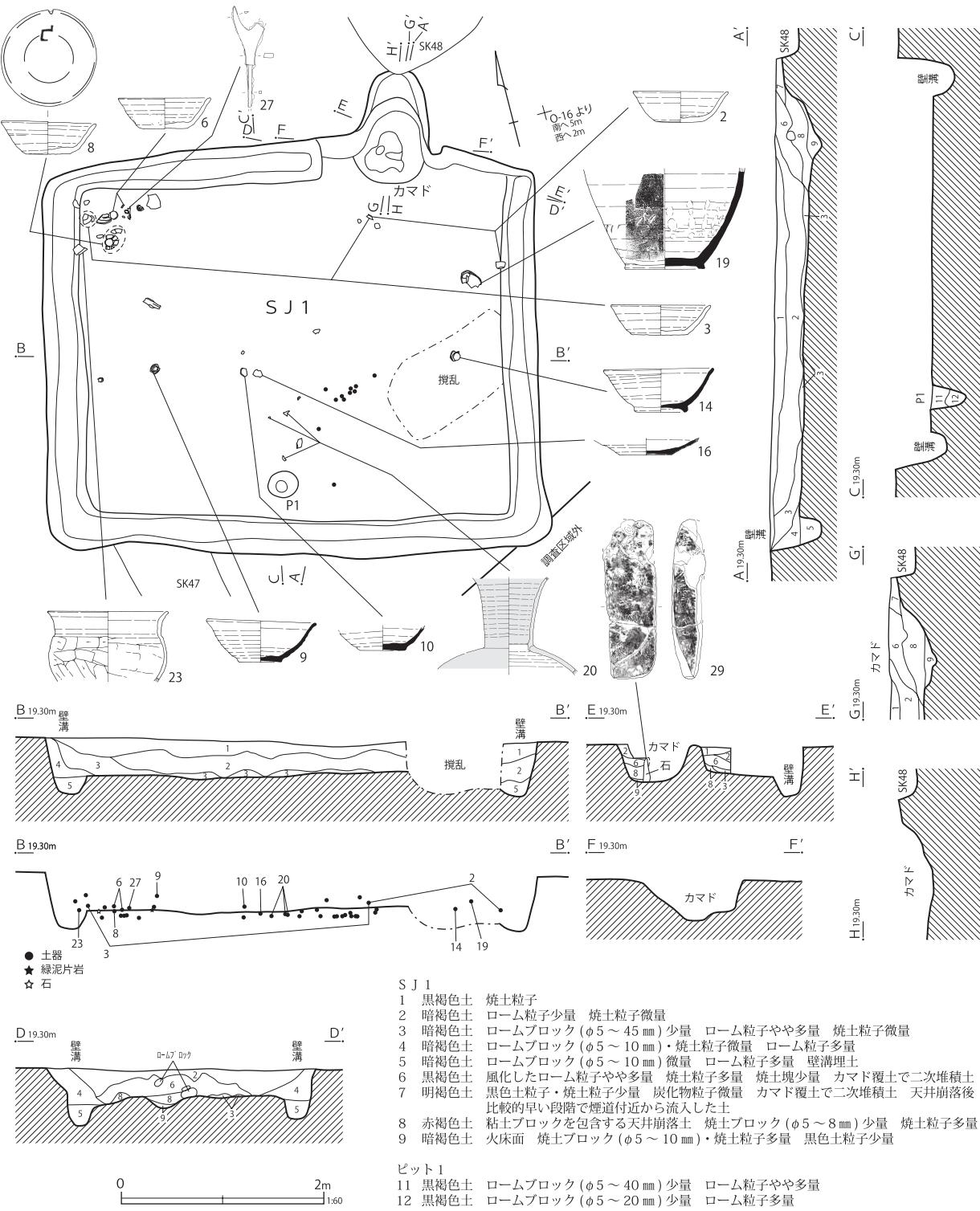
第40図 第2号住居跡(2)・出土遺物

第7表 第2号住居跡出土遺物観察表(第40図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	台付甕	20.0	[21.9]	—	A H I	75	普通	黒褐	内外面煤付着	19-16
2	土師器	台付甕	16.2	[20.8]	3.3	A C H I K	75	良好	灰褐	内外面煤付着 赤変	19-17
3	土師器	高坏	(20.4)	[6.3]	—	E G H I	10	良好	にぶい橙	内外面赤彩、ミガキ	19-18

3. 平安時代の遺構と遺物

平安時代では住居跡 15 軒、土壙 19 基が検出された。住居跡は調査区南東部に多く、台地南側から入り込む谷地に臨むように分布していた。カマドは主として住居北壁・東壁に設けられていた。



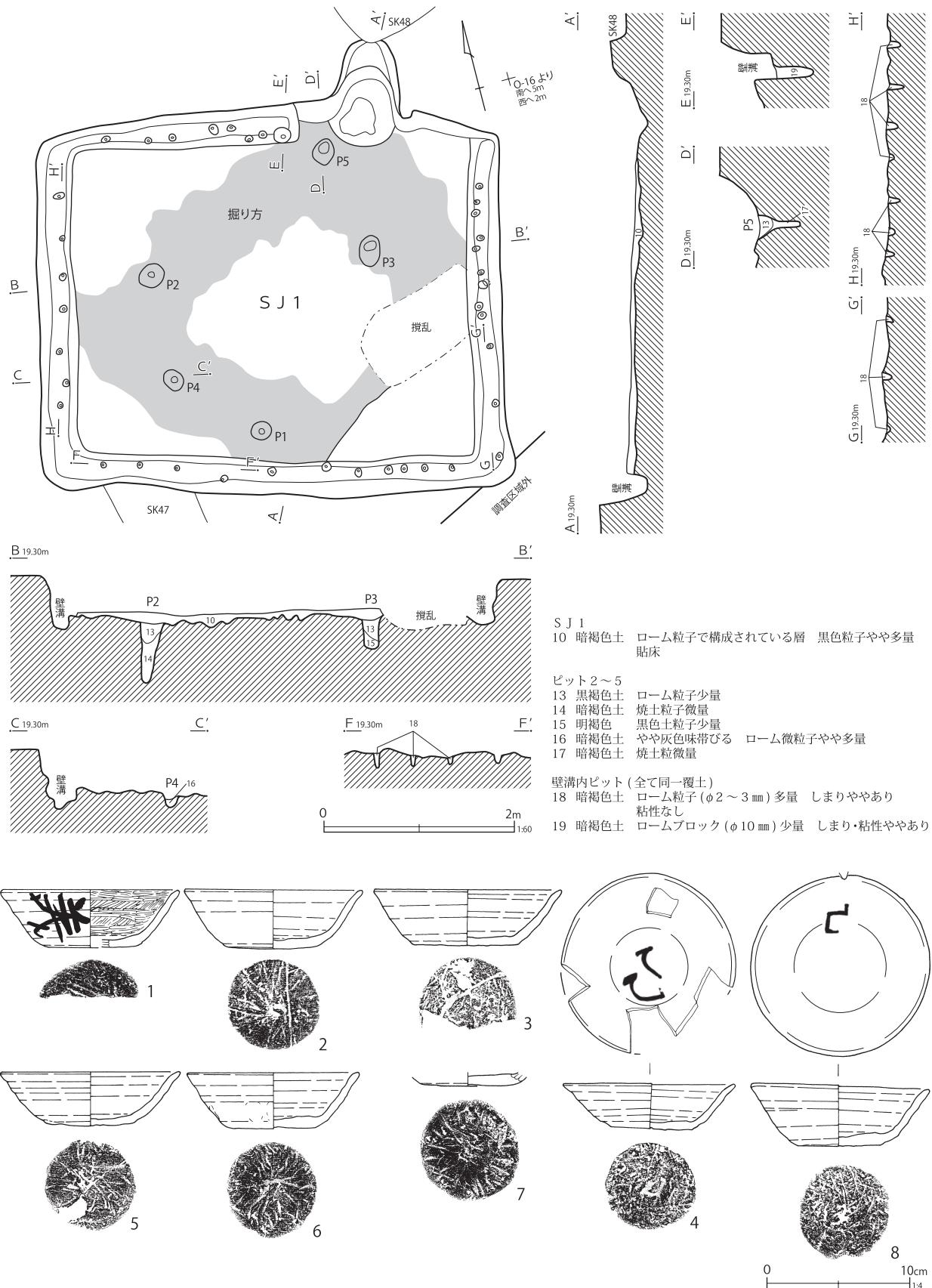
第 41 図 第 1 号住居跡 (1)

(1) 住居跡

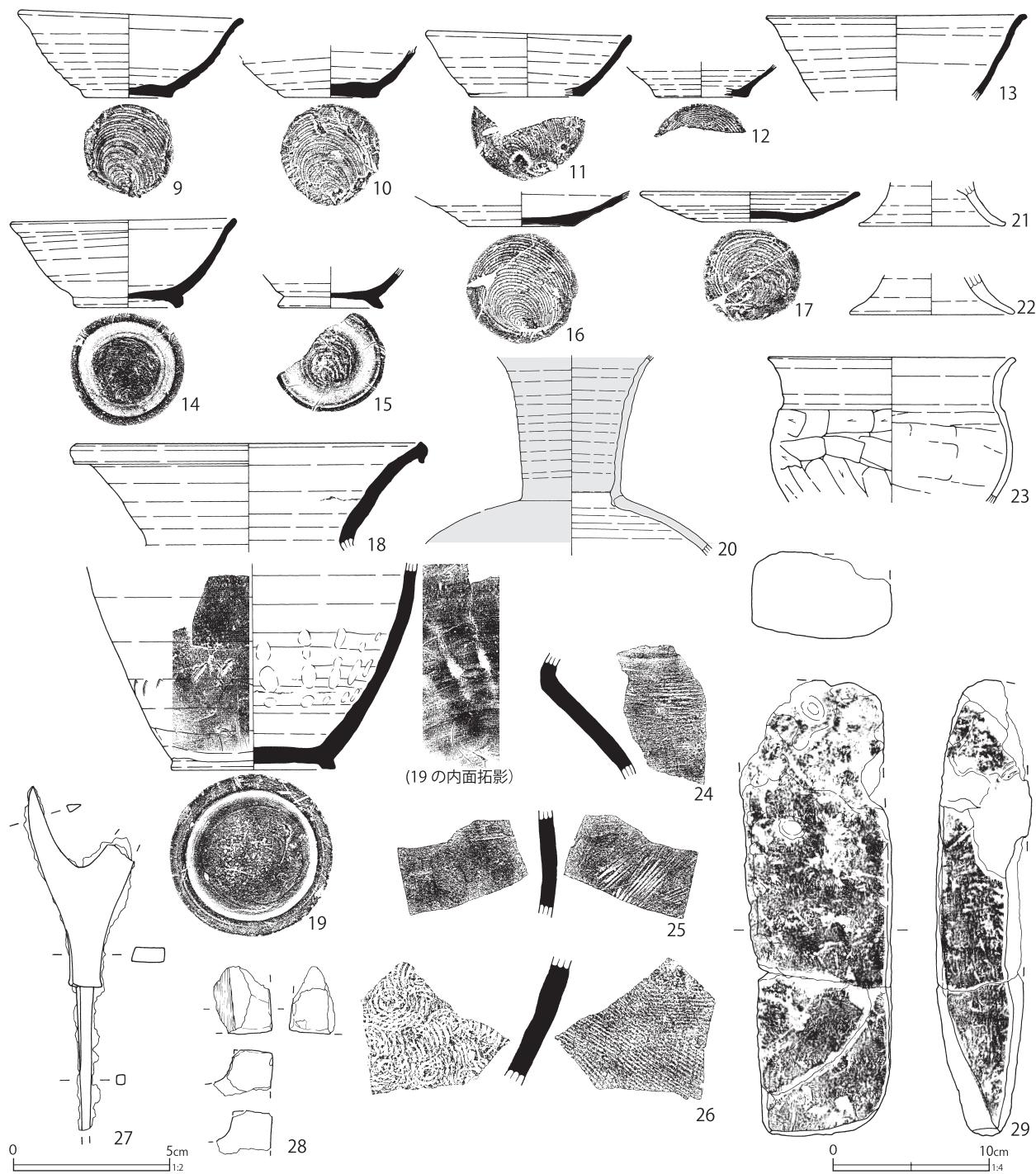
第 1 号住居跡 (第 41・42 図)

調査区南端部の O-15 グリッドに位置する。

平面形は、長軸 4.90m、短軸 4.00m の長方形を呈



第42図 第1号住居跡（2）・出土遺物（1）



第43図 第1号住居跡出土遺物（2）

第8表 第1号住居跡出土遺物観察表（第42・43図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	ロクロ土師器	壺	12.3	4.0	6.3	H I K	50	良好	橙	底部ヘラケズリ 内面ミガキ 体部外面墨書「美」	20-1
2	ロクロ土師器	壺	12.2	4.1	6.3	H I K	80	普通	橙	底部ヘラケズリ	20-2
3	ロクロ土師器	壺	13.0	3.8	7.5	C E H I K	60	良好	橙	底部ヘラケズリ	20-3
4	ロクロ土師器	壺	11.9	3.1	5.7	E H I K	80	良好	橙	底部ヘラケズリ 内面墨書	20-4
5	ロクロ土師器	壺	12.4	3.7	6.4	C E H I K	30	普通	橙	底部ヘラケズリ	20-5
6	ロクロ土師器	壺	11.9	3.8	5.5	H I K	30	良好	明赤褐	底部ヘラケズリ	20-6

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
7	ロクロ土師器	壺	—	[0.9]	6.4	H I K	95	普通	橙	底部ヘラケズリ	
8	ロクロ土師器	壺	12.4	4.2	5.9	C H I K	100	良好	灰白	底部ヘラケズリ 内面墨書	20-7
9	須恵器	壺	(14.0)	5.3	5.8	D E I K	40	良好	にぶい黄橙	底部糸切痕（右）硬質 東金子	20-8
10	須恵器	壺	—	[3.2]	5.9	I K	70	普通	浅黄橙	底部糸切痕（右）東金子	
11	須恵器	壺	13.0	4.1	7.3	I J K	50	良好	灰	底部糸切痕（右）内外面ロクロナデ 南北企（鳩山VII期）	20-9
12	須恵器	壺	—	[2.0]	(6.0)	H I J	30	良好	黄灰	底部糸切痕 内外面ロクロナデ 南北企（鳩山IX期） 末野	
13	須恵器	高台付壺	(16.4)	[5.4]	—	I K	20	普通	浅黄	底部糸切痕（右）付高台 末野	
14	須恵器	高台付壺	(14.2)	5.5	7.1	C D E H I K	45	不良	灰黄褐	底部糸切痕（右）付高台 末野	20-10
15	須恵器	高台付壺	—	[2.4]	6.7	E H I	60	良好	灰黄褐	底部糸切痕 付高台 末野	
16	須恵器	皿	—	[2.2]	6.8	C E K	55	普通	にぶい赤褐	底部糸切痕（右）末野	21-1
17	須恵器	皿	(13.7)	1.9	5.8	C E H I K	50	普通	灰黄	底部糸切痕（右）末野	21-4
18	須恵器	甕	(22.2)	[6.9]	—	D E I	10	良好	黄灰	内面降灰 南北企	
19	須恵器	長頸瓶	—	[13.1]	10.4	D J	40	普通	灰白	内面指頭痕 外面回転ナデ、下位弱い ヘラナデ 南北企	
20	灰釉陶器	長頸瓶	—	[12.1]	—	I K	30	良好	灰白	内面灰釉施釉	21-2
21	土師器	台付甕	—	[2.8]	(9.3)	C H I	5	普通	明褐	脚部破片 一部煤付着	
22	土師器	台付甕	—	[2.6]	(10.3)	C I	5	普通	にぶい橙	脚部破片	
23	土師器	台付甕	(15.6)	[9.3]	—	C E I K	25	普通	にぶい赤褐	外面煤付着	21-3
24	須恵器	甕	—	[8.0]	—	D E I J	5	良好	暗褐	内面ナデ 脊部外面ヘラナデ（一部力 キメ状）南北企	
25	須恵器	甕	—	[6.9]	—	I J	5	良好	灰	内面無文のあて具痕 外面叩き 極めて 硬質 南北企	
26	須恵器	甕	—	[8.1]	—	D E	5	良好	灰	内面同心円状あて具痕 外面上位叩き 末野	
27	鉄製品	雁股鍤	全長 [11.0]cm、鍤身+頸部長 6.4cm、幅 1.05cm、厚さ 0.45cm、茎 長さ [4.6]cm、幅 0.3cm、厚さ 0.35cm、重さ 15.8g								33-3
28	石製品	砥石	長さ [4.4]cm、幅 [3.8]cm、厚さ [2.9]cm、重さ 215g								32-2
29	石製品	石材	長さ 29cm 高さ 9.1cm 幅 5.3cm								32-1

し、深さは 0.34m である。主軸方向は N -15° - E を指す。覆土は大きく 4 層に分けられ、1 層にはヤドロ粒子が僅かに混在するが、木の根等の作用によるものである。カマドは北壁の東側寄りから検出され、天井崩落土（8 層）とその後に流入した土層（6・7 層）が堆積していた。火床面は掘り方埋土（9 層）の上面に確認された。

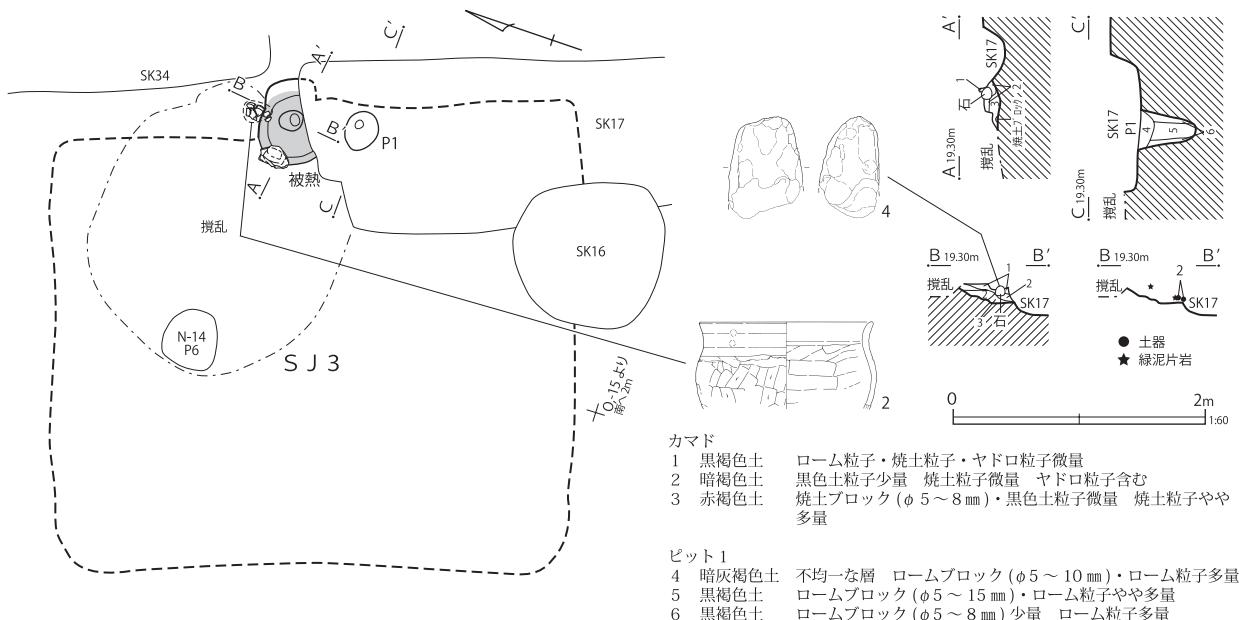
壁溝はカマド部分を除いて四方に廻り、覆土は暗褐色土に黒褐色土が混入する。壁溝覆土下からはピットが多数確認され、ピット下端は細くなっていた。壁の構築に関わる支柱痕と考えられる。

遺物は、ロクロ土師器・土師器・須恵器・灰釉陶器等が出土している（第 42・43 図）。1～8 はロクロ土師器の壺で、いずれも類似した器形を示す。底部は菊花状にヘラケズリ処理される。8 は還元ぎみに焼成され灰色味を帯びる。1 の側面に墨書「美」が認められるほか、4・8 の内面に

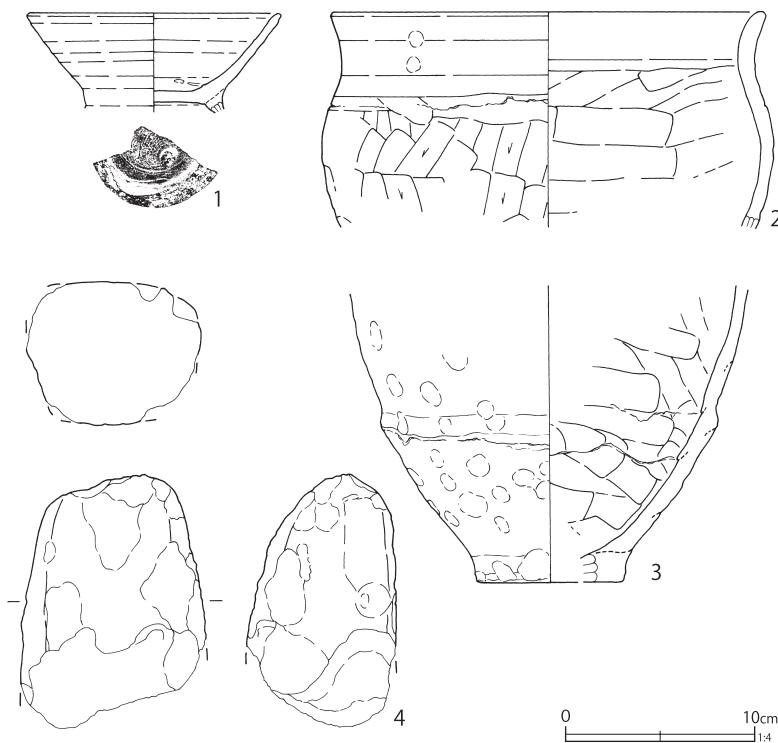
判読不明の墨書が認められる。9～17 は須恵器壺・皿類で、南北企・東金子・末野の製品が認められる。18～19・24～26 は須恵器壺・甕類である。26 は末野産で、他の遺物より時期が遡る可能性がある。他は南北企産である。19 は長頸瓶の底部と考えられる。内面に縦方向の指頭圧痕が連続し、外面には対応する位置にヘラ状工具の「あたり」が横に連なる。21～23 は土師器台付甕である。28・29 は石製品である。28 は多孔質の安山岩を用いた砥石である。29 の石材は極めて軟質で、比企丘陵産凝灰岩である可能性が高い。カマド構築材として使用されたものである。

第3号住居跡（第 44 図）

調査区南側の N・O -14・15、D -14・15 グリッドに位置する。カマドが遺存していたが、上部はほぼ削平されていた。主軸方向は N - 72° - E を指す。カマド底面のソフトロームが暗赤褐色に



第44図 第3号住居跡



第45図 第3号住居跡出土遺物

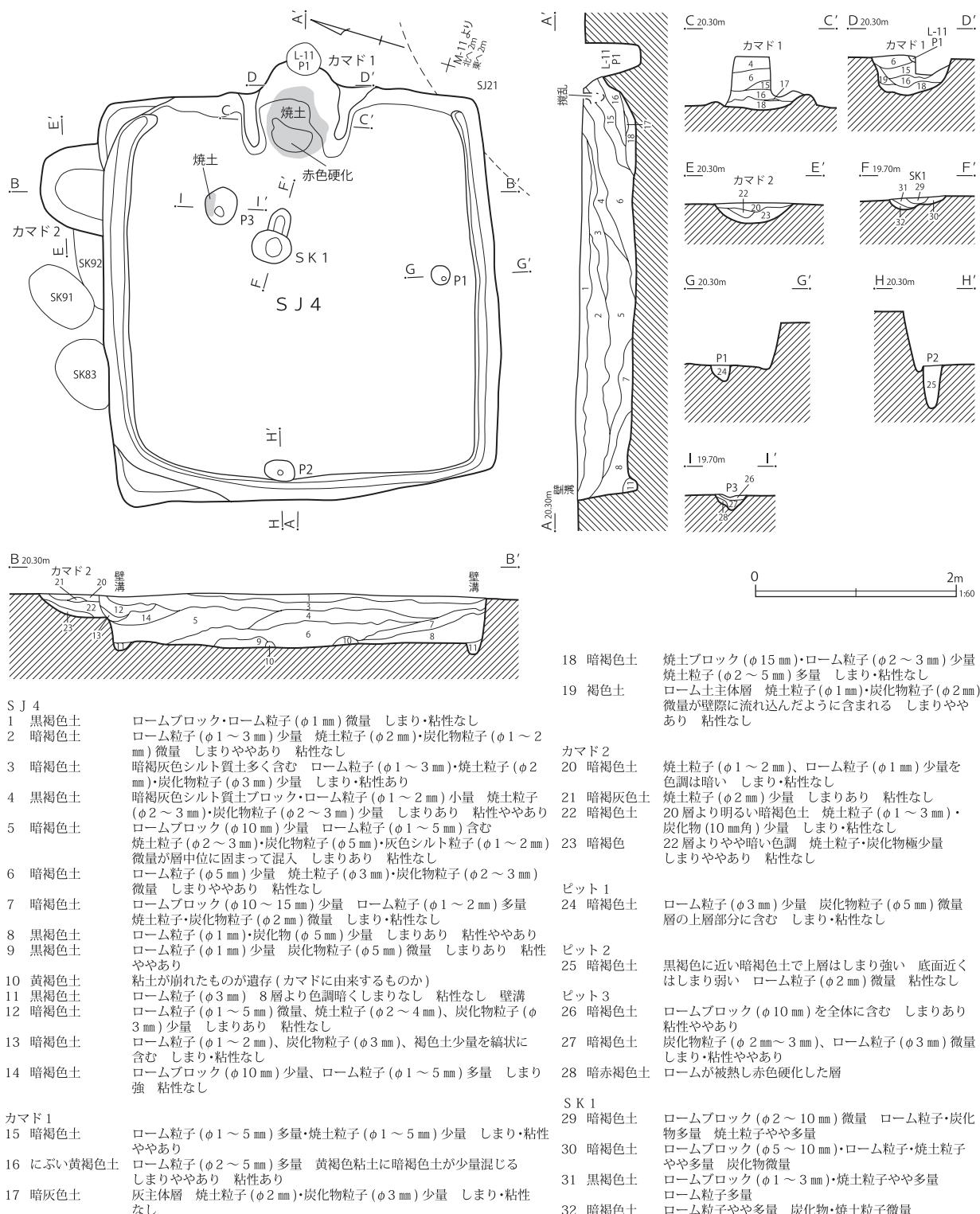
第9表 第3号住居跡出土遺物観察表（第45図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	ロクロ土師器	高台付壺	(13.2)	[5.2]	—	E I J	25	普通	灰黄	底部糸切痕 付高台	21-6
2	土師器	甕	(22.7)	[11.4]	—	E H I K	20	普通	橙		
3	土師器	甕	—	[15.6]	7.5	D E L	15	良好	にぶい黄褐	内面ヘラナデ 外面弱い指頭圧痕、煤付着	21-5
4	石製品	石材	長さ [13.3]cm 径 9.2 ~ 7.5cm					カマド構築材 凝灰岩			32-3

変色していたが、被熱の程度は弱い。カマド以外は全体的に搅乱・削平されおり、規模は判然としない。

遺物はロクロ土師器・土師器・石製品が出土している（第45図）。1はロクロ土師器高台付壺で、胎土に微量の骨針状物質が含まれる。2・3は土師器甕である。2はカマドから出土し、胎土は硬質に焼成される。3はカマド北西側の搅乱から出土したが、第3号住居跡に伴う可能性がある遺物として掲載した。外面はほぼ無調整であるが内面は整形されている。底部を成形・半乾燥後に上部の成形を行っている。

4の石製品はカマド構築材と考えられる。カマド周辺からは緑泥片岩7点、計3461.2gが出土している。

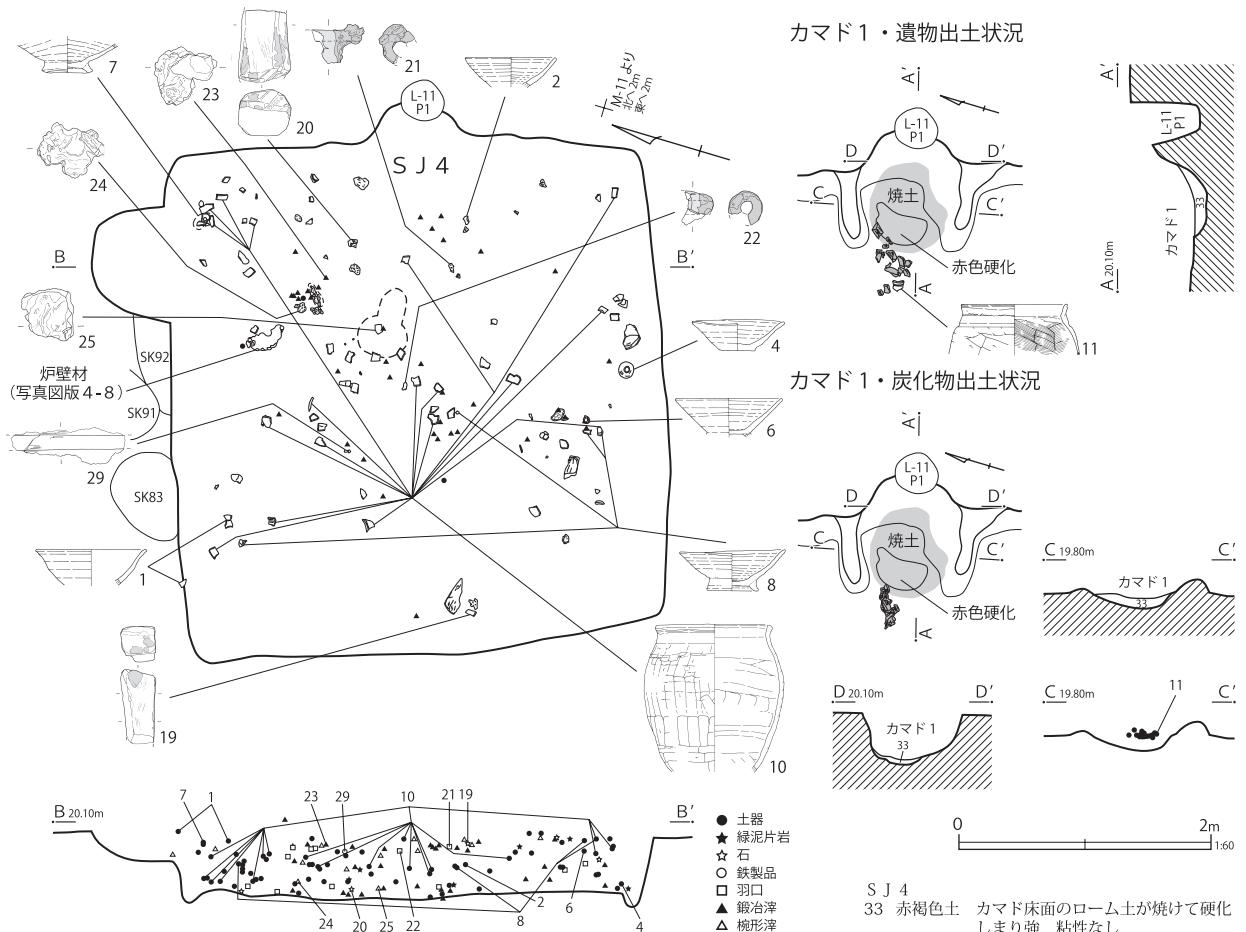


第 46 図 第 4 号住居跡 (1)

第 4 号住居跡 (第 46・47 図)

調査区南側中央部の L-10・11 グリッドに位置する。平面形は、長軸 4.06m、短軸 3.90m の方形を呈し、深さは約 0.50m である。カマドは 2

基検出され、北壁のカマド 2 から東壁のカマド 1 に付け替えられている。主軸方向は、古期が N-8°-W、新期が N-80°-E を指す。カマド 2 の遺存状態から、北側への壁の拡張と、床面の掘



第47図 第4号住居跡（2）

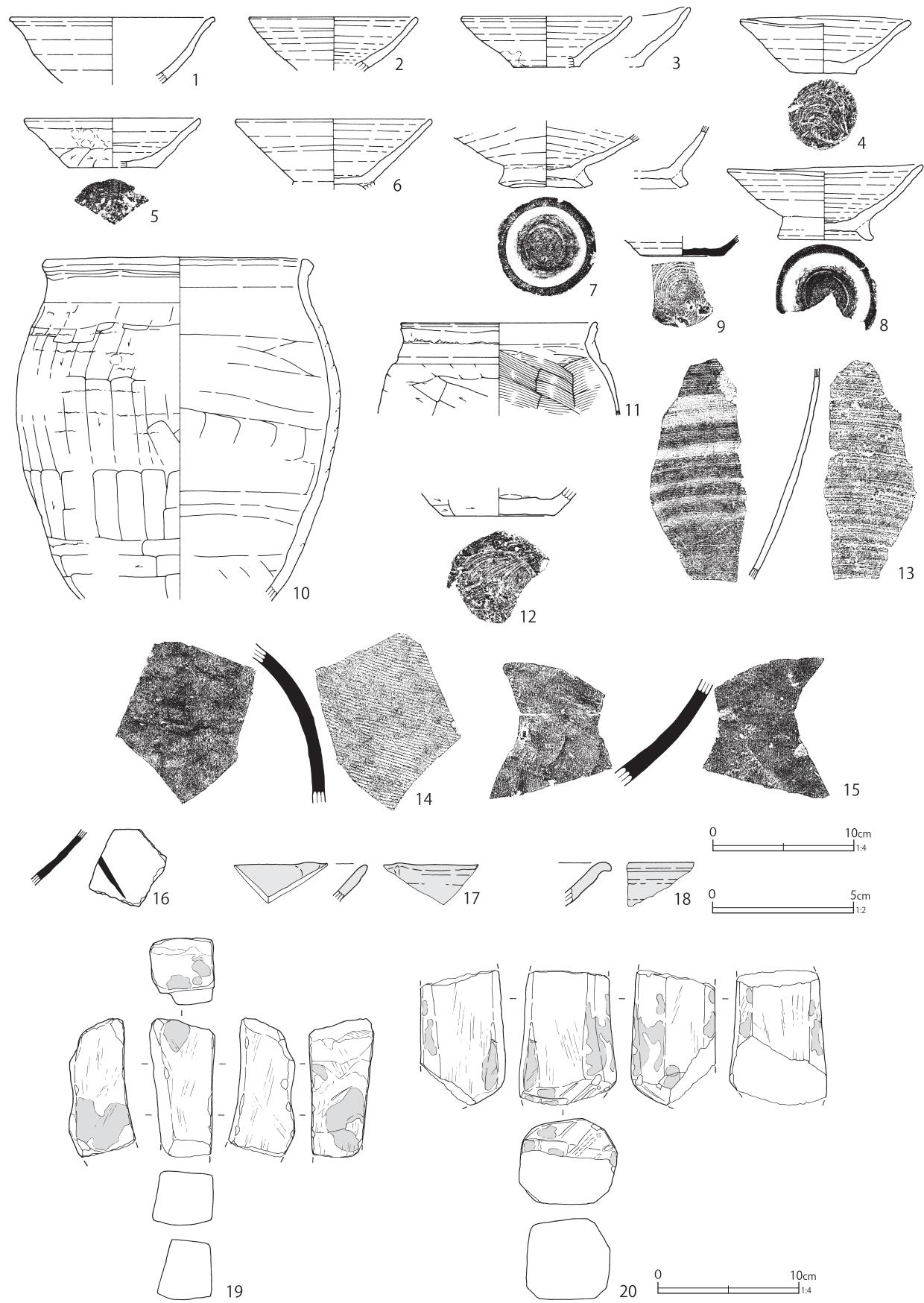
り下げが行われたと考えられる。また、P 1・2が南部・西部の壁際から検出され、新旧の出入口状施設に伴う可能性がある。北東部床面からは断面擂鉢形のP 3が検出された。中央部に炭化物が含まれており、底面が被熱硬化していた。カマド2の関連遺構とも考えられるが、隣接するSK 1より鍛冶滓がまとまって検出されているので鍛冶炉と想定しておく。なお、この近くから、鍛冶炉の底面の還元・酸化部と思われる土の塊が出土した（写真図版4-8）。壁溝は新段階のカマドに伴うもので、東壁以外の壁際に廻っている。

遺物はロクロ土師器・土師器・須恵器のほか、鉄滓・輪羽口が多く出土した（第48・49図）。

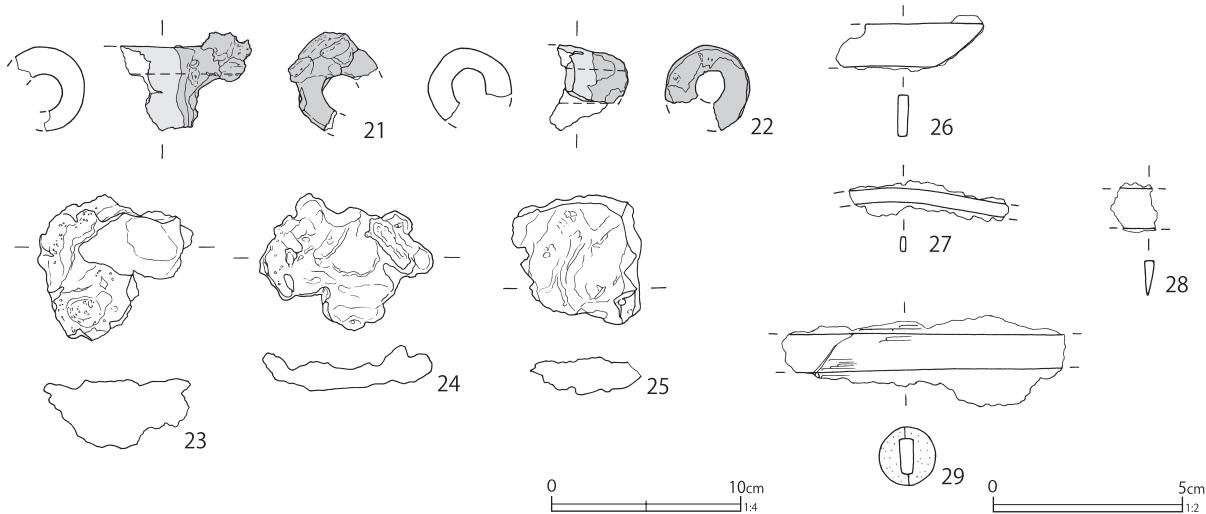
1～8はロクロ土師器の壊・高台付壊である。4・7は還元して灰色味を帯びる。2～4は小さ

な底部から直線的に体部が開く器形に共通性がある。6～8は、これに高台が貼付されたものと捉えられる。5は体部下位に幅広の横のケズリが施されるもので、下総地域の土師器壊に類似する。須恵器の出土は僅かで、9のように南比企産の杯が認められる。10～12は土師器甕である。10は胴部が縦ケズリで仕上げられ、やや硬質に焼成される。13は羽釜胴部と考えられるが、器厚が薄く、ロクロ甕の可能性もある。17・18は東濃産の灰釉陶器で、17は口縁部は輪花状に成形される。19・20は石製品の砥石である。他に緑泥片岩16点、計3570gが出土している。

鍛冶関連遺物は輪羽口963.9g、鍛冶滓166.3g、輪羽口片5点（391.9g）が出土した。このうち21～25に輪羽口・輪形滓を図示した。



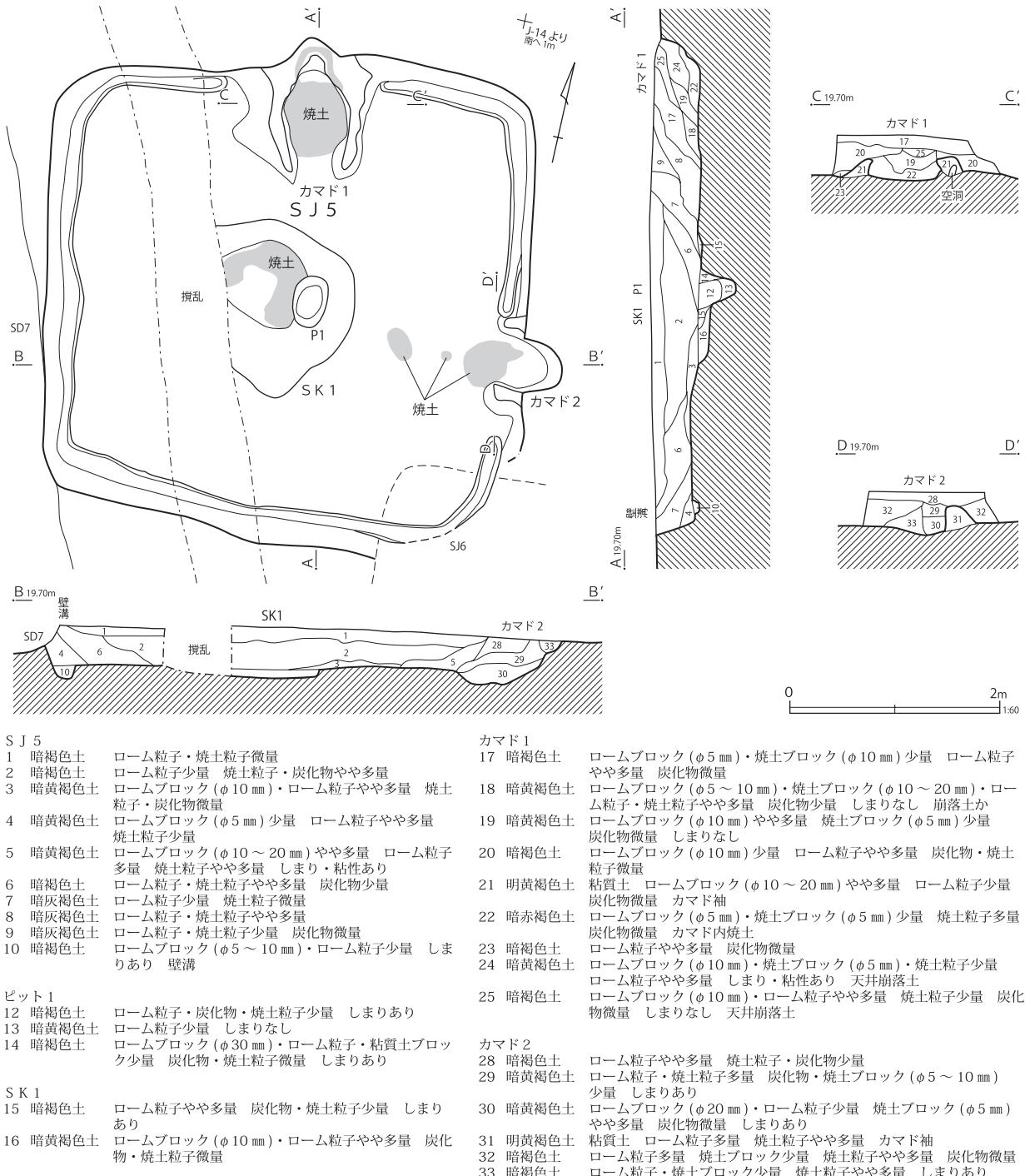
第48図 第4号住居跡出土遺物（1）



第49図 第4号住居跡出土遺物（2）

第10表 第4号住居跡出土遺物観察表（第48・49図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	ロクロ土師器	壺	(14.4)	[4.6]	—	E I K L	30	良好	浅黄		21-7
2	ロクロ土師器	壺	11.8	[3.8]	—	G I	60	普通	にぶい黄	高台付か やや還元	22-1
3	ロクロ土師器	壺	(12.2)	[3.6]	(4.5)	H I L	20	普通	黄浅	底部糸切痕 若干煤付着 口縁部歪む	22-4
4	ロクロ土師器	壺	12	4.1	4.8	I K L	100	普通	灰黄褐	底部糸切痕（右）還元	22-2
5	ロクロ土師器	壺	(12.4)	3.4	(6.2)	C E G I J	15	普通	にぶい黄褐	底部ヘラケズリ	22-3
6	ロクロ土師器	高台付壺	(13.8)	[5.0]	—	D E I L	50	良好	にぶい褐	内底面渦巻き状ナデ（右）	22-6
7	ロクロ土師器	高台付壺	—	[4.5]	6.7	D E H I K	60	普通	灰黄褐	器面大きく歪む（耳皿か）やや還元	22-7
8	ロクロ土師器	高台付壺	(13.7)	5.3	7.0	C G H I	70	普通	黄浅	底部糸切痕（右）	22-5
9	須恵器	壺	—	[1.4]	(6.0)	E I J	10	良好	灰	底部糸切痕（右） 南比企（鳩山VIII～IX期）	
10	土師器	甕	18.5	[24.2]	—	C D E	50	良好	にぶい橙	内面ヘラナデ 外面ヘラケズリ、煤付着	22-8
11	土師器	台付甕	(13.6)	[6.5]	—	C D G	15	普通	にぶい橙	内面ハケメ状ナデ 外面ヘラケズリ	
12	土師器	甕	—	[1.9]	(7.8)	H I K	45	普通	明黄褐	底部静止糸切 外面ヘラケズリ	
13	土師器	羽釜か	—	[14.9]	—	I K	5	普通	黄褐		
14	須恵器	甕	—	[11.3]	—	I J K	5	良好	黄灰	南比企	
15	須恵器	甕	—	[7.6]	—	I J K	5	良好	褐灰	南比企	
16	須恵器	壺	—	[2.0]	—	H I J K	5	普通	明黄褐	体部外面墨書	
17	灰釉陶器	輪花塙か	—	[1.3]	—	I	5	良好	灰白	内外面灰釉薄く施釉 東濃	
18	灰釉陶器	皿	—	[1.5]	—	I	5	良好	灰白	内外面灰釉薄く施釉 東濃	
19	石製品	砥石	長さ [9.8]cm、幅 4.6cm、厚さ 4.7cm、重さ 239.6g						砂岩 被熱、一部黒色化	32-4	
20	石製品	砥石	長さ [9.5]cm、幅 7.0cm、厚さ 6.0cm、重さ 521.7g						砂岩 5面使用 欠損あり	32-5	
21	土製品	鞴羽口	長さ [6.9]cm、外径 4.4cm、孔径 1.9cm、重さ 54.0g							33-2	
22	土製品	鞴羽口	長さ [4.1]cm、外径 4.4cm、孔径 1.8cm、重さ 33.1g							33-2	
23	鉄滓	椀形滓	長さ 7.2cm、幅 8.1cm、厚さ 3.6cm、重さ 187.1g						上面：中央部に鉄分が付着 淬化 下面：土砂付着 粘土化し還元 磁着	33-1	
24	鉄滓	椀形滓	長さ 6.4cm、幅 9.1cm、厚さ 1.9cm、重さ 104.4g						上面：中心部凹む 下面：淬化 磁着	33-1	
25	鉄滓	椀形滓	長さ 6.7cm、幅 6.7cm、厚さ 1.9cm、重さ 136.4 g						上面：鉄分付着 下面：淬化し土砂はほとんど見られず平坦	33-1	
26	鉄製品	板状製品	長さ [3.9]cm、幅 1.1cm、厚さ 0.3cm～0.25cm、重さ 2.4g							33-4	
27	鉄製品	棒状品	長さ [4.2]cm、幅 0.35cm、厚さ 0.15cm、重さ 1.4g								
28	鉄製品	刀子	長さ [1.2]cm、幅 1.0cm、背幅 0.25cm、重さ 1.5g								
29	鉄製品	刀子	長さ [7.5]cm、幅 0.95cm、背幅 0.4cm、重さ 25.6g						茎部	33-5	



第50図 第5号住居跡（1）

第5号住居跡（第50～52図）

調査区南東部のJ-13・14グリッドに位置する。調査時の所見によれば第6号住居跡より古い。長軸4.70m、短軸4.62mの方形を呈し、深さは0.33mである。カマドは東壁のカマド2から北壁

のカマド1へ造り替えられている。主軸方向は、古期がN-87°-E、新期がN-15°-Wを指す。

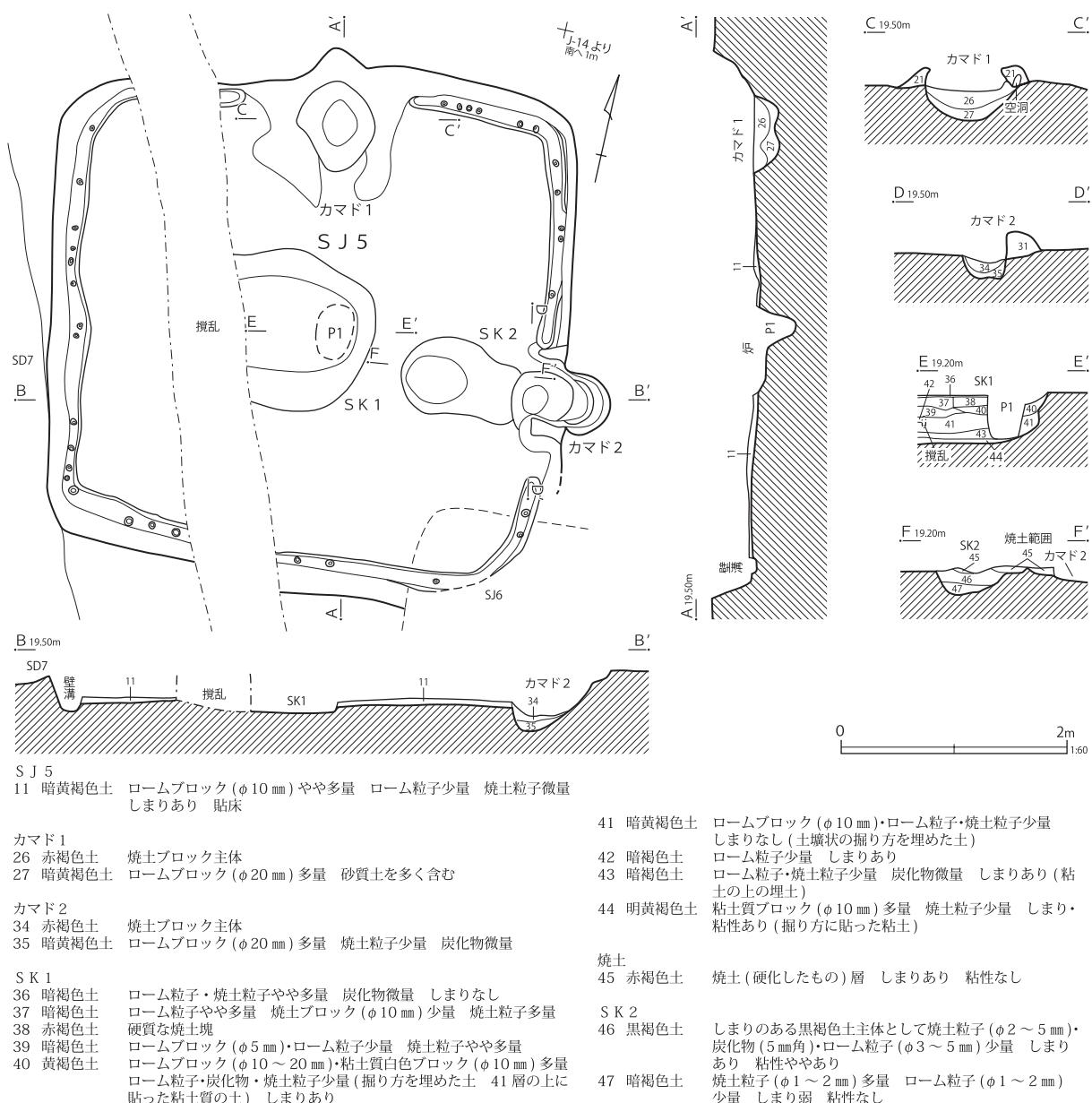
古い段階のカマド2の前面には、焼土範囲と直下の掘り込みが検出された。掘り込み内の土を探取して鍛造剥片の抽出を試みたが、ほとんど検出

されなかつた。焼土範囲は、カマド2の火床部の痕跡とみるのが妥当であろう。一方で、住居中央部には下部に粘質土を貼った焼土範囲が検出されており、長軸1.70m、短軸1.22mの掘り込みを有する(SK1)。鍛冶炉としては規模がかなり大きく、土壤からも鍛造剥片等は検出されなかつたため、詳細な性格は不明である。

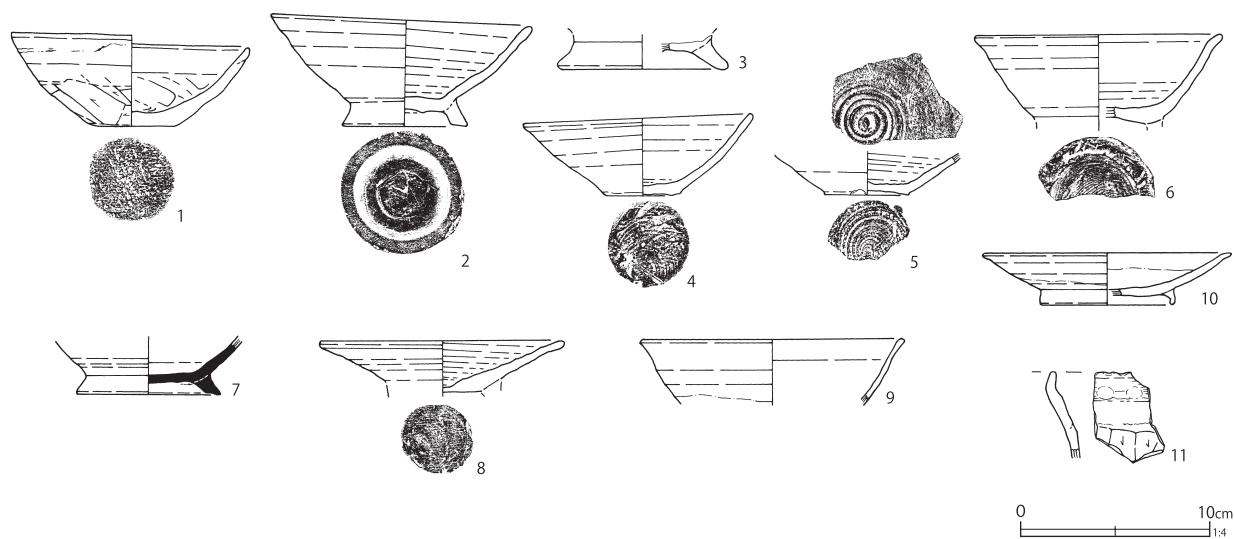
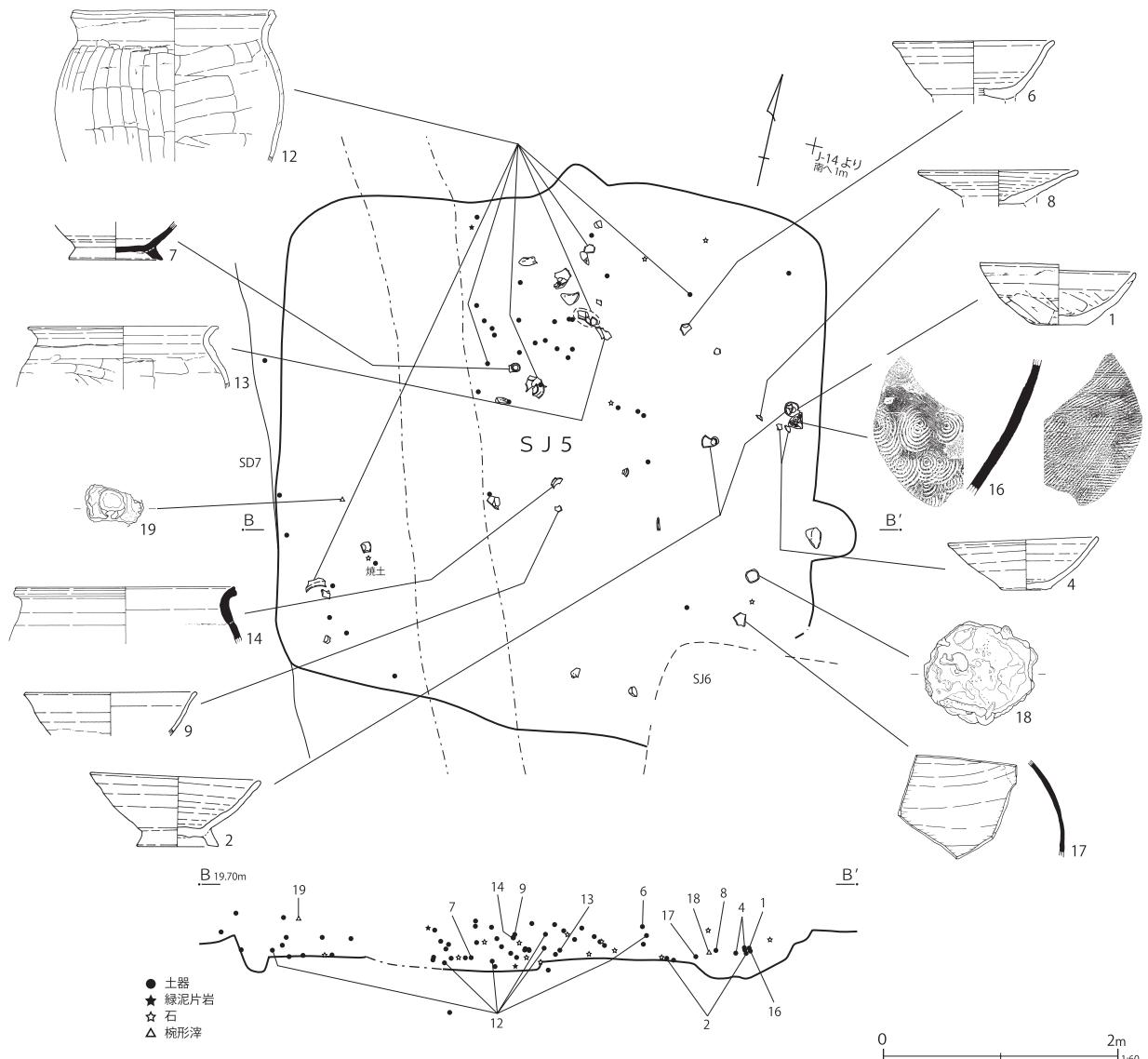
壁溝はカマド部分を除いて全周している。壁溝底面からはピットが多数確認され、壁の構築に關

わる支柱痕の可能性がある。

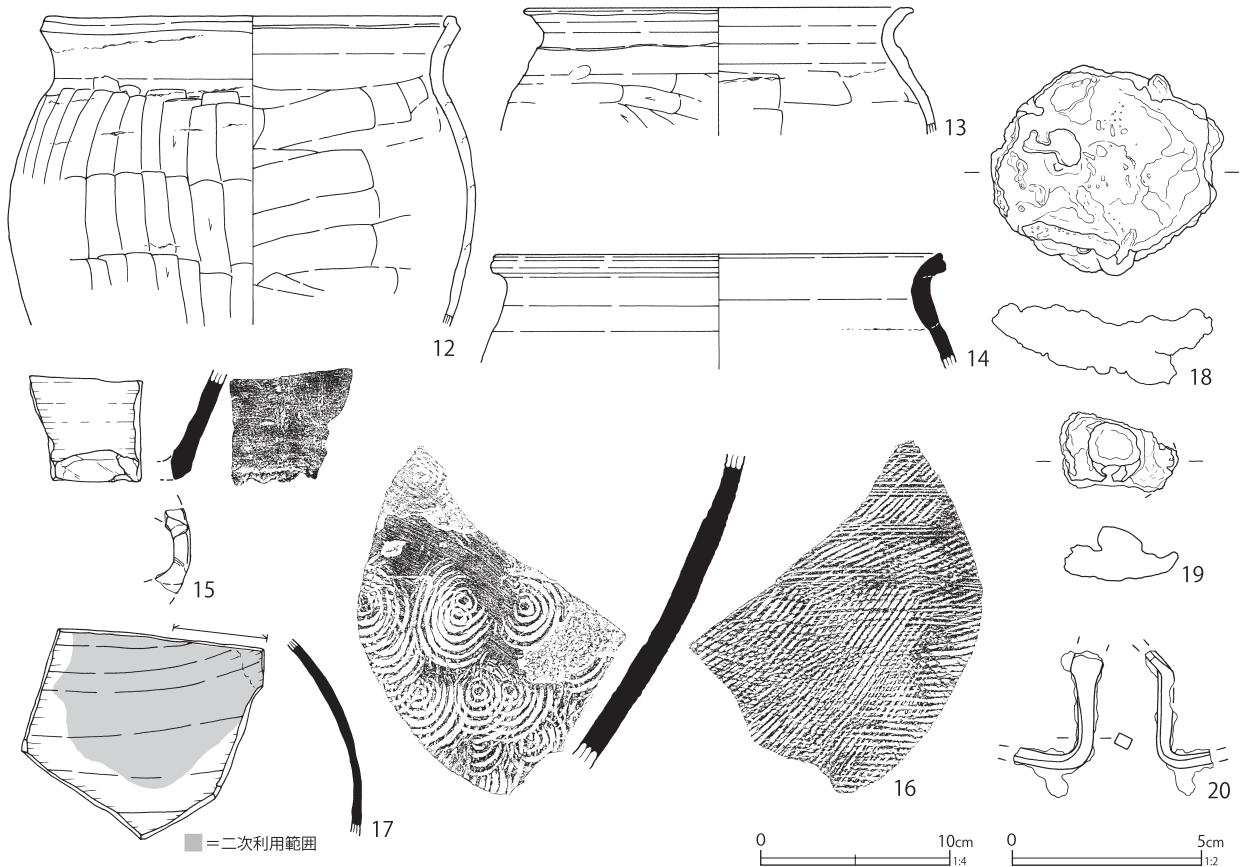
遺物は、ロクロ土師器・土師器・須恵器・灰釉陶器・鉄製品等が出土している(第52・53図)。1は土師器の坏で底部、体部下位ともヘラケズリで仕上げられる。内面は幅の狭いヘラナデ調整され、一部ミガキに近い痕跡になっている。2~6はロクロ土師器の坏及び高台付坏である。このうち、5は還元して灰色味を帯びる。4・5は小さな底部から直線的に体部が開く器形に共通性があ



第51図 第5号住居跡 (2)



第52図 第5号住居跡(3)・出土遺物(1)



第53図 第5号住居跡出土遺物（2）

第11表 第5号住居跡出土遺物観察表（第52・53図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	壺	12.4	4.9	4.6	E H L	95	良好	にぶい黄橙	底部ヘラケズリ 内面下位ヘラナデ	22-9
2	ロクロ土師器	高台付壺	13.6	5.9	6.6	C E G L	80	普通	橙	付高台 内外面の一部煤付着	22-10
3	ロクロ土師器	高台付壺	—	[11.8]	(8.6)	E L	10	良好	にぶい黄橙	付高台	23-2
4	ロクロ土師器	壺	12.0	4.0	4.1	D E H I J	70	良好	にぶい黄橙	底部糸切痕（右）	23-1
5	ロクロ土師器	壺	—	[2.2]	(4.4)	I K L	25	良好	灰黄	底部糸切痕（右）	23-3
6	ロクロ土師器	高台付壺	(12.8)	[4.7]	—	E H I	25	不良	橙	底部糸切痕 付高台	
7	須恵器	高台付壺	—	[3.1]	7.6	I J K	50	普通	灰白	付高台 底部糸切痕はナデ消す 南比企	
8	ロクロ土師器	高台付皿	12.6	[2.8]	—	G H I J	60	良好	橙	内底面渦巻状に強く窪ませる	23-4
9	灰釉陶器	塊	(13.6)	[3.4]	—	I K	10	良好	灰白	内外面灰釉刷毛塗り 黒塙90号窯式段階	
10	灰釉陶器	高台付皿	(12.8)	2.7	(6.9)	E I K	30	良好	浅黄	内外面灰釉刷毛塗り 黒塙90号窯式段階	23-5
11	土師器	甕か	—	[4.6]	—	G I	5	普通	明黄褐	口唇部指頭圧により波状に成形	
12	土師器	甕	21.2	[16.3]	—	E H I	25	良好	浅黄橙	内面ヘラナデ 外面ヘラケズリ	23-6
13	土師器	甕	(20.1)	[6.7]	—	E H I K	20	普通	にぶい橙		23-7
14	須恵器	甕	(23.5)	[6.0]	—	E I J	5	不良	にぶい黄	内面剥離多い 南比企	
15	須恵器	甕	—	[5.8]	—	H I J	5	普通	浅黄	底部に穿孔 南比企	
16	須恵器	甕	—	[16.5]	—	D I	5	良好	灰	内面あて具痕 外面叩き 末野	23-8
17	須恵器	瓶類	—	[10.6]	—	D G	10	良好	明灰黄	外面降灰 破損後二次利用 南比企	23-9
18	鉄滓	楕形滓	長さ 10.9cm、幅 11.6cm、厚さ 3.6cm、重さ 589.6g						上面：中心部凹む 全体に滓化 下面：船底形 土砂僅かに付着 重層が見られる 磁着	33-1	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
19	鉄滓	椀形滓	長さ [4.0]cm	幅 [6.0]cm	厚さ 2.8cm	重さ 73.6g	上面：鉄滓の瘤中央に付着 下面：船底形 断面滓密度高く気孔少ない 木炭痕あり 磁着			33-1	
20	鉄製品	釘	長さ [4.7]cm	幅 0.4cm	厚さ 0.35cm	重さ 2.6g				33-6	

り、2・3はこれに高台が貼付されたものと捉えられる。5は内面にカキ目状の渦巻き痕が明瞭であり、4も内底面に渦巻き状のナデが認められる。8も同じタイプの高台付皿であろう。

7は須恵器高台付坏で南比企産である。胎土はやや粉っぽく軟質な印象を受ける。9・10は灰釉陶器の碗と皿でいずれも黒窯90号窯式段階の所産である。

土師器甕は縦ヘラケズリが施されたやや硬質のもの(12)と、横ヘラケズリが施されたもの(13)が認められる。11は小型甕の破片とみられるが、形態は口縁部が短く直立し鉢形を呈する。口唇部に指頭圧が加えられ、波状に歪んでいる。14は須恵器甕、15は須恵器甌でいずれも胎土は軟質である。16は硬質に焼き締まった須恵器甕の胴部破片で、末野産である。時期的にもやや遡るものであろう。17は須恵器長頸瓶の体部破片であり、外面は平滑にナデ調整され、降灰が認められる。内面と破損面の一部が二次利用によって磨耗しており、転用砥具に用いられたものであろう。

このほか、住居跡覆土から緑泥片岩40点、計4804.2gが出土している。カマド1の前面に大型の緑泥片岩が散在しており、本来はカマドに伴う石材であったと思われる。また、カマド2覆土上層からも緑泥片岩1点(612.4g)が出土しており、カマド2にも緑泥片岩が使用されていた可能性がある。

鍛冶関連遺物は比較的少なく、椀形滓662.0g、鍛冶滓3.1g、轆羽口片2点(18.1g)が出土した。このうち18・19に椀形滓を図示した。

鉄製品の出土も少なかった。20は釘で、中位で折れ曲がっている。

第6号住居跡(第54・55図)

調査区南東側のJ-13・14グリッドに位置し、重複する第5号住居跡より新しいと判断されている。長軸5.0m、短軸4.0mの長方形を呈し、深さは0.30mである。主軸方向はN-1°-Eを指す。

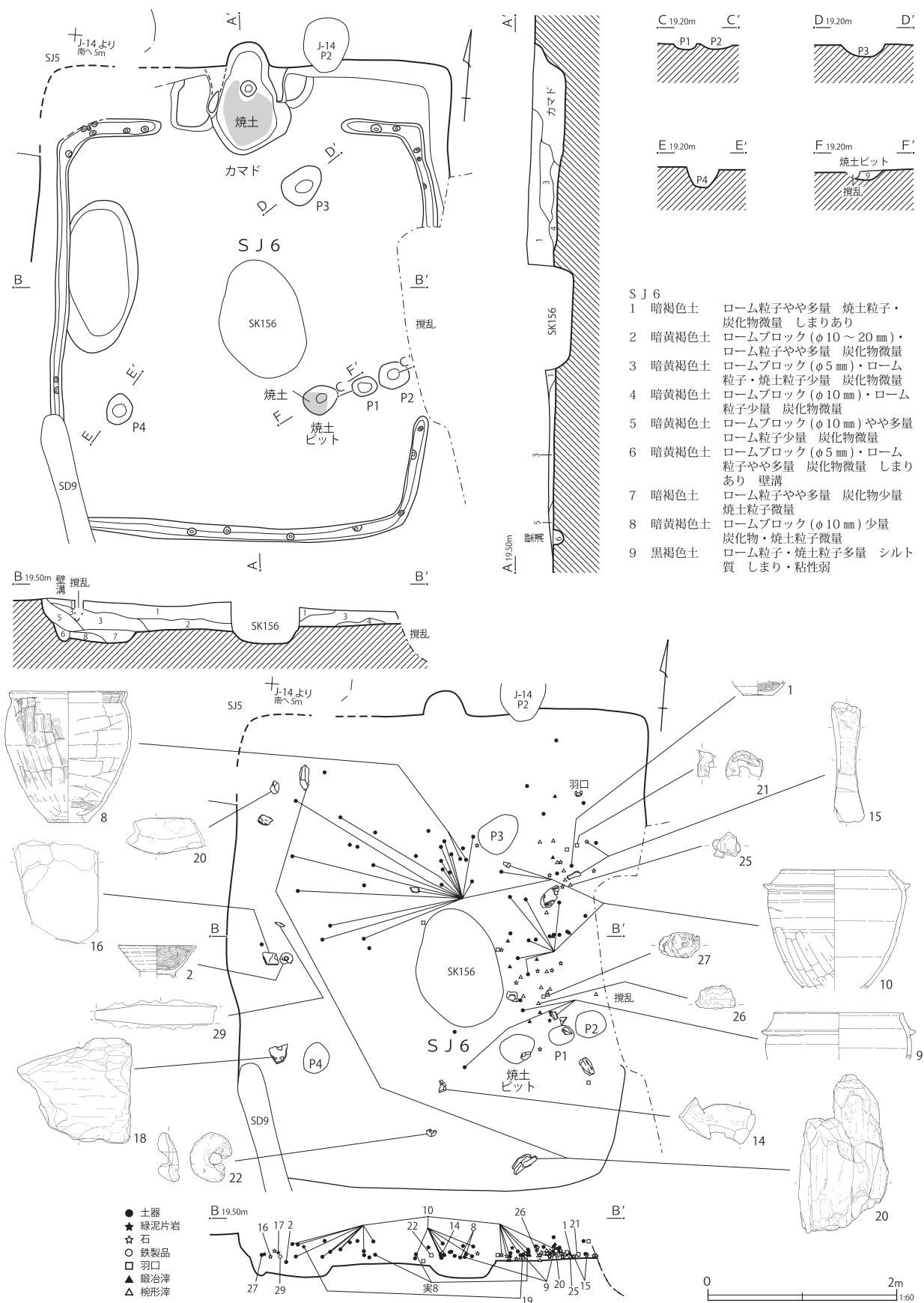
カマドは北壁から検出されており、奥壁部分に緑泥片岩板材が遺存していた。カマドの前面には4枚の緑泥片岩板材が床面直上に並べられたように出土しており、このうち2枚が接合した。カマドの解体に伴う行為が想定され、あるいは再利用を意図して石材を選別したとも推定される。

住居跡からは鍛冶関連遺物が多く出土しているが、特に東部に鉄滓が多く分布する。住居跡南東部から検出された焼土ピットが鍛冶炉、P1・2は関連構造と考えられ、焼土ピット及び周囲の覆土を採取した土壤からも多量の鍛造剥片が抽出されている(第23表)。

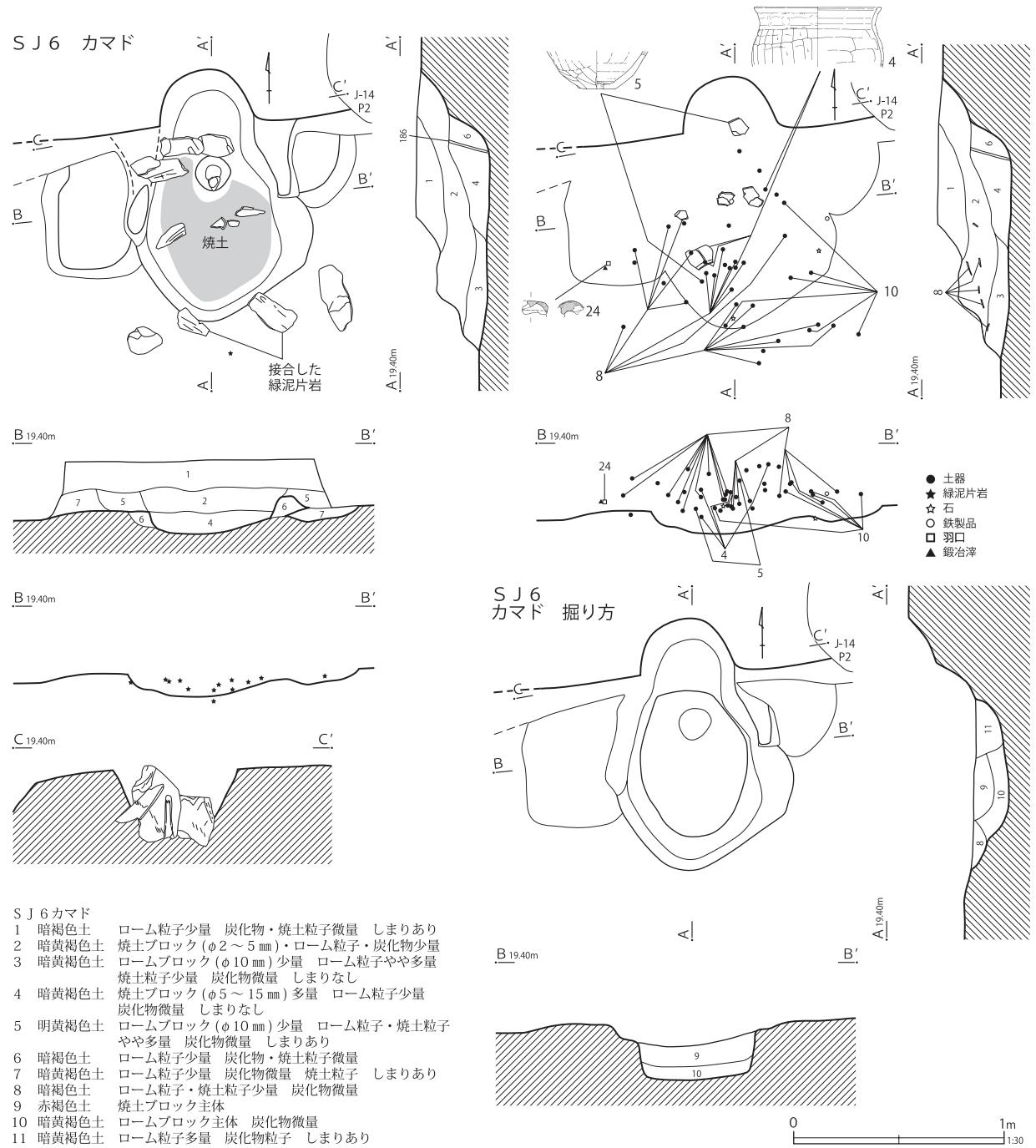
壁溝はカマド部分を除いて全周しているが、カマドのある北壁では、壁際から60cmほど離れた位置で検出された。また、カマド袖の両脇部分には、ロームブロックを含む明黄褐色土が高く残っている状況が認められた。状況から北壁に棚状施設が伴っていたものと想定される。壁溝の底面からはピットが複数確認され、壁の構築に関わる支柱痕の可能性がある。

なお、住居中央部に第156号土壙が掘り込まれ、馬歯が出土している。住居跡検出時には土壙のプランを確認し得なかったが、断面精査によって住居跡より新しい遺構と判断された。

遺物は土師器・須恵器・石製品・鉄製品等が出土している(第56・57図)。土器類の出土は比較的少なかったが、土師器では、内面に黒色処



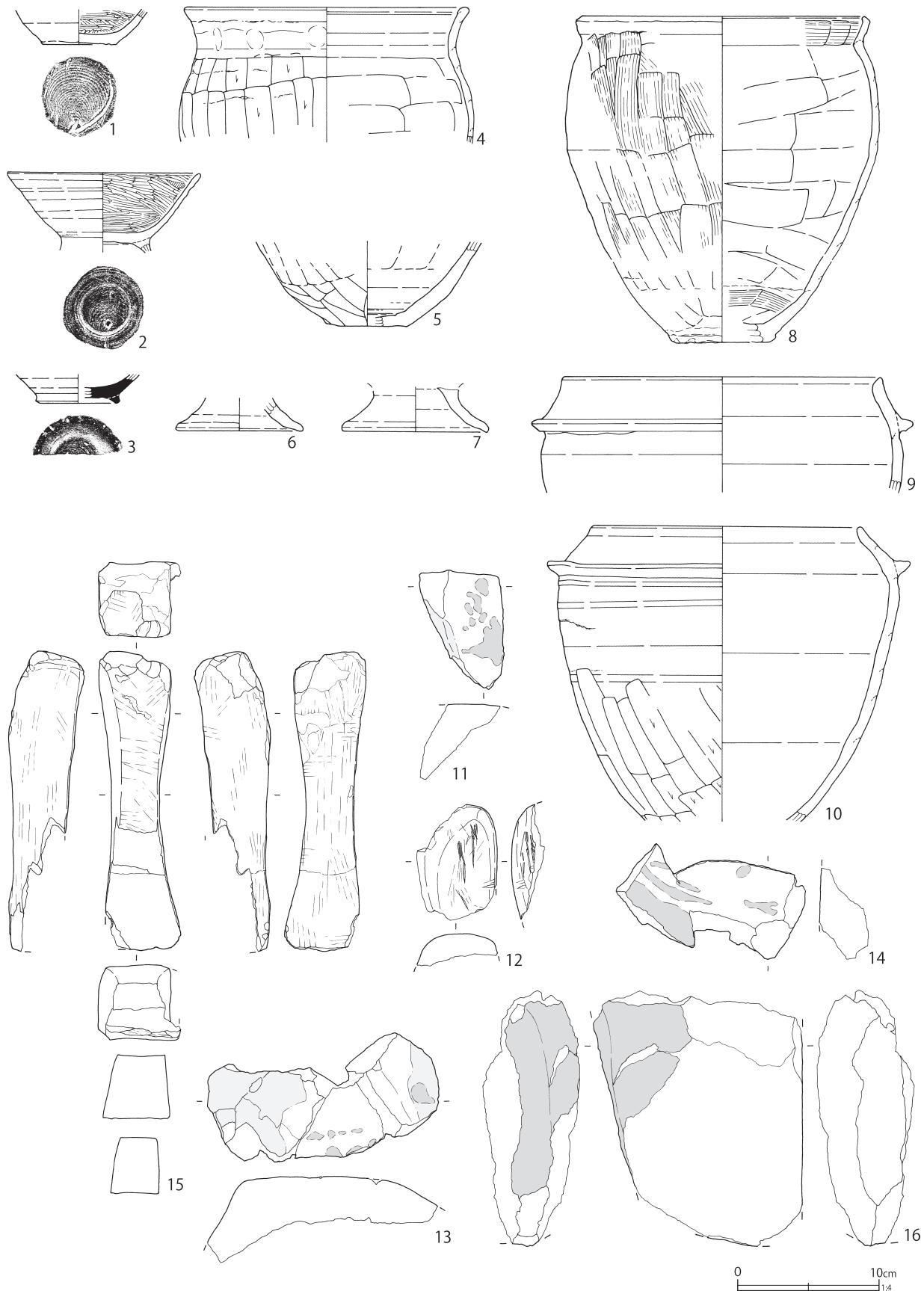
第 54 図 第 6 号住居跡 (1)



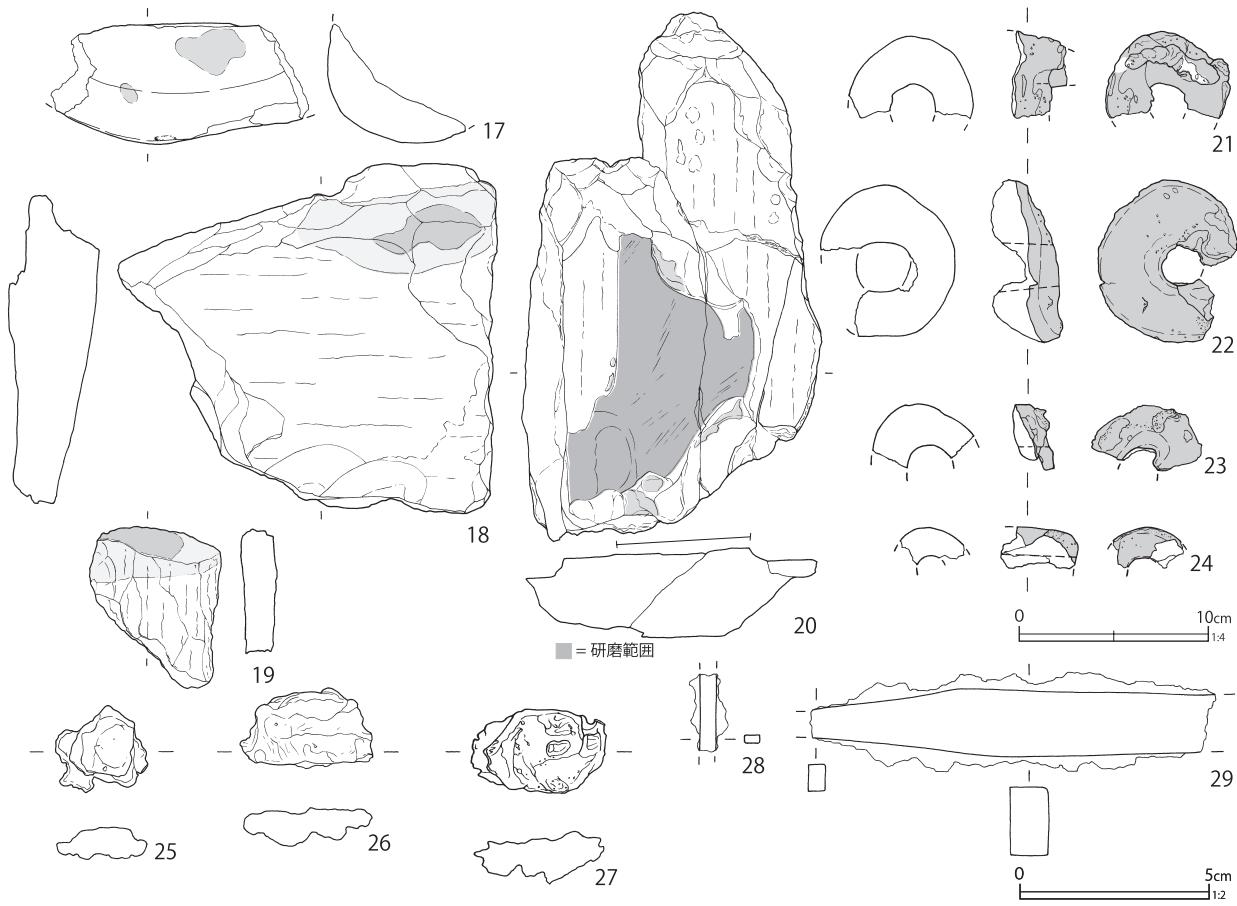
第55図 第6号住居跡（2）

理が施される坏類（1・2）や羽釜2個体（9・10）が特徵的である。羽釜はいずれも口唇部が丸く收められており、胴部下位のみに縦のヘラケズリが施される。5は形態から羽釜の底部の可能性がある。土師器甕は胴部に縦のヘラケズリが施された硬質のもの（4）と、ハケメ状痕跡を残す縦

ヘラナデで仕上げられたもの(8)が認められる。8の胎土は粗く、径1.5mm程のゴマ粒状を呈する種子圧痕が密に認められる。アワ等を含むエノコログサ属の種子圧痕と考えられる(佐々木由香氏のご教示による)。このほか、6・7に示した土師器台付甕の脚部が出土しているが、小破片で



第 56 図 第 6 号住居跡出土遺物 (1)



第 57 図 第 6 号住居跡出土遺物 (2)

第 12 表 第 6 号住居跡出土遺物観察表 (第 56・57 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	壺	—	[2.4]	5.3	A I	20	普通	にぶい黄橙	底部糸切痕 (右) 内面ミガキ、黒色処理	23-11
2	土師器	高台付壺	13.5	[5.6]	—	I	70	普通	浅黄	底部糸切痕 (右) 付高台 内面ミガキ、黒色処理	23-10
3	須恵器	高台付壺	—	[2.0]	(5.3)	C E I K	50	不良	灰白	底部糸切痕 付高台	23-12
4	土師器	甕	(19.7)	[9.4]	—	C E I	15	良好	にぶい橙	内面ヘラナデ 外面ヘラケズリ 内面一部煤付着	
5	土師器	羽釜か	—	[6.0]	5.7	C D I L	10	良好	褐灰	外面下位ヘラケズリ 上位ヘラナデ	24-3
6	土師器	台付甕	—	[2.3]	(8.8)	C H I L	5	良好	にぶい橙	脚台部	24-4
7	土師器	台付甕	—	[3.1]	(10.2)	C E H I	5	普通	橙	脚台部 脊部との貼付部で破損	24-5
8	土師器	甕	(20.1)	[23.0]	(6.8)	C E G I	25	不良	橙	内外面ハケメ状工具痕 種子圧痕 (長 1.5 mm 程) 実測図下部は同一個体の複数破片から復元的に図化	23-13
9	土師器	羽釜	(22.4)	8.15	—	C E H I K L	10	普通	にぶい褐	内外面強いヨコナデ	24-1
10	土師器	羽釜	19.0	[20.8]	—	C D E L	80	良好	にぶい褐	内外面ロクロナデ 外面下位ヘラケズリ	24-2
11	石製品	金床石	長さ [8.5]cm、幅 [5.9]cm、厚さ [5.6] cm、重さ 150.7g					砂岩			
12	石製品	砥石	長さ [8.1]cm、幅 [5.7]cm、厚さ [2.4]cm、重さ 110.1g					粘板岩か 欠損あり 4 面遺存			
13	石製品	金床石	長さ [9.2]cm、幅 [16.4]cm、厚さ [7.1]cm、重さ 631.3g					砂岩 被熱し一部黒色・赤色化			
14	石製品	金床石	長さ [13.4]cm、幅 [8.1]cm、厚さ [4.5]cm、重さ 212.4g					砂岩			
15	石製品	砥石	長さ 21.2cm、幅 5.8cm、厚さ 5.4cm、重さ 529.5g					流紋岩 欠損あり 6 面使用			
16	石製品	金床石	長さ [18.0]cm、幅 [6.9] cm、厚さ 14.8 cm、重さ 2384.9g					砂岩 欠損あり			
17	石製品	金床石	長さ [13.7]cm、幅 [6.2]cm、厚さ [7.3]cm、重さ 398.2g					砂岩 淵状の鉄分付着 被熱し赤色化			
18	石製品	石材か	長さ 20.0cm、幅 18.4cm、厚さ 4.9cm、重さ 1994.8 g					緑泥片岩 淵状の鉄分付着 被熱し赤色化			
19	石製品	石材か	長さ 8.5 cm、幅 7.0cm、厚さ 2.4cm、重さ 139.6g					緑泥片岩 淵状の鉄分付着 被熱し赤色化			
20	石製品	石材か	長さ 28.4cm、幅 15.9cm、厚さ 5.1cm、重さ 2457.5g					緑泥片岩 表面研磨痕 (砥石として使用)			

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
21	土製品	羽口	長さ [2.9]cm、外径 (6.5)cm、孔径 (2.5)cm、重さ 40.5g								33-2
22	土製品	羽口	長さ [3.4]cm、外径 7.9cm、孔径 2.6cm、重さ 103.7g								33-2
23	土製品	羽口	長さ [1.7]cm、外径 (5.7)cm、内径 (2.3)cm、重さ 23.6g								33-2
24	土製品	羽口	長さ [4.0]cm、外径 (4.4)cm、孔径 (1.5)cm、重さ 18.6g								33-2
25	鉄滓	楕形滓	最大長 4.0cm、最大幅 4.8cm、厚さ 1.6cm、重さ 40.7g							上面：突出した滓が付着	33-1
26	鉄滓	楕形滓	最大長 4.1cm、最大幅 6.8cm、厚さ 1.8cm、重さ 79.1 g							下面：流動化した滓のかたまり 磁着	
27	鉄滓	楕形滓	最大長 4.4cm、最大幅 7.0cm、厚さ 2.3cm、重さ 95.7 g							上面：周縁部やや高く中央が凹む 表面滑らか	33-1
28	鉄製品	棒状品	長さ [2.1]cm、幅 0.4cm、厚さ 0.25cm、重さ 1.1g							下面：船底形 流動滓による丸味を持つ 磁着	
29	鉄製品	不明品	長さ [10.7]cm、幅 0.7cm ~ 1.8cm、厚さ 0.45cm ~ 1.0cm、重さ 104.3g							上面：なめらかでわずかに凸凹を持つ 細かい気泡 下面：滓化 磁着	33-1
											33-7

あり、住居に直接伴うものは明確ではない。須恵器は末野産の高台付塊（3）のほか、南比企産の塊・高台付塊・甕・長頸瓶の破片も出土しているが、点数は極めて少ない。

11 ~ 20 は石製品である。11・13・14・16・17 は金床石と考えられるが、いずれも破片である。全体的に鉄分の付着が少量認められ、13 には僅かに被熱痕が認められる。12・15 は砥石である。このうち 12 は川原石状の丸石を用いた砥石破片で、遺存面に細かい擦痕状の使用痕が明瞭である。

緑泥片岩は 30 点、計 16221.9g と多量に出土した。この中には、カマド内に構築材として遺存していたものもある。18・19 は緑泥片岩破片の端部に滓化した鉄分の付着が認められる。付着部周辺は熱変しており、鍛冶行為に関連する資料と思われる。20 は住居跡北西部と南東部から出土した破片が接合したもので、研磨痕が認められる。

鍛冶関連遺物は、楕形滓 827.4 g、鍛冶滓 281.4 g、鞴羽口片 13 点 (563.6 g)、炉壁材 4 点 (32.3g) が出土した。主に住居跡東部からの出土である。このうち 21 ~ 24 に鞴羽口、25 ~ 27 に楕形滓を図示した。

28・29 は鉄製品である。28 は断面長方形を呈する棒状鉄製品である。29 は 1cm 程の厚さがある鉄製品で、片方の端部は細く幅・厚みを減じていく。用途は不明であるが工具類の可能性が考えられる。

第7号住居跡（第 58・59 図）

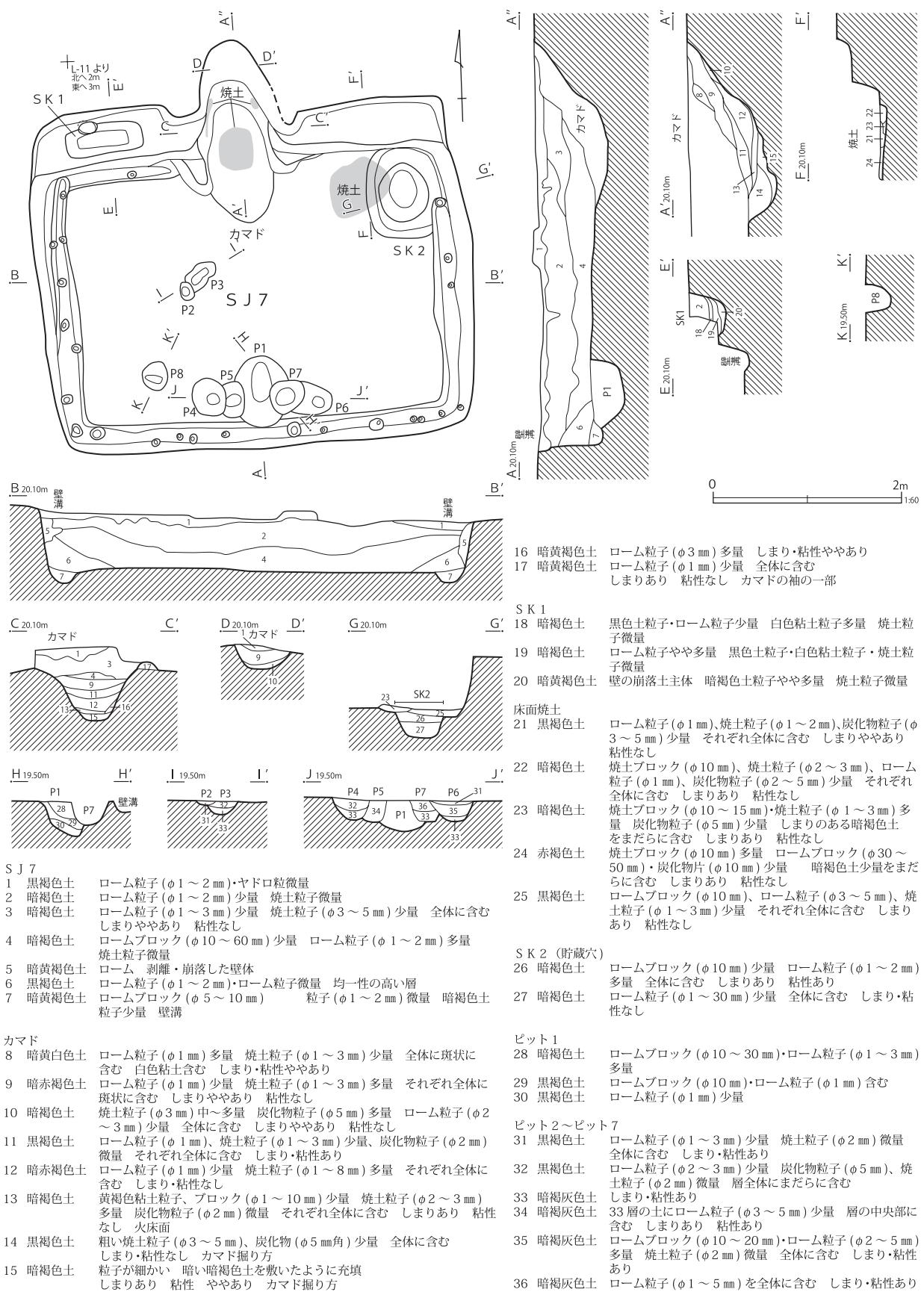
調査区南寄り中央の K・L-11 グリッドに位置する。長軸 4.66m、短軸 3.65m の長方形を呈し、深さは 0.57m である。主軸方向は N - 7° - W を指す。

カマドは北壁中央部に設けられており、掘り方を若干埋め戻して火床面としている。火床面直上には小型台付甕の口縁部破片（第 60 図 24・25）が検出されており、調査時には支脚として据えられたものと想定している。カマドの両側は床面より約 30cm 高いテラス状になっており、棚状施設と捉えられる。壁溝はカマド部分とその東側を除いて全周している。壁溝覆土下からは小ピットが多数確認されている。

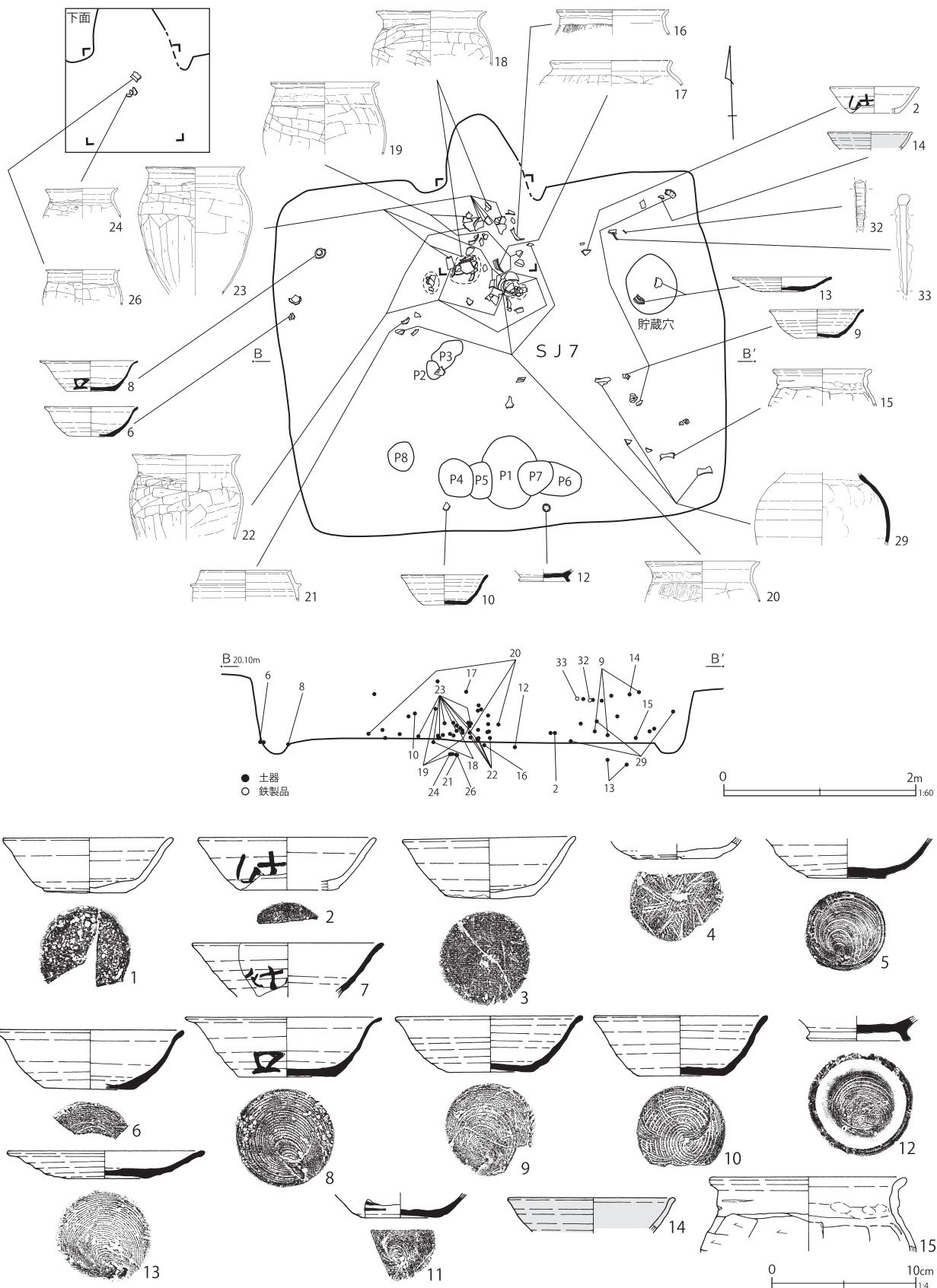
壁溝が途切れる住居跡北東隅には、貯蔵穴と考えられる土壙（SK2）が検出された。平面形態は隅丸方形で、長軸・短軸とも 60cm 強、深さ 35cm である。確認面付近に焼土が検出されたが、SK2 の覆土より若干上部に堆積する状況から、直接的な関連性は認められない。住居覆土が埋没する過程で形成された焼土堆積層と考えられる。

住居跡南壁際には、主軸上に P1・4~7 が集中して検出された。いずれも出入口施設に関わる遺構と考えられるが、各々重複し、土層観察から前後関係が認められる。検出されたピットの組み合わせについては不明であり、出入口施設の具体的な構造も詳らかではない。

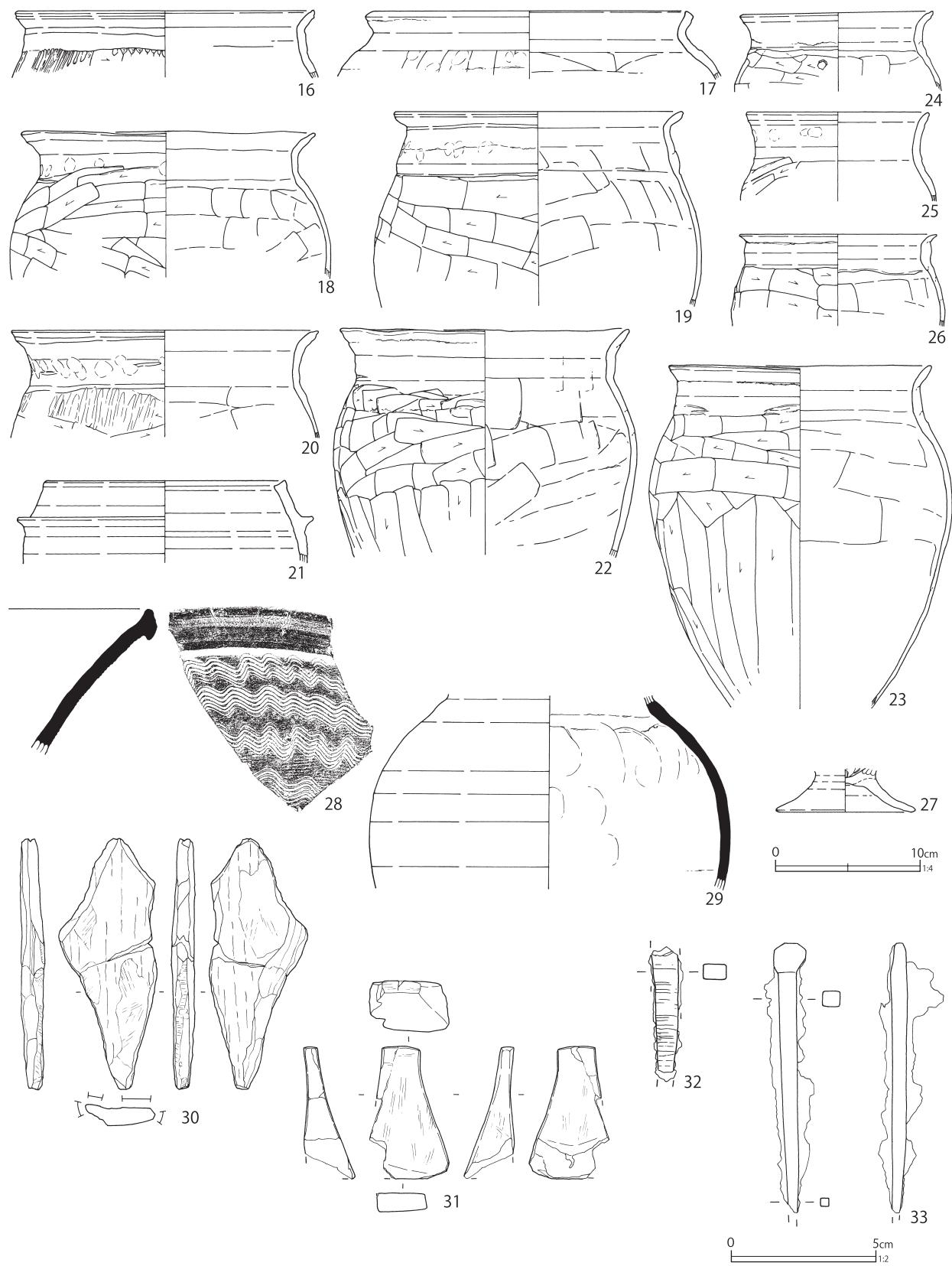
遺物は、住居跡全体からロクロ土師器・土師器・



第 58 図 第 7 号住居跡 (1)



第59図 第7号住居跡(2)・出土遺物(1)



第 60 図 第 7 号住居跡出土遺物 (2)

第13表 第7号住居跡出土遺物観察表(第59・60図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	ロクロ土師器	壺	(11.5)	3.8	5.7	H K	30	普通	橙		24-7
2	ロクロ土師器	壺	(12.2)	[3.6]	(7.2)	E H I K	30	普通	橙	体部外面墨書	24-8
3	ロクロ土師器	壺	(11.9)	4.2	6.2	E H I K	60	普通	明黄褐	底部ヘラケズリ	24-9
4	ロクロ土師器	壺	—	[1.4]	5.7	E I K	10	普通	橙	底部放射状にヘラケズリ	25-6
5	須恵器	壺	—	[2.7]	(5.5)	C E I	40	良好	灰黄褐	底部糸切痕(右)末野か	24-10
6	須恵器	壺	(12.8)	4.1	(6.4)	E I J K	25	不良	褐灰	底部糸切痕 南比企(鳩山VII期)	24-11
7	須恵器	壺	(13.2)	[3.7]	—	E J K	10	良好	灰白	外面墨書 南比企	25-3
8	須恵器	壺	(13.5)	[4.1]	6.8	C E I	80	良好	褐灰	底部糸切痕(右)体部外面墨書 末野か	24-12
9	須恵器	壺	(12.5)	3.8	5.8	E I J K L	70	良好	灰白	底部糸切痕(右) 南比企	25-1
10	須恵器	壺	(11.9)	4.1	6.0	E J	40	良好	にぶい黄橙	底部糸切痕 底外面煤付着 南比企(鳩山VII期)	25-2
11	須恵器	壺	—	[1.7]	(5.6)	H I J K	30	良好	にぶい黄橙	底部糸切痕(右) 体部外面墨書 南比企	25-4
12	須恵器	高台付塊	—	[1.7]	6.6	C D E I	10	良好	にぶい褐	底部糸切痕(右) 末野か	25-7
13	須恵器	皿	13.4	1.9	5.6	B H I K	90	良好	褐灰	底部糸切痕(右) 末野	24-6
14	灰釉陶器	小塊	(11.4)	[2.4]	—	I K	10	良好	灰白	内面灰釉刷毛塗り 黒笛90号窯式段階	25-5
15	土師器	甕	(13.4)	[5.1]	—	C E G H	10	普通	にぶい橙	内面ヘラナデ 外面ヘラケズリ 口縁部 被熱 剥離	
16	土師器	甕	(20.4)	[4.6]	—	C G I L	5	普通	橙	外面ヘラケズリ	25-8
17	土師器	甕	(21.8)	[4.7]	—	E G I J L	5	良好	にぶい橙	内面弱いヘラナデ 外面ヘラケズリ	25-9
18	土師器	甕	20.2	[10.1]	—	C E H I	20	良好	にぶい赤褐	内面ヘラナデ 外面ヘラケズリ	
19	土師器	甕	(19.8)	[13.4]	—	C E I	20	普通	にぶい赤褐	内面ヘラナデ 外面ヘラケズリ	26-1
20	土師器	甕	(21.3)	[7.3]	—	C E H I J	10	普通	明褐	内面ヘラナデ 外面ヘラケズリ 角閃石 多く含む	25-10
21	土師器	羽釜	(16.6)	[5.6]	—	C I J	5	良好	にぶい橙	内外面ロクロナデ	26-2
22	土師器	甕	19.8	[15.8]	—	C E I	30	良好	橙	内面ヘラナデ 外面ヘラケズリ、煤付着	26-3
23	土師器	甕	18.0	[23.7]	—	C E I	65	普通	橙	内面弱いヘラナデ 外面ヘラケズリ、一部煤付着	25-12
24	土師器	甕	(13.2)	[5.4]	—	C H I	15	普通	橙	胴部に小円孔(焼成後)あり	25-11
25	土師器	甕	(12.6)	[6.1]	—	C E H I	10	普通	橙	外面ヘラケズリ 煤付着	
26	土師器	甕	(13.5)	[6.3]	—	C D G I	10	普通	赤褐	内面ヘラナデ 外面ヘラケズリ、煤付着	26-4
27	土師器	台付甕	—	[3.0]	(9.7)	C E I	10	良好	にぶい赤褐	脚台部	
28	須恵器	甕	—	[10.0]	—	D	5	良好	灰	外面櫛描き波状文 東金子	
29	須恵器	壺	—	[13.4]	—	D E K	15	良好	黄灰	内面弱いあて具痕あり 南比企	
30	石製品	砥石	長さ17.3cm、幅6.8cm、厚さ1.3cm、重さ186.4g						緑泥片岩 4面使用 完形		32-13
31	石製品	砥石	長さ9.1cm、幅[5.5]cm、厚さ3.5cm、重さ103.1g						流紋岩 5面使用 欠損あり		32-14
32	鉄製品	棒状製品	長さ[4.7]cm、幅1.0cm、厚さ0.7cm、重さ6.0g						釘か 外面木質部遺存		
33	鉄製品	釘	長さ[9.3]cm、幅0.3～0.6cm、厚さ0.3～0.5cm、重さ17.8g								34-1

須恵器等の土器類が出土しており、特にカマド前面に土師器甕類が多く認められた(第59・60図)。

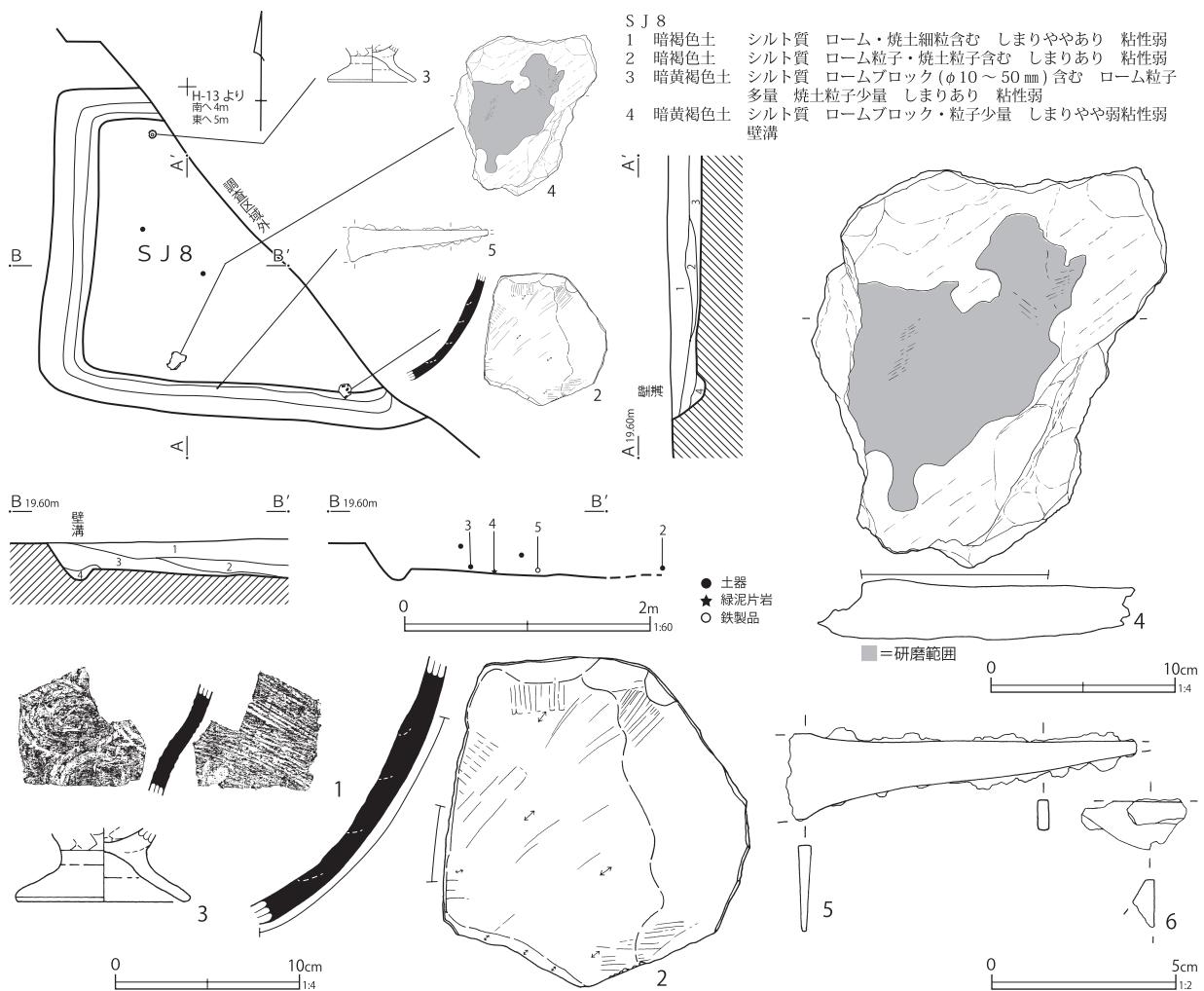
1～4はロクロ土師器壺で、底部は菊花状にヘラケズリで処理される。5～13は須恵器の壺・皿類で、南比企、末野の製品が認められる。これらの組成は第1号住居跡出土土器に類似する。14はやや小型の灰釉陶器塊で、釉薬は全体にやや厚く刷毛塗りされる。

土師器甕は、小型甕(15・24～26)に加え、武藏型甕の特徴を示すものが多い(16・18～

20・22・23)。21は土師器羽釜で、口縁部面取りが明瞭である。吉井型羽釜に類似する。

30・31は砥石である。30は緑泥片岩の一部に研磨痕がある。全体的に緑泥片岩の出土量は少なく、細片を含む7点(計401.5g)に留まった。

鍛冶関連遺物は楕形滓(22.0g)、鍛冶滓(13.3g)各1点と少量であり、第7号住居跡に直接伴うものでは無いと思われる。鉄製品は釘と棒状鉄製品が各1点あり、いずれも覆土上層から出土している。



第 61 図 第 8 号住居跡・出土遺物

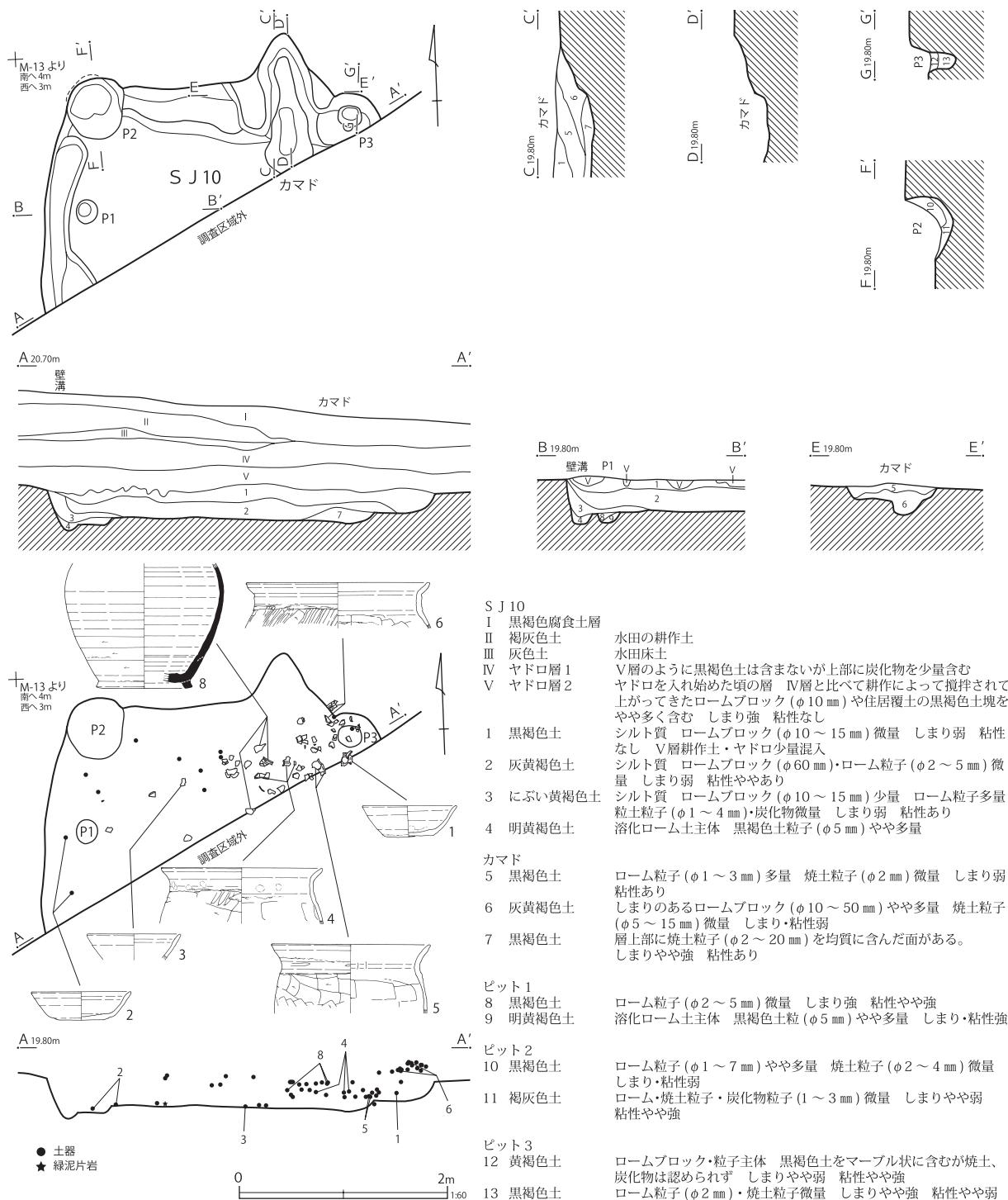
第 14 表 第 8 号住居跡出土遺物観察表（第 61 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	甕	—	[5.9]	—	E I	5	良好	灰	内面同心円状あて具痕 外面平行叩き痕 焼成時の歪み激しい	26-5
2	須恵器	甕	—	[14.3]	—	D G	15	良好	黄灰	外面平行叩き痕 破損後二次利用（転用砥具）南比企	26-6
3	土師器	台付甕	—	[3.9]	9.5	D I	5	普通	にぶい黄橙	脚台部 外面煤付着	32-15
4	石製品	砥石	長さ 21.7cm、幅 19.3cm、厚さ 3.4cm、重さ 1546.8 g							表面を研磨 カマド材の二次利用か 緑泥片岩 裏面被熱し赤色化	34-3
5	鉄製品	刀子	長さ [9.5]cm、背幅 0.35cm、刃幅 2.3cm、重さ 17.5g							茎部	
6	鉄製品	不明品	長さ [2.9]cm、幅 [1.3]cm、厚さ 0.6cm、重さ 2.1g								

第 8 号住居跡（第 61 図）

調査区中央部東側の H-13 グリッドに位置する。北東部は調査区域外で、カマドも調査範囲には認められない。東西 3.2m 以上、南北 2.6m の長方形を呈する住居跡とみられ、深さは 0.20m である。覆土は大きく 3 層に分かれ、自然堆積を示す。壁溝は検出範囲では全周している。

遺物は少ないが、1 を除き床面直上から出土している。1 の須恵器甕は焼成時の歪みが大きい。2 は須恵器甕の破片で表面・側面の一部を砥具に転用する。3 は土師器台付甕の脚台部破片である。4 は緑泥片岩の割石である。ほかに緑泥片岩の破片 4 点 (23.0 g) が出土している。鍛冶関連遺物では、鞴羽口が 1 点 (37.3 g) 出土している。



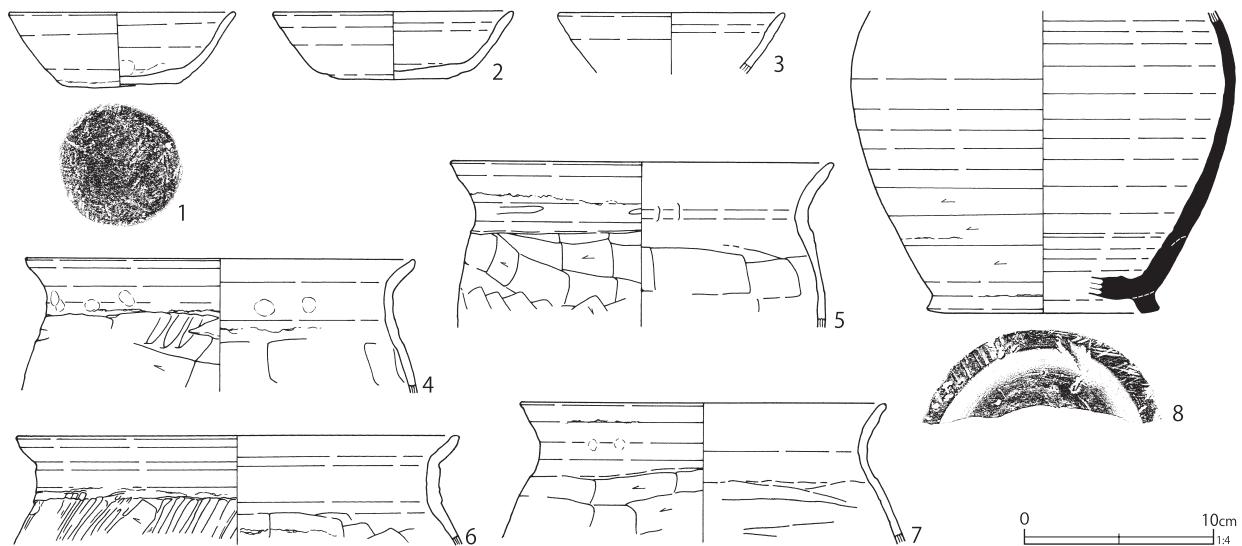
第 62 図 第 10 号住居跡

第 10 号住居跡 (第 62 図)

調査区南寄り中央部のM-12 グリッドに位置する。住居の南東部が調査区外であるが、南北 2.1m、東西 3.4m が検出された。住居跡の上面はヤドロ層によって削平されており、確認面からの

深さは 0.32m である。主軸方向は N-4°-E を指す。

北壁東寄りにカマドが遺存していた。カマド下部の 7 層上面に焼土粒子が広がるが、変色や硬化は認められない。カマドからの流出土であろう。



第 63 図 第 10 号住居跡出土遺物

第 15 表 第 10 号住居跡出土遺物観察表 (第 63 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	ロクロ土師器	壺	(11.8)	3.9	6.0	C E H K	70	普通	橙	底部板状圧痕か 破損部の一部煤付着	26-7
2	ロクロ土師器	壺	(12.6)	3.6	(5.6)	C H I	10	普通	橙	磨滅激しい	
3	ロクロ土師器	壺	(12.0)	[3.2]	—	C E H K	10	普通	橙		
4	土師器	甕	(20.2)	[7.0]	—	E I K	40	普通	明赤褐	内面ヘラナデ 外面ヘラケズリ	26-8
5	土師器	甕	(20.0)	[8.7]	—	E I K	40	普通	にぶい黄橙	内面ヘラナデ 外面ヘラケズリ	26-9
6	土師器	甕	(23.3)	[5.7]	—	E I K	20	普通	にぶい橙	内面ヘラナデ 外面ヘラケズリ	26-11
7	土師器	甕	(19.2)	[7.3]	—	E I K	20	普通	にぶい黄橙	内面ヘラナデ 外面ヘラケズリ	26-12
8	須恵器	長頸瓶	—	[15.9]	(12.4)	D I K	20	良好	暗灰黄	自然降灰 体部下位回転ケズリ 南比企	26-10

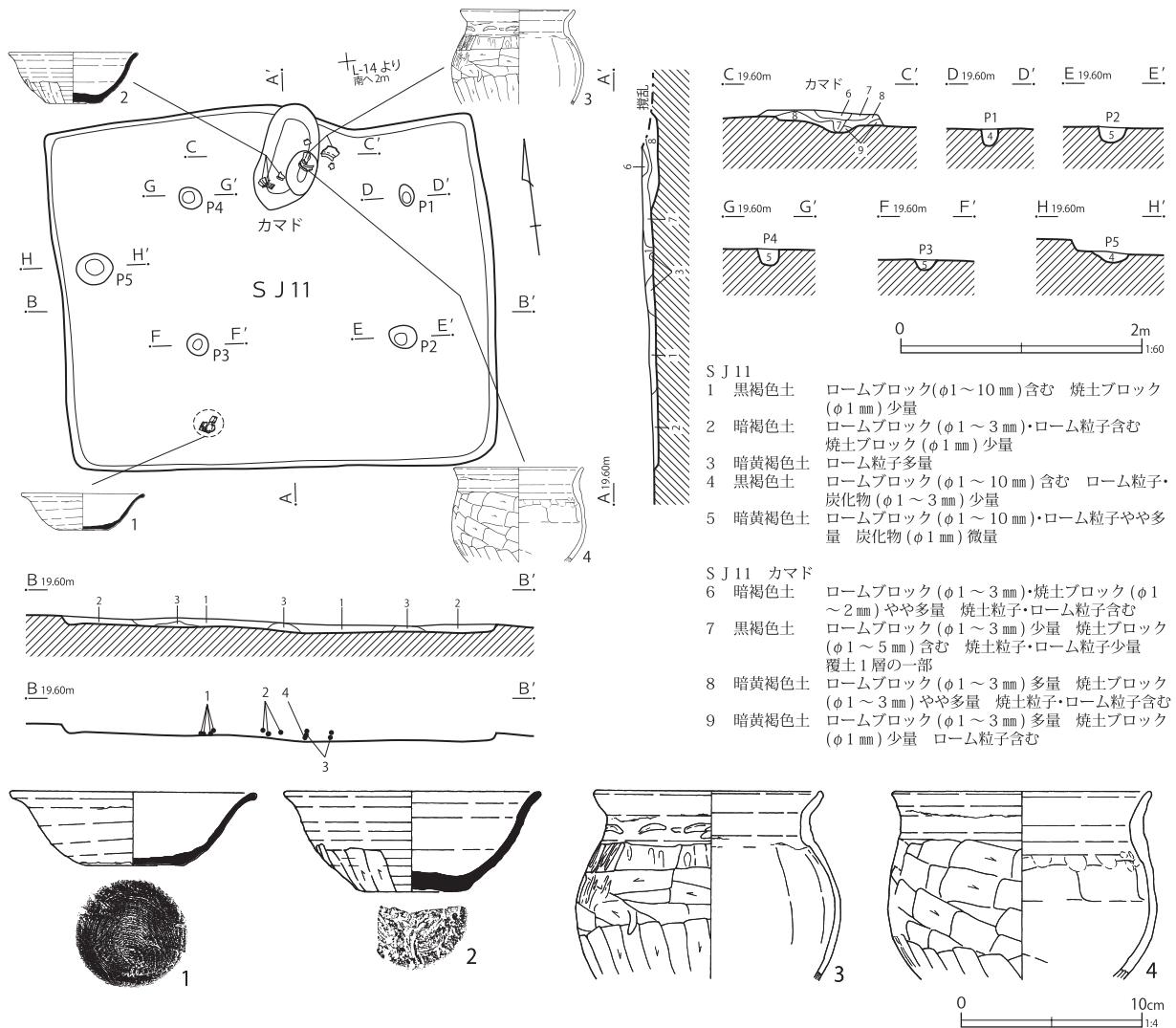
カマド袖の両側は、床面よりも 15cm ほど高くなっている。棚状施設が付属した可能性がある。東西の北壁際にはピットが 2 基検出されているが、性格については明らかではない。壁溝は西壁に沿って検出された。幅 23 ~ 35cm、深さ 8.5 ~ 10cm である。

遺物は比較的豊富で、特にカマド前面および、カマド東側の P 3 の周辺から多くの土器類が出土した (第 63 図)。1 ~ 3 はロクロ土師器の杯である。器形・焼成が第 1 ~ 7 号住居跡出土のものと類似する。4 ~ 7 は土師器甕である。いずれも体部外面は横方向のケズリで仕上げられ、頸部は弱い「コ」の字状を示す。武藏型甕の範疇で捉えられるものであろう。8 は南比企産の須恵器長頸瓶である。なお、緑泥片岩は細片 1 点 (0.5 g) のみ出土した。鍛冶関連遺物の出土は認められない。

第 11 号住居跡 (第 64 図)

調査区南側東寄りの L -13・14 グリッドに位置する。長軸 3.60m、短軸 2.97m の長方形を呈し、深さは 0.05cm である。主軸方向は N - 6° - E を指す。カマドは北壁中央部に設けられているが、上面や袖部は削平され、遺存状態は不良である。僅かに底面のくぼみが検出されている。ピットは 5ヶ所検出され、P 1 ~ 4 で主柱穴を構成するものであろう。壁溝は検出されなかった。

遺物は少なかったが、末野産・南比企産の須恵器壺・土師器小型甕が出土している。緑泥片岩、鍛冶関連遺物はともに認められなかった。第 64 図 1・2 は末野産の須恵器壺で、内底面は層状に薄く剥離している。2 は酸化焼成ぎみで、体部下半から底部にかけて部分的なヘラケズリ痕が認められる。3・4 は土師器台付甕であろう。



第 64 図 第 11 号住居跡・出土遺物

第 16 表 第 11 号住居跡出土遺物観察表 (第 64 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	壺	13.2	4.0	5.9	E I	80	普通	にぶい褐	底部糸切痕 (右) 末野	27-1
2	須恵器	壺	(14.0)	5.5	6.0	E I K	40	普通	にぶい黄褐	底部糸切後、体部から底部の一部にへラケズリ 末野	27-2
3	土師器	台付甕	(12.5)	[10.3]	—	E H I K	50	普通	にぶい橙	ラケズリ 末野	27-3
4	土師器	台付甕	(14.0)	[10.4]	—	E I K	30	普通	橙	外面煤付着	27-4

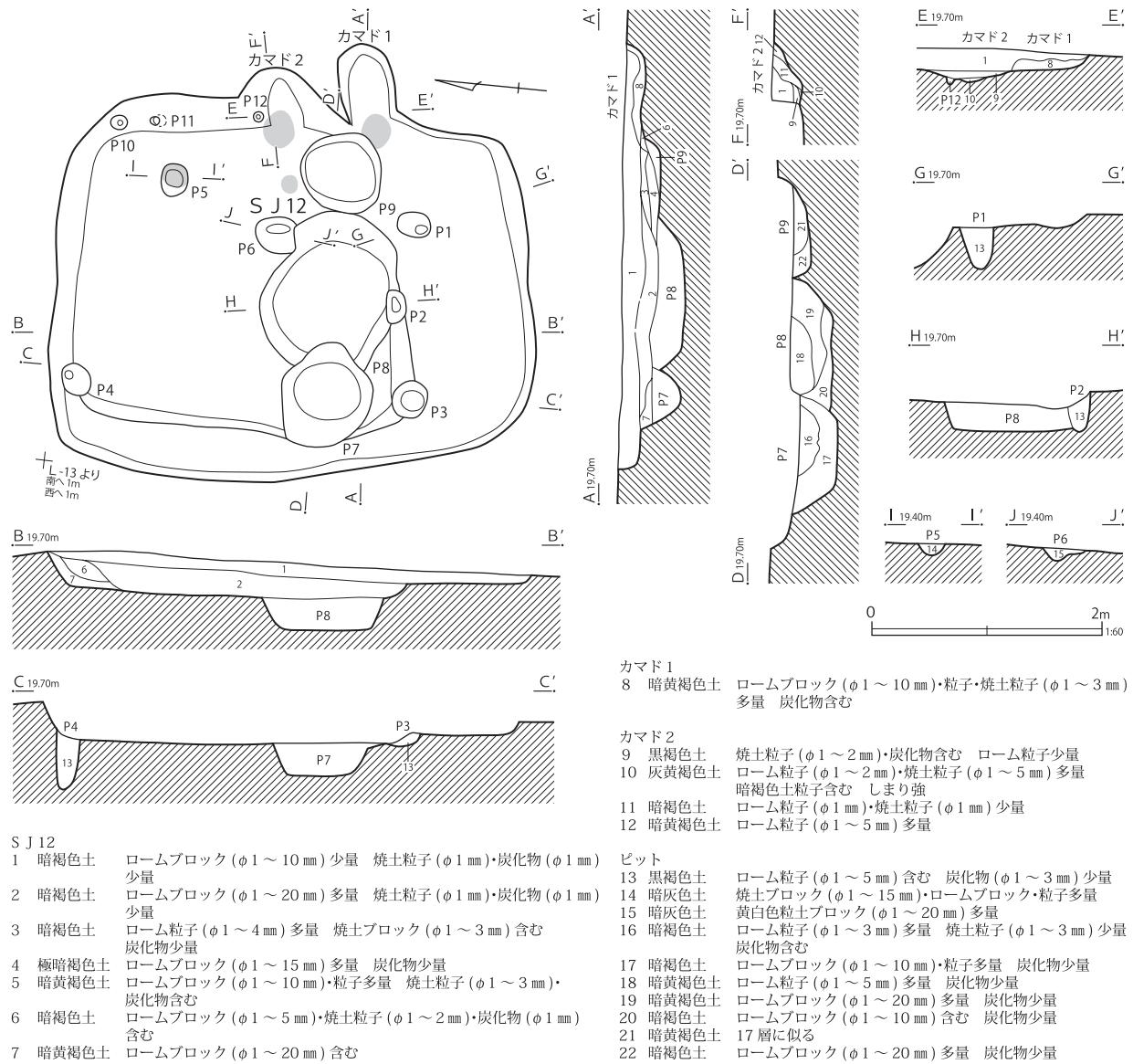
第 12 号住居跡 (第 65・66 図)

調査区南側中央部の L -12・13 グリッドに位置する。建て替えと、それに伴うカマドの付け替えが行われている。

古期の住居は長軸 3.15m、短軸 3.10m、深さ 0.2m である。カマドが東壁南寄りに設けられていた (カマド 2)。主軸方向は N - 75° - E を指す。

袖は遺存していないが、床面に焼土範囲が確認され火床面の痕跡とみられる。床面に土壙状の掘り込み (P 7~9) や粘土範囲が確認されているがともに性格は不明である。

新期の住居は、長軸 3.30m、短軸 4.23m、深さ 0.17m に拡張されており、カマドが南側に付け替えられている (カマド 1)。主軸方向は N - 78°



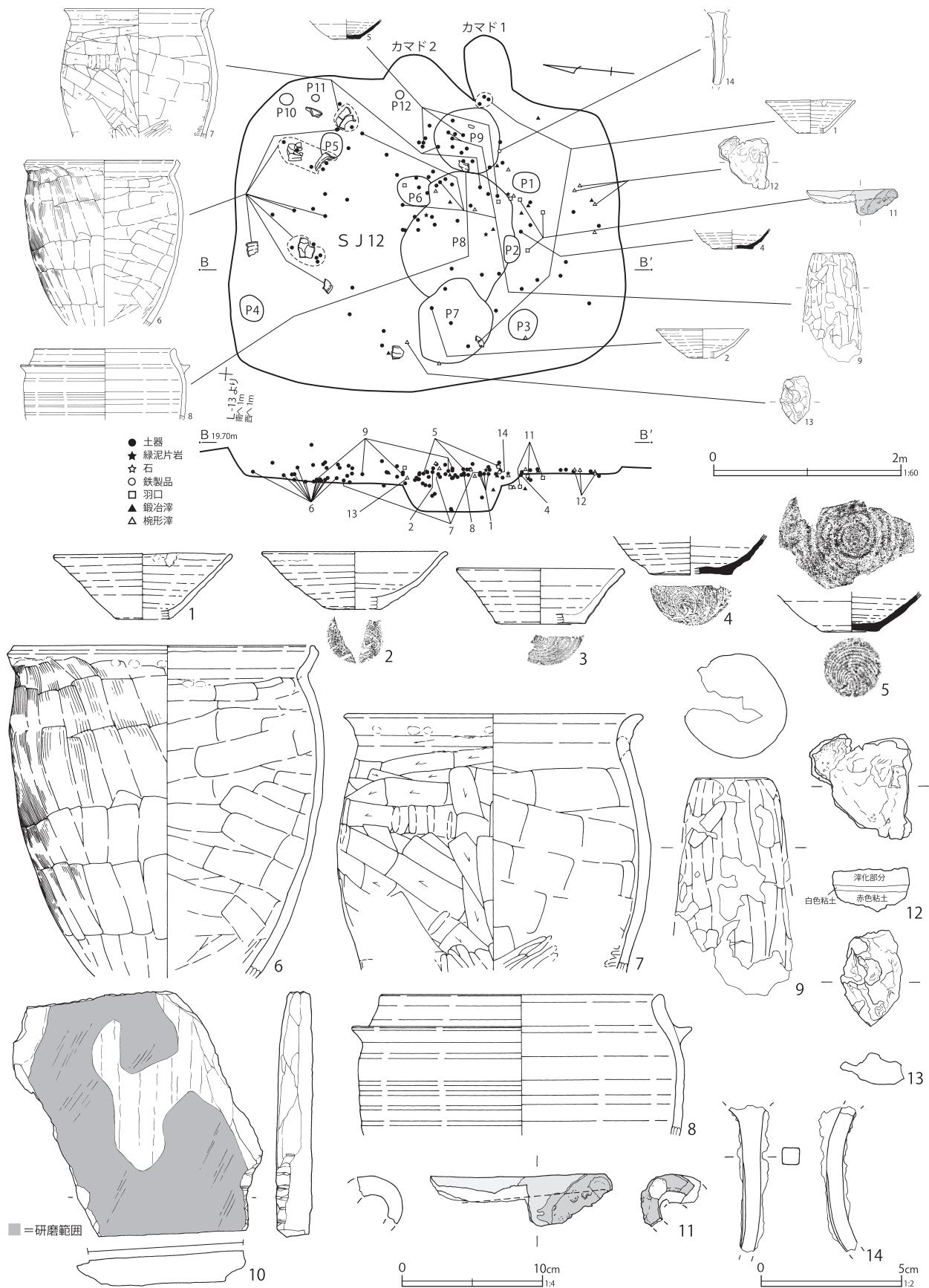
第 65 図 第 12 号住居跡 (1)

– E を指す。カマドの袖は確認されなかったが、前面に焼土範囲が認められ火床面とみられる。

出土遺物は、ロクロ土師器・土師器・須恵器・土製品等が認められる(第 66 図)。1 ~ 3 はロクロ土師器の壺で、1・2 は口径に対して底径が著しく小さい。4・5 は南比企産の須恵器杯である。4 はやや古手で鳩山 VIII 期段階、5 は 10 世紀初頭前後に位置付けられる。6 は赤味の強い色調の土師器甕で、ハケメ状工具で外面がヘラナデされる。胎土は粗い。7 は厚手の土師器甕で、外面がヘラケズリ、内面がヘラナデで整えられる。底

部付近の調整は単位の細かいヘラナデ状である。

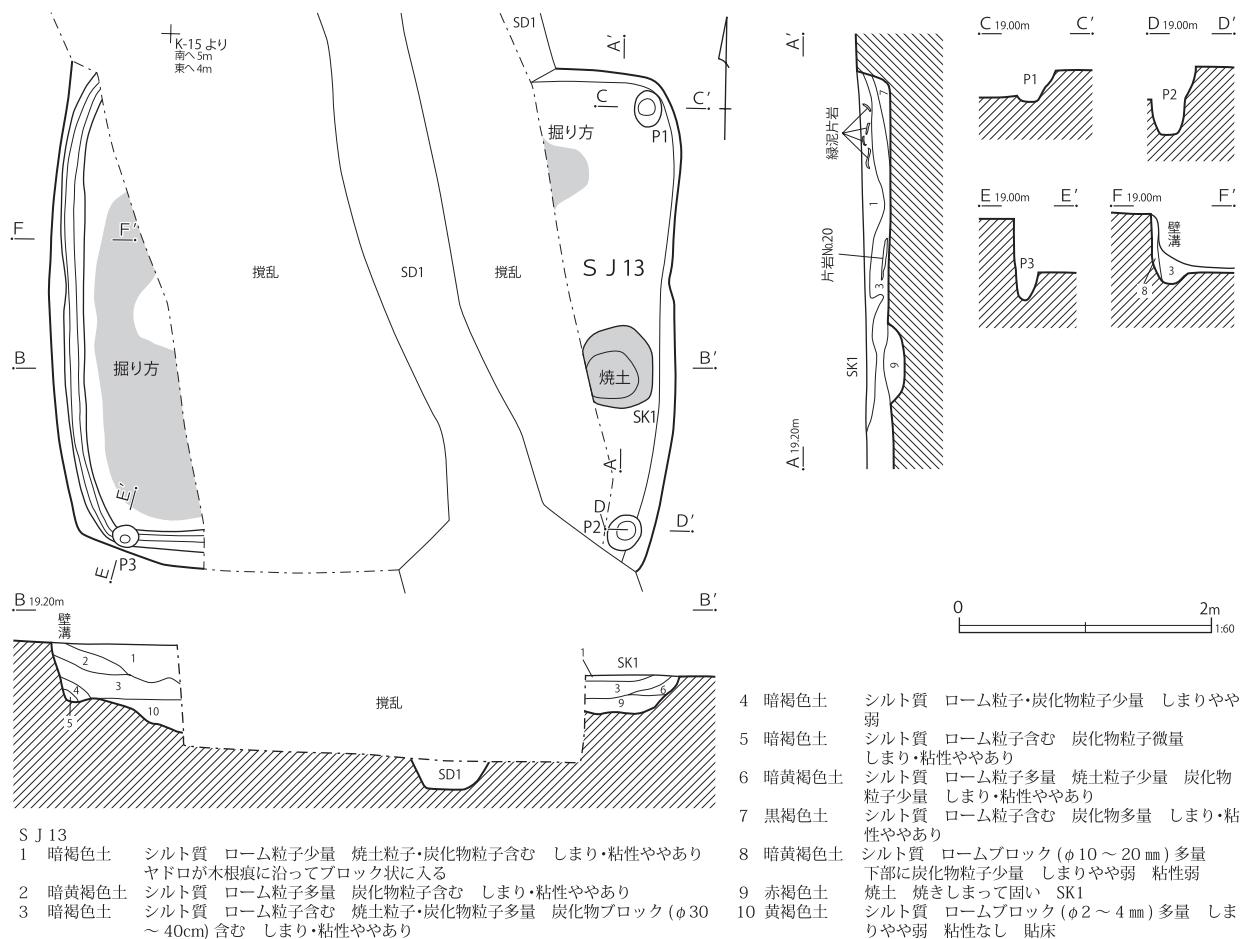
10 は緑泥片岩の割石であり、剥離面が平滑で研磨痕とみられる。住居跡からは緑泥片岩 19 点、計 2213.3 g が出土している。11 ~ 13 は鍛冶関連遺物である。11 は鞴羽口である。12 は鉄滓で、上面は滓化して滑らか、下面には粘土が付着する。13 は円形の椀形滓の半分が残存したものである。下面是還元しており、船底状である。住居内からは椀形滓 657.8 g、鍛冶滓 423.8 g、鞴羽口片 7 点 (231.7 g) が出土した。鍛冶が行われていた可能性があるが、遺構は明確ではない。



第 66 図 第 12 号住居跡 (2)・出土遺物

第 17 表 第 12 号住居跡出土遺物観察表（第 66 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	ロクロ土師器	壺	12.6	[4.5]	(3.6)	C H I K	90	良好	橙	外面に少量煤付着	27-5
2	ロクロ土師器	壺	(13.0)	[4.1]	(4.0)	C E H I J	65	普通	明黄褐	底部糸切痕(右)	27-6
3	ロクロ土師器	壺	(11.7)	[3.9]	(6.4)	E G H I L	20	不良	にぶい黄褐	底部糸切痕(右)	27-8
4	須恵器	壺	—	[2.7]	(6.0)	E I J K	20	普通	灰黄	底部糸切痕(右) 南比企(鳩山VII期)	27-9
5	須恵器	壺	—	[2.8]	4.1	E G I K L	30	普通	灰白	底部糸切痕(右) 南比企(10c初)	27-7
6	土師器	甕	21.6	[23.5]	—	C E I	75	普通	褐灰	外面ハケメ状の工具ナデ	27-10
7	土師器	甕	20.7	[18.4]	—	C G H I	40	良好	にぶい赤褐	内面ヘラナデ 外面ヘラケズリ	27-11
8	土師器	羽釜	(19.8)	[10.0]	—	C G H I K	20	普通	赤褐	内外面ロクロナデ	27-12
9	土製品	支脚	高さ[15.6] 径 5.0			H I K	50	普通	橙		
10	石製品	砥石	長さ 17.5cm、幅 17.8cm、厚さ 2.6cm、重さ 915.5g					緑泥片岩			32-16
11	土製品	羽口	長さ [13.0]cm、外径 (4.4)cm、孔径 (2.1)cm、重さ 85.5g								33-2
12	鉄滓	楕形滓	長さ 7.2cm、幅 [7.0]cm、厚さ 3.1cm、重さ 140.0g					上面: 平滑、滓化 下面: 粘土付着、滓化 粘土内に還流している 磁着			33-1
13	鉄滓	楕形滓	長さ [6.7]cm、幅 [4.6]cm、厚さ 2.1cm、重さ 83.7g					上面: 周縁やや高く 中央部凹み 下面: 船底状 土砂が付着 還元 磁着			33-1
14	鉄製品	釘	長さ [5.2]cm、幅 0.6cm、厚さ 0.6cm、重さ 9.6g								



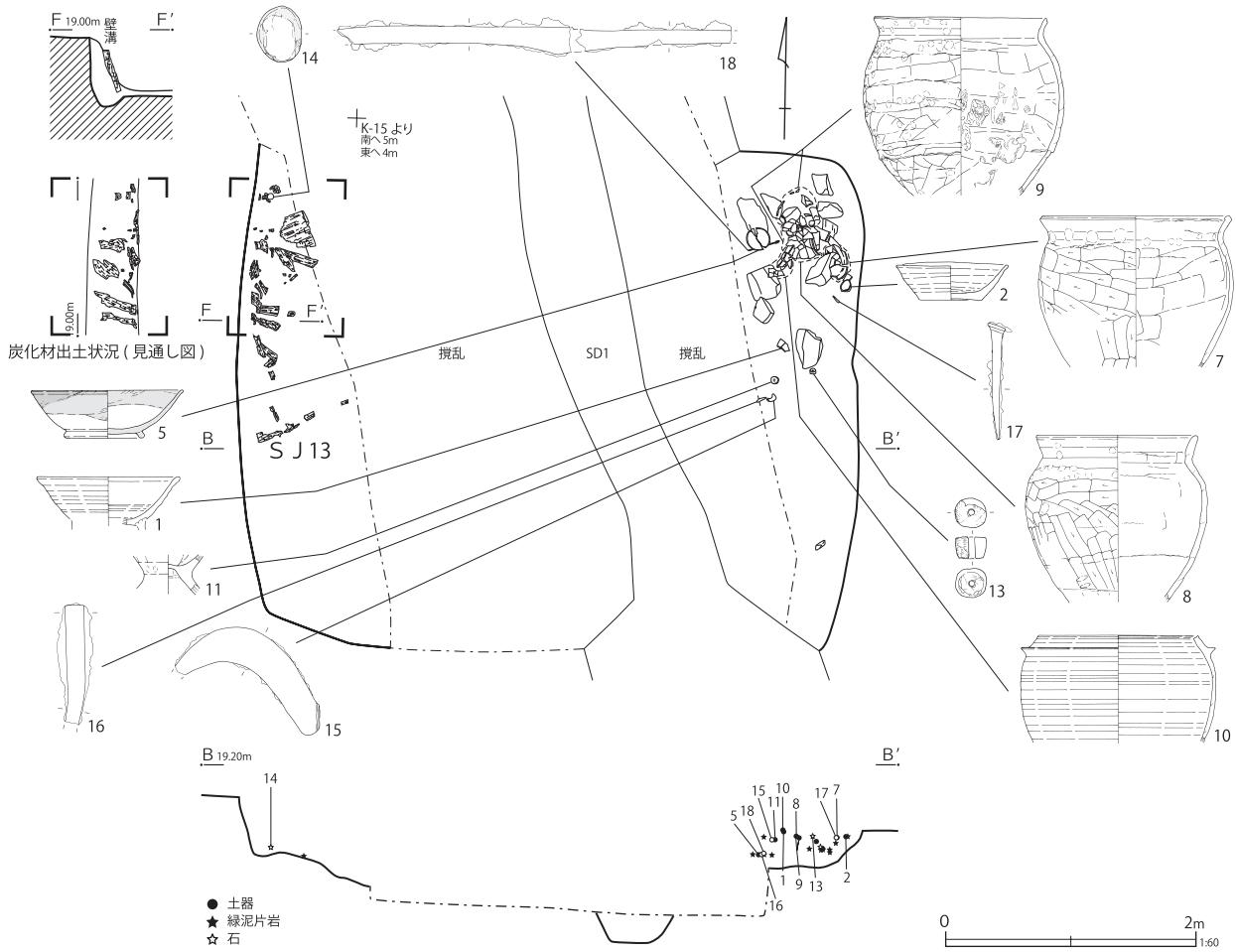
第 67 図 第 13 号住居跡 (1)

第 13 号住居跡 (第 67・68 図)

調査区南側東寄りの K-15 グリッドに位置する。中央部を第 1 号溝跡に大きく壊されている。

長軸 4.96m、短軸 3.96m の長方形を呈し、深さは 0.26m である。長軸方向は N-1°-W を指す。

カマドは検出されていないが、東西壁に認めら



第68図 第13号住居跡（2）

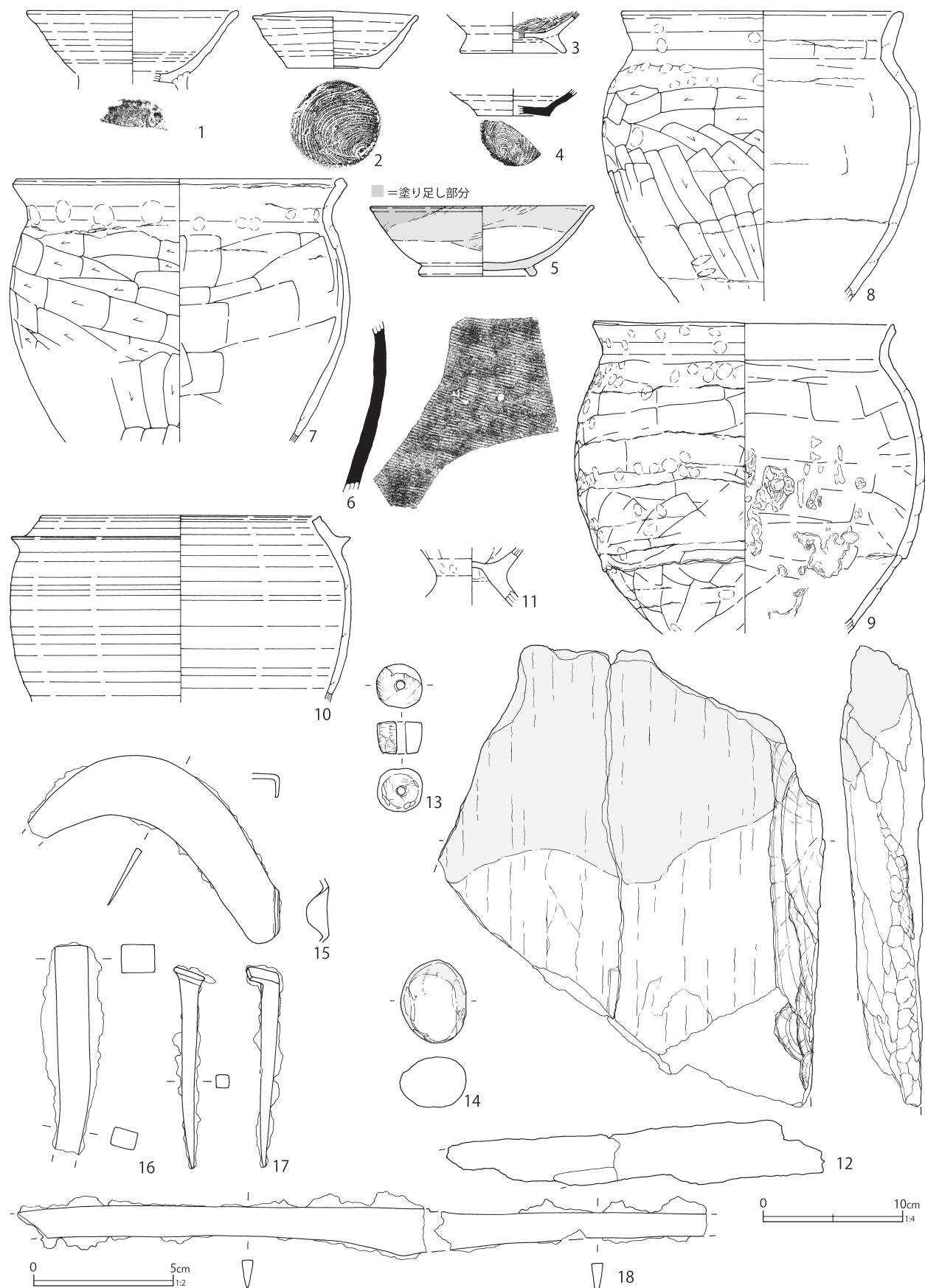
れることなく、北東隅で緑泥片岩石材が多く出土していることから、北壁東寄りに存在していたと推定される。溝跡によって破壊された可能性が高い。なお、東壁際中央部に、硬化した焼土を覆土とするSK1が検出されたが、性格は不明である。

壁溝は溝跡より西側のみで確認される。また、西壁際の壁溝上面に、炭化材が軸を揃えて数本分遺存している状況が確認された。住居の構築材の可能性があるが、住居全体としては焼失家屋の痕跡は見出せない。

遺物はロクロ土師器、土師器、須恵器、石製品、鉄製品等が多量に出土したが、復元し得た遺物は比較的少ない（第69図）。1・2はロクロ土師器である。1は高台が接合部で剥離している。2は歪みのある壺で、胎土は還元ぎみに焼成されて

いる。3は内面に黒色処理が施された土師器高台付壺である。4は東金子産の須恵器壺で強く還元している。他に須恵器壺類では南比企の高台付壺破片が出土している。5は灰釉陶器壺で、高台端部は丁寧なナデによって丸みを帯びている。

6は須恵器甕、7～9は土師器甕、10は羽釜である。7の胎土はかなり硬質であり、口唇部が内面に折り返される。同形態の甕は本遺跡では多く認められるが、いずれも胴部外表面が縦のヘラケズリで調整されるのに対し、本資料は横方向のヘラケズリによって調整されている。9は外面上に輪積み痕が明瞭に残るが、内面はヘラナデ調整されている。下部1/3程を輪積み成形し半乾燥・ヘラナデ調整を経た後、再び上部の成形が行われている。内面には塊状鉄分の付着が多いが、意図的



第69図 第13号住居跡出土遺物

第18表 第13号住居跡出土遺物観察表(第69図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	ロクロ土師器	壺	(15.0)	[5.2]	—	D E G I K L	20	良好	橙	底部糸切痕(右) 高台部剥離	28-1
2	ロクロ土師器	壺	(11.7)	4.1	6.5	D E J K	95	普通	灰白	底部糸切痕(右) 口縁大きく歪む	28-3
3	土師器	高台付壺	—	[2.9]	(7.4)	I K	40	普通	橙	内面黒色処理・ミガキ	28-2
4	須恵器	壺	—	[1.9]	5.2	D E H I J	15	良好	灰	底部糸切痕(右)	
5	灰釉陶器	壺	15.9	5.0	8.5	I	100	普通	灰白	内外面灰釉刷毛塗り 黒帯90号窯式段階	28-8
6	須恵器	甕	—	[12.1]	—	D I J K	5	良好	灰	外面叩き痕 南北企	
7	土師器	甕	(23.2)	[18.9]	—	E G I L	25	良好	にぶい赤褐	内外面煤付着	28-4
8	土師器	甕	20.0	[20.6]	—	D E G H L	75	良好	にぶい褐	底内面に明瞭な粘土継ぎ痕	28-5
9	土師器	甕	21.3	[22.4]	—	B D E G	80	普通	にぶい橙	輪積痕顯著 内面付着物	28-7
10	土師器	羽釜	(20.0)	[13.3]	—	C G H I K	40	普通	橙	内外面強いロクロナデ	28-6
11	土師器	台付甕	—	[4.1]	—	H I K	50	良好	橙	外面煤付着	
12	石製品	石材	長さ33.0cm、幅27.8cm、厚さ6.2cm、重さ3401.5g 緑泥片岩						割石 上面被熱 側縁剥離後叩打による側面加工 一部被熱し赤色化	32-17	
13	石製品	紡錘車	長さ[3.1]cm、幅3.3cm、厚さ2.3cm、重さ30.8g 砂岩か						側縁部は面取るようにケズリで整形したのちに研磨する 黒色化(被熱か) 軽石質 被熱し黒色化(煤付着) 完形	32-18	
14	石製品	砥石	長さ5.9cm、幅4.7cm、厚さ3.7cm、重さ58.7g 角閃安山岩							34-4	
15	鉄製品	鎌	長さ[9.0]cm、刀幅2.3cm、背幅0.2cm、重さ27.6g							34-5	
16	鉄製品	不明品	長さ[7.4]cm、幅1.2cm、厚さ1.0cm、重さ62.5g							34-6	
17	鉄製品	釘	長さ[7.2]cm、幅0.45cm、厚さ0.454cm、重さ7.9g							34-2	
18	鉄製品	刀子	長さ[24.0]cm、刃部長(13.7)cm、刃部幅(1.0)cm、背幅0.4cm、重さ39.9g								

な使用によるものとは考え難い。

12は緑泥片岩の割石で、住居跡北東部から出土した。側縁部が叩打によって調整される。一部が被熱しており、本来はカマド構築材であったと考えられる。本遺跡では多くの緑泥片岩割石が出土しているが、砥石以外に明瞭な加工痕を有するものとしては唯一例である。第13号住居跡からは、緑泥片岩13点、23.2549kg出土している。また、重複する第1号溝跡からも被熱した緑泥片岩の大型破片2点が出土しており、元来、第13号住居跡に伴っていた可能性が高い。

13は石製品の紡錘車である。14は軽石質の角閃石安山岩の丸石で全面に顕著に煤が付着している。同様の遺物は第18号住居跡からも出土しているが、いずれも研磨等の使用痕があるかは不明である。

鍛冶関連遺物は少なく、椀形滓4点(40.8g)のみである。金属製品では、長さ24cmを遺存する刀子(18)のほか、鎌(15)や釘(17)が出士している。

第15号住居跡(第70・71図)

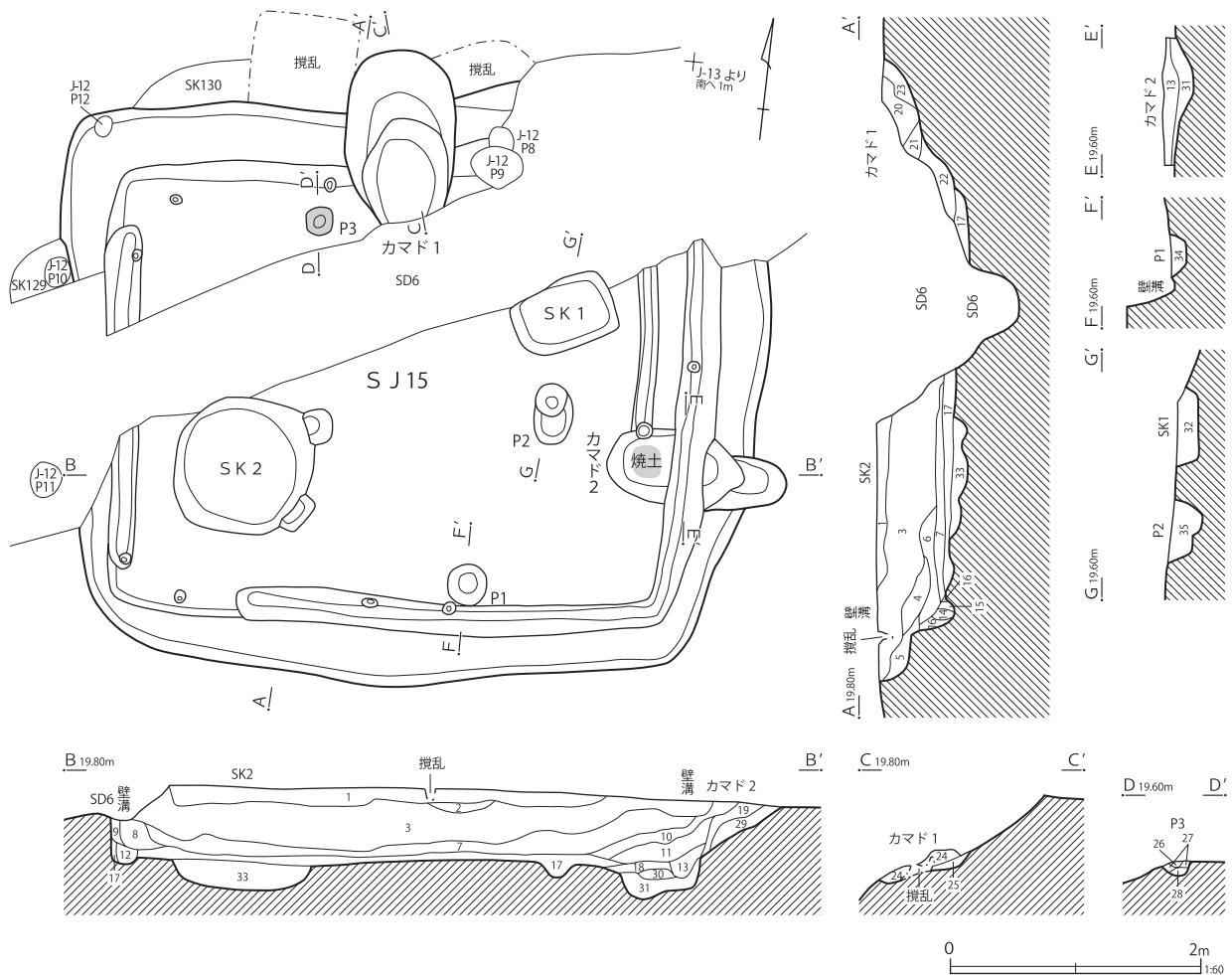
調査区南側東寄りのJ-12・13グリッドに位置する。中央部北寄りを第6号溝跡によって壊されている。長軸5.66m、短軸4.44mの長方形を呈し、深さは0.60mである。

カマドは2ヵ所検出されており、東壁から北壁に付け替えられている。古期のカマド2は袖等が検出されなかつたが、前面に火床面とその下の掘り方が検出されている。調査時の所見によれば、カマド2の廃絶後、その煙道部上面に土を盛って新住居の壁を構築したことが確認されている。

一方、新期のカマド1は、搅乱等によって上面が大きく壊され、僅かに掘り方部分のみ把握し得る状態だった。主軸方向は、古期がN-87°-E、新期がN-11°-Wを指す。

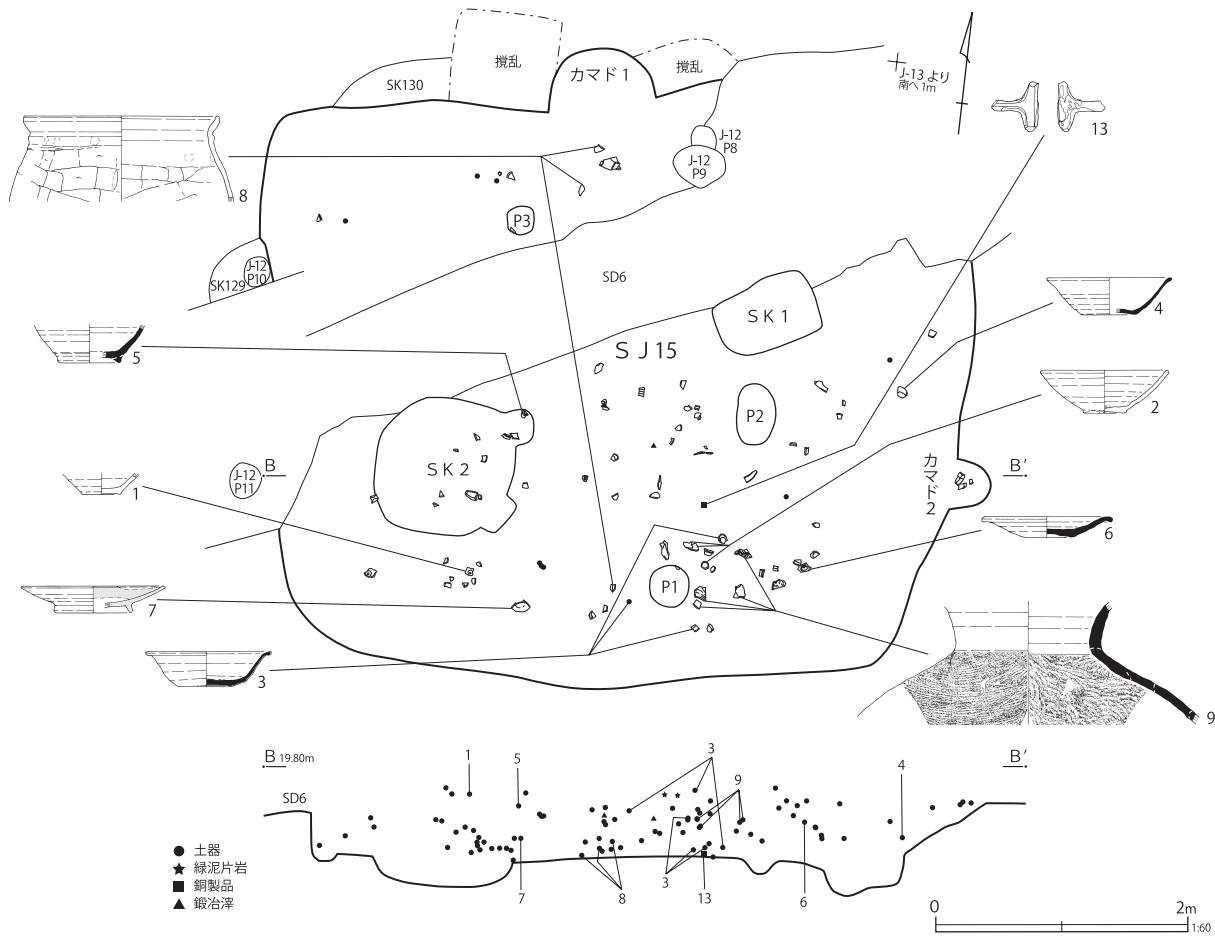
カマド1の東側に接して、「焼土ピット」の名で調査されたP3が検出されている。性格は不明であるが、覆土及び底面に焼土が確認され、粘土塊も含まれていたとされる。

壁溝・貼り床は、新期の住居に伴って認められ



S J 15	1 黒色土	ローム粒子 ($\phi 2 \sim 3 \text{ mm}$)・焼土・炭化物 ($\phi 5 \text{ mm}$)・シルト粒子微量 しまり・粘性あり
	2 黒褐色土	ロームブロック ($\phi 2 \sim 30 \text{ mm}$) 少量 ローム粒子含む 炭化物微量 しまりあり 粘性なし
	3 黒褐色土	ローム粒子 ($\phi 2 \sim 3 \text{ mm}$)・炭化物 ($\phi 2 \sim 5 \text{ mm}$)・焼土微量 しまり強 粘性ややあり
	4 黒褐色土	ローム粒子 ($\phi 2 \sim 3 \text{ mm}$)・炭化物・焼土微量 しまり・粘性あり
	5 淡い黒褐色土	ロームブロック ($\phi 2 \sim 10 \text{ mm}$)・ローム粒子含む 炭化物粒子 ($\phi 2 \sim 5 \text{ mm}$)・炭化物・焼土微量 しまりあり 粘性なし
	6 黒褐色土	ローム粒子 ($\phi 2 \sim 5 \text{ mm}$)・焼土粒子 ($\phi 2 \sim 5 \text{ mm}$) 少量 炭化物微量 しまりあり 粘性なし
	7 黒褐色土	ローム粒子 ($\phi 2 \sim 3 \text{ mm}$)・炭化物粒子 ($\phi 2 \sim 5 \text{ mm}$)・焼土微量 しまり強 粘性ややあり
	8 暗褐色土	ローム粒子 ($\phi 2 \sim 5 \text{ mm}$) 多量 炭化物・焼土粒子微量 黒褐色土 含む しまり・粘性あり
	9 暗褐色土	溶解ロームブロック ($\phi 2 \sim 10 \text{ mm}$) 多量 炭化物微量 しまりあり 粘性あり 12層に似る
	10 暗褐色土	ローム粒子 ($\phi 2 \sim 5 \text{ mm}$) 少量 烧土粒子 ($\phi 2 \sim 5 \text{ mm}$)・炭化物 ($\phi 3 \text{ mm}$) 微量 しまり強 粘性あり 流入土
	11 暗黄灰色土	ローム粒子 ($\phi 2 \sim 3 \text{ mm}$)・焼土ブロック ($\phi 2 \sim 10 \text{ mm}$)・焼土粒子少量 炭化物粒子 ($\phi 2 \sim 3 \text{ mm}$)微量 しまり・粘性あり
	12 黒褐色土	ローム粒子 ($\phi 2 \sim 5 \text{ mm}$)・炭化物少量 しまり強 粘性あり 壁溝 ロームブロック ($\phi 2 \sim 10 \text{ mm}$)・炭化物微量 ローム粒子多量 烧土
	13 黄灰色土	粒子少量 しまり・粘性あり 壁溝
	14 暗褐色土	ローム粒子 ($\phi 2 \sim 5 \text{ mm}$)・ローム粒子含む 炭化物・焼土粒子微量 しまり・粘性あり
	15 黒褐色土	ローム粒子 ($\phi 2 \sim 3 \text{ mm}$) 少量 炭化物・焼土粒子微量 しまりあり
	16 暗褐色土	ロームブロック ($\phi 2 \sim 10 \text{ mm}$) 含む ローム粒子多量 炭化物微量 しまり強 粘性あり
	17 淡い黒褐色土	ローム粒子 ($\phi 2 \sim 3 \text{ mm}$) 少量 炭化物・焼土粒子微量 しまり強 粘性あり 新段階の貼床
	18 暗赤褐色土	ロームブロック ($\phi 2 \sim 10 \text{ mm}$)・炭化物粒子 ($\phi 2 \sim 3 \text{ mm}$)・ローム 粒子・炭化物微量 烧土粒子 ($\phi 2 \sim 5 \text{ mm}$) 少量 しまり強 粘性あり ロームブロック ($\phi 2 \sim 10 \text{ mm}$)・ローム粒子・焼土粒子含む 烧土
	19 黄灰色土	ブロック ($\phi 2 \sim 10 \text{ mm}$) 少量 炭化物 ($\phi 2 \sim 3 \text{ mm}$)微量 しまり強 粘性あり ロームブロックを入れて粘性・しまりをよくしている ※カマド 1 を壊した土で新規住居の壁をつくる
	カマド 1	ロームブロック ($\phi 2 \sim 10 \text{ mm}$)・粘土ブロック ($\phi 2 \sim 10 \text{ mm}$) 含む 烧土粒子 ($\phi 2 \sim 3 \text{ mm}$)・炭化物微量 ローム粒子多量 しまりあり 粘性なし
	20 黒褐色土	粘土粒子 ($\phi 2 \sim 3 \text{ mm}$)・焼土粒子 ($\phi 2 \sim 3 \text{ mm}$) 少量 炭化物微量 ローム粒子多量 しまり・粘性あり
	21 にぶい褐色土	ローム粒子 ($\phi 2 \sim 3 \text{ mm}$)・焼土粒子少量 炭化物微量 ローム粒子多量 しまり・粘性あり
	22 暗褐色土	ローム粒子 ($\phi 2 \sim 3 \text{ mm}$)・炭化物微量 粘土粒子 ($\phi 2 \sim 3 \text{ mm}$) 少量 しまりあり 粘性なし
	23 にぶい黄褐色土	ローム粒子 ($\phi 2 \sim 3 \text{ mm}$)・焼土ブロック ($\phi 2 \sim 3 \text{ mm}$)・ 焼土粒子微量 粘土粒子 ($\phi 2 \sim 3 \text{ mm}$) 少量 しまり強 粘性あり
	24 暗黄褐色土	ローム粒子 ($\phi 2 \sim 5 \text{ mm}$) 微量 粘土粒子 ($\phi 2 \sim 3 \text{ mm}$) 少量 烧土ブロック ($\phi 2 \sim 30 \text{ mm}$) 含む しまり強 粘性あり 挖り方
	25 暗黄褐色土	ロームブロック ($\phi 2 \sim 10 \text{ mm}$)・ローム粒子微量 粘土 ブロック ($\phi 2 \sim 20 \text{ mm}$)・粘土粒子・焼土粒子 ($\phi 2 \sim 3 \text{ mm}$) 少量 しまりは 24層より強 粘性あり
	ピット 3	ローム粒子 ($\phi 2 \sim 5 \text{ mm}$)・焼土粒子 ($\phi 2 \sim 5 \text{ mm}$)・炭化 物微量 白色粒子微量 しまりあり 粘性なし
	26 暗褐色土	ローム粒子 ($\phi 2 \sim 3 \text{ mm}$) 少量 烧土粒子 ($\phi 2 \sim 3 \text{ mm}$)・ 炭化物粒子 ($\phi 2 \sim 5 \text{ mm}$)・炭化物微量 しまりあり 粘性なし
	27 暗褐色土	ローム粒子 ($\phi 2 \sim 5 \text{ mm}$)・炭化物微量 烧土粒子 ($\phi 2 \sim 5 \text{ mm}$) 少量 しまり強 粘性なし
	28 黒褐色土	ローム粒子 ($\phi 2 \sim 5 \text{ mm}$)・炭化物微量 烧土粒子 ($\phi 2 \sim 5 \text{ mm}$) 少量 しまり強 粘性なし 底面に焼土あり
	カマド 2	ローム粒子 ($\phi 2 \sim 3 \text{ mm}$)・焼土粒子少量 烧土ブロック ($\phi 2 \sim 3 \text{ mm}$)微量 黑褐色土含む しまりあり 粘性ややあり 煙道部
	29 淡い黄褐色土	ローム粒子 ($\phi 2 \sim 3 \text{ mm}$)・炭化物微量 烧土ブロック ($\phi 2 \sim 10 \text{ mm}$)・焼土粒子多量 しまり強 粘性なし 火床部
	30 赤灰色土	ハードロームブロック ($\phi 2 \sim 30 \text{ mm}$) 少量 ローム粒子・ 焼土粒子・炭化物微量 しまり強 粘性弱 挖り方
	31 暗褐色土	

第 70 図 第 15 号住居跡 (1)



SK1
32 暗褐色土 ロームブロック ($\phi 2 \sim 10 \text{ mm}$) 少量 ローム粒子多量 焼土ブロック ($\phi 2 \sim 5 \text{ mm}$)・焼土粒子・炭化物ブロック ($\phi 2 \sim 3 \text{ mm}$)・炭化物粒子微量 しまり強 粘性あり

SK2
33 黒褐色土 ロームブロック ($\phi 2 \sim 100 \text{ mm}$) 少量 ローム粒子多量 焼土ブロック ($\phi 2 \sim 3 \text{ mm}$)・焼土粒子・炭化物ブロック ($\phi 2 \sim 5 \text{ mm}$)・炭化物粒子・粘土ブロック ($\phi 2 \sim 3 \text{ mm}$)・粘土粒子微量 しまり強 粘性あり

ピット1
34 黒褐色土 ロームブロック ($\phi 2 \sim 10 \text{ mm}$) 少量 ローム粒子多量 焼土ブロック ($\phi 2 \sim 3 \text{ mm}$)・焼土粒子・炭化物ブロック ($\phi 2 \sim 5 \text{ mm}$)・炭化物粒子・粘土ブロック ($\phi 2 \sim 3 \text{ mm}$)・粘土粒子微量 しまり強 粘性あり

ピット2
35 黒褐色土 ロームブロック ($\phi 2 \sim 20 \text{ mm}$) 少量 ローム粒子多量 焼土ブロック ($\phi 2 \sim 3 \text{ mm}$)・焼土粒子・炭化物ブロック ($\phi 2 \sim 5 \text{ mm}$)・炭化物粒子・粘土ブロック ($\phi 2 \sim 3 \text{ mm}$)・粘土粒子微量 しまり強 粘性あり

第71図 第15号住居跡 (2)

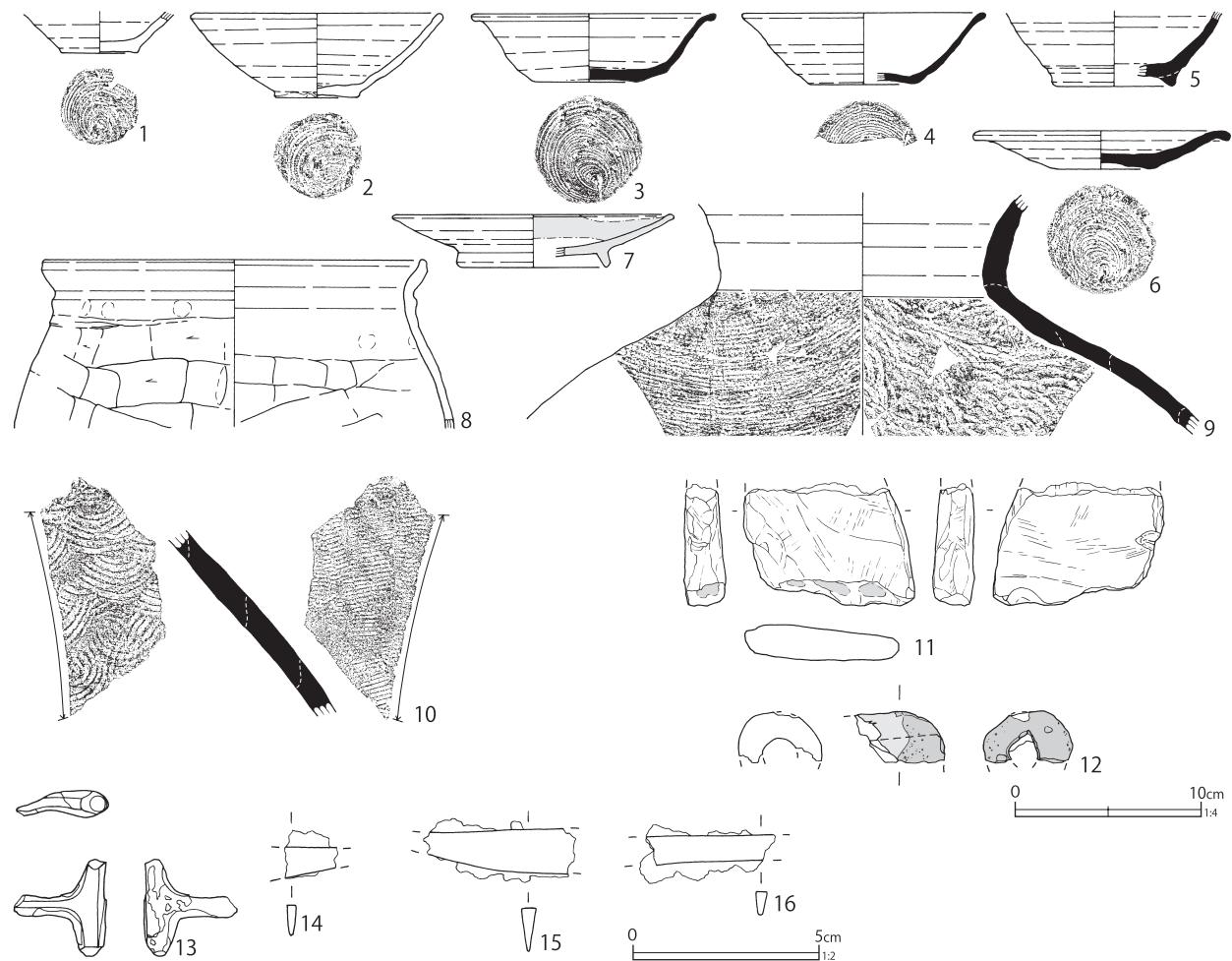
る。壁溝は北壁を除く三方の壁際に廻っている。遺物はロクロ土師器・土師器・須恵器の壺・皿・甕のほか、石製品・土製品が出土している(第72図)。1・2はロクロ土師器で、口径に対し底径が著しく小さいタイプである。3~6は須恵器壺・皿で、3と6が末野産、4が南比企産である。7は灰釉陶器の皿で内面が施釉される。9・10は末野産の須恵器甕で、外面に平行叩き、内面に青海波文のあて具痕が顕著である。いずれも住居跡の時期より古い様相を示し、10は断面が砥具

に転用される。

11は緑泥片岩の砥石である。表裏面に平滑な使用面が認められる。他に製品等に使用した痕跡の無い緑泥片岩2点(191.1g)が出土している。

12は轔羽口の破片で、遺存部分は還元し、先端部には滓が付着している。鍛治関連遺物は、轔羽口4点のほか、楕形滓2点、計111.6g・鍛治滓5点、計61.8gが出土している。

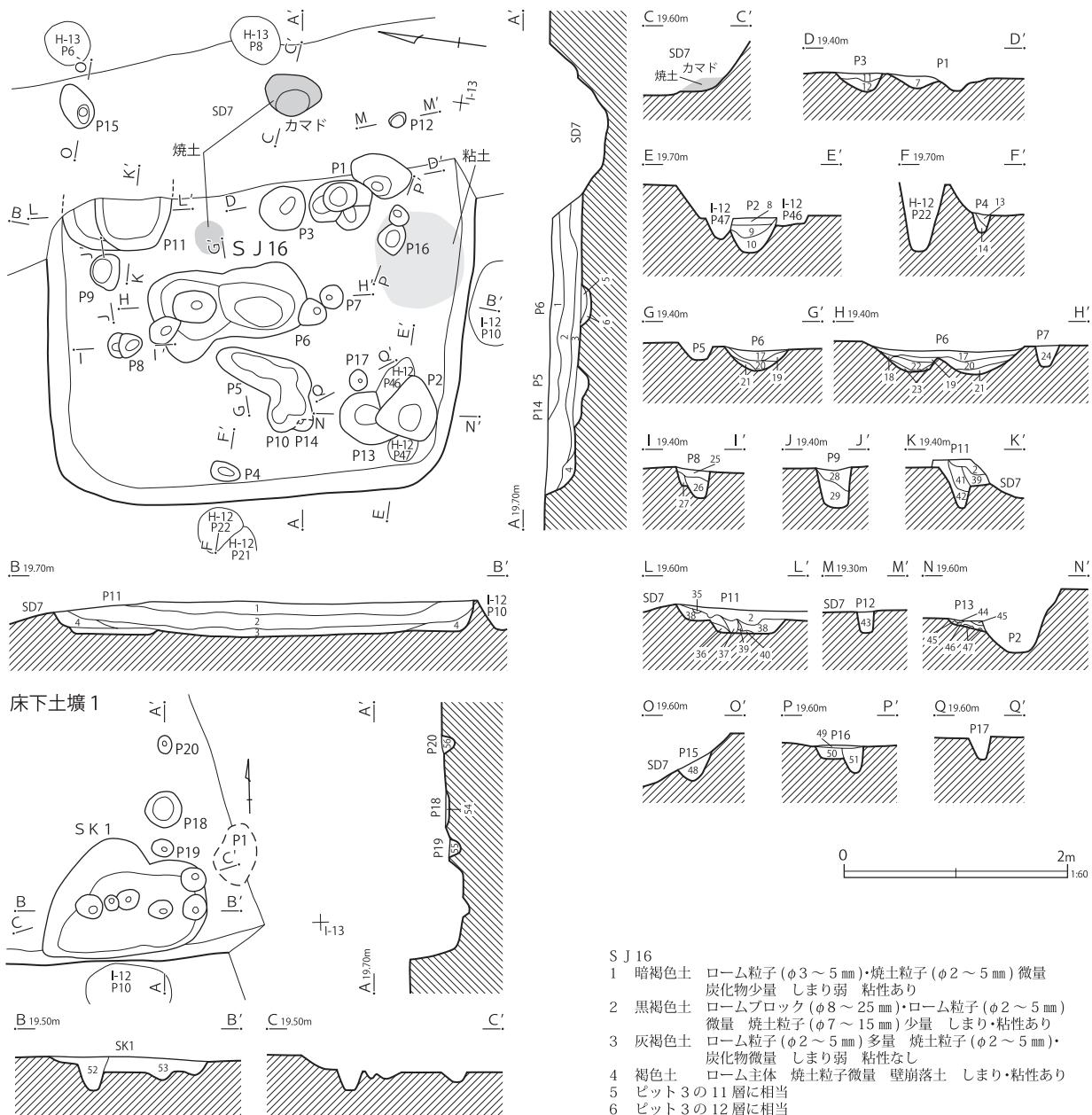
13は銅製品で、腰帶の刺金部分である。14~16は鉄製品の刀子である。



第72図 第15号住居跡出土遺物

第19表 第15号住居跡出土遺物観察表（第72図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	ロクロ土師器	壺	—	[2.2]	4.2	C E G H K	60	普通	にぶい橙	底部糸切痕(右)	29-2
2	ロクロ土師器	壺	(13.2)	4.5	4.4	B D G H I K L	30	良好	にぶい橙	底部糸切痕(右)	28-9
3	須恵器	壺	(13.0)	3.6	5.8	D E G H I K	30	良好	にぶい赤褐	底部糸切痕(右) 末野	29-1
4	須恵器	壺	(12.8)	3.8	6.0	E I J	30	良好	明黄褐	底部糸切痕 南比企	29-3
5	須恵器	高台付壺	—	[4.0]	(6.2)	C E I K	25	良好	灰黄	底部糸切痕 付高台	
6	須恵器	皿	13.0	2.0	5.6	B E I K	30	普通	灰褐	底部糸切痕(右) 末野	29-4
7	灰釉陶器	皿	(14.8)	2.8	(7.75)	I K	45	良好	灰白	内面灰釉刷毛塗り 黒笹90号窯式段階	29-5
8	土師器	甕	20.3	[9.0]	—	H I K	30	普通	明赤褐		29-6
9	須恵器	甕	—	[13.0]	—	E I K	10	良好	灰	内面あて具痕 外面叩き痕 末野	29-7
10	須恵器	甕	—	10.0	—	E H I K	5	良好	黄灰	内面あて具痕 外面叩き痕 破損後二次利用(砥具) 末野	
11	石製品	砥石	長さ[6.6]cm、幅9.2cm、厚さ2.2cm、重さ198.2g						緑泥片岩 遺存4面の不定形砥石 断面 鉄分付着		32-19
12	土製品	羽口	長さ[4.8]cm、外径(4.5)cm、孔径(1.8)cm、重さ33.2g								33-2
13	銅製品	刺金	長さ2.6cm、幅[2.5]cm、厚さ0.7cm、重さ7.2g								34-7
14	鉄製品	刀子	長さ[1.4]cm、幅0.8cm、背幅0.3cm、重さ1.0g								
15	鉄製品	刀子	長さ[4.1]cm、刃幅1.2cm、背幅0.4cm、重さ4.4g								34-8
16	鉄製品	刀子	長さ[3.5]cm、幅0.65cm、背幅0.23cm、重さ3.9g								



第 73 図 第 16 号住居跡 (1)

第 16 号住居跡 (第 73 ~ 76 図)

調査区中央部東側の H・I -12 グリッドに位置する。東部が第 7 号溝跡によって壊されている。東西 3.95m、南北 3.30m 以上の方形を呈し、深さは 0.25m である。

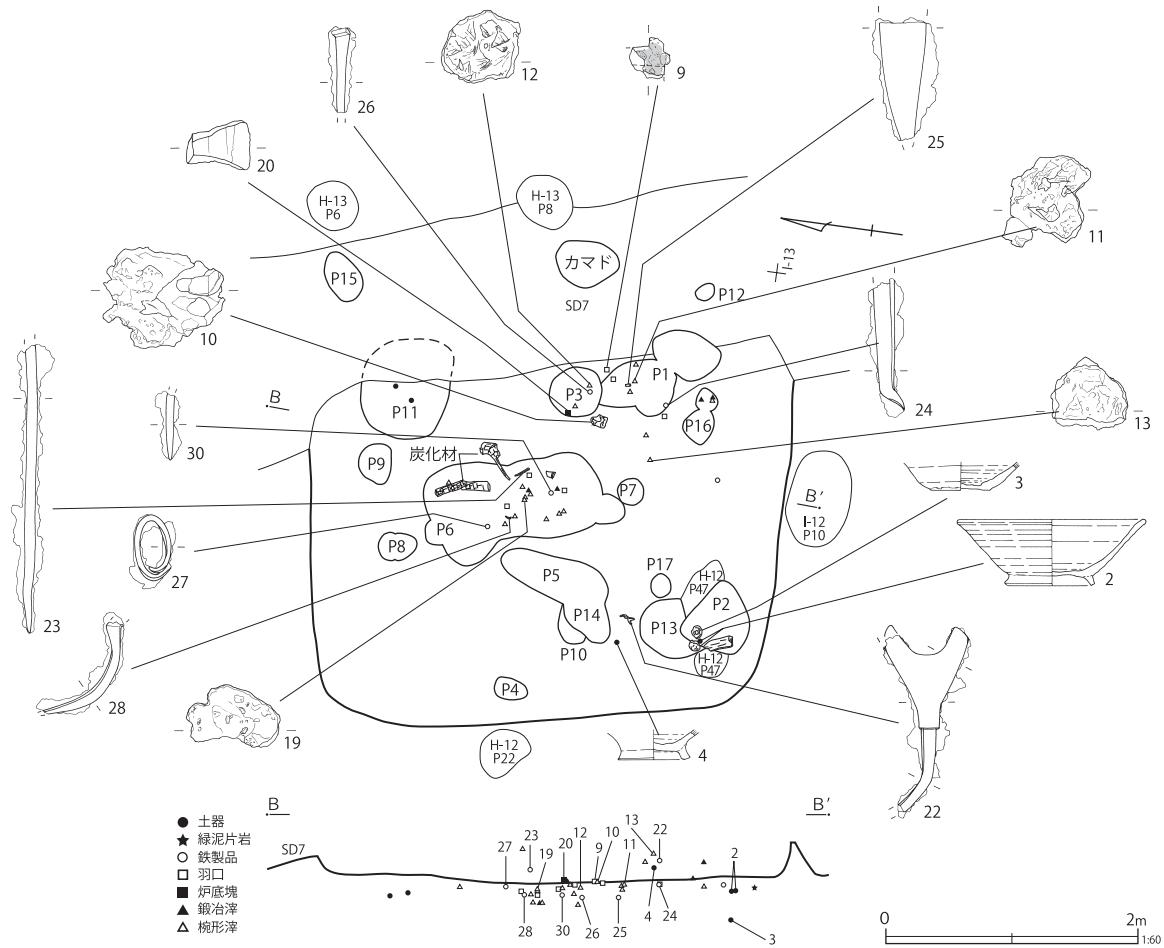
第 7 号溝跡の東側立ち上がり部斜面に焼土が検出され、カマドの下部が残存したものと判断される。従って、カマドは東壁中央部に構築されたもので、主軸方向が N - 75° - E を指すと想定される。

住居床面には大小のピット・土壙が検出された。各々の性格を詳らかにするのは難しいが、鍛冶に関連するものも認められる。P 5・10 は一体化しており、連結部から粘土で下部を固定した轔羽口が検出された (第 76 図)。羽口上部にはローム土の地山が一部遺存しており、トンネル状の孔を穿って羽口を設置した可能性がある。

P 1 は住居跡南東部に検出され、底面の被熱が確認された。P 6 は住居跡ほぼ中央部に検出され、

ピット 1	
7 暗褐色土	炭化物 ($\phi 5$ mm)・焼土粒子微量 しまりやや強 粘性やや弱 底面被熱 鉄滓片多数出土
ピット 2	
8 灰黄褐色土	ロームブロック ($\phi 50$ mm) 少量 ローム粒子 ($\phi 3 \sim 5$ mm) 多量 炭化物・焼土粒子 ($\phi 1 \sim 5$ mm) やや多量 しまりやや強 粘性弱
9 にぶい赤褐色土	焼土ブロック・粒子全体に含む しまり弱 粘性強
10 暗褐色土	粘土ブロック ($\phi 20 \sim 40$ mm)・炭化物 ($\phi 5$ mm) 少量 しまりやや強 粘性弱
ピット 3	
11 黒褐色土	ローム粒子 ($\phi 3 \sim 5$ mm)・炭化物やや多量 ローム粒子 ($\phi 1$ mm以下) 均等に含む 烧土粒子少量 しまりやや弱 粘性弱
12 にぶい黄褐色土	溶化ロームマーブル状に混じる ローム粒子 ($\phi 1$ mm)・炭化物微量 しまりやや弱 粘性やや強
ピット 4	
13 灰黄褐色土	炭化物 ($\phi 3 \sim 5$ mm) 微量 しまり・粘性やや強
14 暗褐色土	溶化ロームやや多量 しまり弱 粘性やや強
ピット 5	
15 黒褐色土	ローム粒子 ($\phi 5$ mm)・炭化物少量 しまり弱 粘性やや弱
16 褐色土	ローム土主体 炭化物 ($\phi 3$ mm) 少量 しまり弱 粘性やや弱 ※焼土を含まない
ピット 6	
17 黒褐色土	ローム粒子 ($\phi 1$ mm以下) 全体に含む 炭化物 ($\phi 10 \sim 15$ mm)・炭化物 ($\phi 5$ mm以下) 少量 しまり・粘性弱 鉄滓を多く含む
18 にぶい黄褐色土	ローム土を主体に黒褐色土が混じる しまり弱 粘性やや弱
19 黒褐色土	ロームブロック ($\phi 7 \sim 30$ mm)・炭化物少量 しまり・粘性弱
20 暗褐色土	焼土粒子 ($\phi 3$ mm)・炭化物微量 しまり・粘性弱
21 黒褐色土	ローム粒子 ($\phi 2 \sim 5$ mm)・($\phi 7$ mm) 少量 しまりあり 粘性弱
22 黒褐色土	ローム粒子 ($\phi 3 \sim 5$ mm) 全体に含む 粘土粒子 ($\phi 7 \sim 10$ mm) 微量 炭化物・焼土粒子 ($\phi 5 \sim 7$ mm) 少量 しまり・粘性弱
23 黒色土	溶化ロームブロック ($\phi 15 \sim 20$ mm)・炭化物少量 しまり・粘性弱 底面に灰色粘土がはりつき部分的に焼土化
ピット 7	
24 黒色土	ローム粒子 ($\phi 2 \sim 5$ mm)・焼土粒子 ($\phi 2$ mm)・炭化物 ($\phi 2 \sim 5$ mm) 微量 しまり・粘性弱
ピット 8	
25 黒褐色土	ローム粒子 ($\phi 5 \sim 10$ mm) 少量 烧土粒子 ($\phi 2 \sim 5$ mm)・炭化木片 (10 mm大) 微量 しまり・粘性弱
26 明黄褐色土	ローム土主体 褐色土がマーブル状に混入 炭化物微量 しまり・粘性強
27 黒褐色土	溶化ロームが混入 しまり・粘性弱
ピット 9	
28 黒褐色土	溶化ローム ($\phi 2$ mm以下) 全体に含む 炭化物小片微量 しまり・粘性弱
29 黒色土	ロームブロック ($\phi 7 \sim 10$ mm) 微量 しまり・粘性弱
ピット 10・14	
30 灰黄褐色土	ローム粒子 ($\phi 2 \sim 3$ mm) 少量 烧土粒子 ($\phi 2$ mm) 微量 しまりやや強 粘性弱
31 灰白土	羽口固定のための粘土 しまり・粘性強
32 にぶい黄褐色土	ローム粒子 ($\phi 5 \sim 7$ mm) 少量 烧土粒子 ($\phi 3$ mm) 微量 しまり強 粘性やや強
33 明黄褐色土	羽口を差した穴の天井部ローム土
34 にぶい黄褐色土	ローム粒子 ($\phi 7 \sim 10$ mm) 少量 微細な炭化物・焼土 ($\phi 2$ mm) 微量 粘性やや弱 しまりやや強
ピット 11	
35 にぶい黄褐色土	球形のローム粒子 ($\phi 2 \sim 5$ mm) 全体に含む しまりやや強 粘性弱
36 にぶい黄褐色土	ローム粒子 ($\phi 2 \sim 5$ mm) 少量 粘土粒子 ($\phi 2 \sim 3$ mm) 微量 しまりやや強 粘性弱
37 黒褐色土	ローム粒子 ($\phi 2 \sim 5$ mm) やや多量 烧土粒子 ($\phi 2 \sim 3$ mm) 微量 しまり・粘性弱
38 褐色土	層下位に粘土ブロック ($\phi 20$ mm)、粘土粒子 ($\phi 1 \sim 2$ mm) 微量 烧土粒子 ($\phi 2 \sim 5$ mm) 全体に含む しまり弱 粘性やや強
39 にぶい赤褐色土	溶化ローム均等に含む 烧土ブロック ($\phi 5 \sim 10$ mm) やや多量 烧土粒子 ($\phi 2$ mm) 微量 しまりあり 粘性弱
40 浅黄褐色土	ローム土が主体だが白色粘土がかなり混じる
41 黒褐色土	ロームブロック ($\phi 5 \sim 10$ mm) 微量 烧土粒子 ($\phi 1 \sim 5$ mm) 少量 しまり弱 粘性やや弱
42 黒褐色土	ローム粒子 ($\phi 1 \sim 3$ mm) 全体に含む 粘土粒子 ($\phi 2$ mm)・炭化物 ($\phi 5$ mm) 微量 しまり・粘性弱
ピット 12	
43 黒褐色土	ローム粒子 ($\phi 2 \sim 4$ mm) 少量 炭化物・焼土は含まない しまり・粘性弱
ピット 13	
44 にぶい黄褐色土	ローム粒子均等に含む 烧土ブロック ($\phi 2 \sim 30$ mm) 少量 しまり強 粘性やや弱
45 黒褐色土	ロームブロック ($\phi 10 \sim 15$ mm) 微量 烧土粒子 ($\phi 3 \sim 5$ mm) 少量 微細な炭化物を全体に含む しまり強 粘性弱
46 明赤褐色土	ロームが焼土化した層 しまり強 粘性弱
47 明黄褐色土	被熱して硬化したロームブロック層 しまり強 粘性やや強
ピット 15	
48 にぶい黄褐色土	ローム粒子 ($\phi 3 \sim 5$ mm) 微量 烧土粒子 ($\phi 3$ mm) 微量 しまり弱 粘性やや弱
ピット 16	
49 黒褐色土	ピット 6 の 17 層とほぼ同質
50 にぶい黄褐色土	ローム土主体 烧土粒子 ($\phi 3$ mm) 微量 しまり強 粘性強
51 にぶい黄褐色土	炭化物 ($\phi 5 \sim 10$ mm) 含む しまりやや強 粘性やや弱
床下SK1	
52 暗褐色土	白色粘土少量 全体に含む (床面上でより多い) ローム粒子 ($\phi 1 \sim 2$ mm)・焼土粒子 ($\phi 3$ mm) 少量 炭化物 ($\phi 5 \sim 10$ mm) 含む
53 暗褐色土	ローム粒子 ($\phi 2 \sim 3$ mm)、炭化物粒子 ($\phi 2$ mm)、焼土粒子 ($\phi 3$ mm) それぞれ少量含む しまりあり 粘性なし
ピット 18(床下ピット)	
54 暗褐色土	焼土粒子 ($\phi 2 \sim 5$ mm) 含む 炭化物粒子 ($\phi 2 \sim 3$ mm)、鉄滓 ($\phi 5 \sim 8$ mm) 少量 しまりあり 粘性なし
ピット 19(床下ピット)	
55 暗褐色土	ローム粒子 ($\phi 2 \sim 3$ mm)、焼土粒子 ($\phi 5$ mm)、炭化物粒子 ($\phi 3 \sim 5$ mm) 全体に少量含む しまりあり 粘性なし ※鉄滓含まない
ピット 20(床下ピット)	
56 暗褐色土	焼土粒子 ($\phi 2 \sim 3$ mm) 少量 炭化物粒子 ($\phi 3 \sim 5$ mm)、鉄滓 ($\phi 2 \sim 3$ mm) それぞれ全体に少量含む しまりややあり 粘性なし

第 74 図 第 16 号住居跡 (2)



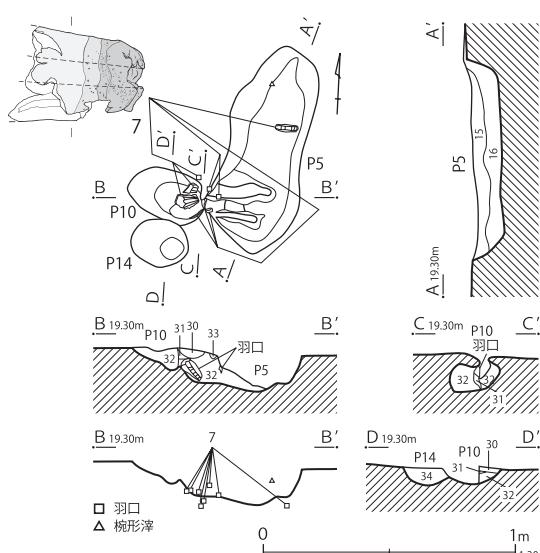
第75図 第16号住居跡（3）

平面形は不整橢円形である。北部の底面に粘土が貼り付くように検出され、一部焼土化していた。また、覆土上面に炭化材が横たわって検出された。P 1・6ともに鉄滓・鞴羽口・鍛造剥片が多く出土しており、鍛冶行為に関連する遺構と捉えられる。このほか、住居跡南壁中央付近の床面には粘土範囲が検出され、直下から白色粘土を覆土に含む床下土壌（SK 1）が確認された。床下土壌検出面からはP 17～19も検出されているが、いずれも性格は不明である。

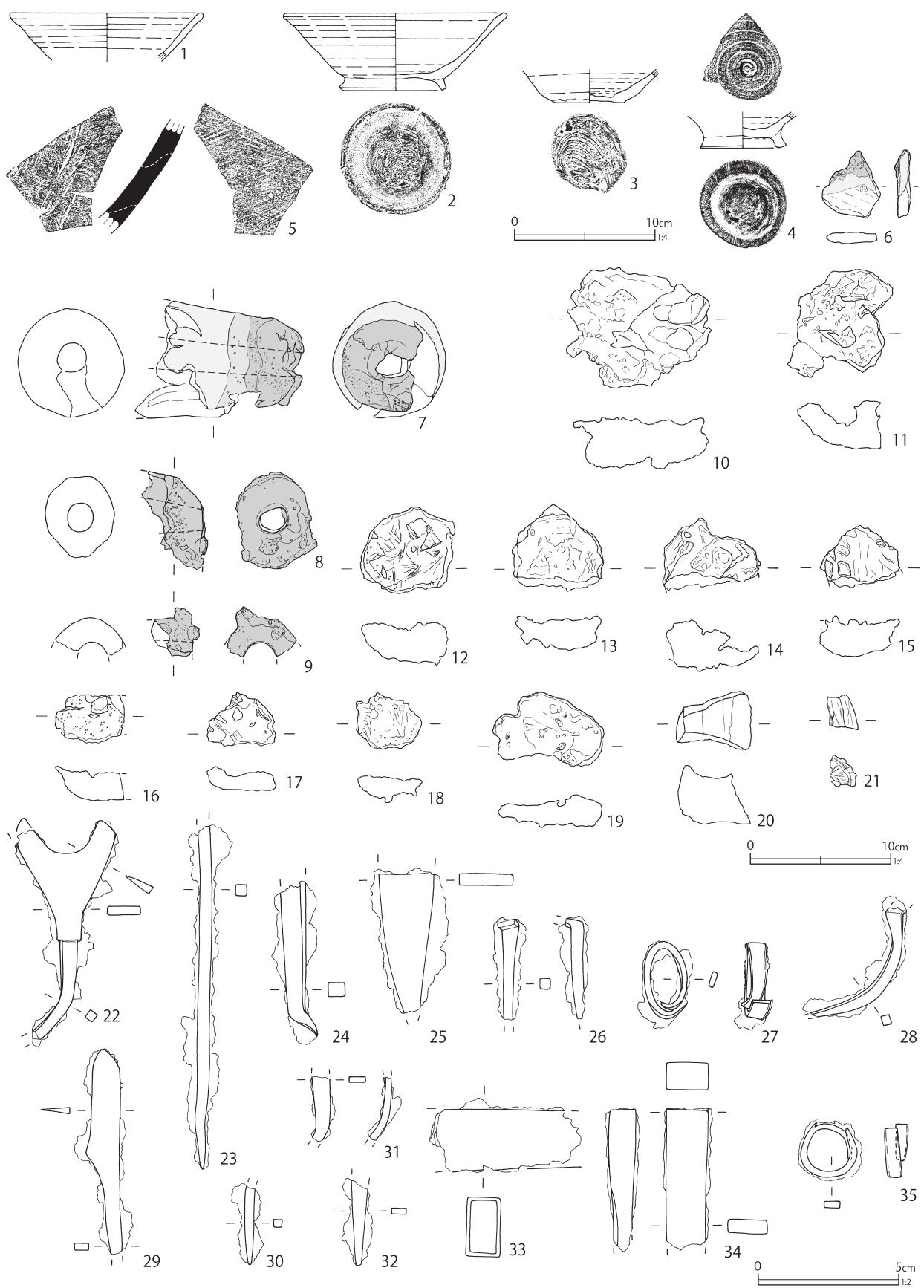
遺物として、ロクロ土師器・土師器・須恵器・鞴羽口・鉄滓・鉄製品等が出土している（第77図）。

1～4はロクロ土師器の坯類で、3・4は還元ぎみの焼成である。5は末野産の須恵器甕である。

6は緑泥片岩の細片で、端部に滓化した鉄分の



第76図 第16号住居跡（4）



第77図 第16号住居跡出土遺物

第20表 第16号住居跡出土遺物観察表（第77図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	ロクロ土師器	壺	(13.6)	[3.4]	—	E H I K	40	普通	明黄褐	—	29-8
2	ロクロ土師器	高台付壺	(15.6)	5.4	7.4	C E H I K	30	普通	にぶい橙	底部糸切痕(右)付高台 口縁歪みあり	29-9
3	ロクロ土師器	壺	—	[2.3]	5.0	G I K L	90	普通	灰	底部糸切痕(右)	29-10
4	ロクロ土師器	高台付壺	—	[2.5]	6.1	C D I K	40	普通	灰白	底部糸切痕付高台	29-11
5	須恵器	甕	—	[8.1]	—	H I K	5	良好	灰黄褐	内面あて具痕 外面叩き痕 末野	—
6	石製品	石材か	—	—	—	—	—	—	—	剥岩に滓化した鉄分付着 緑泥片岩	32-20
7	土製品	羽口	—	—	—	—	—	—	—	—	33-2
8	土製品	羽口	—	—	—	—	—	—	—	—	33-2
9	土製品	羽口	—	—	—	—	—	—	—	—	33-2
10	鉄滓	椀形滓	—	—	—	—	—	—	—	—	—
11	鉄滓	椀形滓	—	—	—	—	—	—	—	—	—
12	鉄滓	椀形滓	—	—	—	—	—	—	—	—	—
13	鉄滓	椀形滓	—	—	—	—	—	—	—	—	—
14	鉄滓	椀形滓	—	—	—	—	—	—	—	—	—
15	鉄滓	椀形滓	—	—	—	—	—	—	—	—	—
16	鉄滓	椀形滓	—	—	—	—	—	—	—	—	—
17	鉄滓	椀形滓	—	—	—	—	—	—	—	—	—
18	鉄滓	椀形滓	—	—	—	—	—	—	—	—	—
19	鉄滓	椀形滓	—	—	—	—	—	—	—	—	—
20	鉄滓	炉底塊	—	—	—	—	—	—	—	—	—
21	炭化物	木炭	—	—	—	—	—	—	—	—	—
22	鉄製品	雁股鎌	—	—	—	—	—	—	—	—	34-9
23	鉄製品	棒状品	—	—	—	—	—	—	—	—	34-10
24	鉄製品	釘	—	—	—	—	—	—	—	—	—
25	鉄製品	楔か	—	—	—	—	—	—	—	—	34-12
26	鉄製品	釘	—	—	—	—	—	—	—	—	—
27	鉄製品	口金	—	—	—	—	—	—	—	—	34-13
28	鉄製品	釘	—	—	—	—	—	—	—	—	—
29	鉄製品	刃物	—	—	—	—	—	—	—	鉄あるいは刀子か	34-11
30	鉄製品	釘	—	—	—	—	—	—	—	—	—
31	鉄製品	金具	—	—	—	—	—	—	—	金具の一部にスラグ付着	—
32	鉄製品	釘か	—	—	—	—	—	—	—	—	—
33	鉄製品	不明	—	—	—	—	—	—	—	中空・箱状に組み合わる	34-15
34	鉄製品	楔	—	—	—	—	—	—	—	—	34-16
35	鉄製品	口金	—	—	—	—	—	—	—	螺旋状か	34-14

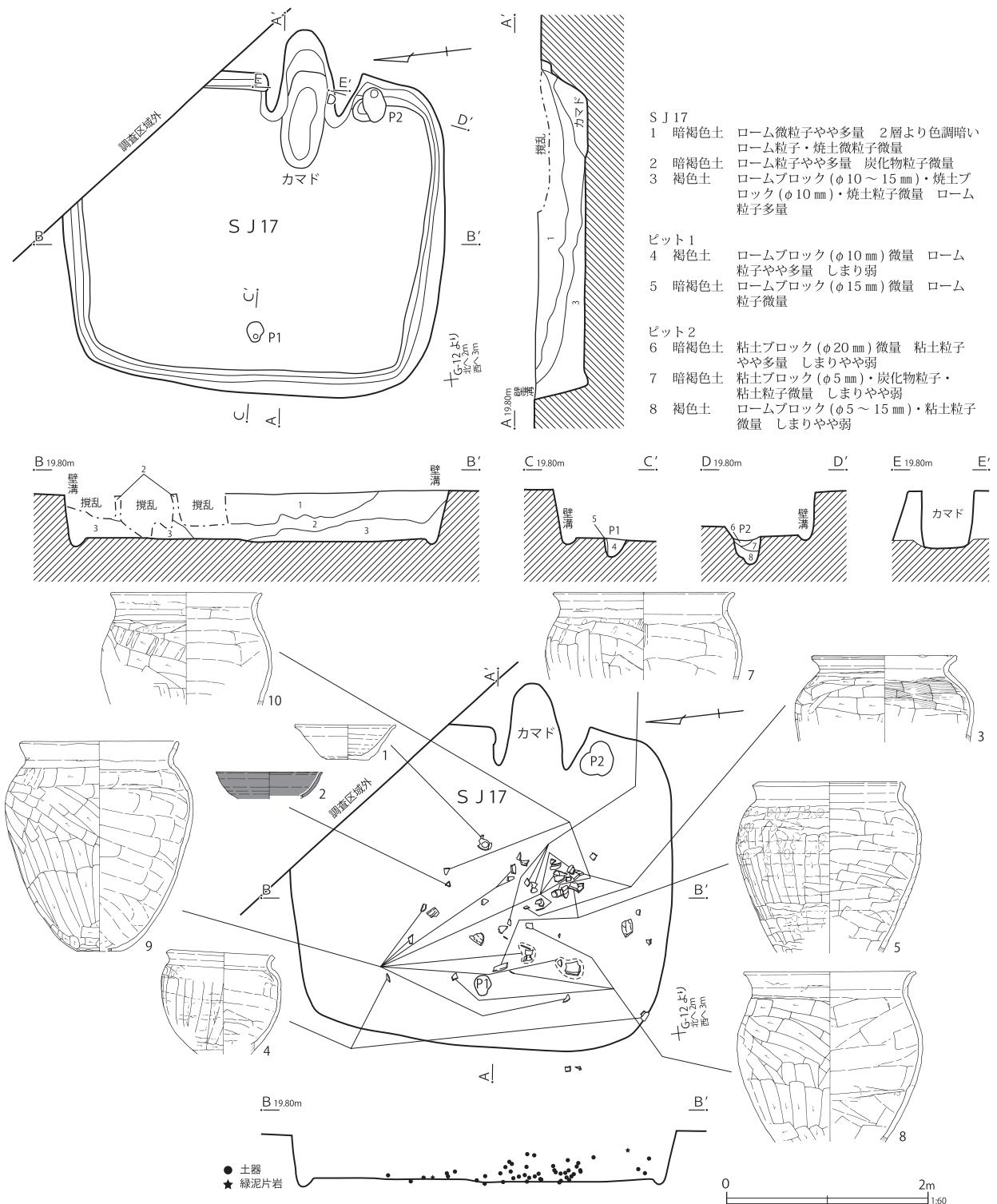
付着が顕著に認められる。鉄分付着部の周辺は被熱により白く変色している。住居跡内からは、緑泥片岩30点、計2224.8gが出土している。

鍛冶関連遺物は極めて多く、椀形滓4398.3g、鍛冶滓2290g、轆羽口片19点(1419.3g)、炉底塊1点(132.2g)が出土した。7~9は轆羽口である。7がP5・10の間から出土したものである。10~19は椀形滓、20は炉底塊である。

第17号住居跡(第78・79図)

調査区中央部東際のF-11・12グリッドに位置する。北東隅部が調査区域外であるが、長軸3.88m、短軸3.33mの長方形を呈し、深さは0.45mである。東壁中央やや南寄りにカマドが構築されており、主軸方向はN-83°-Eを指す。

カマドは、袖部を黄灰色土で造っており、緑泥片岩を構築材に使用している。煙道部には土師器

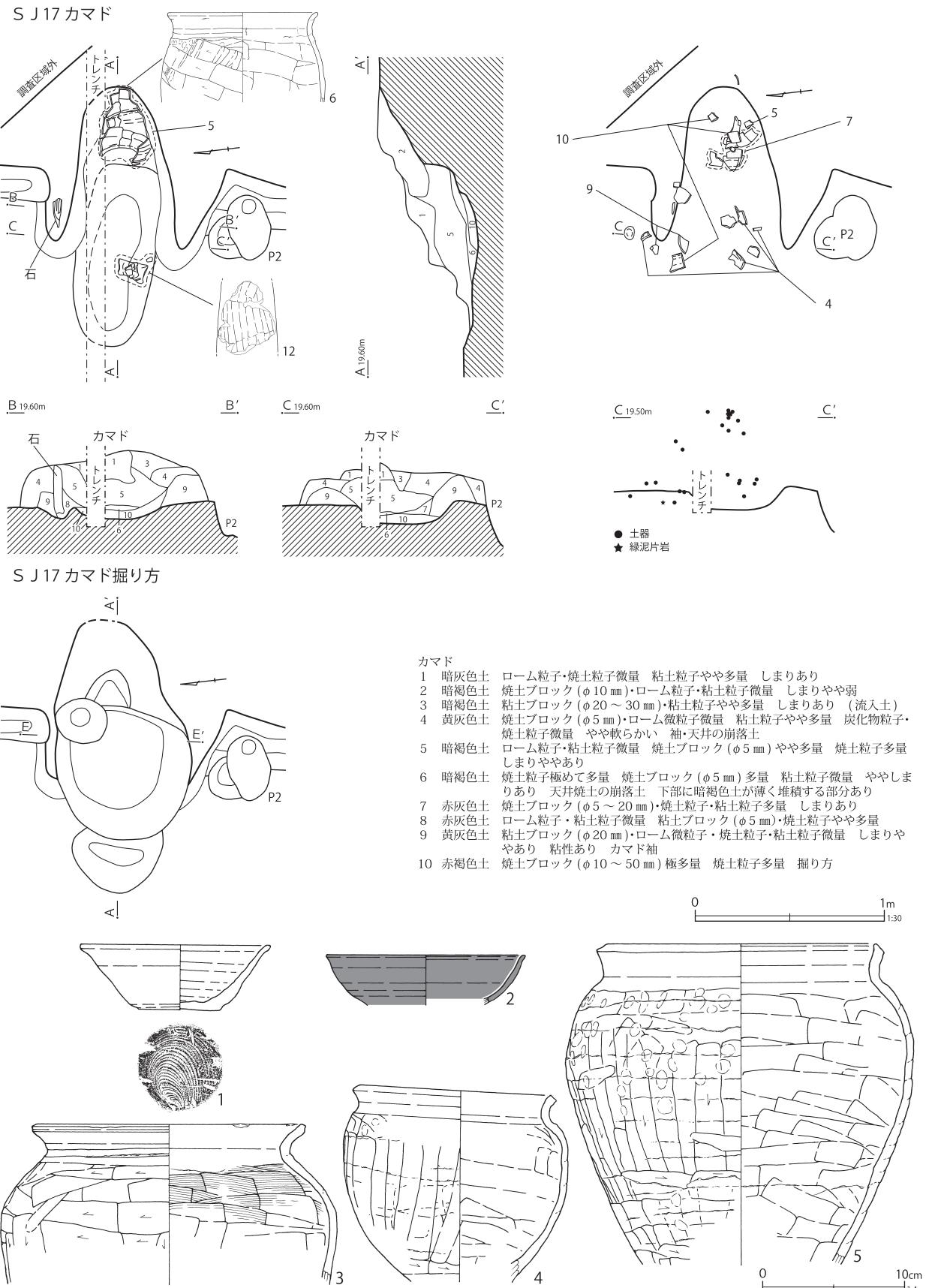


第 78 図 第 17 号住居跡 (1)

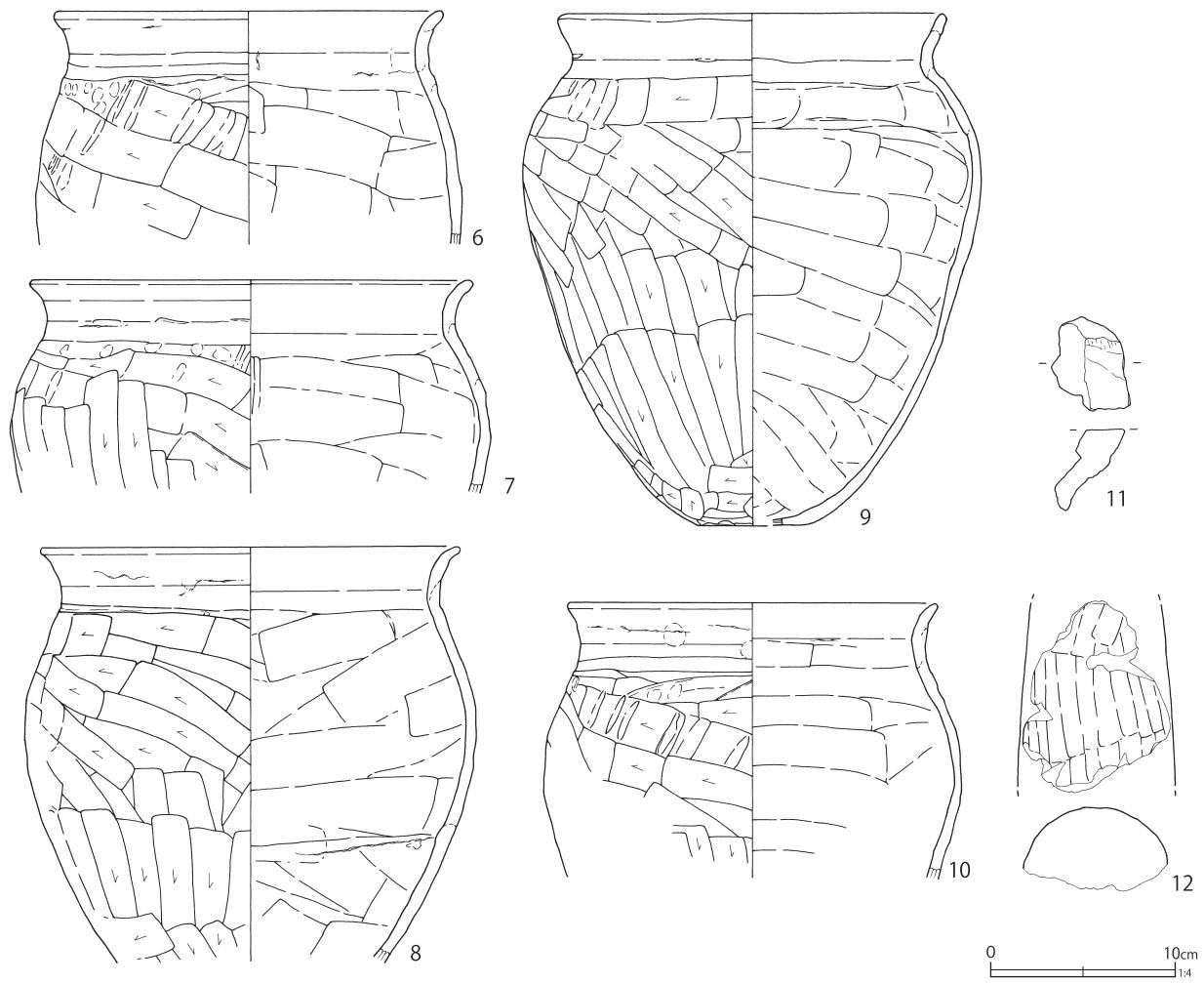
甕を転用して補強材として用いている。壁溝は、カマド部分を除いてほぼ全周している。明確な柱穴は検出されなかったが、西壁中央部からやや離れて検出された P 1 は出入口施設に係るものと考

えられる。

遺物は、土師器・ロクロ土師器・石製品・土製品が出土した (第 79・80 図)。1 はロクロ土師器の壊である。4・5 は土師器小型甕と甕である。



第79図 第17号住居跡(2)・出土遺物(1)



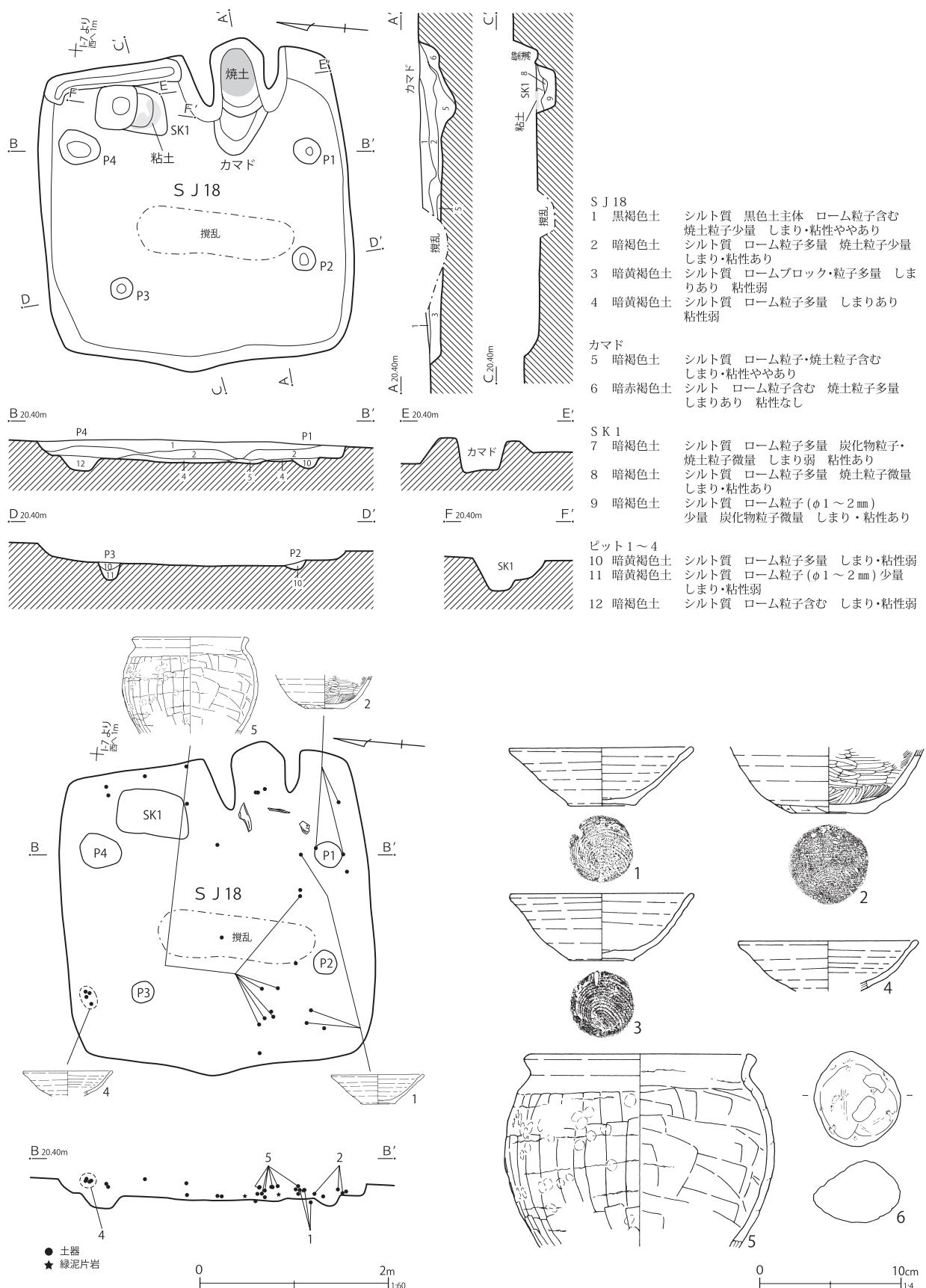
第 80 図 第 17 号住居跡出土遺物 (2)

第 21 表 第 17 号住居跡出土遺物観察表 (第 79・80 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版	
1	クロコ土師器	壺	13.4	4.6	5.7	C E H I	80	普通	にぶい黄橙	底部糸切痕(右) 外面墨書	29-12	
2	緑釉陶器	壺	(13.8) [3.45]	—	—	I	10	良好	暗赤灰	外面緑釉施釉 胎土緻密 東濃産	29-13	
3	土師器	甕	(18.5) [11.2]	—	—	E G H I K	30	普通	橙	カマド煙道転用	29-14	
4	土師器	小型甕	(13.5) [13.5]	—	—	D E G H	50	良好	にぶい褐		29-15	
5	土師器	甕	19.1 [22.5]	—	—	C D E G	60	良好	にぶい橙	外面輪積痕顯著	30-1	
6	土師器	甕	(20.6) [12.6]	—	—	A B E G I K	30	普通	にぶい橙		29-16	
7	土師器	甕	(23.6) [11.4]	—	—	A B E H I K	40	普通	にぶい橙		29-17	
8	土師器	甕	(22.4) [22.4]	—	—	A B D E I K	40	普通	にぶい橙		30-2	
9	土師器	甕	(20.5) 27.6	5.7	—	A B D E G	40	普通	にぶい橙		30-3	
10	土師器	甕	(19.8) [14.8]	—	—	A B E I K	40	普通	橙	6と同一個体の可能性あり	30-4	
11	石製品	砥石	長さ [5.1]cm、幅 [4.2]cm、厚さ [4.4]cm、重さ 57.0g						砂岩 1面遺存 欠損あり		32-21	
12	土製品	支脚	—	[10.4]	—	—	25	普通	灰黄	外面ヘラナデ		

いずれも口唇部が僅かに内側に屈曲するような形態を示し、胴部上位が縦方向ヘラケズリで仕上げられる点に特徴がある。4は胴部最下位に横ヘラ

ナデが施され、器厚の変化からも脚台が付属した可能性が高い。6～10も土師器甕でいずれも口縁部は外反傾向が強く、口唇部は丸みを帯びる。



第 81 図 第 18 号住居跡・出土遺物

器形・胎土が類似し、同一個体が含まれる可能性もある。いずれも胎土に雲母状の鉱物と片岩粒を含む。住居跡内出土の緑泥片岩は細片も含めて12点、計40.765gである。カマド袖に遺存していた割石の他にも、住居中央部やや北側や南西部の覆土からも大型の割石が検出されている。他に鍛冶滓1点(3.7g)が出土している。

第18号住居跡(第81図)

調査区中央部西寄りのH・I-6グリッドに位置する。長軸3.38m、短軸3.27mの方形を呈し、深さは0.20mである。東壁中央やや南寄りにカマドが構築されており、主軸方向はN-82°-Eを指す。

カマドには袖が比較的良好に遺存し、火床面とみられる焼土範囲も認められた。また、袖部やカマド前面の床面上に緑泥片岩の割石が認められ、カマドの構築材に用いられたものと考えられる。住居跡全体からは、緑泥片岩9点(細片含)、20.751kgが出土している。壁溝はカマドから北側の東壁に認められる。ピットは床面から4基検出され、主柱穴の可能性があるが、深さは10~18cm程度である。カマド北側の床面には粘土範囲が広がっており、直下に深さ35cmの土壙が掘り込まれていた。土壙内の覆土には土器片も含まれており、貯蔵穴の可能性がある。

遺物は少量であるが、ロクロ土師器壺・土師器甕や石製品が出土した。1・3・4はロクロ土師器壺で、口径に対して底径が著しく小さい。2もロクロ土師器壺だが、やや腰が張り、内面にミガキが施される。黒色処理は認められない。5は口

唇部が面取りされ、胴部に縦のヘラケズリが施される小型甕である。6は軽石質の角閃石安山岩の円礫で、顕著に煤の付着が認められる。なお、鍛冶関連遺物は出土していない。

土壤サンプルについて

各住居跡からは、鍛冶関連の遺物が多く出土している。一部の遺構について微小な鍛冶遺物の抽出を目的として土壤を採取した。

採取した土壤サンプルは、自然状態で充分に乾燥させると同時に塊状の土はほぐし、篩を用いて混入物を抽出した。最初に全ての土壤サンプルを6号の篩にかけた(篩の号数は、一寸=3.03cmの中にある網目の数を示し、一寸間隔に6の網目があるのが6号となる)。その後、篩の目を通らなかった粒子から鍛冶関連遺物の抽出を行った。抽出方法は目視と磁着によった。

6号の篩で、鍛造剥片等が多く認められた第4号住居跡SK1・第6号住居跡覆土・第16号住居跡P6については、9号・12号の篩でも土壤の分離を行い、主に磁着物の抽出を行った。結果については、第23表に示したとおりである。これにより、第4号住居跡のSK1及び近接する焼土ピット、第6号住居跡の焼土ピットが鍛冶炉である蓋然性は高いと考えられる。一方で、第5号住居跡のSK1・2は、鍛冶とは関連性の無い遺構と想定される。このように、遺構によって鍛冶関連遺物の抽出量に明確な差が認められ、各住居における鍛冶作業の有無を考える上で有意な結果が得られた。なお、鍛造剥片の重量には微小な鉄製品破片が含まれる可能性がある。

第22表 第18号住居跡出土遺物観察表(第81図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	ロクロ土師器	壺	12.8	4.0	4.7	B C E H I J K	55	良好	橙	底部糸切痕(右)	30-5
2	ロクロ土師器	壺	—	[4.6]	5.2	C I K	80	普通	にぶい黄橙	底部糸切後、多方向からヘラケズリ	30-6
3	ロクロ土師器	壺	12.7	4.7	4.5	D E H I J K	90	普通	橙	底部糸切痕(右) SK1出土	30-8
4	ロクロ土師器	壺	12.6	[3.5]	—	E G H I J K	50	良好	にぶい赤褐		30-7
5	土師器	甕	(15.3)	[13.6]	—	B D E G I	15	良好	橙	外面煤付着	30-9
6	石製品	砥石	長さ6.7cm、幅6.1cm、厚さ4.4cm、重さ87.4g						完形 角閃石安山岩(軽石質)		

第23表 住居跡土壤サンプルの鍛冶関連遺物抽出量

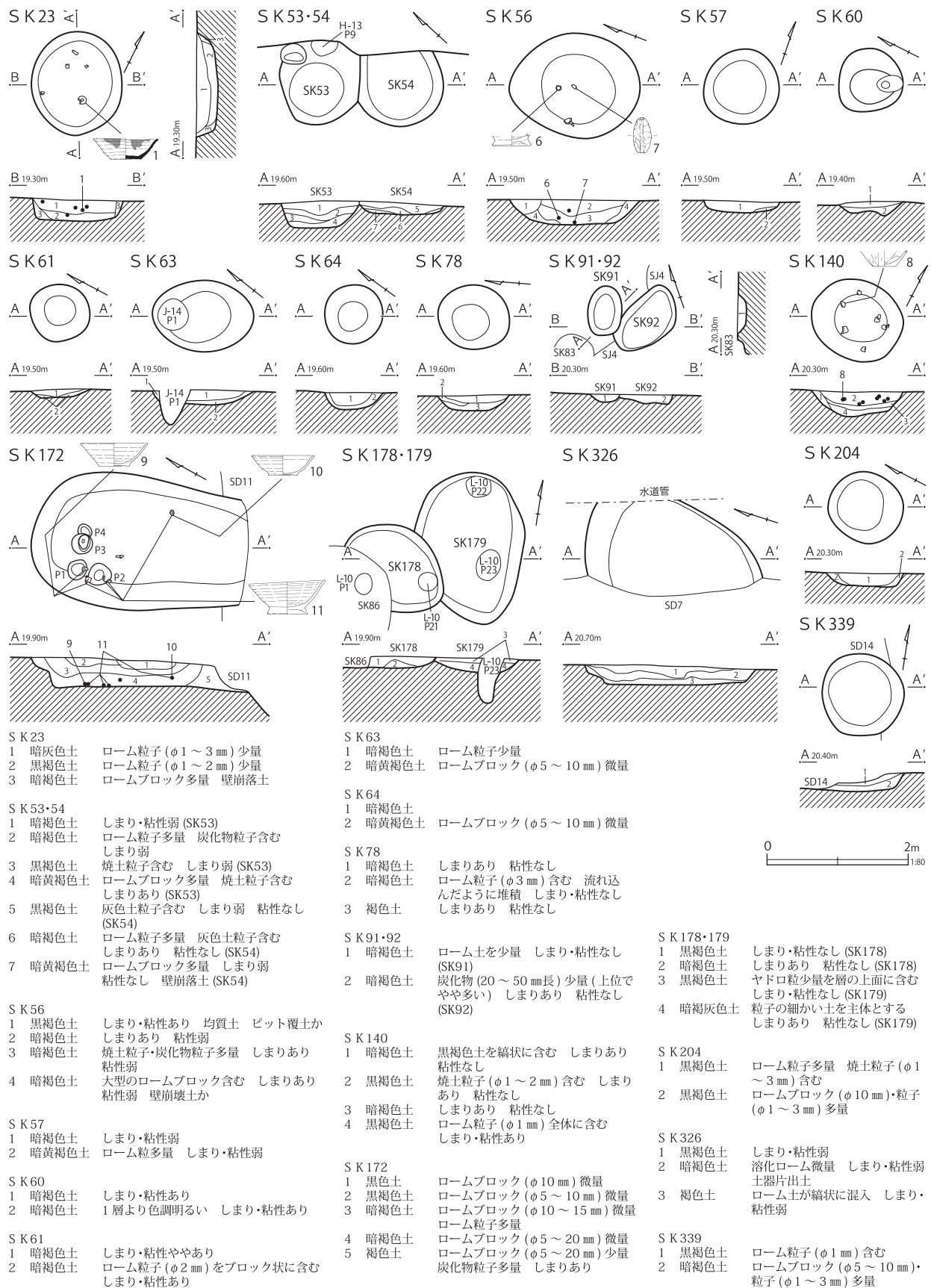
遺構名	サンプリング場所	土壤サンプル総重量/g	篩号数	鍛造剥片重量/g	磁着滓重量/g	非磁着滓重量/g	湯玉個数/点	炭化物重量/g	備考
第4号住居跡	SK1	8042.8	6号	0.9	29.7	10.2	0	1.3	
			9号	1.2	5.2	-	0	0	
			12号	3.3	3.0	-	1	0	
	総計	8042.8	-	5.4	37.9	10.2	1	1.3	
第5号住居跡	SK1	6013.7	6号	0	0.1	0	0	0.1未満	
	SK2上面 焼土	16022.6	6号	0	0.1未満	0	0	0.1未満	
	SK2下層	20006.1	6号	0	0.1未満	0	0	0	
	総計	42042.4	-	0	0.1	0	0	0.1未満	
第6号住居跡	覆土	4094.5	6号	0.4	11.0	13.6	1	0	
	覆土 (焼土ピット周辺)	2035.4	6号	0.5	58.3	32.2	1	0	
			9号	0.5	2.4	-	8	0	
			12号	2.2	1.5	-	15	0	
	焼土 ピット	1532.3	6号	0.1未満	0.6	20.5	0	0	
	ピット1	14820.8	6号	0.1未満	0.6	0	0	0	
	総計	22483.0	-	3.6	74.4	66.3	25	0	
第7号住居跡	貯蔵穴 覆土	9430.1	6号	0	0	0	0	1.2	
	床面焼土	2004.2	6号	0	0	0	0	0	住居北東部焼土範囲
	総計	11434.3	-	0	0	0	0	1.2	
第12号住居跡	ピット5	2019.3	6号	0	0	0	0	0.9	
第13号住居跡	SK1	1244.3	6号	0	0	0	0	0	対象サンプルは焼土主体
第16号住居跡	ピット1	6677.0	6号	2.9	228.6	176.3	2	6.4	
	ピット3	4898.6	6号	2.3	80.9	47.7	2	5.9	
	ピット5	11474.5	6号	1.1	43.6	12.2	0	2.5	
	ピット6	45856.4	6号	9.6	540.8	247.2	17	12.7	
			9号	8.8	85.8	-	127	0	
			12号	43.7	48.6	-	260	0	
	ピット7	908.8	6号	0.1未満	0.2	0	0	0	
	ピット10	112.4	6号	0	0	0	0	0	
	ピット16	7355.6	6号	2.1	238.9	0	8	6.2	
	ピット17	931.9	6号	0.1未満	7.5	7.3	1	0	
	ピット18	918.6	6号	0.1未満	0.1未満	0	0	0	
	ピット19	721.3	6号	0.1	7.4	0.9	0	0	
	SK1	38240.1	6号	0.1未満	1.6	0	0	0	微細な線状鉄製品あり
	カマド 焼土	4126.9	6号	0	0	0	0	0	
	焼土1	506.0	6号	0.1未満	1.0	0	0	0.1未満	
	総計	122728.1	-	70.6	1284.9	491.6	417	33.7	
第156号土壙	覆土	8974.4	6号	1.8	33.0	27.1	12	0	(参考) SJ6を掘り込む土壙
第2号 掘立柱建物跡	焼土2	2004.7	6号	0	0	0	0	0	(参考) 中・近世の掘立柱建物跡に付随。

(2) 土壙 (第82図)

平安時代に帰属する土壙は、形態や覆土の状況・遺物内容から、計19基を認定した。内容は第24表に示した。多くは平面形が円形もしくは円形に近い橢円形を呈し、直径1m前後の規模である。ほかにも、当該期に帰属する可能性がある土壙も

あるが、明確に時期が絞り込めないため、中・近世の土壙の項で一括して扱う。

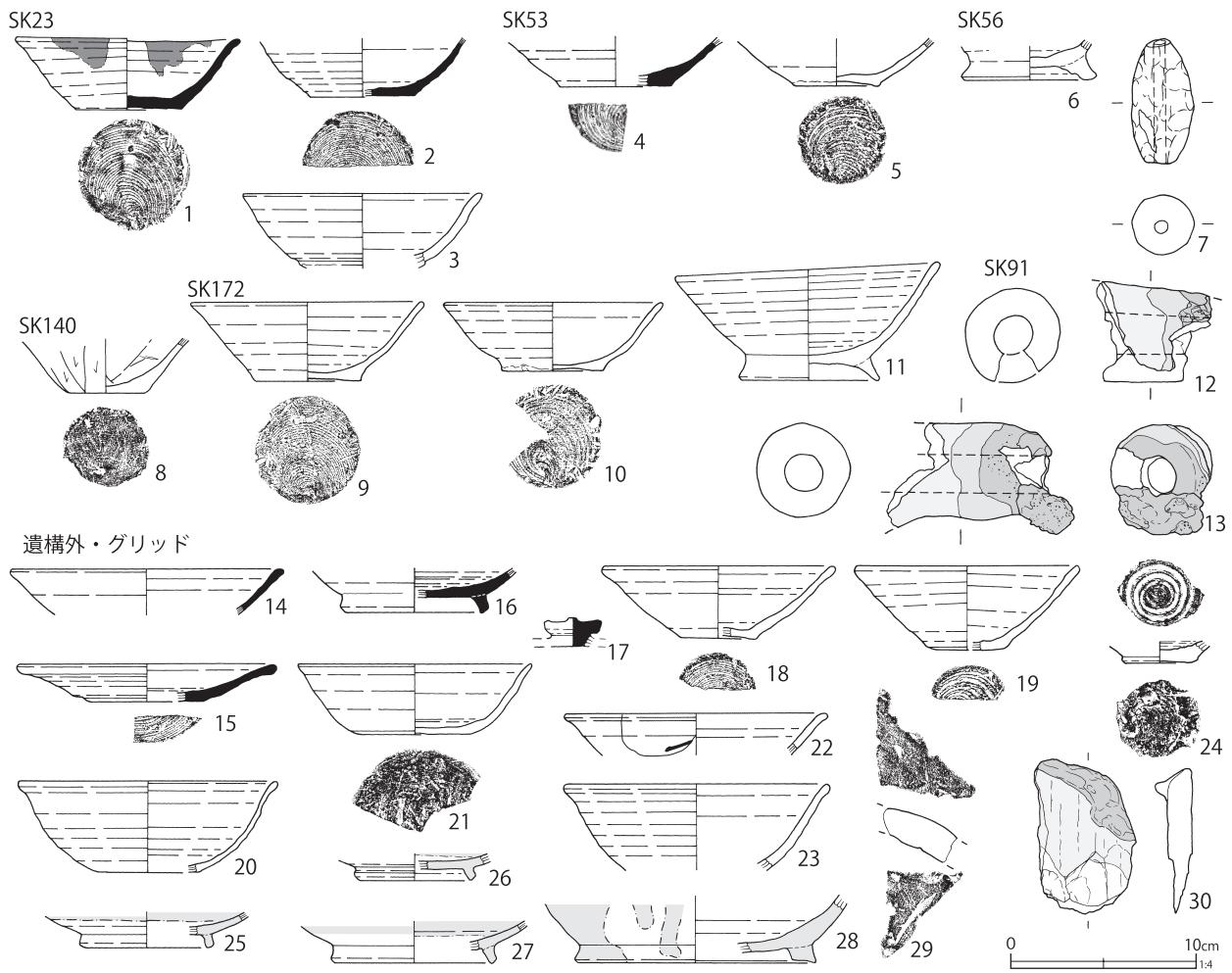
特徴的な土壙としては、第172号土壙が挙げられる。北西部付近の底面から、ほぼ完形のロクロ土師器壺2点、高台付壺1点が出土した(第83図9~11)。土壙の形態と土器の出土位置から、



第82図 平安時代の土壤

第24表 平安時代の土壙一覧表 (第82図)

遺構名	グリッド	長軸 /m	短軸 /m	深さ /m	平面形	方位	新旧関係	非掲載遺物・備考
SK23	0-15	1.29	1.29	0.30	円形	—		ロクロ土師器壺, 須恵器杯, 土師器甕
SK53	H・I-13	(1.20)	(1.10)	0.38	円形	—	SK54と重複	土師器甕(武藏型含む), 須恵器甕(南比企)
SK54	I-13・14	1.20	(1.05)	0.16	円形	—	SK53と重複	土師器甕(武藏型含む), 須恵器甕(末野)
SK56	I-13	1.85	1.48	0.35	楕円形	N-22°-W		須恵器壺, 土師器台付甕, 土師器甕, 鍛治津
SK57	I-13	1.06	1.06	0.16	円形	—		
SK60	I-14	0.89	0.90	0.21	円形	—		須恵器壺(末野), 土師器甕(武藏型)
SK61	I-14	0.80	0.80	0.12	円形	—		土師器甕
SK63	I・J-14	1.45	1.00	0.21	楕円形	N-39°-W		須恵器壺, ロクロ土師器壺, 土師器甕(武藏型含む)
SK64	J-14	0.84	0.84	0.25	円形	—		ロクロ土師器壺
SK78	J-14	1.00	0.91	0.21	円形	—		須恵器壺(南比企), 土師器高台付壺, 鍛治津
SK91	L-10	0.70	0.48	0.09	楕円形	N-21°-E	SJ4より新 SK92と重複	ロクロ土師器壺, 輸羽口, 焼土塊
SK92	L-10	(0.83)	0.64	0.13	楕円形	N-60°-E	SJ4より新 SK91と重複	土師器甕
SK140	K-10	0.79	0.65	0.35	円形	—		須恵器壺, ロクロ土師器壺, 土師器甕
SK172	G・H-11	(3.06)	1.86	0.42	楕円形	N-28°-W	SD11と重複	鉄製品(釘複数含)
SK178	L-10	1.56	(0.70)	0.16	楕円形	N-62°-W	SK86と重複 SK179より新	須恵器壺(南比企, 酸化), 土師器甕
SK179	L-10	2.14	(1.30)	0.20	楕円形	N-21°-W	SK178より古	土師器甕(武藏型)
SK204	J-10	1.07	1.00	0.19	円形	—		須恵器壺(酸化), ロクロ土師器壺, 土師器壺
SK326	H-12	2.56	(1.11)	0.28	不整形	N-12°-W	SD7と重複	須恵器壺, 高台付壺, 甕, 土師器壺, 甕
SK339	I-8	1.15	1.10	0.21	円形	—	SD13・14より古	土師器甕



第83図 土壙・グリッド出土遺物

第25表 平安時代の土壙出土遺物観察表（第83図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	遺構名	備考	図版
1	須恵器	壺	12	3.7	5.8	I K	85	良好	暗オリーブ	SK23	底部糸切痕（右）口縁煤付着 東金子	30-10
2	須恵器	壺	—	[3.1]	(5.7)	E I J K	30	良好	灰白	SK23	底部糸切痕 南北企	31-1
3	ロクロ土師器	壺	(12.8)	[3.9]	—	H I K	25	良好	橙	SK23		31-2
4	須恵器	壺	—	[2.6]	(6.0)	D E H I K	10	普通	黄灰	SK53	底部糸切痕	
5	ロクロ土師器	壺	—	[2.5]	4.4	E G H I K	20	普通	明黄褐	SK53	底部糸切痕（右）	31-3
6	ロクロ土師器	高台付壺	—	[1.9]	7.0	C D E J	15	普通	にぶい黄橙	SK56	底部糸切痕 付高台	
7	須恵器	陶錘	長さ 6.6cm、径 3.3cm、孔径 0.7cm、重さ 70.7g			I	100	良好	褐灰	SK56		
8	土師器	甕	—	[2.9]	4.2	C E I K	10	普通	にぶい橙	SK140	外面煤付着	
9	ロクロ土師器	壺	12.4	4.2	5.7	E H I K	95	普通	にぶい黄橙	SK172	底部糸切痕（右）	31-4
10	ロクロ土師器	壺	(11.6)	3.6	5.4	C E H I K	45	普通	明黄褐	SK172	底部糸切痕（右）	31-5
11	土師器	高台付壺	14.0	[6.3]	7.6	C E H I K	90	普通	橙	SK172	底部ヘラナデ後高台貼付	31-6
12	土製品	羽口	長さ [6.2]cm、外径 5.1cm、孔径 2.1cm、重さ 94.9g							SK91		33-2
13	土製品	羽口	長さ [10.1]cm、外径 5.0cm、孔径 2.1cm、重さ 176.1g							SK91		33-2

第26表 グリッド出土遺物観察表（第83図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
14	須恵器	壺	(14.2)	[2.4]	—	I J K	10	普通	黄灰	SD17 口縁部歪みあり 南北企	
15	須恵器	皿	(13.8)	2.0	(6.0)	H I K	10	普通	橙	N15G-P1 底部糸切痕 末野か	31-7
16	須恵器	高台付壺か	—	[2.4]	(7.4)	H I K	40	良好	灰白	J14G-P2 底部糸切痕 付高台 東海系	31-8
17	須恵器	蓋	3.1	[1.5]	—	I J K	10	良好	灰	SD6 つまみ部分 南北企	
18	ロクロ土師器	壺	(12.4)	[3.9]	(4.2)	C E I J K	20	普通	にぶい黄橙	SK89・90	
19	ロクロ土師器	壺	(11.9)	4.5	(4.0)	H K	20	普通	黄橙	N15G 底部ヘラケズリ	31-9
20	ロクロ土師器	壺	(13.9)	4.9	(5.7)	C E I J K	30	普通	橙	I6G 底部糸切痕	31-10
21	ロクロ土師器	壺	(12.4)	[3.7]	(6.0)	E G I K	30	普通	にぶい橙	SD7 底部糸切痕	
22	ロクロ土師器	壺	(14.0)	[2.2]	—	E H I K	10	普通	浅黄褐	J13G-P1 外面墨書	31-11
23	ロクロ土師器	壺	(14.0)	[4.6]	—	C E G I K	30	良好	灰黄	SJ2	31-12
24	ロクロ土師器	壺	—	[1.1]	4.0	H I K	60	普通	浅黄	L16G 底部糸切痕（右）内底面渦巻状ナデ	31-13
25	灰釉陶器	塊	—	[1.9]	(6.5)	I K	10	良好	灰白	SD1 灰釉刷毛塗り 黒笛 90号窯式	
26	灰釉陶器	皿	—	[1.4]	(6.0)	H I K	10	良好	灰黄	SD6	
27	灰釉陶器	塊	—	[2.2]	(8.6)	H I K	5	良好	灰白	SD6 灰釉刷毛塗り 黒笛 90号窯式	
28	灰釉陶器	長頸瓶	—	[3.5]	(12.8)	I K	20	良好	灰黄	SD7	
29	瓦	丸瓦	高さ [2.8]cm 長さ [4.0]cm			C I K	5	普通	灰白	SD13 凹面に布目压痕	
30	石製品	石材か	長さ 8.3cm、幅 5.5cm、厚さ 2.0cm、重さ 78.0g							SD1 緑泥片岩 淵状の鉄分付着	

墓壙の可能性がある。また、第23号土壙出土の須恵器（第83図1）は、口縁部にタールの付着が顕著である。灯明皿として用いられたものと思われる。

（3）グリッド出土遺物（第83図）

遺構に帰属しない平安時代の遺物を第83図14～30に示した。なお、須恵器を転用した砥具類については、後世に使用された可能性もあるので、中・近世の遺物と一括して掲載した。

14～17は須恵器である。15は赤味の強い色

調だが、硬く焼き締まっている。16は胎土から東海系と思われる。底面はナデ調整されず、粗いロクロナデ痕が残る。17は蓋のつまみ部分である。今回の出土遺物に蓋はほとんど確認されていない。18～24はロクロ土師器である。18・19・24は底部径が著しく小さいもので、10世紀前葉の所産であろう。25～28は灰釉陶器で、塊類は黒笛90号窯式段階である。29は布目瓦の破片である。胎土は軟質で粉っぽい印象を受ける。30は渕状に鉄分が付着した緑泥片岩である。

4. 中・近世の遺構と遺物

中・近世の遺構は、掘立柱建物跡 7 棟、井戸跡 6 基、地下式坑 1 基、火葬遺構 1 基、溝跡 24 条、土壙 315 基が検出された。

(1) 掘立柱建物跡

検出された掘立柱建物跡は計 7 棟であり、東西方向に長軸をもつ建物が主体である。全てが調査区北部から南西部にかけて分布している。第 1・2・5・6 号建物跡は、調査区西部を区画する第 13・14 号溝跡等と有機的な関連があるものと考えられる。個々の建物跡の規模、軸方向等は一覧表（第 27 表）にまとめた。

第 1 号掘立柱建物跡（第 84 図）

J-6・7、K-6 グリッドに位置し、西側は調査区域外にある。重複する第 11 号溝跡、第 2 号掘立柱建物跡より新しい。桁行五間以上、梁間は二間である。

柱間距離は、概ね 1.8m 強であるが、建物東側の P 4～8 間は 2.0m 以上とやや不規則である。覆土には柱痕が残るものが多かった。中央部やや東側からは 2 カ所の焼土が検出された。北寄りの焼土 1 は、深さ 8 cm ほどの掘り方上に焼土が散っている状態であったが、南寄りの焼土 2 は、深さ 32 cm ほどの掘り方に焼土層が形成されていた。同様の焼土跡は、第 2・4～6 号掘立柱建物跡からも検出されている。火処である可能性が考えられるが、性格は明確では無い。

遺物は、中世の青磁碗や片口鉢を始め、17 世紀までの陶器細片が出土している。寛永通寶も古

寛永であり、17 世紀中～後葉頃に構築された建物と考えられる。

第 2 号掘立柱建物跡（第 85 図）

J-7 グリッドに位置し、重複する第 11 号溝跡より新しい。第 1 号掘立柱建物跡とも重複し、第 2 号掘立柱建物跡のほうが古い。

三間四方の建物跡のようにみえるが、柱間距離はやや不規則であり、北西隅の柱穴は確認されなかった。三間×二間の建物跡 2 棟が重複している可能性もあるが、P 4 と P 12 の間に柱穴が認められず、不自然である。従って、P 1・3・6・8 を四隅とする三間×二間の南北棟（身舎）の西部に P 8～12 で構成される一間分の張り出しが付く建物跡と想定した。

建物範囲からは 2 カ所の焼土範囲が確認された。身舎状の南北棟には、ほぼ中央部に焼土 2 が検出されている。一方焼土 1 は西部張り出し部に検出されている。いずれも深さ 10 cm 強のくぼみに焼土ブロックが認められた。

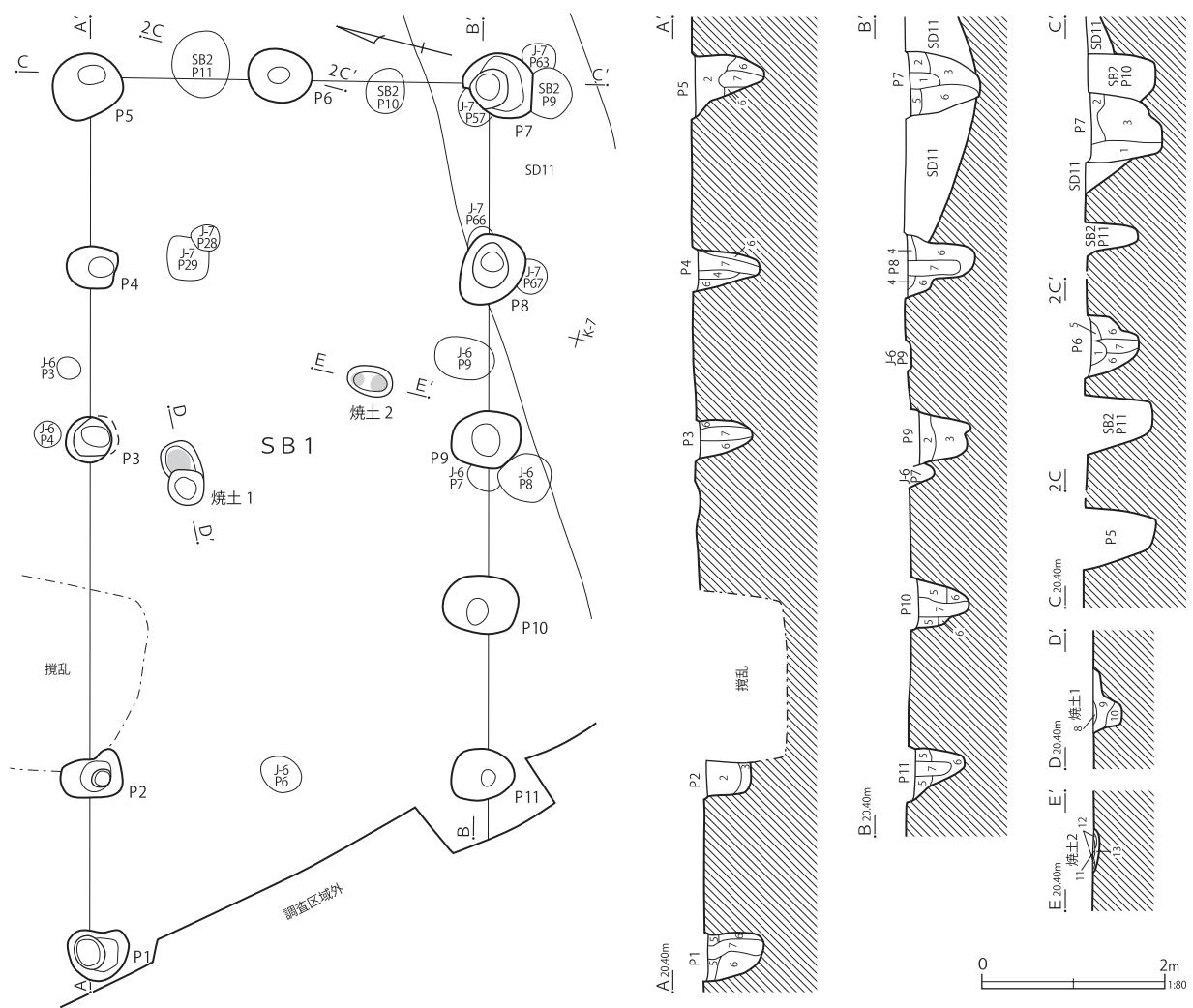
出土遺物は、北宋錢 2 枚とかわらけ 1 点が出土している（第 86 図）。かわらけは砂質の粗い胎土のものであり、16 世紀後半以降に比定される。第 1 号建物跡との重複関係から、16 世紀後半～17 世紀半ばに帰属する可能性が高いであろう。

第 3 号掘立柱建物跡（第 87 図）

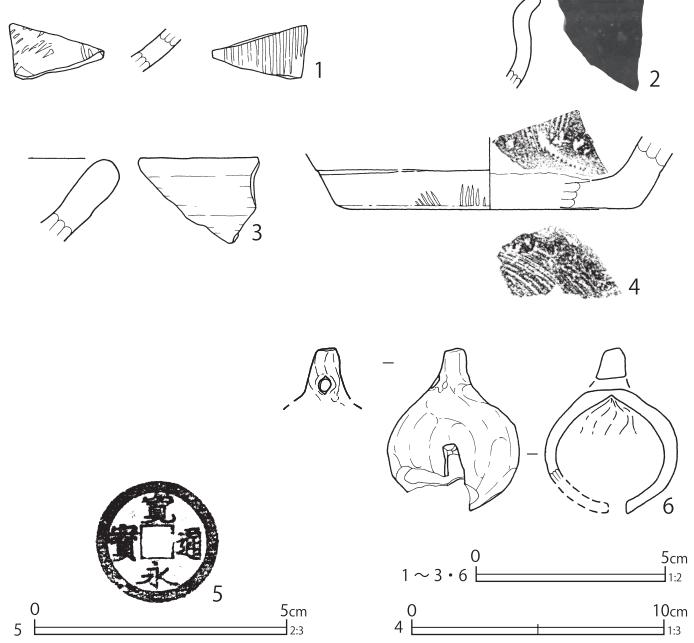
L・M-8 グリッドに位置し、北西隅は調査区域外である。桁行三間、梁間二間の南北に長い建物と考えられる。桁行方向の柱間距離は概ね 1.7

第 27 表 掘立柱建物跡一覧表（第 84～85・87～91 図）

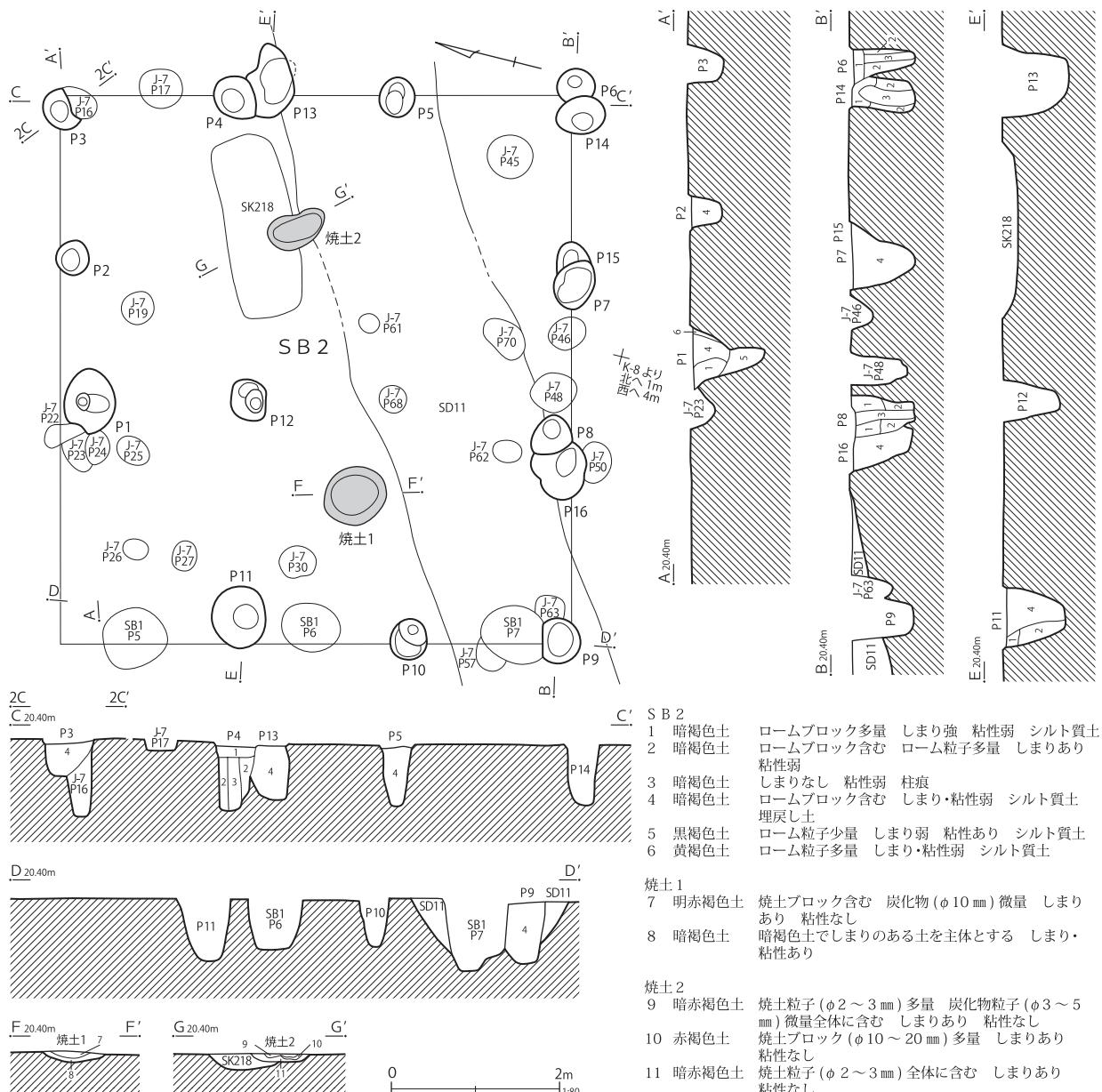
遺構名	グリッド	長軸 /m	短軸 /m	方位	新旧関係	非掲載遺物・備考
SB1	J-6・7 K-6	9.52	4.32	N-77° -E	SD11・SB2 → 本跡	瓦質焰烙（P9, 8 平底）、瀬戸美濃系陶器天目茶碗（P5, 10）
SB2	J-7	6.52	6.20	N-77° -E	SD11 → 本跡 → SB1	かわらけ（P11）
SB3	L・M-8	5.12	2.46	N-10° -W		
SB4	D・E-10	8.15	4.79	N-71° -E		肥前系磁器碗、かわらけ（P20）
SB5	H-5・6	7.76	4.66	N-73° -E		瓦質焰烙（P7 平底）
SB6	G・H-6	6.68	3.72	N-19° -W		志野皿（P2）
SB7	D-4・5	6.12	3.42	N-78° -E		肥前系磁器碗・かわらけ（P1）、火打石（P3 チャート）



- SB 1
- 1 黒褐色土 ロームブロック ($\phi 5 \sim 10$ mm)・粒子少量 灰白色
粘質土含む しまり・粘性あり
 - 2 暗褐色土 ロームブロック ($\phi 30 \sim 50$ mm) 含む ローム
粒子多量 しまり・粘性あり 柱抜取後の埋土
 - 3 黒褐色土 ロームブロック ($\phi 30 \sim 50$ mm) 少量 しまり・
粘性弱 しまり弱くボソボソしている 柱抜取
後の埋土
 - 4 黒褐色土 ローム粒子少量 しまり弱 粘性なし 1層より
ローム 多く含み黄色強い P4は柱抜取か
 - 5 黒褐色土 ロームブロック・粒子少量 しまり強 粘性あり
柱の周囲を埋めた土
 - 6 暗褐色土 ロームブロック ($\phi 30 \sim 50$ mm)・粒子多量 しま
り・粘性あり 柱穴埋土
 - 7 黒褐色土 ローム粒子少量 しまりなし 粘性あり 柱痕
- 焼土 1
- 8 暗赤褐色土 焼土粒子 ($\phi 2 \sim 5$ mm) 多量 層全体に含む
しまり・粘性あり
 - 9 黒褐色土 ローム粒子 ($\phi 2 \sim 5$ mm) 少量が壁際に流れ込む
しまり・粘性なし
 - 10 暗褐色土 ローム土を層全体に縞状に含む しまり・粘性なし
- 焼土 2
- 11 黒褐色土 しまり・粘性あり
 - 12 明赤褐色土 焼土層 しまり強 粘性なし
しまり・粘性なし
 - 13 暗褐色土 しまり・粘性なし



第 84 図 第 1 号掘立柱建物跡・出土遺物

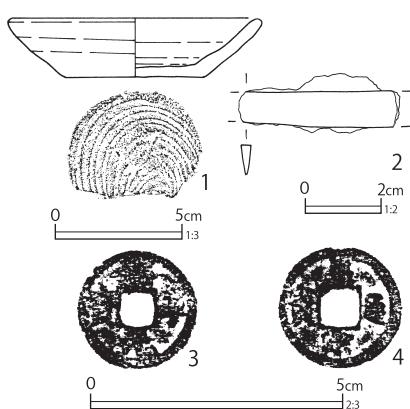


第85図 第2号掘立柱建物跡

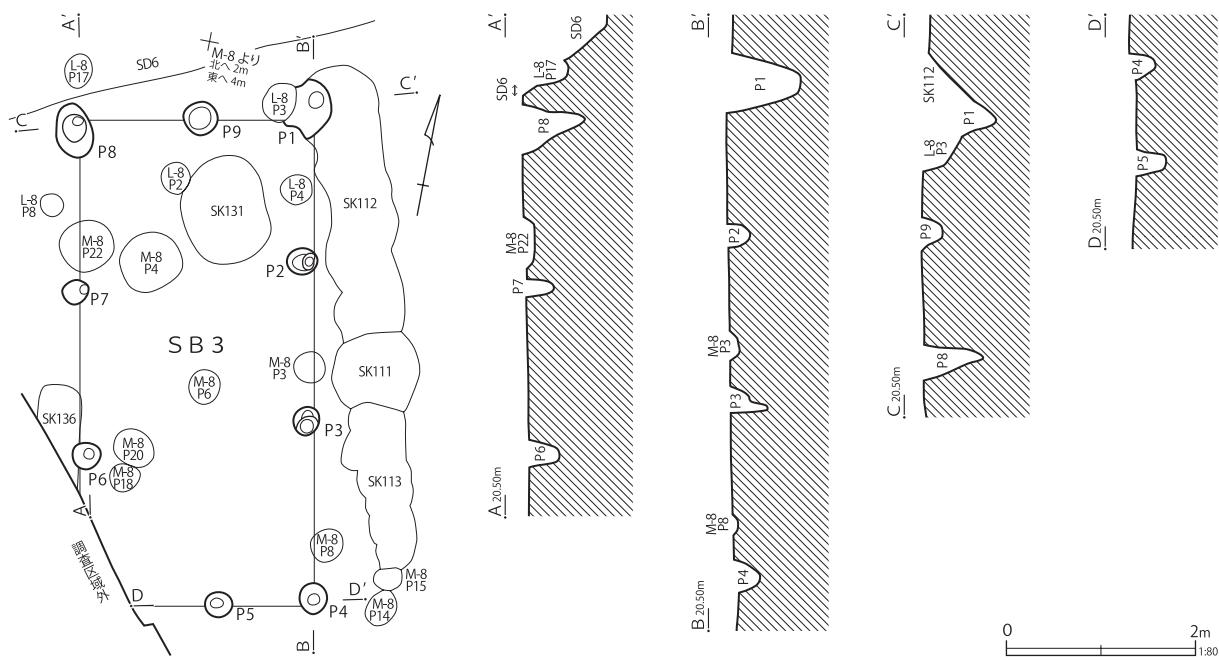
～1.8mであるが、梁間方向ではやや短い。遺物は出土しておらず、時期は不詳である。東部に近接して第113号土壙が平行して掘り込まれているが、土壙の形態から、建物に伴う植栽痕の可能性がある。

第4号掘立柱建物跡（第88図）

D・E-10 グリッドに位置する。柱穴の配列や切り合い関係から、3回の建て替えが想定される。新段階をSB 4 a、中段階をSB 4 b、古段



第 86 図 第 2 号掘立柱建物跡出土遺物



第 87 図 第 3 号掘立柱建物跡

第 28 表 掘立柱建物跡出土遺物観察表 (第 84・86・88・90・91 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	遺構名	備考	図版
1	青磁	碗	—	[1.1]	—	HIK	5	良好	灰白	SB 1	P 11 中国同安窯系 内外面青磁釉 櫛描文 12c ~ 13c 前	35-1
2	陶器	天目茶碗	—	[2.4]	—	IK	5	良好	灰白	SB 1	P 8 濑戸美濃系 内外面鉄釉 16c ~ 17c 前	
3	陶器	片口鉢	—	[2.2]	—	HIK	5	良好	灰白	SB 1	P 5 山茶碗窯系 内外面自然降灰 13c	35-2
4	陶器	擂鉢	—	[2.8]	(12.0)	HIK	10	普通	淡黄	SB 1	P 7 内外面鉄釉 摺目 濑戸美濃系 17c	
5	銅製品	錢貨	径 24.0mm、厚さ 0.9mm、重さ 2.48g							SB 1	P 10 寛永通寶 (古寛永)	
6	土製品	土鉢	最大径 3.4cm、残存高 [4.2]cm、孔径 0.3cm			K	80	良好	灰白	SB 1	P 10 胎土緻密で色調は白色味強い	35-3
1	かわらけ	小皿	(9.6)	2.3	5.5	CHIK	50	普通	にぶい橙	SB 2	P 4 底部糸切痕 (左) 胎土砂質	
2	鉄製品	刀子	長さ [4.5]cm、刃幅 0.85cm、背幅 0.3cm、重さ 6.1g							SB 2	P 8	35-4
3	銅製品	錢貨	径 23.5mm、厚さ 0.9mm、重さ 2.84g							SB 2	P 11 熙寧元寶 真書 北宋 1068 年	35-5
4	銅製品	錢貨	径 24.3mm、厚さ 0.8mm、重さ 1.96g							SB 2	P 11 皇宋通寶 真書 北宋 1038 年	35-6
1	石製品	砥石	長さ 6.6cm、幅 2.2cm、重さ 31.0g							SB 4	P12 流紋岩 完形 4面使用	
2	石製品	砥石	長さ 7.6cm、幅 4.7cm、厚さ 0.9cm、重さ 37.3g							SB 4	P5 粘板岩 欠損あり 4面使用	35-7
1	磁器	碗	(11.4)	[4.7]	—	K	10	良好	白	SB 6	P8 濑戸美濃系 内外面施釉 19c	35-8
2	鉄製品	鉄	長さ [4.4]cm、刃幅 1.0cm、背幅 0.2cm、重さ 5.3g							SB 6	P3	
3	鉄製品	煙管	長さ 6.8cm、小口外径 1.0cm、口付外径 0.4cm、口付内径 0.2cm、重さ 4.8g							SB 6	P4 吸口	35-9
1	磁器	碗	—	[1.9]	(4.2)	K	60	普通	白	SB 7	P8 肥前系 内外面施釉 外面染付 18c	
2	陶器	片口鉢	(18.5)	13.1	11.0	K	60	良好	灰白	SB 7	P13 濑戸美濃系 内外面灰釉 18c	35-10
3	銅製品	錢貨	径 24.8mm、厚さ 1.0mm、重さ 2.42g							SB 7	P3 寛永通寶 (新寛永)	
4	銅製品	錢貨	径 23.2mm、厚さ 1.0mm、重さ 2.90g							SB 7	P16 寛永通寶 (新寛永)	
5	鉄製品	釘	長さ [4.0]cm、幅 0.5cm、厚さ 0.5cm、重さ 5.3g							SB 7	P2	

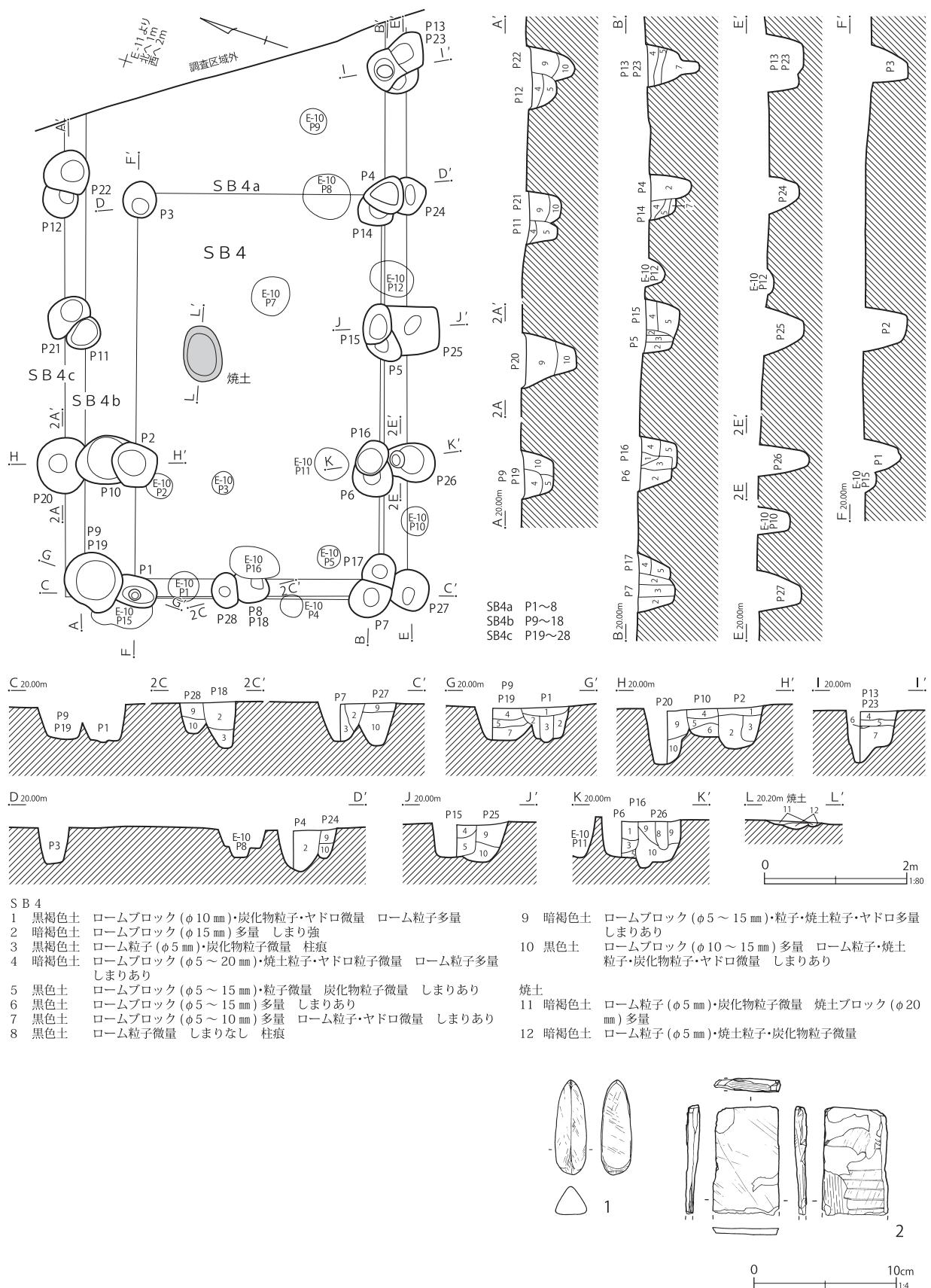
階を SB 4 c として図示する。

SB 4 a は P 1 ~ 8 で構成され、桁行 5.65m、梁間 3.46m の三間 × 二間の建物跡である。柱穴には柱痕が認められるものが多かった。

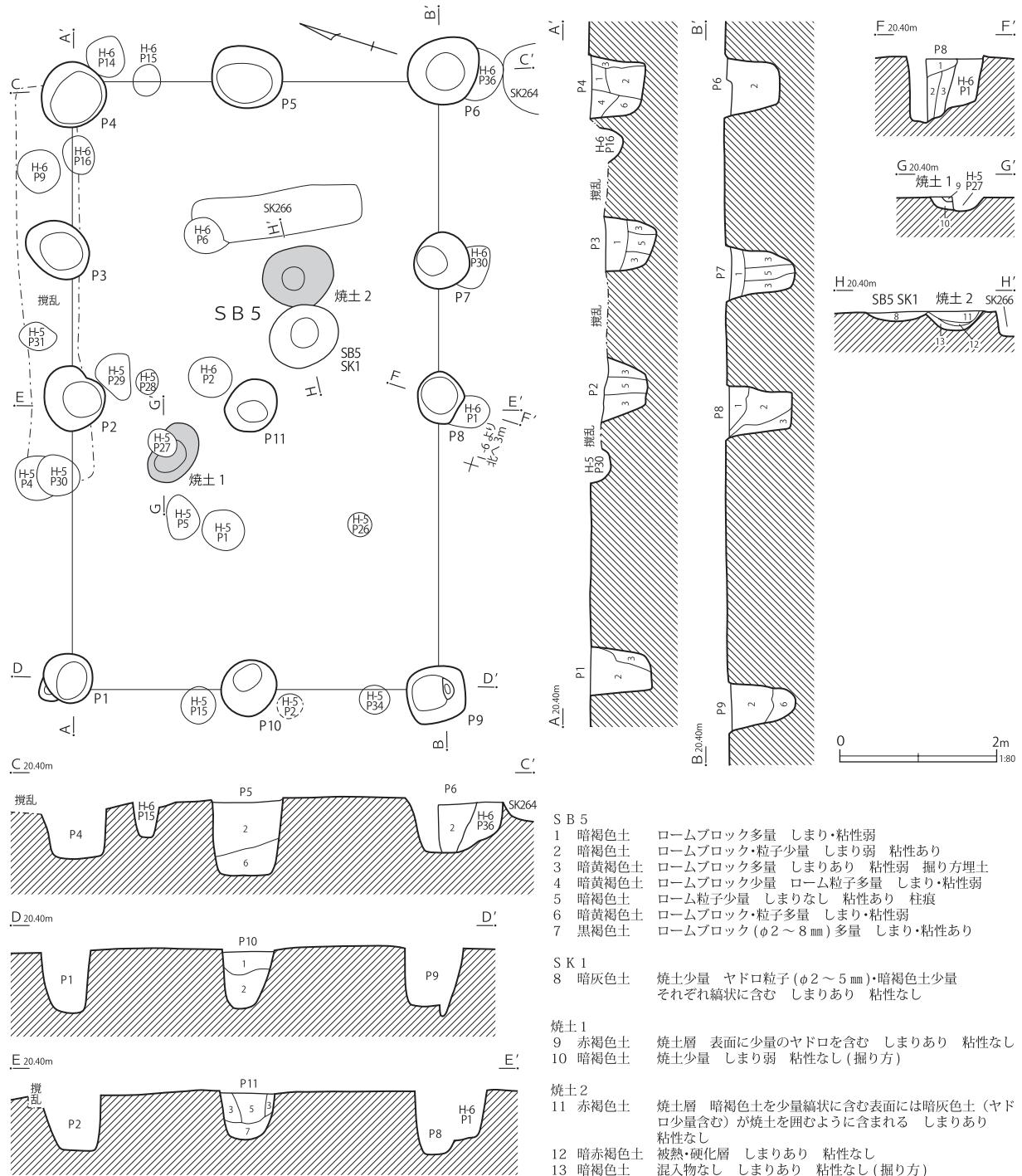
SB 4 b は P 9 ~ 18 で構成され、桁行 8.07m 以上、梁間 4.12m の四間 × 二間の建物跡である。

柱穴覆土は埋め戻しを示すものが主体であった。

SB 4 c は P 19 ~ 28 で構成され、桁行 8.15m 以上、梁間 4.79m の四間 × 二間の建物跡である。柱穴覆土は埋め戻しを示す。P 6・16・26 の重複部から肥前波佐見系の磁器碗片 2 点が出土しており、18 世紀代を中心とした時期に帰属するも



第88図 第4号掘立柱建物跡・出土遺物



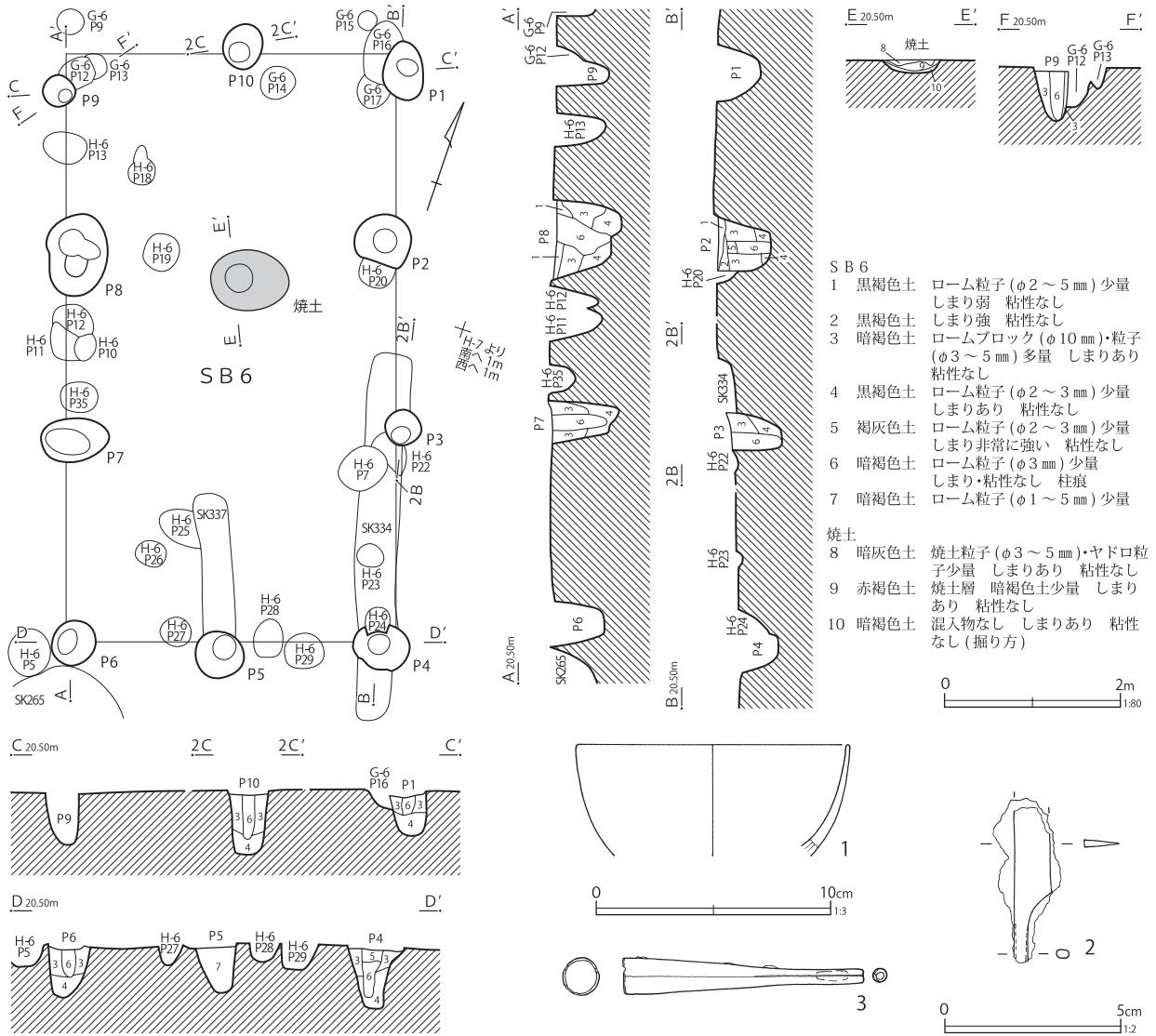
第 89 図 第 5 号掘立柱建物跡

のである。

第 5 号掘立柱建物跡 (第 89 図)

H 5・6 グリッドに位置し、第 13・14 号溝跡によって区画された範囲から検出された。三間 × 二間の建物跡であるが、柱間間隔は一定せず、

特に西部の P 1・2 間、P 8・9 間は 3.75m とかなり広い。一方で、柱穴の規模、底面深度はほぼ一定であった。建物範囲から 2 カ所の明瞭な焼土範囲が検出されており、特に東部の焼土 2 には、被熱に伴う硬化面が形成されていた。



第90図 第6号掘立柱建物跡・出土遺物

第6号掘立柱建物跡 (第90図)

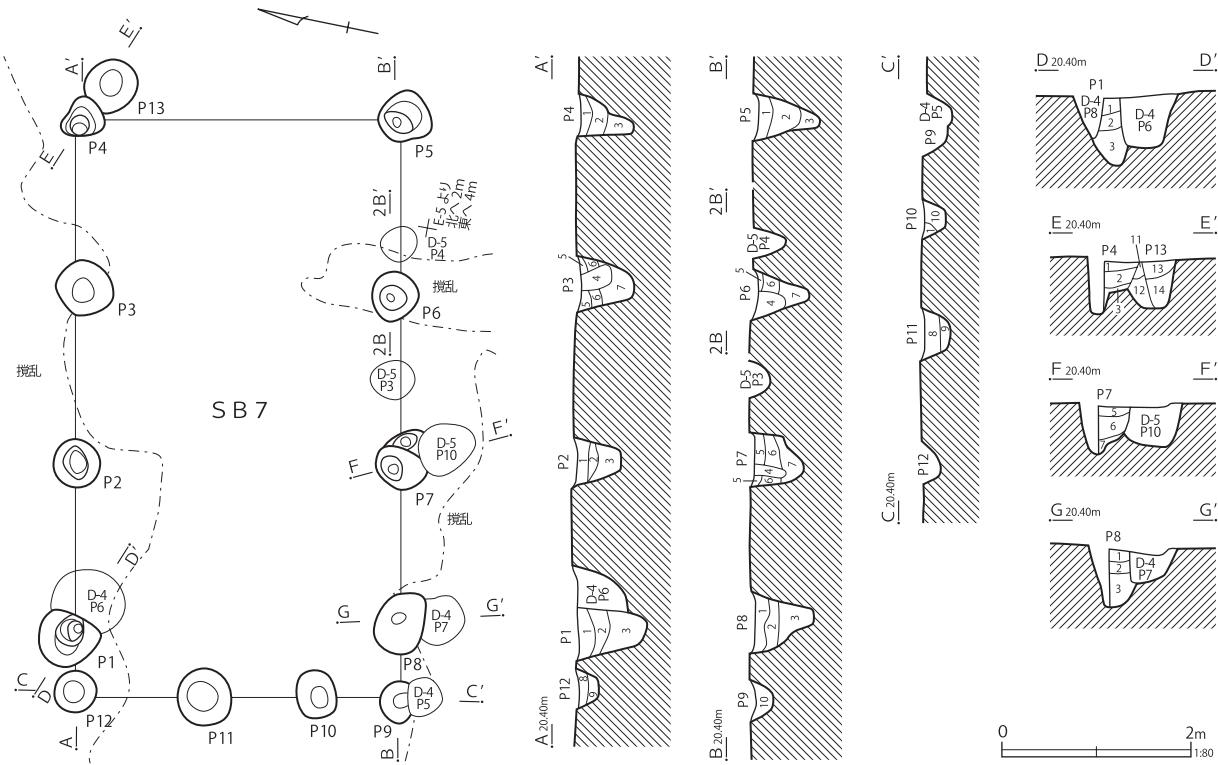
G・H-6グリッドに位置する。第5号掘立柱建物跡とともに第13・14号溝跡による区画内から検出された。三間×二間の建物跡であるが、柱間間隔は一定せず、特に南部のP6とP7、P3とP4の間は2.3m前後とやや広い。この点は第5号建物跡に類似する。土層断面を観察した柱穴のほぼ全てに柱痕が認められた。中央やや北寄りに焼土範囲1ヶ所が検出され、13cm程の掘り込みの中層に焼土層が形成されていた。

瀬戸美濃系磁器碗の破片 (第90図1) が出土しており、19世紀前半以降の構築と考えられる。

第7号掘立柱建物跡 (第91図)

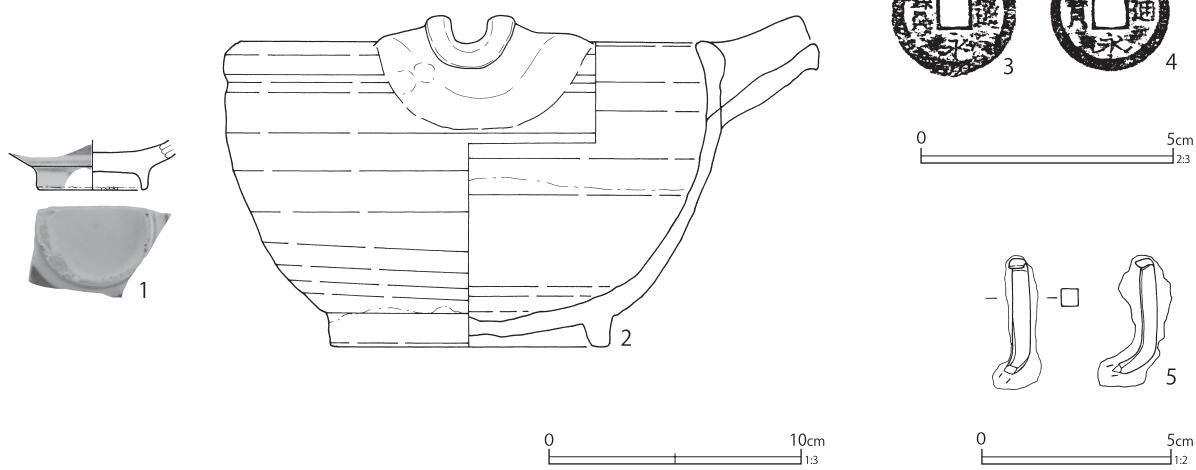
D4・5グリッドに位置する。三間×一間の建物跡である。西側に65~85cm程度離れて4基の浅いピット (P9~12) が検出され、梁間方向に沿って並んでいた。廂等の付属施設と考えられる。柱穴は基本的に埋め戻しているが、P3・6・7のように柱痕が確認されたものもある。

遺物は、陶磁器・砥石・鉄釘・古銭等が出土している。第91図2の陶器片口鉢は、北東隅のP13から出土し、ほぼ完形に復元された。出土遺物の様相から、18世紀後葉以降の構築と考えられる。



SB 7

- | | |
|----------|---|
| 1 灰褐色土 | ロームブロック ($\phi 2 \sim 10 \text{ mm}$)・ヤドロ粒子 ($\phi 2 \sim 5 \text{ mm}$) 少量
焼土粒子・炭化物粒子微量 しまり・粘性あり 柱抜取後の埋土 |
| 2 灰褐色土 | ローム粒子 ($\phi 2 \sim 5 \text{ mm}$) 少量 烧土粒子・炭化物粒子・ヤドロ
粒子 ($\phi 2 \sim 5 \text{ mm}$) 微量 しまり・粘性あり 柱抜取後の埋土 |
| 3 黒灰褐色土 | ロームブロック ($\phi 2 \sim 10 \text{ mm}$)・炭化物粒子・ヤドロブロック
($\phi 2 \sim 10 \text{ mm}$) 微量 しまり・粘性あり 柱抜取後の埋土 |
| 4 黑褐色土 | ヤドロ粒子 ($\phi 2 \sim 5 \text{ mm}$) 微量 ヤドロ粒子 ($\phi 2 \sim 3 \text{ mm}$) 上層
に微量 しまりなし 粘性あり 柱痕 |
| 5 灰褐色土 | ローム粒子 ($\phi 2 \sim 5 \text{ mm}$) 少量 烧土粒子・炭化物粒子・ヤドロ
粒子 ($\phi 2 \sim 3 \text{ mm}$) 微量 しまり強 粘性あり 挖方埋土 |
| 6 灰褐色土 | ロームブロック ($\phi 2 \sim 20 \text{ mm}$) 少量 烧土粒子・炭化物粒子・
ヤドロブロック ($\phi 2 \sim 10 \text{ mm}$) 微量 しまり強 粘性あり
挖方埋土 |
| 7 灰褐色土 | ロームブロック ($\phi 2 \sim 10 \text{ mm}$)・焼土粒子 ($\phi 2 \sim 3 \text{ mm}$)・炭化物
粒子・ヤドロ粒子 ($\phi 2 \sim 3 \text{ mm}$) 微量 しまり強 粘性あり
掘方埋土 |
| 8 灰褐色土 | ローム粒子 ($\phi 2 \sim 5 \text{ mm}$) 微量 ヤドロ粒子 ($\phi 2 \sim 3 \text{ mm}$) 少量
しまりなし 粘性あり 柱抜取後の埋土 |
| 9 黑褐色土 | ロームブロック ($\phi 2 \sim 30 \text{ mm}$) 少量 炭化物粒子・ヤドロ粒子
($\phi 2 \sim 3 \text{ mm}$) 微量 しまり・粘性あり 柱抜取後の埋土 |
| 10 暗褐色土 | ロームブロック ($\phi 2 \sim 50 \text{ mm}$) 少量 烧土粒子・炭化物粒子・
ヤドロ粒子 ($\phi 2 \sim 3 \text{ mm}$) 微量 しまりなし 粘性あり |
| 11 灰褐色土 | ロームブロック ($\phi 2 \sim 10 \text{ mm}$)・ヤドロブロック ($\phi 2 \sim 20 \text{ mm}$)
少量 烧土粒子微量 しまり強 粘性なし 柱抜取後の埋土 |
| 12 黑褐色土 | ローム粒子 ($\phi 2 \sim 3 \text{ mm}$)・焼土粒子・炭化物粒子微量 ヤドロ
粒子 ($\phi 2 \sim 5 \text{ mm}$) 少量 しまり・粘性なし 柱抜取後の埋土 |
| 13 暗黄褐色土 | ロームブロック ($\phi 2 \sim 30 \text{ mm}$) 多量 ヤドロ粒子 ($\phi 2 \sim 5 \text{ mm}$)
微量 しまり強 粘性あり 挖方埋土 |
| 14 黑褐色土 | ロームブロック ($\phi 2 \sim 10 \text{ mm}$)・炭化物粒子・ヤドロ粒子 ($\phi 2 \sim 5 \text{ mm}$) 微量 しまり強 粘性ややあり 挖方埋土 |



第 91 図 第 7 号掘立柱建物跡・出土遺物

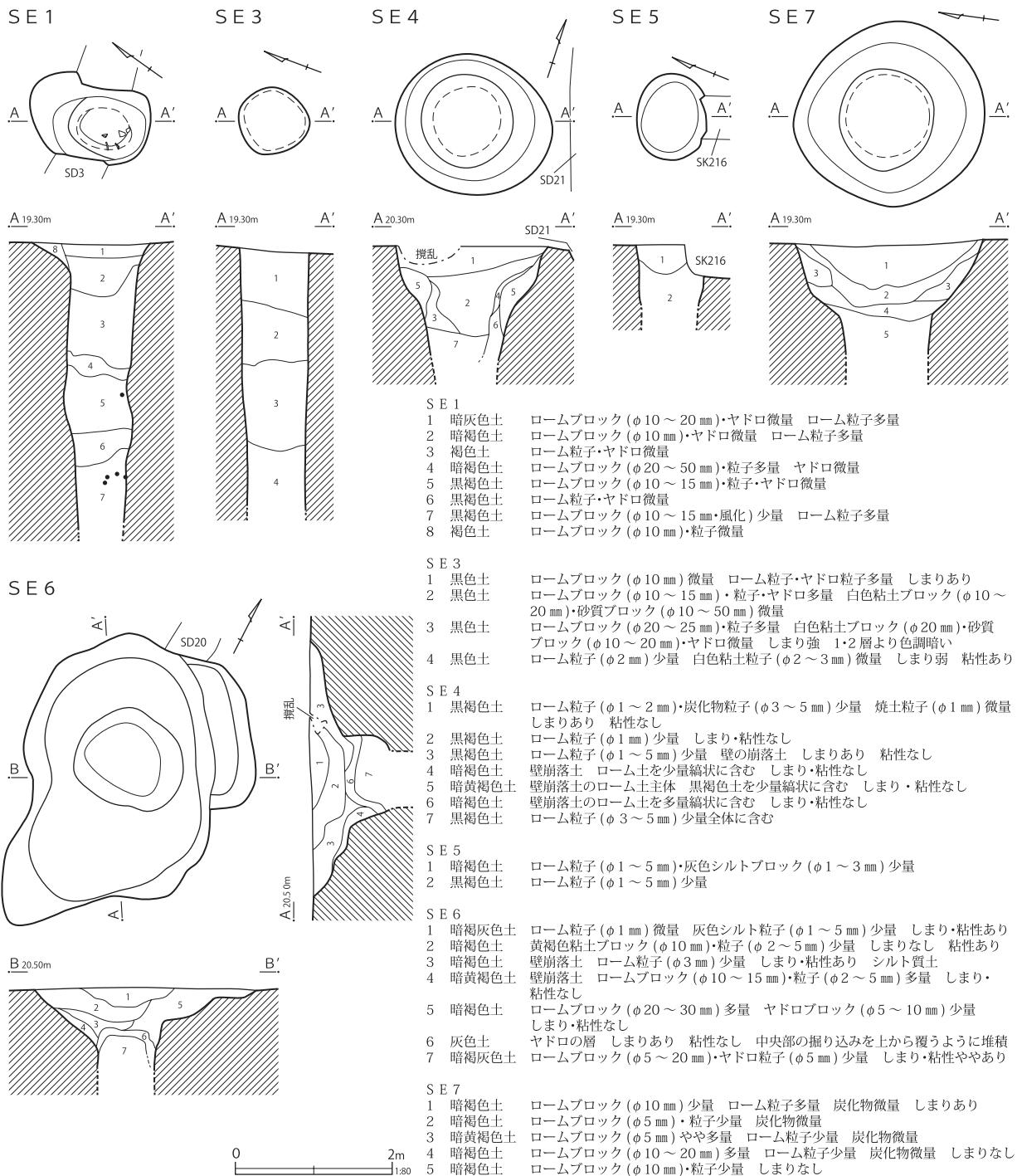
(2) 井戸跡

検出された井戸跡は6基である。上部が漏斗状に広がり、下部が円筒形を成すものが多い。図を第92図、出土遺物を第93図に示した。計測値等については一覧表（第29表）に示した。

第1号井戸跡の覆土下層からは、瀬戸美濃系陶

器播鉢（第93図1）、瓦質土器焙焼（3）等が出土しており、18世紀前半までは使用されていたものと考えられる。第93図2の播鉢片は、丹波系陶器に類似するが、胎土がより白色味が強く、信楽産の可能性もある。

第1号井戸跡のほかは出土遺物が少なく、時期



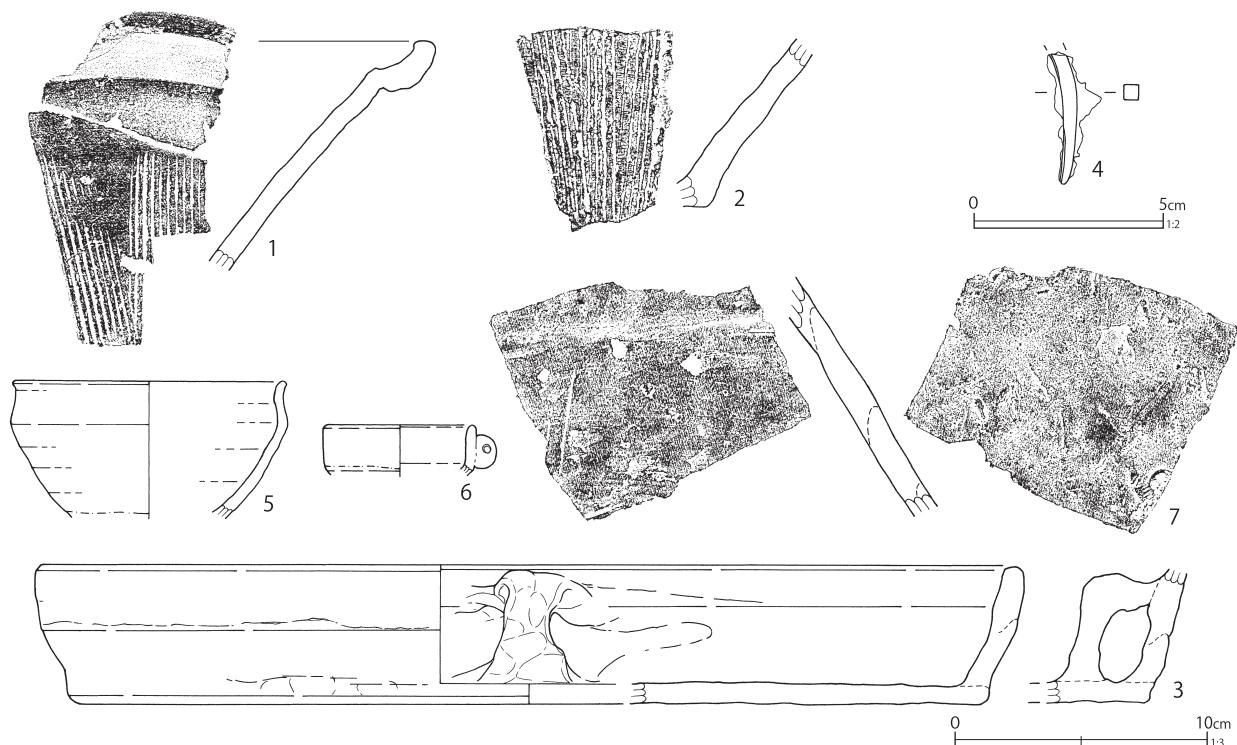
第92図 井戸跡

第29表 井戸跡一覧表（第92図）

遺構名	グリッド	長軸 /m	短軸 /m	新旧関係	非掲載遺物・備考
SE1	N-13	1.50	0.94		瀬戸美濃系陶器灰釉皿（直重痕）・瓦質土器焰烙・土師器片
SE2	-	-	-		欠番（第1号地下式坑へ変更）
SE3	M-14	0.84	0.84		かわらけ（砂質）・瓦質土器焰烙・土師器・須恵器
SE4	G-6	1.96	1.96		瀬戸美濃系陶器灰釉皿（大窯期）・須恵器・緑泥片岩細片
SE5	I-6	1.12	0.88	本跡→SK216	旧称 SK215
SE6	K・L-8	3.26	2.46		肥前系磁器瓶類（18C～）・須恵器 旧称 SK237
SE7	T-15・16	10.75	3.15		

を特定し難い。第6号井戸跡は、肥前系磁器の出土から18世紀以降の埋没と考えられる。第3号井戸跡は、天目茶碗（5）の出土から17世紀頃に遡る可能性がある。第4号井戸跡からも16世紀代の陶器皿が出土しており、構築時期が中世に

遡る可能性もある。近世の陶器餌入れ（第93図6）も出土しているが、上層の搅乱からの出土であり、直接に遺構の時期を示すものではない。また、第7号井戸跡からは、中世の常滑焼破片（7）が出土しているが、他に遺物は認められなかった。



第93図 井戸跡出土遺物

第30表 井戸跡出土遺物観察表（第93図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	遺構名	備考	図版
1	陶器	擂鉢	-	[9.0]	-	I K	5	良好	にぶい黄橙	SE1	瀬戸美濃系 内外面錫釉 内面擂目 17c 後～18c前	
2	陶器	擂鉢	-	[6.6]	-	E H I K	5	普通	にぶい黄橙	SE1	丹波系（信楽か）内面擂目（一単位6本）	35-11
3	瓦質土器	焰烙	(38.3)	5.4	(35.3)	E H I K	20	普通	灰黄	SE1	底部シワ状痕 外面煤付着 内耳遺存	35-12
4	鉄製品	釘	長さ [3.4]cm、幅 0.4cm、厚さ 0.4cm、重さ 1.9g							SE1		
5	陶器	天目茶碗	(10.5)	[5.4]	-	I K	15	普通	浅黄橙	SE3	瀬戸美濃系 内外面鉄釉 17c前	35-13
6	陶器	餌入れ	(5.7)	[2.0]	-	H K	10	良好	灰白	SE4	瀬戸美濃 内外面灰釉 上層搅乱中	
7	陶器	甕	-	[9.5]	-	C E I K	10	普通	にぶい橙	SE7	常滑 15～16c	

(3) 地下式坑

第1号地下式坑（第94図）

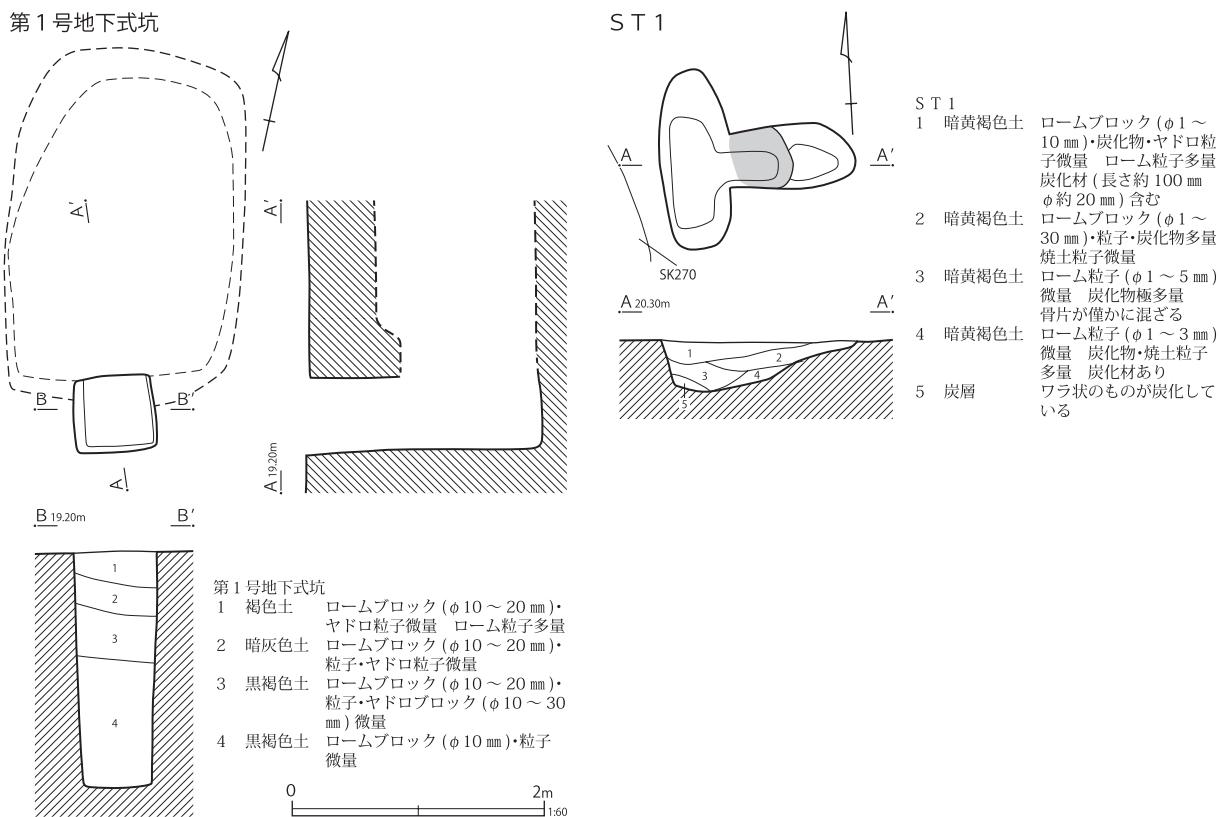
地下式坑は、調査区南端部に近いM・N-14グリッドから1基検出された。当初、第2号井戸跡として調査していたが、確認面から70cm程下部で主室の空洞部が開口し、地下式坑の豊坑部であることが分かった。主軸方向はN-20°-Wを指し、南方に向かって開口する。豊坑部は一辺0.62～0.66mの方形プランで、深さは1.86mであった。豊坑部の覆土は大きく4層に分けられ、水平堆積であることから人為的に埋め戻されていると考えられる。ただし、1～3層にはヤドロの混入が確認されており、下部と上部で若干土層が異なっている。主室部は一部空洞であったが、安全性の問題から調査できなかった。簡易な測量の結果、長さ約2.4m、幅約1.8mの遺存が確認

されている。天井部は一部崩落していたが、主室内の高さは1.25m程であった。遺物の出土は無いが、中世に帰属する可能性が高い。

(4) 火葬遺構

第1号火葬遺構（第94図）

調査区中央部のG-8グリッドから1基検出された。平面プランは「T」字状である。西部の主体部（燃焼部）は長さ1.43m、幅0.53mであり、軸方向はN-3°-Wを示す。東側に長さ1.00m、幅0.50mの張り出し部が付属する。主体部覆土の3層中に骨片が僅かに混在しており、その下の5層には藁状の炭化物が認められた。焼土層は張り出し部の主体部寄りに認められた。一方、張り出し部東側底面では炭層が検出された。遺物は出土しておらず、詳細な時期は不明である。形態から中世に帰属する可能性がある。



第94図 第1号地下式坑・第1号火葬遺構

(5) 溝跡

検出された溝跡は24条で、いずれも近世の遺構と考えられる。土層断面図を第96・97図、出土遺物を第98～100図、規模等を一覧表（第31表）に示した。

これらの溝跡のうち、調査区南西部から検出された第2号溝跡からは、近世陶磁器類が多量に出土している。その様相から、18世紀中葉～後葉頃に埋没したものと想定される。

第6号溝跡・第11号溝跡は、西から東へ平行して走る溝跡であり、規模も比較的大きい。覆土には平安時代の遺物が多量に含まれていたが、僅かに磁器や煙管が出土しており、近世の所産であることが窺われる。

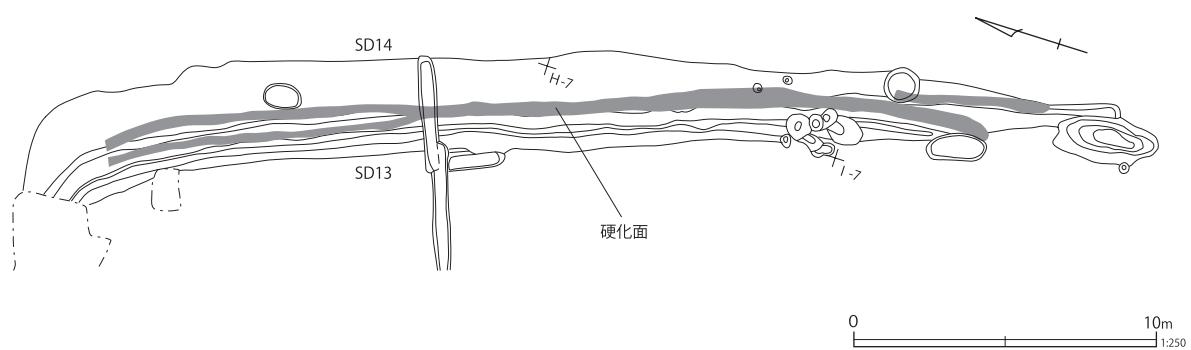
調査区北西部に展開する第13・14・21～23

号溝跡は複雑に重複しているが、屋敷跡等の区画溝として機能していた可能性が考えられる。第13・14号溝跡では上面に硬化面が形成されており、埋没過程で通路として使用されていた時期があつたようである（第95図）。なお、第99図51に示した土師質土器は、東海系羽釜の破片である。関東地方では東京湾沿岸を中心に少数出土するが、前領家遺跡の周辺ではあまり出土していない。16～17世紀頃の所産である。

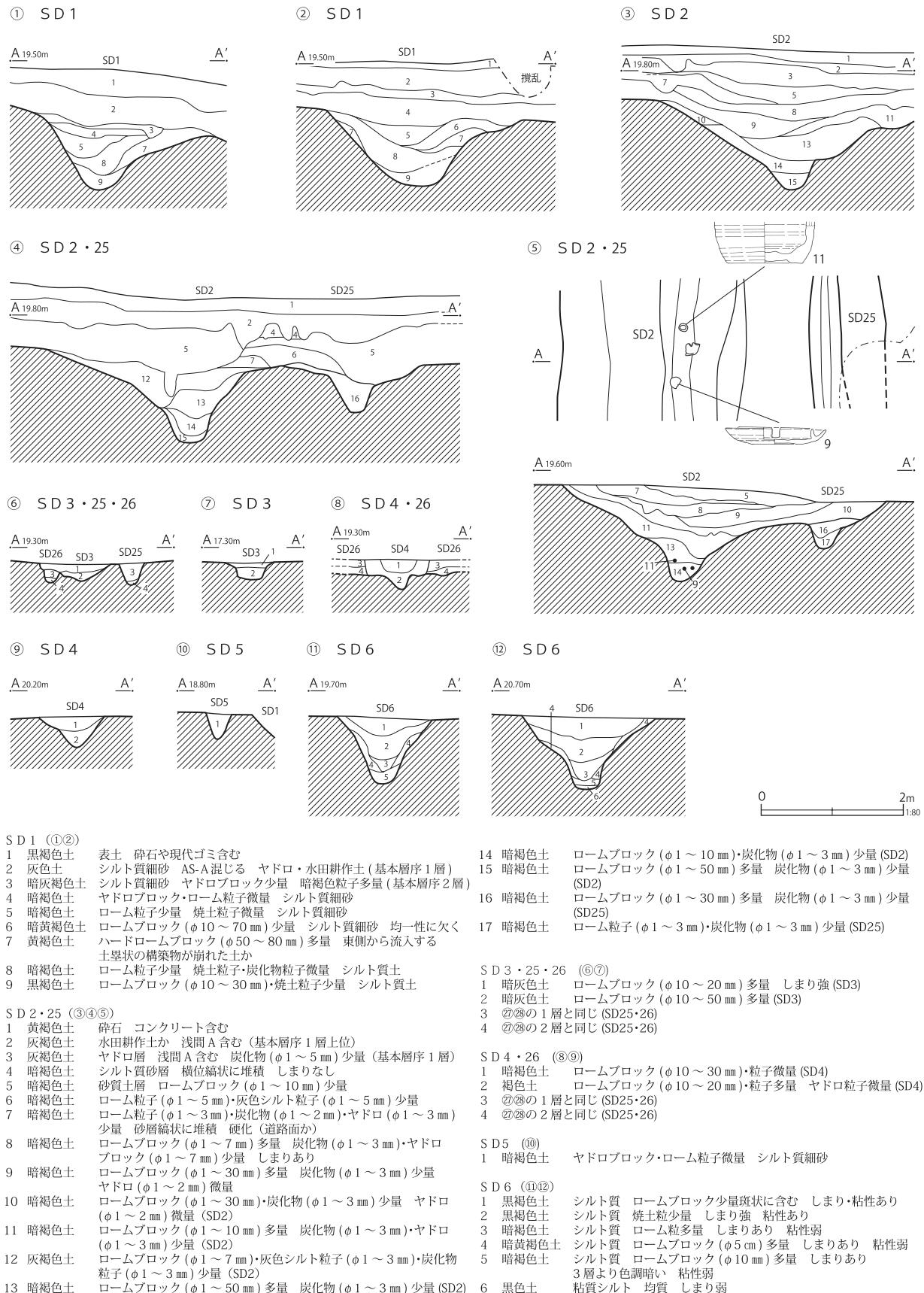
第25号溝跡・第26号溝跡は、平行して走る比較的小規模な溝である。西部で第2号溝跡と重複している。調査時には道路遺構の側溝と認識されている。現道につながる道路の痕跡である可能性があるが、硬化面等の道路跡と認定する積極的な証拠は得られなかった。

第31表 溝跡一覧表（第95～97図）

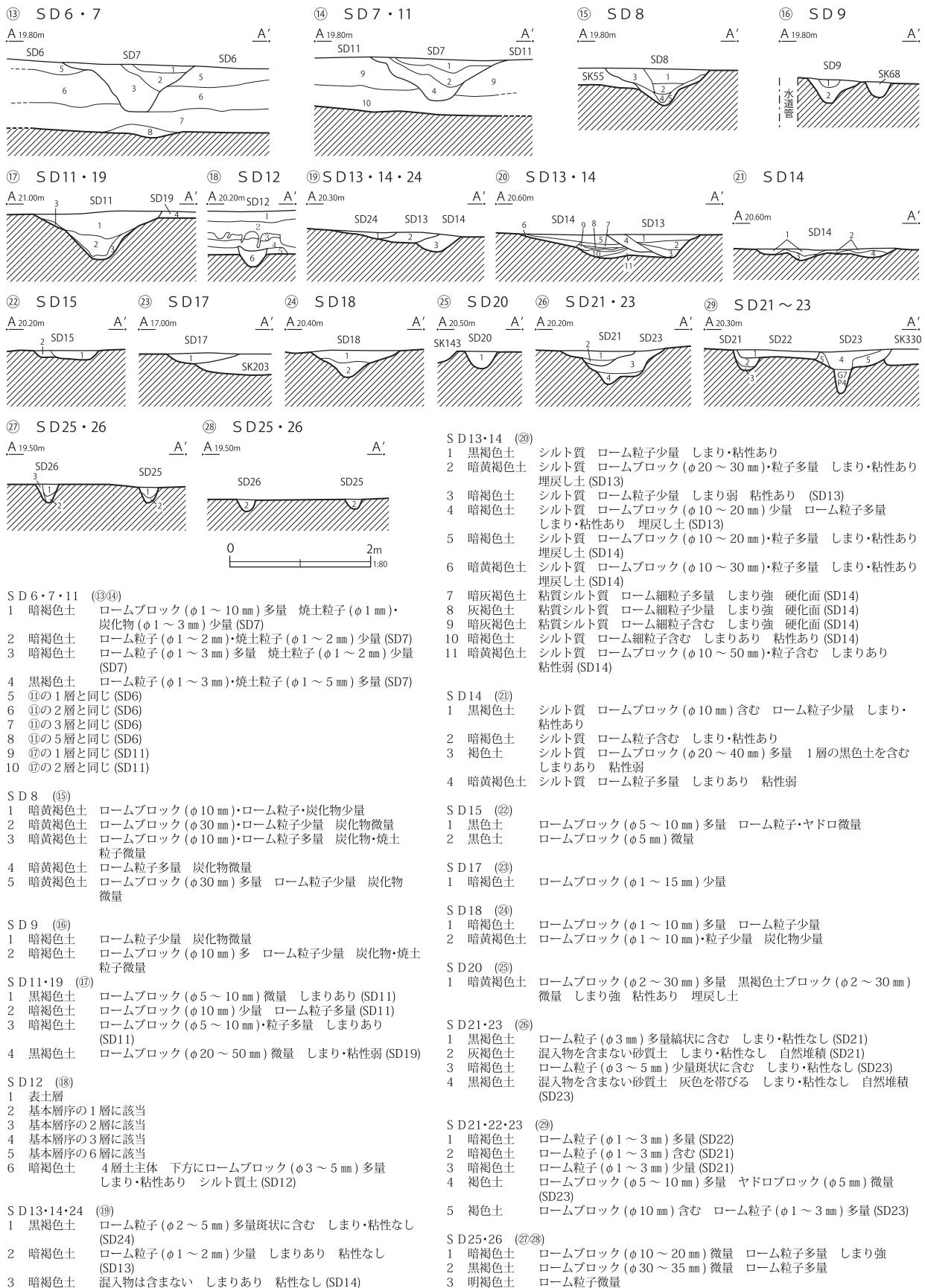
遺構名	グリッド	長さ/m	幅/m	深さ/m	断面形	方位	走行方向	新旧関係、備考
SD1	J～L-15 L～0-16	28.50	2.10～3.10	1.03～1.05	逆台形	N-16° -W	南→北	SK1-3・SK39→本跡 近代磁器を含む
SD2	N～P-12 P-13	19.50	3.00	1.14～1.30	逆台形	N-15° -W	北→南	SD25→本跡
SD3	N-12, 13	13.00	0.35～0.70	0.20～0.23	逆台形	N-32° -W N-75° -E	北→南か N-13G で東へ	N-14G でSD4に接続 SK5・SD25・26→本跡→SK24・SD4・SE1
SD4	M, N-13 N, 0-14	14.70	0.48～1.35	0.40～0.60	薬研形	N-20° -W	南→北	SD3・SD25・26・SK24→本跡→SK15
SD5	L, M-16	6.50	0.33	0.25～0.33	U字形	N-12° -W	南→北	
SD6	I-13, 14 J-11～13 K-9～11 L-8～10	71.60	1.55～1.88	0.66～0.84	逆台形	N-62° -E	西→東	SK62・129→本跡→SD7・SK109・197
SD7	G, H-12 H～J-13	45.00	1.63～2.00	0.48～0.66	薬研形	N-18° -W	南→北	SD6・11・SK59・326→本跡
SD8	K-13, 14 L-14	17.00	0.80～1.50	0.44～0.48	薬研形	N-18° -W	北→南か	SK55→本跡
SD9	J-13 J～L-14	15.30	0.36～0.96	0.30～0.36	薬研形	N-18° -W	南→北	
SD10	-	-	-	-	-	-	-	欠番
SD11	J, K-6, 7 I, J-8 I-9 H, I-10 H-11 G, H-12	71.50	1.73～1.80	0.65～0.68	逆台形	N-62° -E	西→東	SD19・SK324・325→本跡→SD7・SB1・2
SD12	G, H-13	2.50	0.45～0.82	0.18	U字形	N-73° -W	-	
SD13	F-6, 7 G-4, 5, 7 H-7, 8 I-8	57.50	0.90～1.32	0.14～0.27	皿形	N-68° -E		SD14→本跡→SD24・317
SD14		63.00	0.78～1.53	0.23～0.39	皿形	N-23° -W	南→北→西	SK339→本跡→SD13・SK317
SD15	G-9, 10	9.70	1.80～2.00	0.06～0.13	皿形	N-28° -W	南→北	
SD16	-	-	-	-	-	-	-	欠番
SD17	I-7 J-5～7	11.80	0.73～0.93	0.07～0.15	皿形	N-72° -W	東→西	SK203→本跡
SD18	I-6 J-5, 6	12.30	1.27～1.40	0.36～0.47	逆台形	N-67° -E	東→西	
SD19	H, I-9	10.03	0.35～0.40	0.07～0.10	皿形	N-28° -W	-	本跡→SD19
SD20	K-8	5.00	0.32～0.42	0.14～0.23	U字形	N-27° -W	南→北	本跡→SK243・244
SD21	G, H-6, 7	33.50	1.53～1.85	0.20～0.42	U字形	N-78° -E N-15° -W	南→北 F5G で西へ	SD23→本跡→SD22
SD22	G-6, 7	8.30	1.53～1.85	0.08～0.21	皿形	N-78° -E N-20° -W	南→北	SD21・23→本跡
SD23	F-5, 6 G-6, 7 H-7	26.50	0.38～1.20	0.27～0.48	薬研形	N-20° -W	南→北→西	SK330→本跡→SD22・SK177・332
SD24	F, G-6	4.70	1.07	0.09～0.21	皿形	N-80° -E	西→東	SD13→本跡
SD25	M-13, 14	34.30	0.30～1.25	0.17～0.69	逆台形	N-65° -E N-13° -W	東→西→南	旧称S01(北溝) 本跡→SD2・3・4、SK7・8 SD26と対の道路側溝か
SD26	M-14 N12～14	18.00	0.35～0.47	0.15～0.27	U字形	N-65° -E	東→西	旧称S01(南溝) 本跡→SK8・SD4・3 SD25と対の道路側溝か



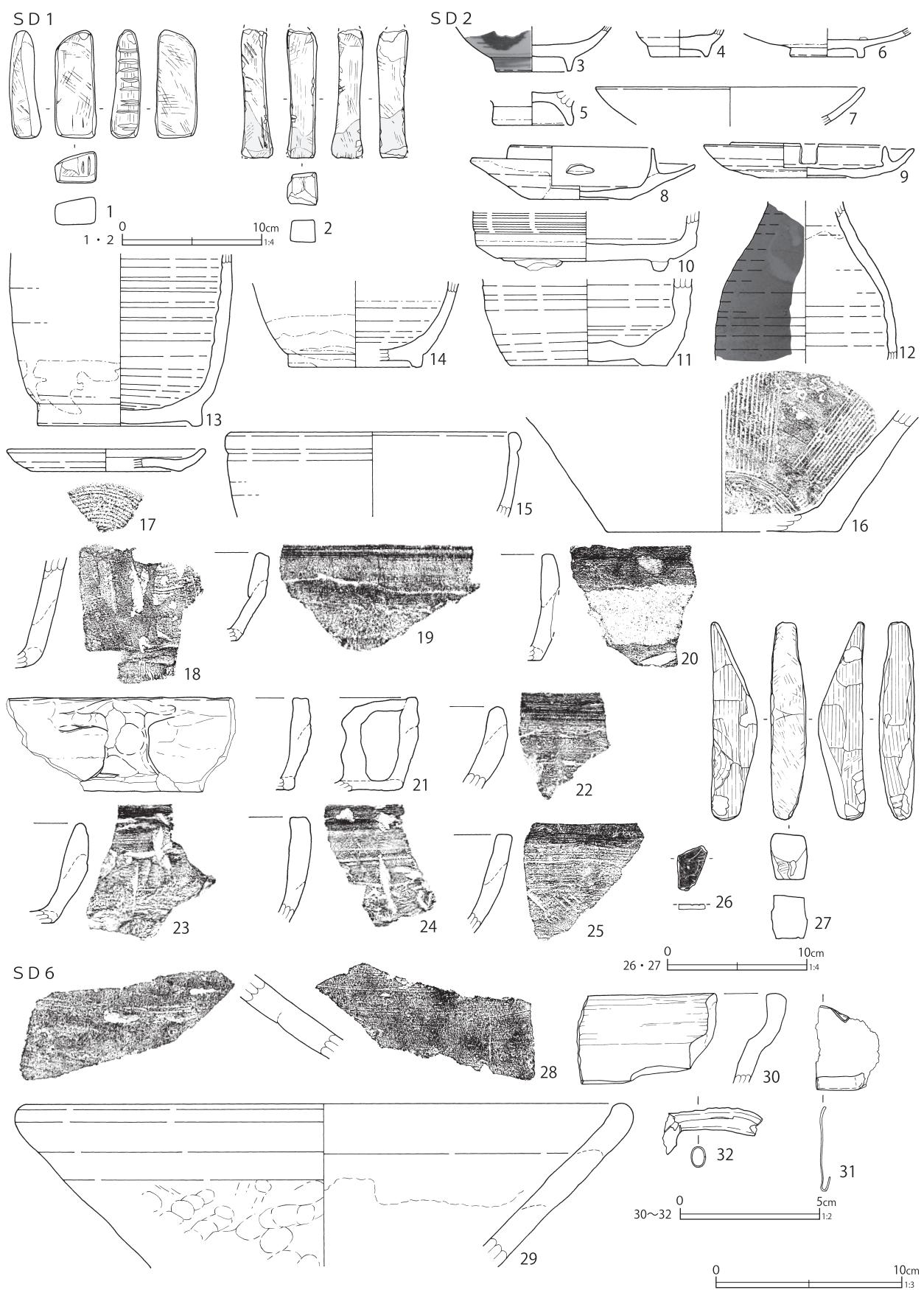
第 95 図 溝跡分布図・第 13・14 号溝跡硬化範囲



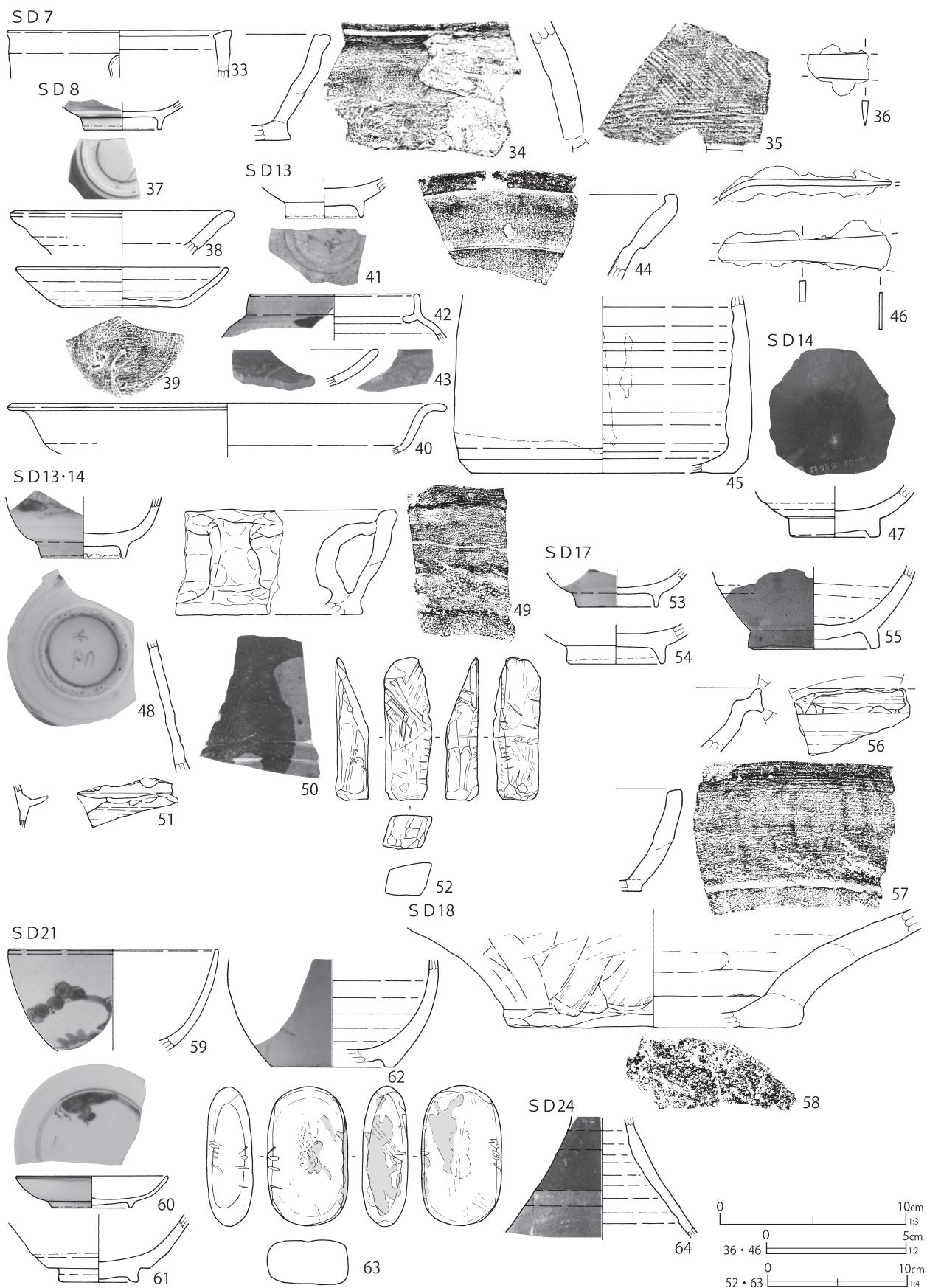
第96図 溝跡土層断面 (1)



第97図 溝跡土層断面 (2)

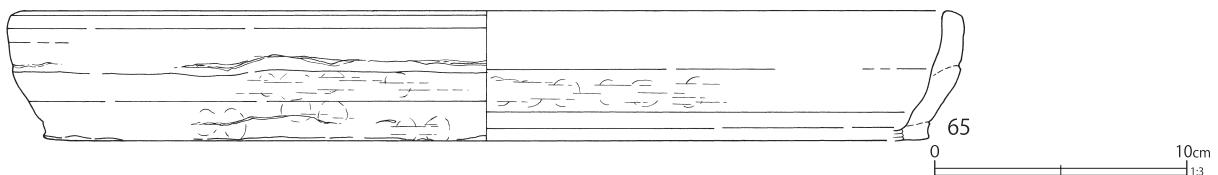


第98図 溝跡出土遺物 (1)



第99図 溝跡出土遺物 (2)

SD 25



第 100 図 溝跡出土遺物 (3)

第 32 表 溝跡出土遺物観察表 (第 98 ~ 100 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	遺構名	備考	図版
1	石製品	砥石		長さ 7.7cm、幅 3.0cm、厚さ 2.2cm、重さ 68.6g						SD1	流紋岩 完形 5面使用	35-14
2	石製品	砥石		長さ [9.3]cm、幅 2.2cm、厚さ 2.3cm、重さ 57.9g						SD1	流紋岩 4面使用 被熱・黒色化	35-15
3	磁器	碗	—	[2.4]	4.0	K	40	良好	灰白	SD2	肥前系 内外面施釉 外面染付 (コンニヤク判) 18c 前	35-16
4	磁器	小壺か	—	[1.5]	3.0	K	20	良好	灰	SD2	肥前系 内外面施釉 被熱	
5	陶器	碗	—	[1.8]	4.2	I K	15	普通	にぶい黄橙	SD2	肥前系 内外面灰釉 17c 後 (呉器手)	
6	陶器	平碗	—	[1.5]	4.0	H I K	30	良好	灰黃	SD2	京都信楽系 内外面灰釉 18c	
7	陶器	皿	(14.3)	[2.0]	—	K	15	良好	灰白	SD2	肥前内野山窯系 内面銅綠釉 外面透明釉 17c 末~18c 前	
8	陶器	灯明皿	12.0	2.8	5.5	I K	100	良好	灰褐	SD2	志戸呂系 内外面鉄釉 煤付着 17c 後	35-17
9	陶器	灯明皿	11.2	1.9	5.0	K	80	良好	褐灰	SD2	瀬戸美濃系 内外面鉄釉 18c 中~後	35-18
10	陶器	香炉	—	[3.1]	(9.4)	I K	25	良好	灰白	SD2	瀬戸美濃系 内外面灰釉 18c 中	
11	陶器	小瓶	—	[4.6]	8.4	H K	30	良好	灰黃	SD2	瀬戸美濃系 内外面長石釉 外面一部に銅綠釉 瀬戸美濃系 17c 前 (志野)	35-19
12	陶器	徳利	—	[8.6]	—	H I K	20	普通	灰白	SD2	瀬戸美濃系 外面灰釉 18c 中	35-20
13	陶器	徳利	—	[9.2]	—	H I K	30	普通	黄橙	SD2	瀬戸美濃系 外面飴釉 18c 前~中	
14	陶器	徳利	—	[4.6]	(7.1)	H I K	15	普通	明黄褐	SD2	瀬戸美濃系 外面鉄釉 (黄褐色) 18c 前	
15	陶器	片口鉢	(15.2)	[4.5]	—	E I K	20	良好	灰白	SD2	瀬戸美濃系 内外面灰釉	
16	陶器	擂鉢	—	[6.4]	(12.2)	E I K	20	普通	灰黃	SD2	瀬戸美濃系 内外面鉛釉 内面擂目 被熱	
17	かわらけ	小皿	(10.4)	[1.1]	(8.0)	C H I K	25	普通	浅黄橙	SD2	底部糸切痕 胎土砂質	
18	瓦質土器	火鉢	—	[6.0]	—	E D I K	10	普通	灰白	SD2	外面縦ヘラナデ、下端部横ヘラケズリ	35-21
19	瓦質土器	焙烙	—	[4.7]	—	C E I K	10	普通	褐灰	SD2	底部~体部下位シワ状痕 外面煤付着	
20	瓦質土器	焙烙	—	5.6	—	C E I K	10	普通	灰白	SD2	底部シワ状痕 体部下位強いヘラナデ	
21	瓦質土器	焙烙	—	4.9	—	E H I K	5	普通	黄灰	SD2	底部~体部下位シワ状痕 外面煤付着	35-22
22	瓦質土器	焙烙	—	[4.4]	—	C E H I K	10	普通	灰白	SD2	外面煤付着 外面横ヘラケズリ2段以上	
23	瓦質土器	焙烙	—	5.3	—	H I K	10	普通	淡黄	SD2	体部下位シワ状痕、中位横ヘラケズリ	
24	瓦質土器	焙烙	—	[5.6]	—	C H I K	欠片	普通	淡黄	SD2	体部下位シワ状痕、内外面ヨコナデ	
25	瓦質土器	焙烙	—	[5.1]	—	E I K	5	良好	灰黃	SD2	外面煤付着、体部下位強いヘラナデ	
26	石製品	硯か		長さ 3.2cm、幅 2.2cm、厚さ 0.4cm、重さ 3.7g						SD2	粘板岩 欠損あり 文字線刻 (「倉」か)	35-23
27	石製品	砥石		長さ 14.1cm、幅 2.6cm、厚さ 3.3cm、重さ 130.1g						SD2	流紋岩 完形 2面使用 櫛齒状工具痕	
28	陶器	甕	—	[4.5]	—	C E G H I	5	普通	にぶい黄橙	SD6	常滑	
29	瓦質土器	片口鉢	(31.8)	[8.5]	—	D E I K	10	普通	灰白	SD6	片口部一部遺存 外面煤付着	36-1
30	土師質土器	堀	—	[4.7]	—	C E I	5	良好	にぶい赤褐	SD6	内耳堀 15c	36-2
31	銅製品	煙管か		長さ 3.0cm、幅 2.3cm、厚さ 0.05cm、重さ 2.2g						SD6		36-3
32	銅製品	煙管		長さ [3.5]cm、幅 0.8cm、厚さ 0.05cm、重さ 2.2g						SD6		36-4
33	陶器	香炉	(11.9)	[2.5]	—	K	15	普通	淡黄	SD7	瀬戸美濃系 内外面灰釉 17c 後~18c 前	
34	瓦質土器	焙烙	(27.0)	[5.6]	(22.8)	C H I K	10	普通	灰白	SD7	底部シワ状痕 外面煤付着	
35	須恵器	甕 (転用砥具)	—	[6.2]	—	E G I K	5	良好	灰	SD7	破損面を二次利用 (砥具)	
36	鉄製品	刀子		長さ [2.2]cm、刃幅 0.9cm、背幅 0.25cm、重さ 1.9g						SD7		
37	磁器	碗	—	[1.5]	(4.0)	K	15	良好	灰白	SD8	肥前系 内外面施釉 外面染付 17c 後	
38	陶器	皿	(11.4)	[2.3]	—	I K	5	普通	浅黄	SD8	瀬戸美濃系 内外面灰釉	36-5
39	かわらけ	小皿	(11.1)	[2.1]	(6.0)	C E H I K	45	普通	にぶい黄橙	SD8	底部糸切痕 (左)	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	遺構名	備考	図版
40	陶器	皿	(22.5)	[2.8]	—	K	10	良好	灰白	SD8	京都信楽系か 内外面灰釉	36-6
41	磁器	碗	—	—	(2.0)	H K	20	普通	灰白	SD13	肥前系 内外面施釉 外面染付 被熱 18c 前～中	36-9
42	陶器	土瓶	(9.0)	[2.4]	—	H K	15	普通	灰白	SD13	外面灰釉 具須絵(青) 19c 中	
43	陶器	皿か	—	[1.9]	—	I K	5	稜	灰白	SD13	型作り成形 外面布目痕 内外面緑釉	36-7
44	陶器	擂鉢	—	[4.5]	—	H I K	10	普通	灰白	SD13	瀬戸美濃系 内外面鉄釉 内面擂目 18c 前	
45	陶器	徳利	—	[9.5]	(14)	E H K	50	普通	黒	SD13	瀬戸美濃系 内外面鉄釉 外面下位ふきどり	36-8
46	鉄製品	不明品	長さ [6.2]cm、幅 1.3cm、厚さ 0.2cm、重さ 7.7g							SD13		36-10
47	陶器	天目茶碗	—	[2.7]	4.8	E H I K	25	普通	淡黄	SD14	瀬戸美濃系 内外面鉄釉 17c 中	36-12
48	磁器	碗	—	[3.2]	4.5	H K	45	普通	白	SD13・14	肥前系 内外面施釉 外面染付 18c	
49	瓦質土器	焰烙	—	5.5	—	C E I K	5	普通	灰黄	SD13・14	外部下位～底部シワ状痕 内耳 1 遺存	
50	陶器	徳利	—	[7.0]	—	H I K	20	良好	灰白	SD13・14	志戸呂系 外面鉄釉 17c 後～18c 前	
51	土師質土器	羽釜	—	[2.3]	—	I K	10	良好	黒褐	SD13・14	東海系 外面煤付着	36-11
52	石製品	砥石	長さ 10.4cm、幅 3.5cm、厚さ 2.4cm、重さ 97.0g							SD13・14	流紋岩 2面使用 完形 丸ノミ状工具痕	
53	陶器	碗	—	[2.0]	(4.4)	H K	25	普通	明緑灰	SD17	肥前系 内外面施釉 外面染付 17c 後～18c 前	
54	陶器	碗	—	[2.1]	(5.0)	H K	20	普通	灰白	SD17	瀬戸美濃系 内外面灰釉	36-13
55	陶器	瓶類	—	[4.4]	(7.0)	I K	20	普通	灰白	SD17	肥前系 外面灰釉 17c 前か	36-14
56	陶器	擂鉢	—	[3.4]	—	K	5	普通	黒褐	SD17	瀬戸美濃系 内外面鉄釉 破具転用 瀬戸美濃系 17c 前	36-15
57	瓦質土器	焰烙	—	[5.5]	—	C I K	10	普通	灰黄	SD17	底部シワ状痕 体部外面煤付着	
58	陶器	甕	—	[6.3]	(15.5)	E I K	20	普通	褐灰	SD18	常滑 歪みあり	
59	陶器	碗	(11.2)	[5.4]	—	H K	30	普通	灰白	SD21	肥前系 内外面施釉 外面染付 18c 前	36-16
60	磁器	小皿	(8.2)	[1.6]	(4.3)	K	30	普通	灰白	SD21	肥前系 内外面施釉 染付 17c 後	36-17
61	陶器	天目茶碗	—	[3.6]	4.0	I K	50	普通	灰白	SD21	瀬戸美濃系 内外面鉄釉 17c 前	36-18
62	磁器	瓶類	—	[5.7]	(6.4)	H I K	25	普通	灰白	SD21	肥前系 外面施釉 染付 18c	
63	石製品	砥石	長さ 9.9cm、幅 5.8cm、厚さ 3.3cm、重さ 326.7g							SD21	安山岩 磨石を転用 鉄分付着	
64	陶器	徳利	—	[6.5]	—	E I K	20	良好	にぶい褐	SD24	志戸呂系 外面鉄釉 17c 後～18c 前	
65	瓦質土器	焰烙	(36.7)	5.1	(34.8)	C D H I K	10	普通	浅黄	SD25	底部～体部下位シワ状痕 煤付着	

第33表 溝跡出土遺物一覧表

遺構名	非掲載遺物(点数は破片数)
SD1	瀬美鉢 TC2f, 灰釉小杯 TC6, 地方窯鉄釉土鍋 TZ33, 肥磁碗 JB1v, 近代磁器(碗3, 色絵皿, 型押し成形皿), 土師質土器焰烙(丸底), 瓦質土器焰烙, かわらけ, 砥石, 須恵器
SD2	肥磁碗 JB1v/6, JB1(17c 後～18c 前) 1, 肥磁環 JB6b/2, 肥前銅緑釉皿 TB2a, 瀬美灰釉せんじ碗 TC11, 灰釉平碗 TC1n, 天目茶碗細片 2, 鉢 TC2f, 尾呂徳利 TC10d, 灰釉香炉 TC9d, 擂鉢 TC29, 京信碗 TD1b, 近代磁器皿底部細片, 瓦質土器鍋底(15-16c), 瓦質土器焰烙(平底)17, 土師質土器焰烙(丸底), 土師質土器焜炉片, 土師質土器甕口縁(真壁系), 平瓦3, 砥石, 破片, 須恵器, 土師器
SD4	瀬美磁器細片, 近代磁器湯呑み, 瀬美腰鉢碗 TC1u, 灰釉鉢 TB5c, 瓦質土器焰烙7, かわらけ, 平瓦, 須恵器, 土師器
SD6	煙管, 須恵器多数
SD7	瀬美鉢 TC51(18c 前), 瓦質土器焰烙, 須恵器, 土師器多数
SD8	瀬美天目茶碗細片, 須恵器, 土師器
SD9	肥磁皿口縁 JB21 か, 瓦質土器焰烙, 砥石

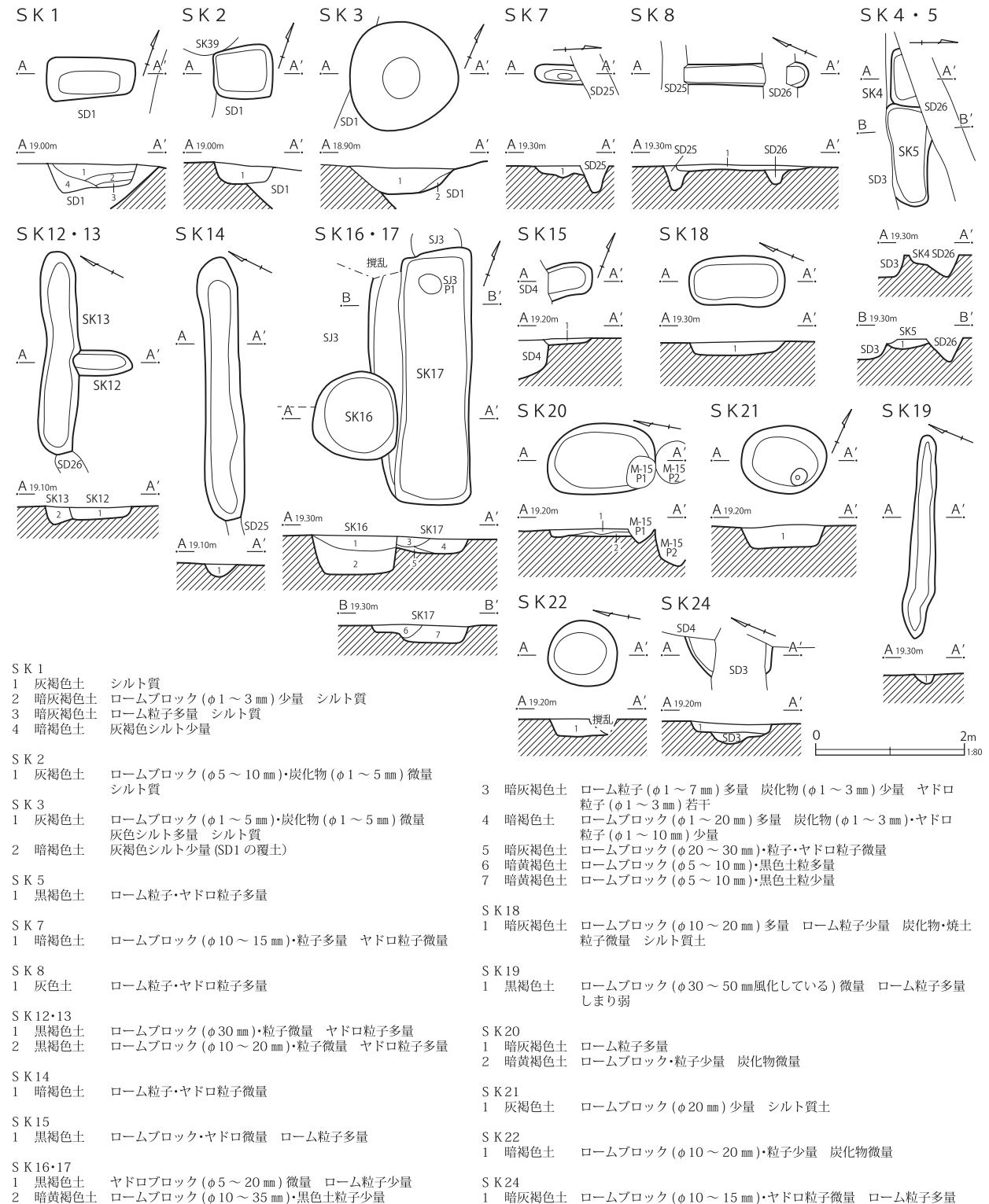
遺構名	非掲載遺物(点数は破片数)
SD10	肥磁碗 JB1u, 瓦質土器焰烙, かわらけ, 砥石(丸のみ成形痕)
SD11	肥磁端反碗 JB1n, 瓦質土器焰烙, 須恵器, 土師器
SD13	肥磁碗 JB1u(コンニャク判)3, 常滑甕, 京信合子蓋 TD18b, 瓦質土器焰烙 10, かわらけ, 栓瓦3, 須恵器
SD14	瀬美天目茶碗細片, 近代磁器碗(型紙刷1, 手書き2), 坏(銅版刷1, 「酒[]支店」銘1), 瓦質土器焰烙3, かわらけ3, 砥石, 土師器
SD16	常滑甕1(中世), 近代陶磁器3(磁器型紙刷碗含む)
SD17	肥磁細片, 陶器細片(近代), 瓦質土器焰烙
SD18	瓦質土器焰烙
SD20	肥前銅緑釉碗 TB1i, 須恵器
SD23	瀬美磁器細片 JC6f, 瀬美鉄釉煙硝摺, 燒土塊
SD24	瓦質土器焰烙

* 器種が判明する近世陶磁器類については、「東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類(2)」(『東京大学校内遺跡調査研究年報7』2011)に基づく分類記号を付した。

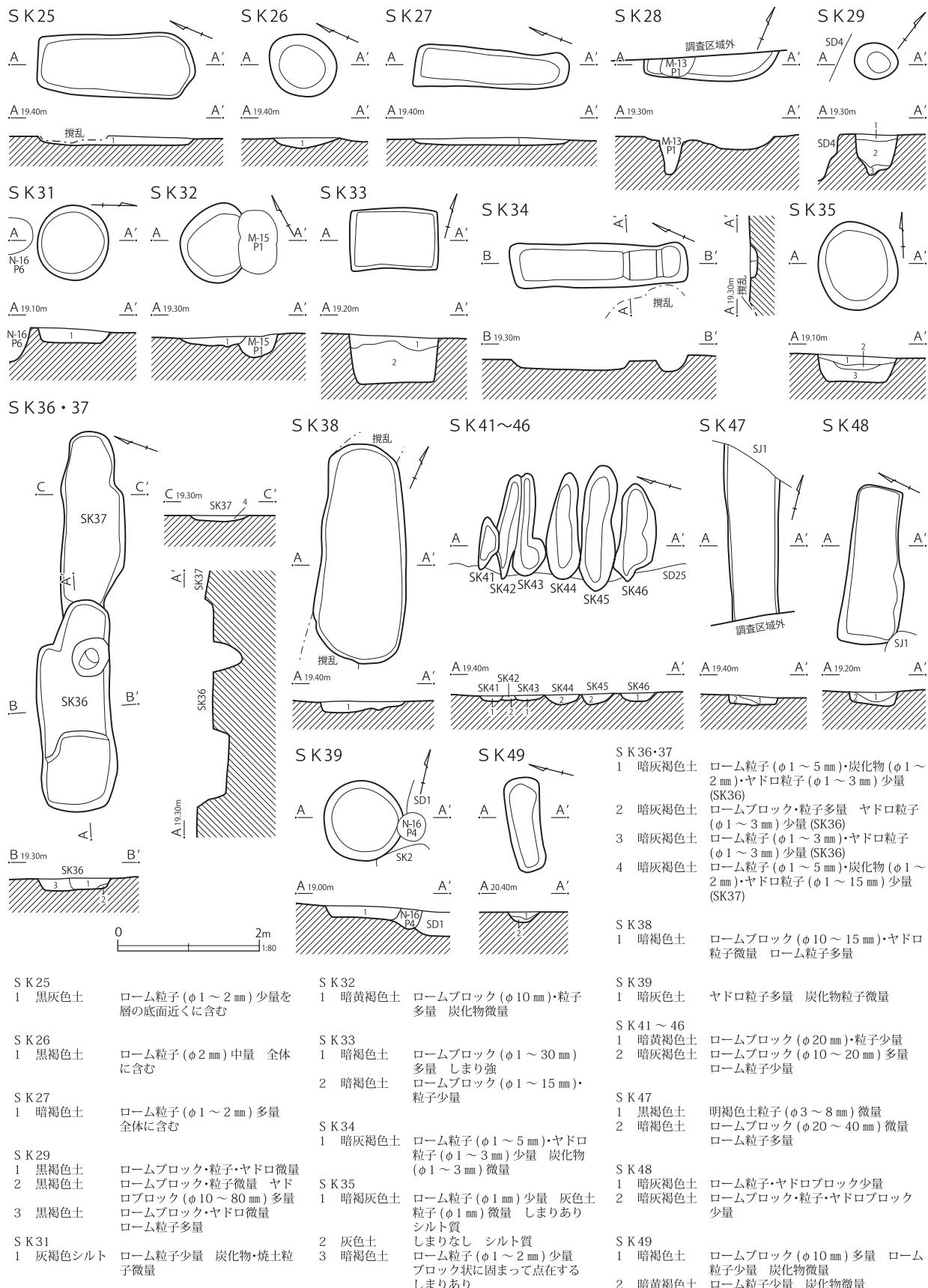
(6) 土壌

土壌は計315基検出されている。図を第101～114図に、規模等を第34表に示した。この中には、時期不詳の土壌もあるが、一括して報告す

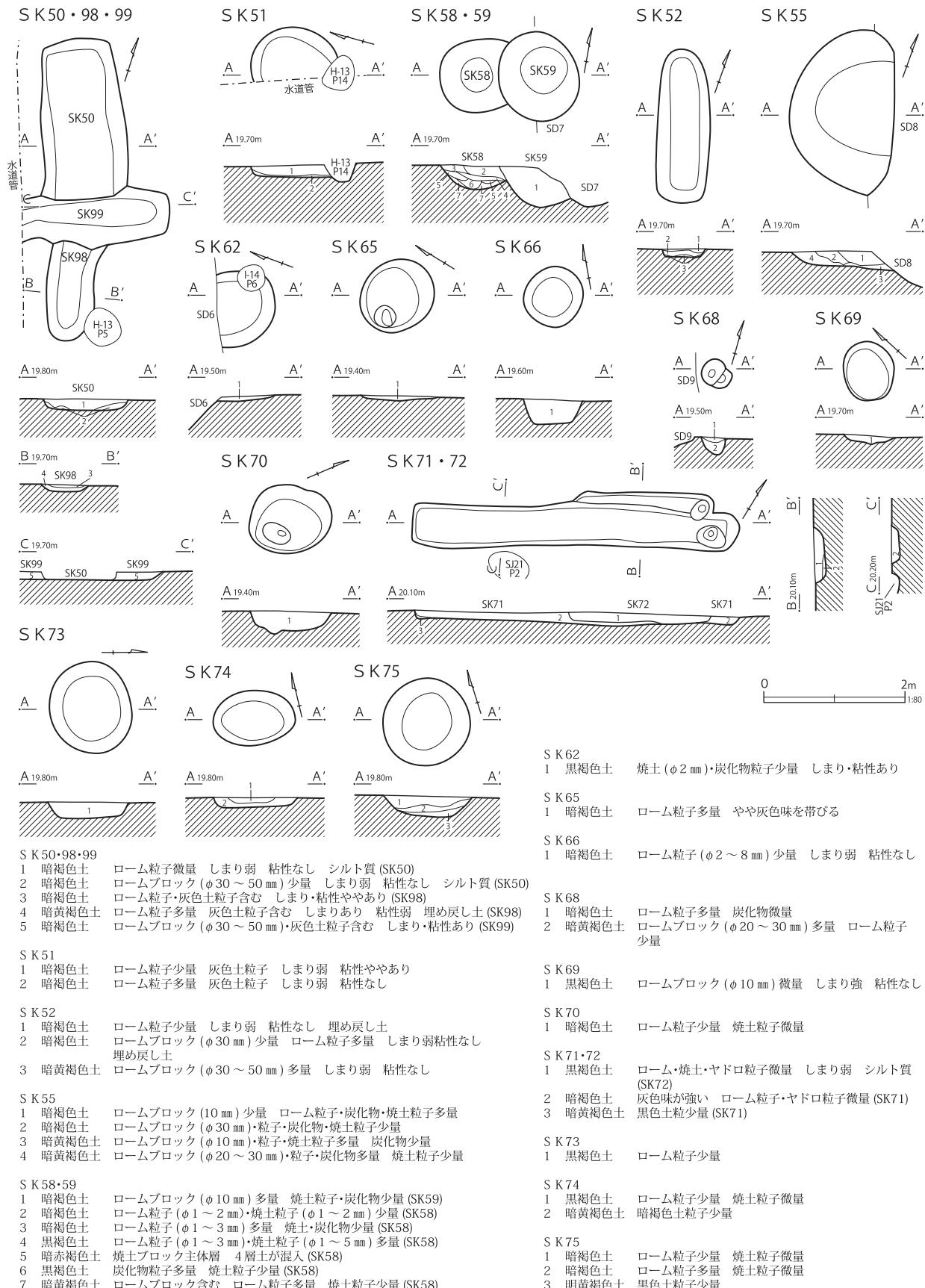
る。なお、調査区西部の第13・14、21～23号溝跡で区画された範囲には、平面長方形の土壌が密に分布する。溝跡と平行するものが多く、この種の土壌の性格を考える上で興味深い。



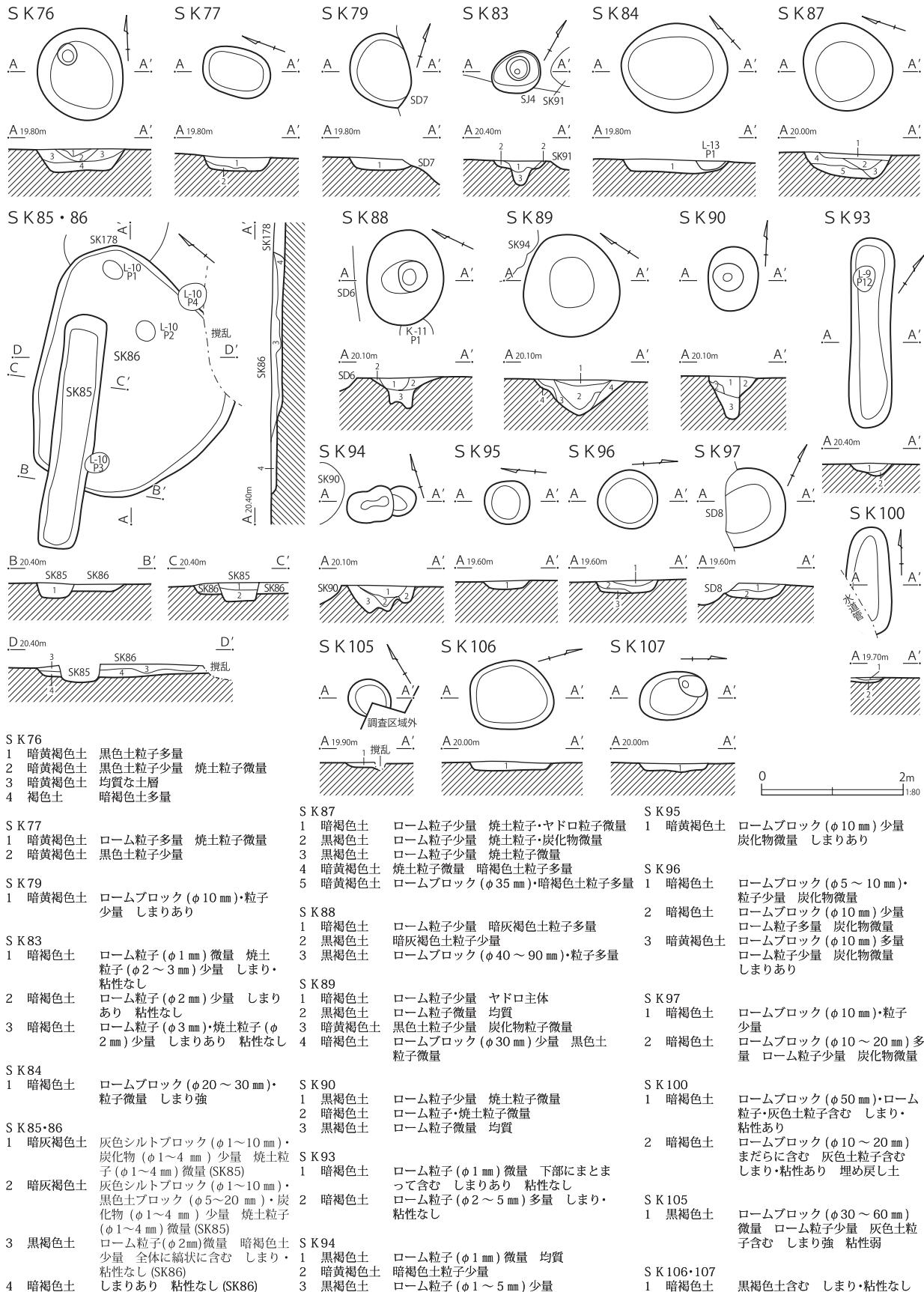
第101図 土壌 (1)



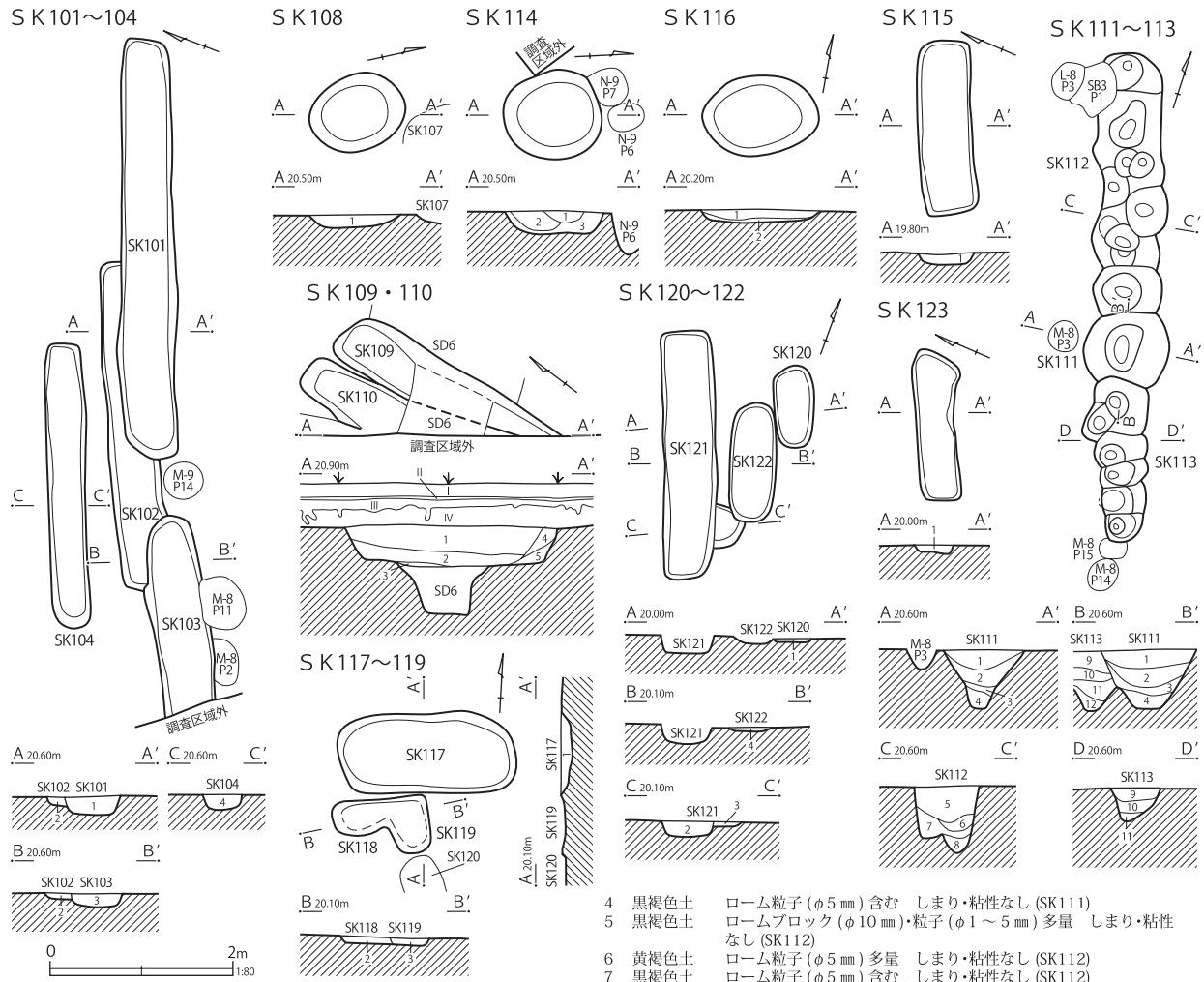
第102図 土壌 (2)



第 103 図 土壌 (3)



第104図 土壌 (4)



S K 101 ~ 104

- 1 暗褐色土 ローム粒子($\phi 2 \sim 5$ mm)・ヤドロ粒子($\phi 3 \sim 5$ mm) 少量 しまり・粘性なし (SK101)
- 2 暗褐色土 ローム粒子($\phi 3 \sim 5$ mm) 少量 しまり・粘性なし (SK102)
- 3 暗褐色土 ローム粒子($\phi 1 \sim 8$ mm) 多量 ヤドロ粒子($\phi 2 \sim 5$ mm) 少量 しまり・粘性なし (SK103)
- 4 暗褐色土 ローム粒子($\phi 2 \sim 3$ mm) 微量 ヤドロ粒子($\phi 2 \sim 3$ mm) 少量 しまり・粘性なし (SK104)

S K 108

- 1 暗褐色土 黒褐色土含む しまり・粘性なし

S K 109・110

- I 灰色土 ヤドロ しまりあり 粘性なし
- II 暗褐色土 鉄分が層状に沈着 しまりあり 粘性なし 水田床土か
- III 暗褐色土 ヤドロ 炭化物粒子($\phi 3 \sim 4$ mm) 微量 灰色土粒子($\phi 1 \sim 8$ mm) 少量 しまりあり 粘性なし
- IV 黑褐色土 ローム粒子($\phi 3$ mm) 微量 灰色シルト粒子($\phi 1 \sim 5$ mm) 含む しまり・粘性あり

S K 111 ~ 104

- 1 黑褐色土 ローム粒子($\phi 2 \sim 3$ mm)・灰色土粒子($\phi 1 \sim 2$ mm) 少量 しまり・粘性なし (SK109)
- 2 黑褐色土 ローム粒子($\phi 3$ mm) 微量 しまり・粘性なし (SK109)
- 3 暗褐色土 ロームブロック($\phi 10$ mm)・粒子($\phi 2 \sim 5$ mm) 多量 しまり・粘性あり (SK109)
- 4 黑褐色土 ロームブロック($\phi 10 \sim 20$ mm) 少量 ローム粒子($\phi 3 \sim 5$ mm) 多量 灰色土粒子($\phi 1$ mm) 微量 しまり・粘性なし (SK110)
- 5 黑褐色土 ローム粒子($\phi 1 \sim 5$ mm) 少量上部にかたまって含む 灰色土粒子($\phi 2 \sim 5$ mm) 含む しまり・粘性なし (SK110)

S K 111 ~ 113

- 1 黑褐色土 ローム粒子($\phi 2 \sim 5$ mm) 少量 (下部に集中) しまり・粘性なし (SK111)
- 2 黑褐色土 ロームブロック($\phi 10$ mm)・粒子($\phi 3 \sim 5$ mm) 多量 しまり・粘性なし (SK111)
- 3 暗褐色土 ローム粒子($\phi 5$ mm) 少量 しまり・粘性ややあり (SK111)

- 4 黒褐色土 ローム粒子($\phi 5$ mm) 含む しまり・粘性なし (SK111)
 5 黒褐色土 ロームブロック($\phi 10$ mm)・粒子($\phi 1 \sim 5$ mm) 多量 しまり・粘性なし (SK112)
 6 黄褐色土 ローム粒子($\phi 5$ mm) 多量 しまり・粘性なし (SK112)
 7 黑褐色土 ローム粒子($\phi 5$ mm) 含む しまり・粘性なし (SK112)
 8 暗褐色土 ローム粒子($\phi 1$ mm) 少量 しまりあり 粘性なし (SK112)
 9 暗黄褐色土 ロームブロック($\phi 3 \sim 10$ mm)・粒子多量を上位に含む 黑褐色土 少量縞状に含む しまり・粘性なし (SK113)
 10 暗褐色土 黑褐色土少量縞状に含む しまり・粘性あり (SK113)
 11 黑褐色土 ローム粒子($\phi 5$ mm) 少量 暗褐色土縞状に含む しまり・粘性なし (SK113)
 12 暗黄褐色土 ロームブロック($\phi 5 \sim 10$ mm)・粒子多量 黑褐色土少量縞状に含む しまりあり 粘性なし (SK113)

S K 114

- 1 暗褐色土 ローム粒子($\phi 1$ mm) 微量 しまり・粘性なし
- 2 黑褐色土 ローム粒子($\phi 2$ mm) 含む ローム土を縞状に含む しまり・粘性なし
- 3 暗褐色土 ローム粒子($\phi 2$ mm) 少量 しまりあり 粘性なし

S K 115

- 1 黑褐色土 ロームブロック($\phi 3 \sim 7$ mm)・灰色シルトブロック($\phi 1 \sim 5$ mm) 含む 炭化物少量

S K 116

- 1 暗褐色土 黑褐色土多量縞状に含む ローム粒子($\phi 1$ mm) 少量 焼土粒子($\phi 2 \sim 5$ mm) 微量 しまりあり 粘性なし
- 2 暗黄褐色土 ローム粒子($\phi 1$ mm) 含む しまりあり 粘性なし

S K 117・118・119

- 1 暗褐色土 ロームブロック($\phi 1 \sim 20$ mm)・粒子少量 (SK117)
- 2 黑褐色土 ロームブロック($\phi 1 \sim 10$ mm) 少量 (SK118)
- 3 暗黄褐色土 ロームブロック($\phi 1 \sim 10$ mm)・粒子少量 (SK119)

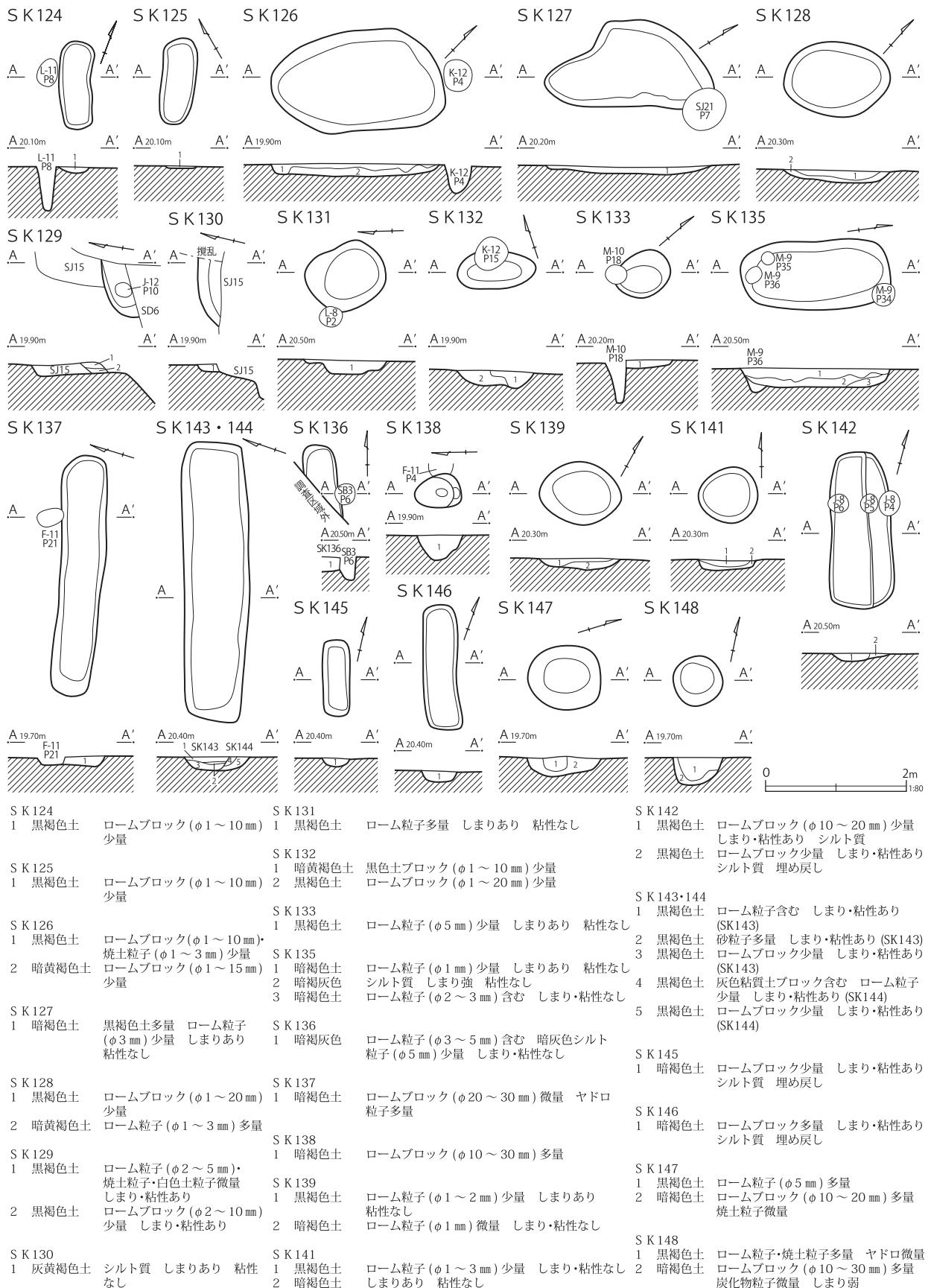
S K 120・122

- 1 黑褐色土 ロームブロック($\phi 1 \sim 10$ mm) 少量 (SK120)
- 2 黑褐色土 ロームブロック($\phi 1 \sim 10$ mm) 少量 (SK121)
- 3 暗黄褐色土 ロームブロック($\phi 1 \sim 10$ mm)・粒子少量 (SK121)
- 4 黑褐色土 ロームブロック($\phi 1 \sim 10$ mm) 少量 (SK122)

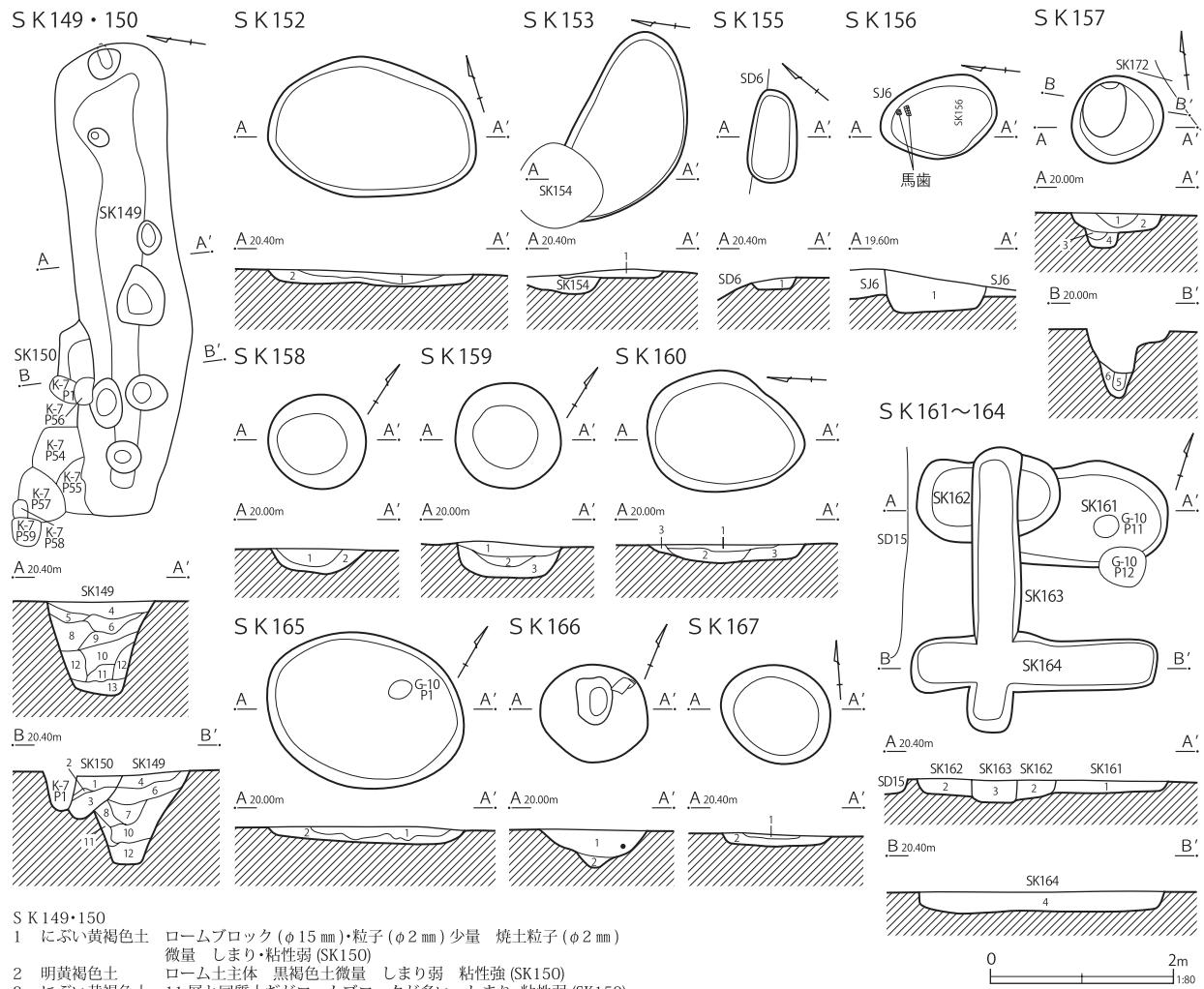
S K 123

- 1 黑褐色土 ロームブロック($\phi 1 \sim 10$ mm) 少量

第 105 図 土壌 (5)



第 106 図 土壌 (6)



SK 149・150

1 にぶい黄褐色土 ロームブロック ($\phi 15$ mm)・粒子 ($\phi 2$ mm) 少量 焼土粒子 ($\phi 2$ mm)
微量 しまり・粘性弱 (SK150)
2 明黄褐色土 ローム土主体 黒褐色土微量 しまり弱 粘性強 (SK150)
3 にぶい黄褐色土 11層と同質土だがロームブロックが多い しまり・粘性弱 (SK150)
4 灰黄褐色土 ロームブロック ($\phi 2 \sim 50$ mm) 多量 ヤドロブロック ($\phi 10$ mm)・
焼土粒子 ($\phi 2 \sim 4$ mm) 微量 しまり・粘性弱 (SK149)
5 明黄褐色土 ローム土主体 褐色土を斑状に含む 焼土粒子 ($\phi 2 \sim 4$ mm) 微量
しまり・粘性強 (SK149)
6 灰黄褐色土 ロームブロック ($\phi 10 \sim 30$ mm) を斑状に含む しまり強 粘性弱
7 灰黄褐色土 ロームブロック少量 しまり・粘性弱 (SK149)
8 黄褐色土 崩れたロームブロック主体 黒褐色土微量 しまり・粘性強 (SK149)
9 明黄褐色土 暗色のロームブロック ($\phi 50$ mm) 微量 しまり弱 粘性強 (SK149)
10 黑褐色土 第1黒色帶の壁崩落土 赤色スコリア微量 しまり・粘性強 (SK149)
11 にぶい黄褐色土 黒褐色土・粘土ブロック微量 ソフトローム土含む しまり・粘性弱
(SK149)
12 黑褐色土 ローム粒子 ($\phi 3 \sim 5$ mm) 少量 しまり・粘性弱 (SK149)
13 黄褐色土 ローム土主体 黑褐色土含む しまり・粘性弱 (SK149)

SK 152

1 暗褐色土 黑褐色土を縞状に含む ローム粒子 ($\phi 3$ mm) 少量 しまりあり
粘性なし

SK 153

1 黑褐色土 ローム粒子 ($\phi 3$ mm) 少量 しまり・粘性なし

SK 155

1 黑褐色土 ロームブロック ($\phi 10 \sim 30$ mm)・粒子少量 しまりあり

SK 156

1 暗褐色土 ローム粒子少量

SK 157

1 黑褐色土 ロームブロック ($\phi 30$ mm)・焼土ブロック ($\phi 5$ mm) 微量 ローム粒子
多量

2 暗褐色土 ロームブロック ($\phi 5 \sim 10$ mm) 微量 ローム粒子多量

3 暗褐色土 ロームブロック ($\phi 10 \sim 20$ mm)・粒子微量

4 褐色土 ロームブロック ($\phi 20$ mm)・粒子・炭化物粒子微量

5 暗褐色土 ローム粒子多量 炭化物粒子微量

6 暗褐色土 ロームブロック ($\phi 5 \sim 10$ mm) 多量

SK 158

1 黒褐色土 ロームブロック ($\phi 30$ mm)・焼土ブロック ($\phi 5$ mm)・炭化物粒子
微量 ローム粒子多量

2 暗褐色土 ロームブロック ($\phi 5 \sim 10$ mm) 微量 ローム粒子多量

SK 159

1 黒褐色土 ロームブロック ($\phi 5 \sim 10$ mm)・焼土粒子微量 ローム粒子多量

2 黒褐色土 ロームブロック ($\phi 5$ mm)・粒子微量 しまりあり

3 黑褐色土 ロームブロック ($\phi 10 \sim 30$ mm) 微量 ローム粒子多量
しまりあり

SK 160

1 暗褐色土 ロームブロック ($\phi 20$ mm)・粒子微量

2 暗褐色土 ロームブロック ($\phi 5 \sim 8$ mm)・粒子・炭化物粒子微量

3 褐色土 ロームブロック ($\phi 10 \sim 15$ mm)・粒子多量

SK 161～164

1 黑褐色土 ロームブロック ($\phi 5 \sim 10$ mm)・ヤドロ粒子微量 ローム粒子
多量 (SK161)

2 黑褐色土 ロームブロック ($\phi 5 \sim 20$ mm)・焼土粒子・ヤドロ粒子微量

3 黑灰色土 ローム粒子多量 (SK162)

4 黑褐色土 ロームブロック ($\phi 5 \sim 8$ mm)・炭化物粒子多量 (SK163)

4 黑褐色土 ロームブロック ($\phi 5 \sim 10$ mm)・ヤドロ粒子多量 しまりあり
(SK164)

SK 165

1 暗褐色土 ロームブロック ($\phi 10$ mm)・炭化物粒子微量 ローム粒子多量

2 暗褐色土 ロームブロック ($\phi 5 \sim 15$ mm)・粒子多量

SK 166

1 黑褐色土 ロームブロック ($\phi 5 \sim 15$ mm) 多量 ヤドロ微量

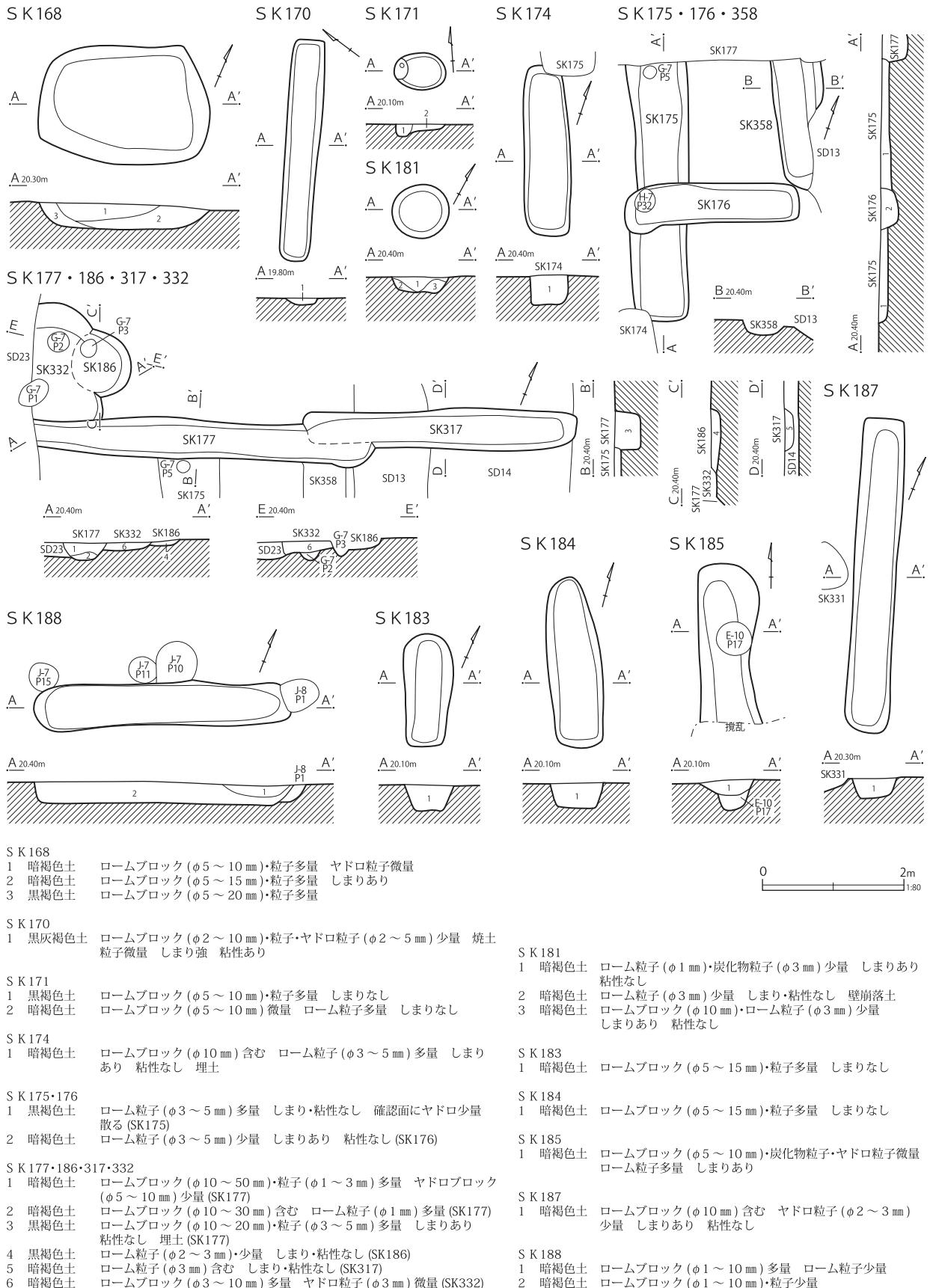
2 暗褐色土 ロームブロック ($\phi 5 \sim 30$ mm) 多量

SK 167

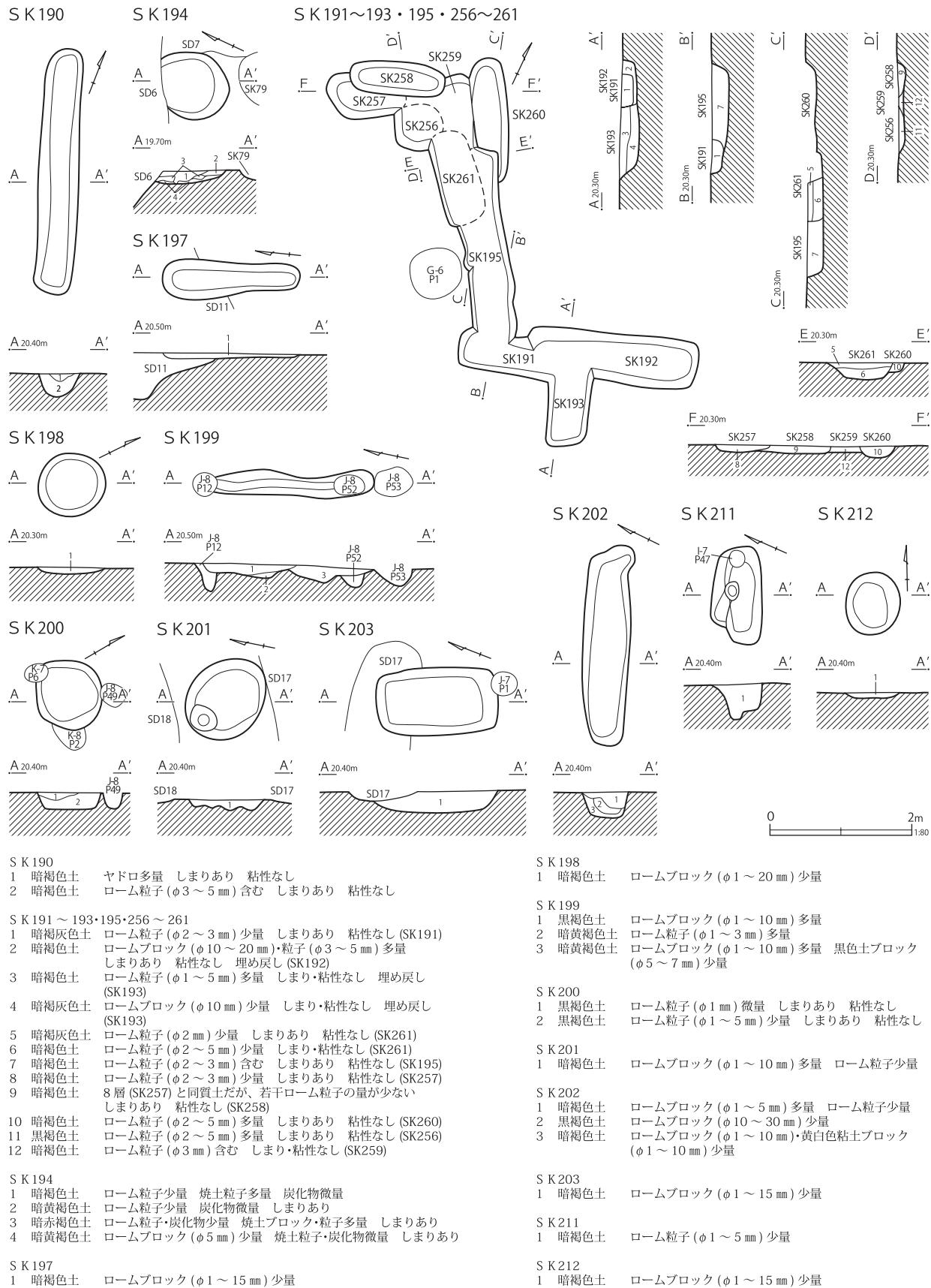
1 黑色土 ロームブロック ($\phi 10$ mm)・粒子微量

2 褐色土 ロームブロック ($\phi 10 \sim 20$ mm)・粒子多量

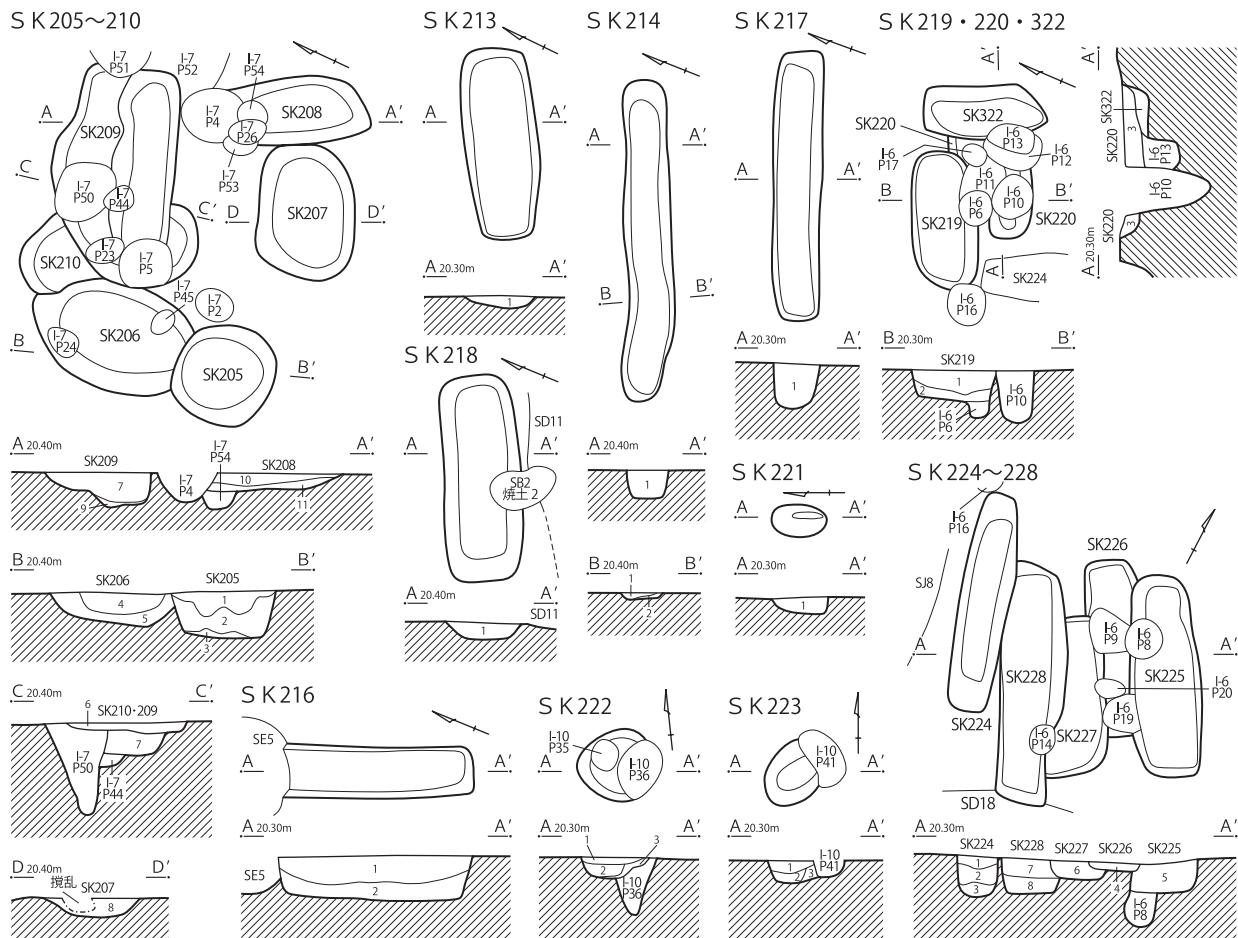
第 107 図 土壌 (7)



第108図 土壌 (8)



第 109 図 土壌 (9)



S K 205 ~ 210

- | | | |
|----|------|---|
| 1 | 黒褐色土 | ロームブロック ($\phi 1 \sim 10 \text{ mm}$) 少量 (SK205) |
| 2 | 暗褐色土 | ロームブロック ($\phi 1 \sim 10 \text{ mm}$) 少量 (SK205) |
| 3 | 黒褐色土 | ロームブロック ($\phi 1 \sim 10 \text{ mm}$) 少量 (SK205) |
| 4 | 黒褐色土 | ロームブロック ($\phi 1 \sim 10 \text{ mm}$) 少量 燃土ブロック ($\phi 5 \text{ mm}$) 微量 (SK206) |
| 5 | 暗褐色土 | ロームブロック ($\phi 1 \sim 10 \text{ mm}$) 少量 (SK206) |
| 6 | 暗褐色土 | ロームブロック ($\phi 1 \sim 10 \text{ mm}$)・灰色シルト粒子 ($\phi 1 \sim 2 \text{ mm}$) 少量 (SK210) |
| 7 | 黒褐色土 | ロームブロック ($\phi 1 \sim 10 \text{ mm}$) 少量 (SK209) |
| 8 | 暗褐色土 | ロームブロック ($\phi 1 \sim 5 \text{ mm}$) 少量 (SK207) |
| 9 | 黒褐色土 | 11層に似る (SK209) |
| 10 | 暗褐色土 | ロームブロック ($\phi 1 \sim 7 \text{ mm}$) 多量 ローム粒子少量 (SK208) |
| 11 | 黒褐色土 | ロームブロック ($\phi 1 \sim 7 \text{ mm}$) 少量 (SK208) |

S K 213

- 1 暗褐色土 ロームブロック ($\phi 1 \sim 20 \text{ mm}$) 少量 灰色シルト粒子 ($\phi 1 \sim 5 \text{ mm}$) 少量

S K 214

- | | | | |
|---|------|--|---|
| 1 | 暗褐色土 | ロームブロック ($\phi 1 \sim 10 \text{ mm}$) 少量 | 灰色シルト粒子 ($\phi 1 \sim 3 \text{ mm}$) 少量 |
| 2 | 暗褐色土 | ロームブロック ($\phi 1 \sim 20 \text{ mm}$) 少量 | 灰色シルト粒子 ($\phi 1 \sim 5 \text{ mm}$) 少量 |

SK216
1 暗相

- 1 暗褐色土 ローム粒子 ($\phi 1 \sim 5 \text{ mm}$)・灰色シルトブロック ($\phi 1 \sim 10 \text{ mm}$) 少量 焼土
ブロック ($\phi 1 \sim 2 \text{ mm}$)・炭化物微量
2 暗褐色土 ロームブロック ($\phi 1 \sim 20 \text{ mm}$) 多量

SK 217

- 1 暗褐色土 ロームブロック ($\phi 1 \sim 7 \text{ mm}$)・灰色シルト粒子 ($\phi 1 \sim 3 \text{ mm}$) 少量

J R E T U
1 黑棍

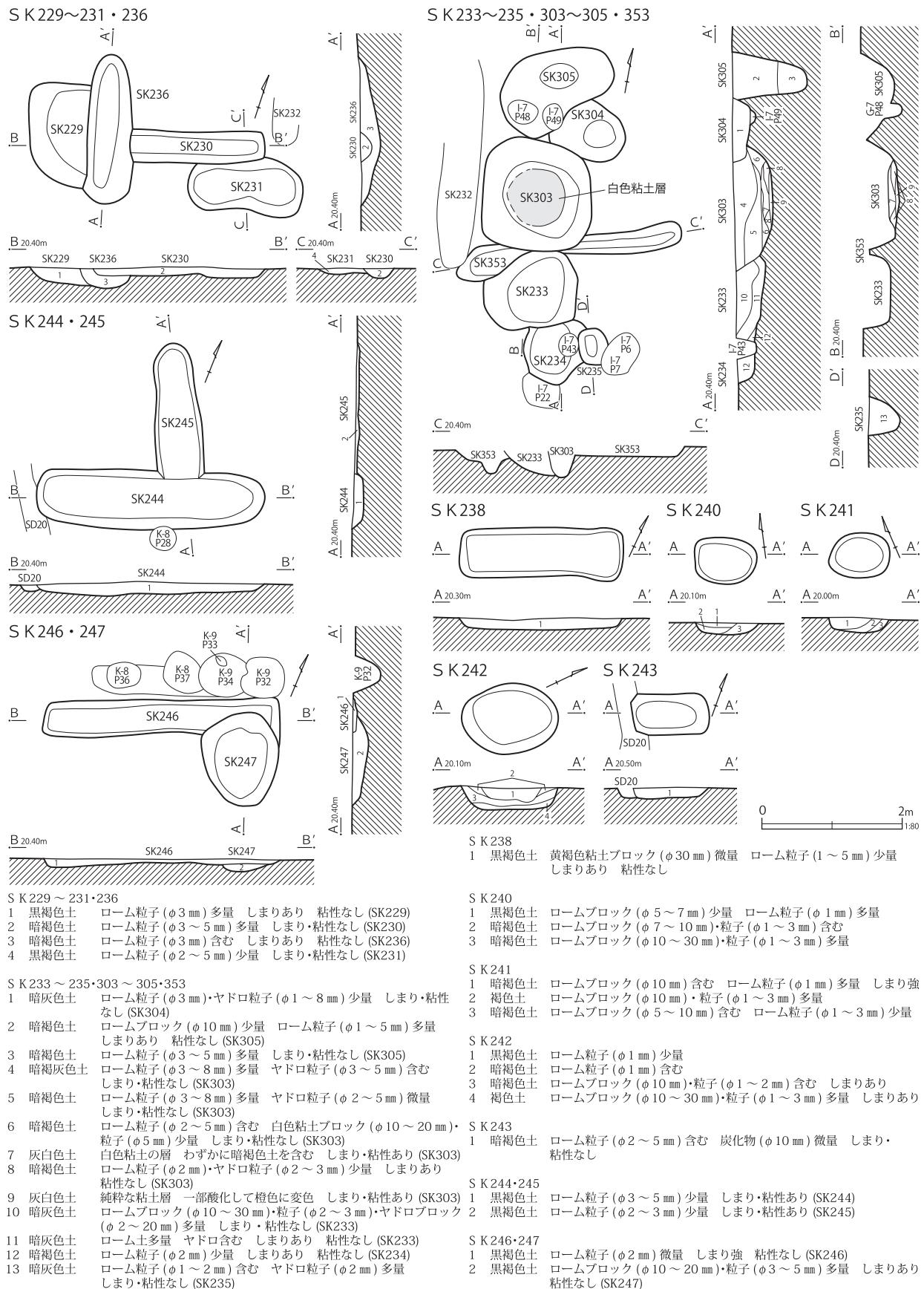
- 1 黒鴎色生 SSB 焼生ひより白、2 云母子(φ0mm)微量 ひよりのう相性なし

1 褐色土

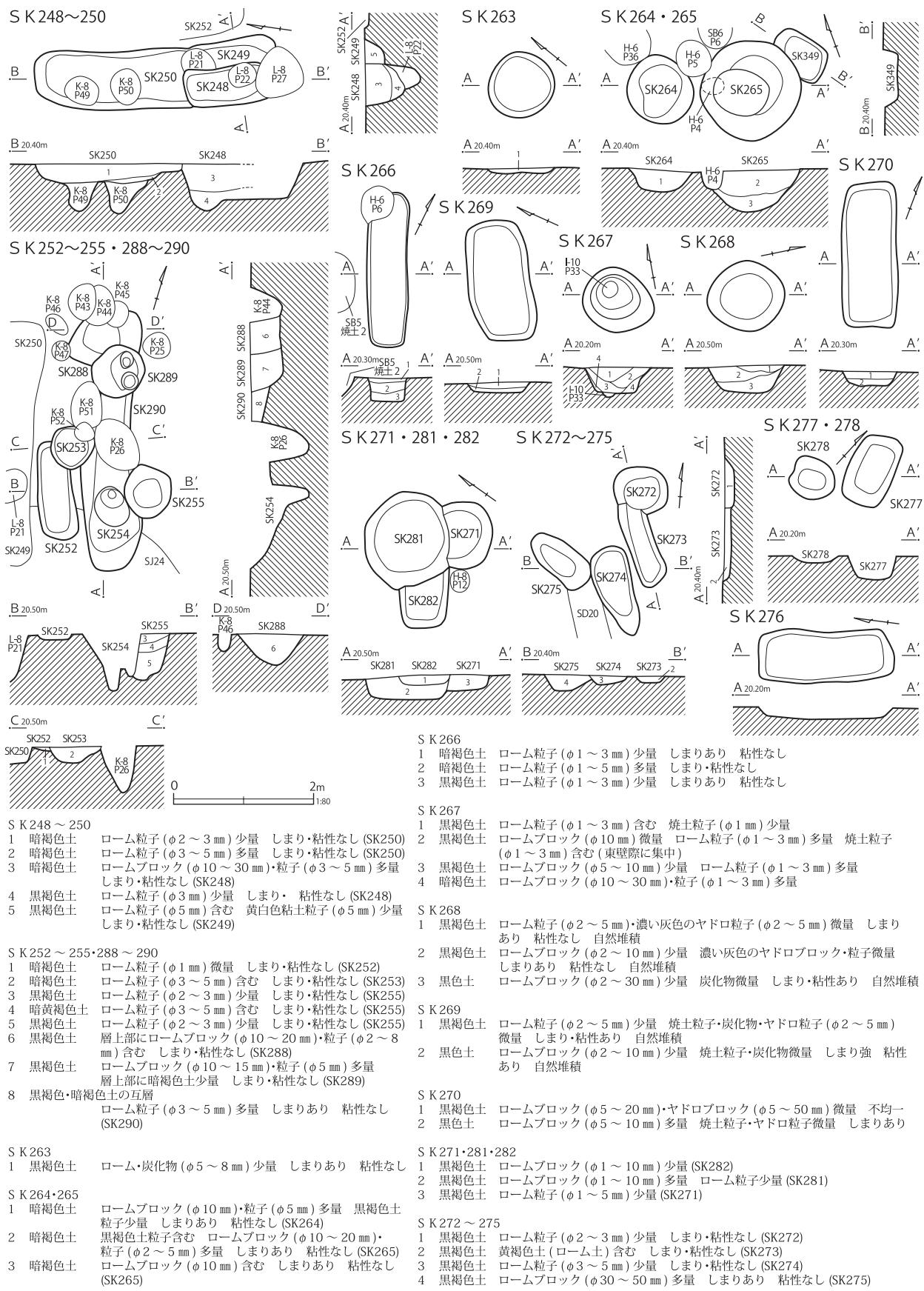
- | | |
|--------|---|
| 2 暗褐色土 | ヤドロ粒子 (φ3 ~ 5 mm) 少量 しまりなし 粘性弱 (SK219)
ロームブロック (φ5 ~ 10 mm) 少量 しまりなし 粘性弱 (SK219) |
| 3 暗褐色土 | ヤドロ粒子 (φ5 ~ 8 mm) 多量 ヤドロ粒子 (φ5 mm) 少量 しまりあり
粘性なし 埋め戻し (SK220) |

- 第 110 図

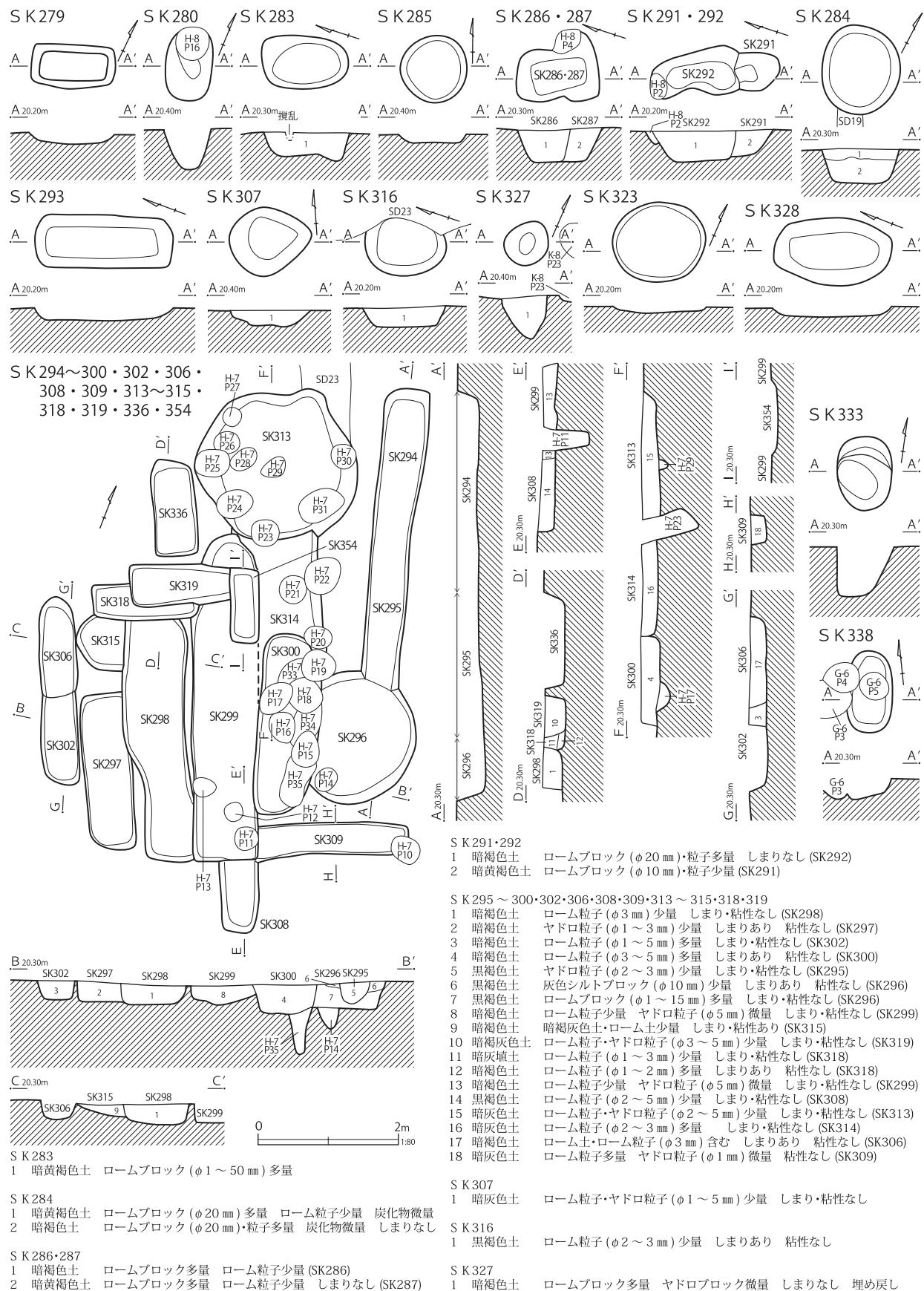
第110図 土壌(10)



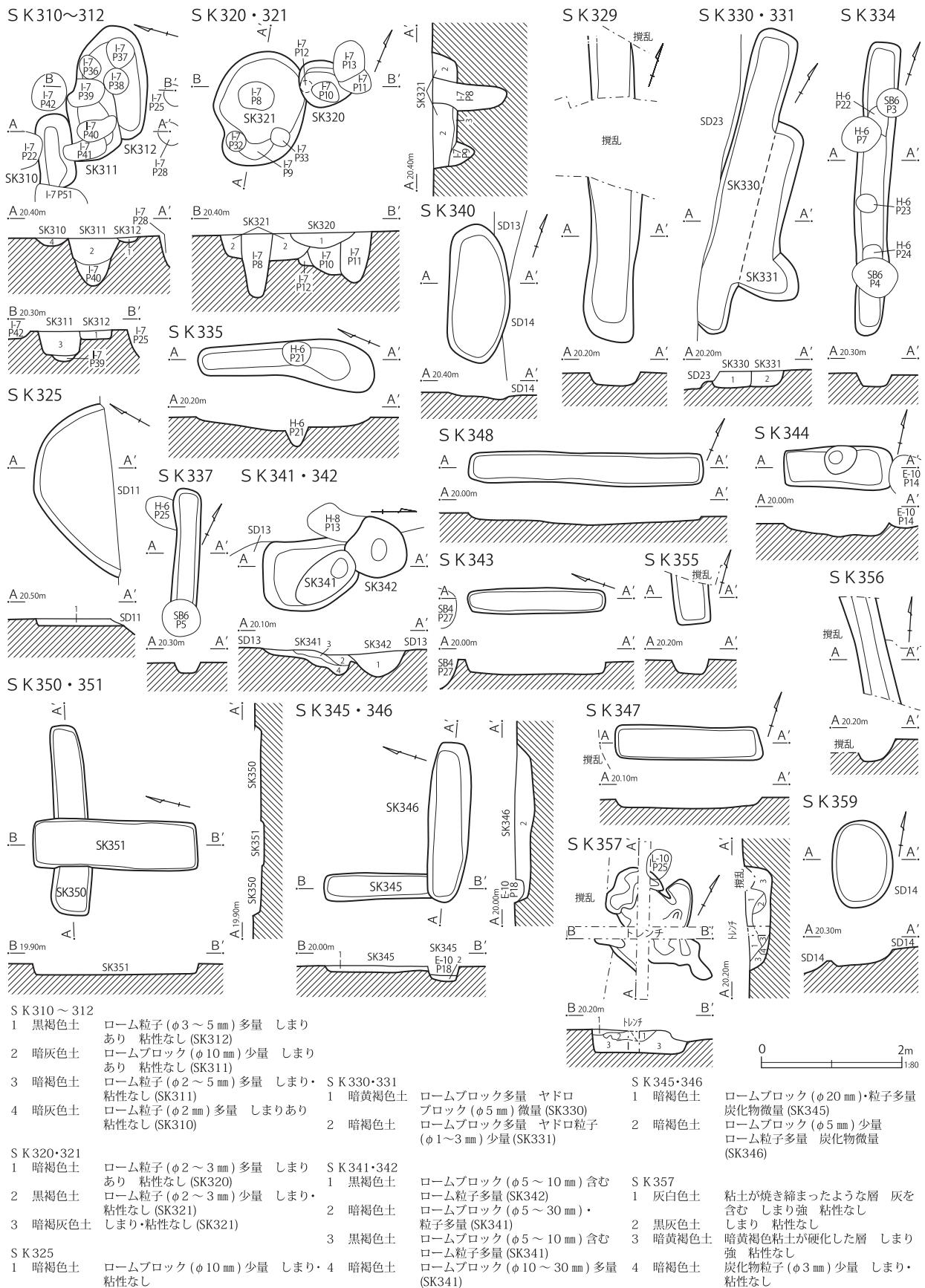
第 111 図 土壌 (11)

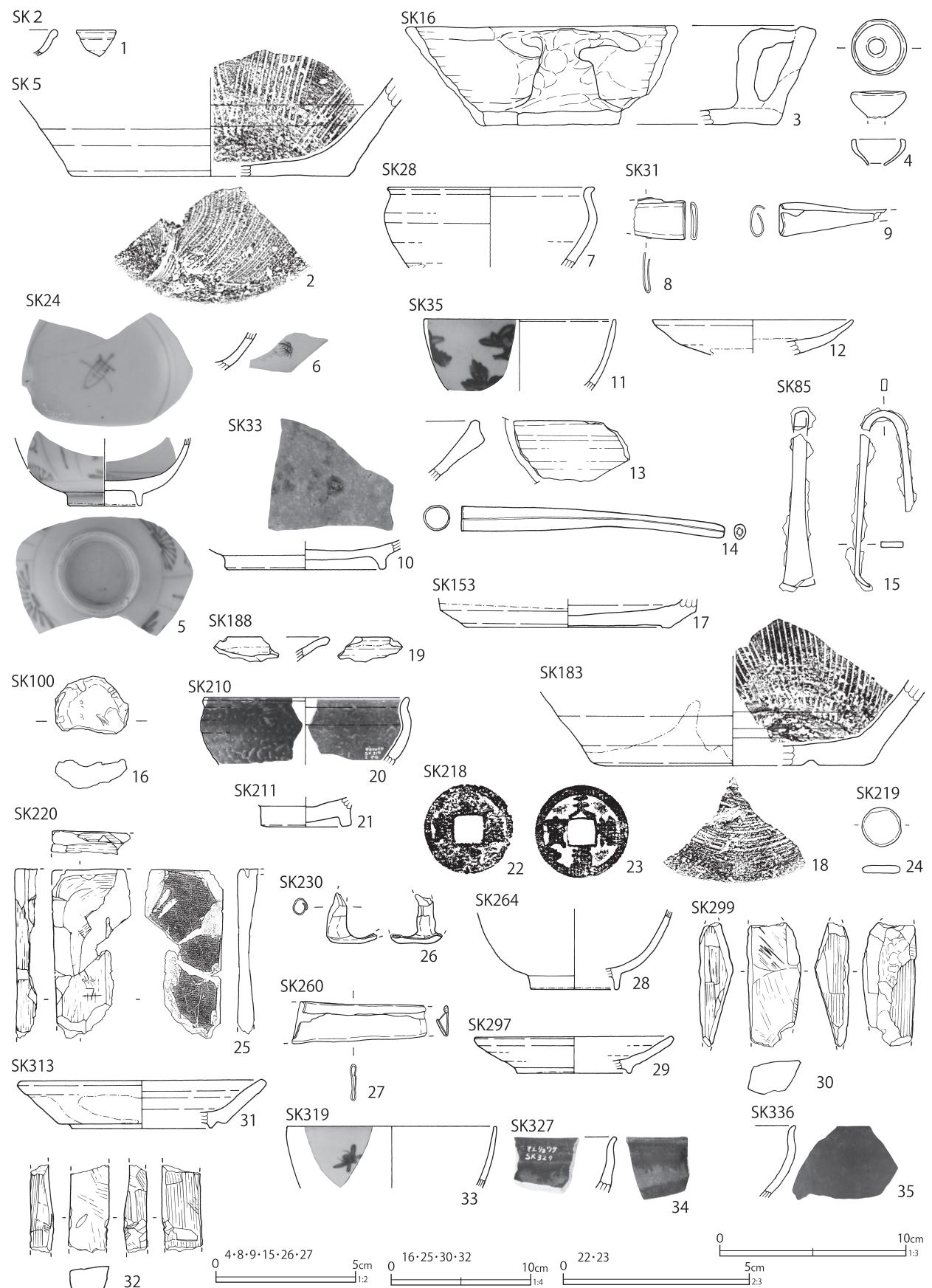


第 112 図 土壌 (12)



第 113 図 土壌 (13)





第115図 土壌出土遺物

土壙の時期を示すと考えられる遺物を第 115 図に示した。また、図示しなかった遺物については第 36 表にまとめた。

第 115 図 3 は第 16 号土壙出土の瓦質土器焙烙で、18 世紀頃の製品である。4 は煙管破片である。第 16 号土壙は円形プランの土壙で、他にも陶器小片が出土している。重複する第 17 号土壙とともに、近世の土壙とみられる。ほぼ同規模の円形土壙である第 31・35 号土壙からも比較的多くの遺物が出土しており、前者からは煙管の破片（8・9）や銅錢・陶磁器等が、後者からは陶磁器の破片（11～13）・煙管（14）等が出土している。いずれも 18 世紀頃の遺構と考えられる。

第 34 表 土壙出土遺物観察表（第 115 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	遺構名	備考	図版
1	磁器	壺	—	[1.4]	—	K	5	良好	白	SK2	内外面施釉 口縁部玉縁状	36-19
2	陶器	擂鉢	—	[5.2]	(14.7)	IK	25	普通	灰黄	SK5	瀬戸美濃系 内外面鉄釉 擂目（一单位 12 本）底部糸切痕 18c	36-20
3	瓦質土器	焙烙	—	[5.2]	—	CHIK	10	良好	灰白	SK16	体部下位～底部シワ状痕 内耳 1 遺存	36-21
4	銅製品	煙管	外径 2.0cm、高さ [1.0]cm、厚さ 0.15cm、重さ 3.2g							SK16	外面煤付着 火皿	36-22
5	磁器	碗	—	[3.6]	3.9	IK	50	普通	白	SK24	瀬戸美濃系 内外面施釉 染付 19c 前	
6	磁器	碗	—	[2.0]	—	IK	5	良好	白	SK24	肥前系 内外面施釉 外面色絵 18c 前	37-1
7	陶器	天目茶碗	(11.0)	[4.3]	—	IK	15	良好	灰	SK28	瀬戸美濃系 内外面鉄釉 17c 前～中	37-2
8	銅製品	煙管か	長さ [1.8]cm、幅 1.4cm、厚さ 0.05cm、重さ 1.7g							SK31		
9	銅製品	煙管	長さ [3.8]cm、幅 1.2cm、厚さ 0.05cm、重さ 3.9g							SK31	吸口	
10	陶器	皿	—	[1.5]	(8.6)	DEIK	20	普通	灰白	SK33	瀬戸美濃系 内面灰釉 鉄刷絵 18c 後	37-3
11	磁器	碗	(10.0)	[3.8]	—	HIK	10	良好	白	SK35	肥前系 内外面施釉 外面染付 18c 前	37-5
12	磁器	皿	(10.6)	[1.7]	—	HIK	10	普通	白	SK35	肥前系 内外面施釉 蛇の目釉剥ぎ 17c 後	37-6
13	陶器	擂鉢	—	[3.2]	—	HIK	5	良好	浅黄	SK35	瀬戸美濃系 内外面鉄釉 砧具転用 大窯第 1 段階	37-4
14	銅製品	煙管	長さ 9.4cm、小口径 0.9cm、口付内径 0.2cm、口付外径 0.5cm、重さ 5.8g							SK35	吸口	
15	鉄製品	毛抜き	長さ [6.3]cm、幅 0.4～0.8cm、厚さ 0.2cm、重さ 6.0g							SK85		37-7
16	鉄滓	椀形滓	最大長 3.9 cm、最大幅 5.2 cm、厚さ 1.9 cm、重さ 58.5 g							SK100	磁着	
17	陶器	香炉	—	[1.5]	(10.0)	HIK	10	普通	灰白	SK153	瀬戸美濃系 外面鉄釉 17c 後～18c 前	
18	陶器	擂鉢	—	[4.6]	(15.0)	EIK	20	良好	IK	SK183	瀬戸美濃系 内外面柿釉 内面擂目（一单位 14 本）	37-8
19	陶器	縁釉小皿	—	[1.3]	—	HIK	5	良好	灰白	SK188	古瀬戸 内外面灰釉 後 IV 新～大窯第 1 段階	37-9
20	陶器	天目茶碗	(10.8)	[3.6]	—	IK	15	普通	灰白	SK210	瀬戸美濃系 内外面鉄釉（鮫肌状） 17c 前	37-10
21	陶器	天目茶碗	—	[1.6]	4.8	K	15	良好	K	SK211	瀬戸美濃系 内面長石釉（白天目）	37-11
22	銅製品	錢貨	径 24.2mm、厚さ 0.8mm、重さ 2.43g							SK218	錢種不明（「[] 通寶」）	37-12
23	銅製品	錢貨	径 25.0mm、厚さ 0.9mm、重さ 2.51g							SK218	天禧通寶 北宋 1017 年	37-13
24	石製品	碁石	長さ 2.1cm、幅 2.1cm、厚さ 0.4cm、重さ 3.1g							SK219	粘板岩 完形	
25	石製品	硯	長さ [12.1]cm、幅 [5.7]cm、厚さ [1.7]cm、重さ 99.3g							SK220	粘板岩 SD13 出土破片と接合 表中央に溝 表面文字線刻（「七口」）	37-14
26	銅製品	煙管か	長さ [3.0]cm、幅 1.9cm、厚さ 0.05cm、重さ 1.9g							SK230		37-15
27	銅製品	煙管か	長さ 4.8cm、幅 1.4cm、厚さ 0.05cm、重さ 4.2g							SK260	吸口か	37-16
28	磁器	碗	—	[4.3]	—	K	20	良好	白	SK264	肥前系 内外面施釉 17c 後	37-17
29	陶器	反皿	(10.5)	1.9	(6.0)	K	20	良好	灰黄	SK297	瀬戸美濃系 内外面灰釉 17c 後～18c 前	
30	石製品	砥石	長さ [8.8]cm、幅 3.9cm、厚さ 2.4cm、重さ 85.4g							SK299	流紋岩 4 面使用	37-18
31	陶器	反皿	(12.8)	2.5	(8.5)	K	10	良好	灰黄	SK313	瀬戸美濃系 内外面灰釉 見込み目跡 17c 後	
32	石製品	砥石	長さ 6.2cm、幅 2.9cm、厚さ 1.7cm、重さ 85.2 g							SK313	流紋岩 4 面使用 櫛齒状工具痕	
33	磁器	碗	(11.2)	[3.2]	—	K	10	普通	白	SK319	肥前系 内外面施釉 外面染付 17c 末～18c 前	37-19
34	陶器	天目茶碗	—	[3.0]	—	HK	5	普通	灰白	SK327	瀬戸美濃系 内外面鉄釉 17c 後	37-20
35	陶器	天目茶碗	—	[3.9]	—	K	20	良好	にぶい黄澄	SK336	瀬戸美濃系 内外面鉄釉 16c	37-21

このような円形土壙には、桶が埋設されていた可能性がある。

10 は、第 33 号土壙から出土した瀬戸美濃系陶器の摺絵皿である。他に瀬戸美濃系陶器の徳利が出土しており、19 世紀前半頃の遺構と考えられる。第 33 号土壙は小型の方形土壙で、壁はほぼ垂直に掘られている。

平面形態が長方形を呈する土壙からの出土遺物は概して少ない。15 の鉄製品毛抜き、18 の陶器擂鉢、19 の陶器皿、21 の陶器碗（白天目）、22・23 の古錢、26 の潰された煙管等が長方形土壙からの遺物である。近世でも比較的古い段階の遺物が混じる点は留意する必要がある。

第35表 土壌一覧表（第101～114図）

番号	グリッド	形態	長径 /m	短径 /m	深さ /m	備考
1	0-16	隅丸長方形	1.20	0.55	0.40	
2	N-16	隅丸長方形	0.80	0.70	0.37	SD1より新
3	N-16	円形	1.45	1.45	0.35	
4	N-13	隅丸方形	(0.69)	(0.27)	0.13	
5	N-13	楕円形	1.35	0.50	0.13	SD1・SK4・SDより古
6	—	—	—	—	—	欠番
7	N-13	楕円形	(0.58)	0.25	0.15	SD1より古
8	N-13	楕円形	(1.68)	0.29	0.09	SD1より新
9～11	—	—	—	—	—	欠番
12	M-14	楕円形	(0.78)	(0.35)	0.23	SK13より新
13	M-14	楕円形	2.76	0.44	0.17	SK12より古
14	M-14	楕円形	3.53	0.45	0.17	
15	N-14	楕円形	(0.60)	(0.43)	0.10	SD4より新
16	0-15	円形	1.15	1.15	0.52	SK17より古
17	N / 0-15	隅丸長方形	3.44	1.17	0.24	SK16より古 SJ3より新
18	N-15	楕円形	1.30	0.66	0.19	
19	M-14	楕円形	2.74	0.26	0.13	
20	N-14/15	楕円形	1.90	0.91	0.10	
21	0-14	楕円形	1.14	0.94	0.29	
22	0-14	円形	0.92	0.92	0.25	
23	平安時代の土壌参照					
24	N-13	不明	—	—	0.13	SD3より新
25	0-15	楕円形	2.22	0.87	0.13	
26	0-14	円形	0.95	0.90	0.15	
27	0-14	楕円形	2.19	0.54	0.11	
28	M-13	楕円形	1.81	(0.35)	0.18	
29	N-14	円形	0.61	0.51	0.58	
30	—	—	—	—	—	欠番
31	N-16	円形	1.05	1.00	0.22	
32	M-15	円形	1.13	(0.85)	0.15	
33	M-16	長方形	1.25	0.85	0.65	
34	N-15	隅丸長方形	2.50	0.61	0.20	
35	N-16	円形	1.23	1.13	0.37	
36	N-15	楕円形	3.00	1.04	0.40	
37	N-15	楕円形	(2.38)	0.88	0.17	
38	N-14	楕円形	3.09	1.20	0.18	
39	N-16	円形	1.14	1.14	0.18	SD1より新
40	—	—	—	—	—	欠番
41	N-12	不整形	0.72	(0.20)	0.08	
42	N-12	不整形	1.42	(0.17)	0.06	
43	N-12	不整形	1.45	0.31	0.08	
44	N-12	楕円形	1.50	0.40	0.13	
45	N-12	楕円形	1.80	0.40	0.15	
46	N-12	楕円形	1.40	0.50	0.12	
47	0 / P-15	楕円形	2.35	0.70	0.13	
48	0-15	隅丸長方形	2.25	0.72	0.20	
49	E-3	楕円形	1.33	0.45	0.15	
50	H-13	隅丸長方形	(2.31)	1.20	0.15	
51	H-13	楕円形	(1.13)	(0.75)	0.16	
52	H-13	楕円形	2.20	0.75	0.12	
53・54	平安時代の土壌参照					
55	K-13	円形	2.43	(1.47)	0.25	SD8より古

番号	グリッド	形態	長径 /m	短径 /m	深さ /m	備考
56・57	平安時代の土壌参照					
58	I-13	円形	(1.04)	(0.84)	0.32	SK59より古
59	I-13	円形	1.28	(1.15)	0.55	SK58より新 SD7より古
60・61	平安時代の土壌参照					
62	I-14	円形	1.07	(0.80)	0.07	SD6より古
63・64	平安時代の土壌参照					
65	J-15	円形	1.05	1.00	0.05	
66	M-12	円形	0.85	36.00	0.36	
67	—	—	—	—	—	欠番
68	L-14	楕円形	0.44	0.38	0.24	
69	M-12	円形	0.86	0.72	0.11	
70	K-12	円形	1.15	1.00	0.32	
71	L-11	隅丸長方形	(2.20)	0.80	0.19	
72	L-11	隅丸長方形	4.65	0.80	0.13	
73	K-13	円形	1.29	1.15	0.22	
74	K-12	楕円形	1.16	0.80	0.15	
75	K-12	円形	1.25	1.25	0.28	
76	K / L-12	円形	1.30	1.20	0.34	
77	L-12	楕円形	0.98	0.70	0.20	
78	平安時代の土壌参照					
79	J-13	円形	1.00	(0.86)	0.17	
80～82	—	—	—	—	—	欠番
83	L-10	円形	0.69	(0.50)	0.35	SJ4より新
84	L-13	円形	1.50	1.30	0.19	
85	L / M-10	楕円形	3.32	0.48	0.20	SK86より新
86	L / M-10	楕円形	3.46	2.84	0.18	SK85より古
87	K-11	円形	1.24	1.24	0.35	
88	K-11	円形	1.34	1.10	0.40	
89	K-11	円形	1.45	1.33	0.50	
90	K-11	楕円形	0.90	0.70	0.60	
91・92	平安時代の土壌参照					
93	L-9	楕円形	2.70	0.58	0.17	
94	K-11	楕円形	0.95	0.50	0.39	
95	J-13	円形	6.30	6.30	0.11	
96	J-13	円形	0.95	0.85	0.18	
97	K-13	円形	1.10	(0.85)	0.22	
98	H-13	楕円形	(1.40)	0.67	0.10	
99	H-13	楕円形	(2.10)	(0.62)	0.11	
100	G/H-12/13	楕円形	(1.20)	0.62	0.08	
101	M-8 / 9	楕円形	4.57	0.57	0.20	SK102より新
102	M-8 / 9	楕円形	3.60	0.55	0.10	SK103より新 SK101より古
103	M-8 / 9	楕円形	(2.10)	0.60	14.00	SK102より古
104	M-8 / 9	楕円形	3.12	0.41	0.16	
105	M-12	円形	0.6	(0.52)	0.08	
106	N-10	楕円形	1.18	0.97	0.13	
107	N-9	楕円形	0.95	0.68	0.10	
108	N-9	楕円形	1.08	0.83	0.15	
109	L-7/8, M-8	隅丸長方形	(2.24)	0.60	0.34	SK110, SD6より新
110	L-7/8, M-8	隅丸長方形	(1.51)	0.50	0.45	SK109より古 SD6より新
111	L / M-8	円形	0.93	(0.80)	0.62	SK112, 113より古
112	L / M-8	不整形	(2.85)	0.70	0.65	SK111より古

番号	グリッド	形態	長径 /m	短径 /m	深さ /m	備考
113	L / M-8	不整形	(1.71)	0.58	0.64	SK111 より古
114	N-9	円形	1.07	0.98	0.25	
115	K / L-12	長方形	1.90	0.60	0.13	
116	L-11	楕円形	1.29	0.88	0.14	
117	L-11	楕円形	1.93	0.89	0.12	
118	L-11	不整形	(0.55)	0.39	0.07	SK119 より古
119	L-11	不整形	0.63	(0.46)	0.07	SK118 より新
120	L-11	楕円形	0.89	0.40	0.05	
121	L-11	隅丸長方形	2.72	0.58	0.16	
122	L-11	楕円形	1.30	0.50	0.05	
123	L-11 / 12	隅丸長方形	1.65	0.42	0.10	
124	L-11	隅丸長方形	1.25	0.45	0.07	
125	L-11	隅丸長方形	1.22	0.49	0.04	
126	K-12	楕円形	2.45	1.42	0.19	
127	L / M-11	不整形	2.40	1.25	0.10	
128	L-11	楕円形	1.50	1.08	0.18	
129	J-12	不明	(0.73)	(0.35)	0.17	SJ15 より新
130	J-12	不明	(0.90)	(0.31)	0.10	SJ15 より古
131	L / M-8	楕円形	1.16	0.95	0.20	
132	K-12	楕円形	1.10	(0.50)	0.25	
133	M-10	楕円形	(0.74)	0.65	0.13	
134	—	—	—	—	—	欠番
135	M-9	楕円形	2.12	0.99	0.27	
136	M-8	楕円形	(0.70)	(0.47)	0.22	
137	F-11	楕円形	3.41	0.64	0.15	
138	F-11	楕円形	0.67	0.45	0.36	
139	K-11	楕円形	1.17	0.90	0.18	
140	平安時代の土壌参照					
141	L-10	円形	0.83	0.79	0.14	
142	J-8	楕円形	2.23	0.85	0.10	
143	K-8	隅丸長方形	3.95	(0.60)	0.17	SK144 より新
144	K-8	隅丸長方形	3.95	(0.30)	0.15	SK143 より古
145	J-8	隅丸長方形	1.06	0.39	0.12	
146	J-8	隅丸長方形	1.78	0.49	0.16	
147	K-13	円形	1.05	0.92	0.25	
148	K-13	円形	0.71	0.70	0.38	
149	K-7	不整形	5.15	1.16	1.00	SK150 より古
150	K-7	不整形	(0.62)	(0.35)	0.47	SK149 より新
151	縄文時代の土壌参照					
152	L-10	楕円形	2.25	1.50	0.14	
153	L-10	楕円形	(1.55)	1.19	0.10	SK154 より新
154	縄文時代の土壌参照					
155	K-10	楕円形	1.00	0.50	0.11	
156	J-14	楕円形	1.37	0.86	0.42	SJ6 より新
157	G / H-12	円形	1.00	0.90	0.40	
158	G-11	円形	1.07	1.05	0.26	
159	G-11	円形	1.16	1.14	0.40	
160	G-11	楕円形	1.75	1.32	0.20	
161	G-10	楕円形	(1.60)	1.07	0.14	SK162, 163, 164 より古
162	G-10	楕円形	1.56	0.89	0.20	SK161 より新 SK163, 164 より古
163	G / H-10	隅丸長方形	3.12	0.54	0.24	SK161, 162 より新 SK164 より古

番号	グリッド	形態	長径 /m	短径 /m	深さ /m	備考
164	G / H-10	隅丸長方形	2.70	0.55	0.21	SK163 より新
165	G-10	楕円形	2.13	1.69	0.20	
166	G-11	円形	1.16	1.06	0.36	
167	H-9	円形	1.14	1.07	0.13	
168	G / H-9	楕円形	2.41	1.67	0.35	
169	—	—	—	—	—	欠番 GP へ変更
170	J-12	隅丸長方形	3.13	0.48	0.10	
171	H-19	楕円形	0.72	0.52	0.17	
172	平安時代の土壌参照					
173	—	—	—	—	—	欠番
174	H-7	隅丸長方形	2.44	0.62	0.30	SK175, 177 より新
175	G / H-7	隅丸長方形	(3.65)	0.73	0.15	SK174, 176 より古 SK177 より新
176	G / H-7	隅丸長方形	2.50	0.55	0.15	SK175, SK177 より新
177	G-7	隅丸長方形	(5.11)	0.51	0.24	SK174, 175, 176 より古 SK332, SD23 より新
178・179	平安時代の土壌参照					
180	—	—	—	—	—	欠番
181	H-7	円形	0.81	0.77	0.22	縄文期の可能性
182	—	—	—	—	—	欠番 GP へ変更
183	E-10	隅丸長方形	1.60	0.57	0.36	
184	E / F-10	隅丸長方形	2.44	0.76	0.35	
185	E-10	隅丸長方形	(2.44)	0.74	0.22	
186	G-7	円形	(0.86)	(0.80)	0.14	
187	G-7	隅丸長方形	4.45	0.58	0.28	
188	J-7 / 8	隅丸長方形	3.58	0.58	0.30	
189	—	—	—	—	—	欠番
190	G-7	隅丸長方形	3.47	0.53	0.32	
191	G-6	隅丸長方形	(0.95)	(0.54)	0.16	SK192, 193, 195 より新
192	G-6	隅丸長方形	(2.41)	0.72	0.22	SK191 より古 SK193 より新
193	G-6	隅丸長方形	(1.10)	0.58	0.28	SK191, 192 より古
194	J-13	円形	0.95	(0.93)	0.18	SD6 より新
195	G-6	隅丸長方形	(1.60)	0.64	0.23	SK191, 261 より古
196	—	—	—	—	—	欠番
197	J-8	隅丸長方形	1.85	0.36	0.08	SD6 より新
198	K-7	円形	0.97	0.90	0.10	
199	J-8	隅丸長方形	(2.21)	0.16	0.23	
200	J / K-7 / 8	楕円形	1.05	0.95	0.24	
201	J-6	楕円形	1.28	1.02	0.14	
202	I - 6 / 7	隅丸長方形	2.72	0.60	0.36	
203	J-7	隅丸長方形	1.74	0.94	0.30	SD17 より古
204	平安時代の土壌参照					
205	I-7	円形	1.10	1.07	0.51	SK206 より新
206	I-7	楕円形	(1.65)	1.13	0.36	SK205 より古
207	I-7	楕円形	(1.45)	0.50	0.20	
208	I-7	楕円形	(1.00)	0.72	0.21	
209	I-7	不整形	(2.25)	1.29	0.45	SK210 より古
210	I-7	不明	(0.82)	(0.70)	0.11	SK209 より新
211	I-7	不整形	1.39	0.66	0.44	
212	I-5	楕円形	0.89	0.76	0.07	
213	I-5	隅丸長方形	2.04	0.70	0.12	

番号	グリッド	形態	長径 /m	短径 /m	深さ /m	備考
214	I-5 / 6	隅丸長方形	(3.10)	0.47	0.30	
215	—	—	—	—	—	欠番
216	I-6	隅丸長方形	(1.96)	0.53	0.49	SE5 より新
217	I-5 / 6	隅丸長方形	2.82	0.50	0.47	
218	J-8	隅丸長方形	2.18	0.80	0.17	SB2 より古
219	I-6	隅丸長方形	1.45	0.66	0.34	
220	I-6	不明	1.61	(0.42)	0.20	SK322 より新
221	I-10	楕円形	0.60	0.35	0.19	
222	I-10	円形	0.79	(0.45)	0.21	
223	I-10	楕円形	(0.56)	0.56	0.23	
224	I-6	隅丸長方形	2.31	0.48	0.43	
225	I-6	隅丸長方形	2.16	0.62	0.30	SK226 より古
226	I-6	隅丸長方形	1.89	0.54	0.09	SK225, 227 より新
227	I-6	隅丸長方形	1.70	(0.55)	0.19	SK226 より古 SK228 より新
228	I-8	隅丸長方形	2.52	0.60	0.37	SK227, 228 より古
229	I-6 / 7	不整形	1.42	(0.83)	0.24	SK230, 236 より古
230	I-7	不整形	(1.93)	0.45	0.14	SK229, 231, 236 より新 一部 SK353 に変更
231	I-7	隅丸長方形	1.65	0.65	0.08	SK229, 230, 236 より古
232	H / I-7	隅丸長方形	3.01	0.54	0.13	SK353 より新
233	I-7	楕円形	1.34	1.10	0.39	SK234, 353 より 新 SK303 より古
234	I-7	不整形	1.00	(0.85)	0.24	SK233, 235, 304 より古
235	I-7	楕円形	0.52	(0.40)	0.44	SK234 より新 SK304 より古
236	I-7	楕円形	2.14	0.60	0.28	SK229 より新 SK230 より古
237	—	—	—	—	—	欠番
238	L-8 / 9	隅丸長方形	2.34	0.68	0.17	
239	縄文時代の土壌参照					
240	I-11	楕円形	0.89	0.68	0.15	
241	I-11	楕円形	0.88	0.65	0.18	
242	I-11	楕円形	1.40	1.00	0.30	
243	K-8	隅丸長方形	(1.10)	0.57	0.16	
244	K-8	隅丸長方形	(3.25)	0.84	0.18	SK245 より新
245	K-8	隅丸長方形	(1.87)	0.61	0.06	SK244 より古
246	K-8/9	隅丸長方形	(3.50)	0.52	0.11	SK247 より古
247	K-9	隅丸長方形	1.30	0.48	0.23	SK246 より古
248	K/L-8	隅丸長方形	(1.00)	0.55	0.65	SK249 より新 SK250 より古
249	K/L-8	隅丸長方形	(0.92)	(0.35)	0.28	SK248 より古
250	K/L-8	隅丸長方形	(2.14)	0.83	0.26	SK248 より新
251	—	—	—	—	—	欠番
252	K/L-8	隅丸長方形	1.40	0.47	0.08	SK253 より古
253	K-8	円形	0.60	0.58	0.24	SK252 より新
254	K/L-8	隅丸長方形	(1.53)	(0.83)	0.84	SK255 より新
255	K/L-8	え円形	0.77	0.67	0.67	SK254 より古
256	G-6	不明	(0.63)	(0.50)	0.08	SK257 より新
257	G-6	隅丸長方形	(1.20)	0.65	0.09	SK256, 258 より古 SK257 より新
258	G-6	隅丸長方形	1.35	0.46	0.10	SK257 より古 SK259 より新
259	G-6	不明	—	—	0.06	
260	G-6	隅丸長方形	1.75	(0.48)	0.15	SK195, 259 より新 SK261 より古
261	G-6	不明	—	—	0.24	SK195, 260 より新
262	縄文時代の土壌参照					

番号	グリッド	形態	長径 /m	短径 /m	深さ /m	備考
263	K / L-7	円形	0.95	0.95	0.09	
264	H-6	円形	1.01	0.97	0.30	
265	H-6	円形	1.45	1.42	0.58	
266	H-6	隅丸長方形	2.23	0.59	0.32	
267	I-10	楕円形	1.05	0.89	0.39	
268	I-8	楕円形	1.13	0.94	0.40	
269	H / I-8	隅丸長方形	1.74	0.88	0.15	
270	G-8	隅丸長方形	2.06	0.77	0.22	
271	H-8	円形	0.95	(0.62)	0.22	SK281, 282 より古
272	K-8	円形	0.75	(0.70)	0.19	SK273 より新
273	K-8	隅丸長方形	(2.16)	0.40	0.09	SK272 より古
274	K-8	楕円形	1.31	0.55	0.14	SK275 より新
275	K-8	楕円形	1.00	0.46	0.23	SK274 より古
276	B / C-8	隅丸長方形	1.91	0.72	0.17	
277	B-8	隅丸長方形	1.05	0.63	0.33	
278	B-8	楕円形	0.64	0.59	0.10	
279	B-8	隅丸長方形	1.20	0.57	0.15	
280	H-8	楕円形	1.05	0.67	0.59	
281	H-8	円形	1.35	1.20	0.31	SK271 より新 SK282 より古
282	H-8	隅丸長方形	(0.65)	0.69	0.15	SK271, 281 より新
283	H-8	隅丸長方形	1.23	0.77	0.41	
284	H-9	楕円形	1.25	1.11	0.50	SD19
285	E-6	円形	0.95	0.95	0.12	
286	H-8	隅丸長方形	(0.75)	0.72	0.44	SK287 より新
287	H-8	隅丸長方形	(0.74)	(0.45)	0.54	SK286 より古
288	K-8	円形	(1.05)	(0.40)	0.44	SK289, 290 より新
289	K-8	円形	0.76	0.73	0.47	SK288 より古 SK290 より新
290	K-8	不明	(0.41)	(0.32)	0.45	SK288, 289 より古
291	H-8	不整形	(0.63)	0.53	0.35	SK292 より古
292	H-8	隅丸長方形	(1.03)	0.56	0.42	SK291 より新
293	H-8	隅丸長方形	1.98	0.72	0.18	
294	H-7	隅丸長方形	(2.90)	0.55	0.31	SK295 より古
295	H-7	隅丸長方形	(2.06)	0.56	0.40	SK294, 296 より新
296	H-7	円形	1.85	(1.40)	0.44	SK295, 300 より古
297	H-7	隅丸長方形	2.23	0.70	0.30	SK298 より古
298	H-7	隅丸長方形	(3.44)	0.88	0.27	SK297, 315, 318 より新
299	H-7	隅丸長方形	4.64	(0.95)	0.27	SK300 より古 SK308 より新
300	H-7	隅丸長方形	2.57	(0.90)	0.42	SK296, 299, 314 より新
301	—	—	—	—	—	欠番
302	H-7	隅丸長方形	(1.27)	0.54	0.25	SK306 より古
303	H-7	隅丸長方形	(1.55)	1.55	0.55	SK233, 234, 353 より新 SK304 より古
304	H / I-7	不整形	0.95	0.75	0.26	SK303, 305 より新
305	H / I-7	楕円形	1.70	0.80	1.05	SK304 より古
306	H-7	隅丸長方形	1.40	0.52	0.24	SK302 より新
307	H / I-7	楕円形	1.17	0.79	0.22	
308	H-7	隅丸長方形	(1.02)	0.55	0.11	SK299, 308 より古
309	H-7	隅丸長方形	(2.15)	0.45	0.22	
310	I-7	楕円形	(1.03)	0.50	0.10	
311	I-7	楕円形	(1.10)	(0.70)	0.61	SK312 より古
312	I-7	楕円形	(1.64)	(0.98)	0.13	SK311 より新
313	H-7	円形	(2.30)	2.10	0.27	SK314 より新

番号	グリッド	形態	長径 /m	短径 /m	深さ /m	備考
314	H-7	不明	(1.44)	—	0.22	300, 313 より古
315	H-7	不明	(0.75)	(0.75)	0.18	SK298 より古
316	G-7	楕円形	1.04	(0.75)	0.26	
317	G-7	隅丸長方形	(3.88)	(0.50)	0.12	SD13, 14 より新
318	H-7	隅丸長方形	(1.50)	0.50	0.30	SK298, 319 より古
319	H-7	隅丸長方形	(1.43)	0.55	0.30	SK318 より新
320	I-7	円形	0.68	(0.52)	0.23	SK321 より新
321	I-7	楕円形	1.64	(1.26)	0.38	SK320 より古
322	I-6	隅丸長方形	1.31	0.53	0.28	SK220 より古
323	G-5	楕円形	1.32	1.15	0.10	
324	縄文時代の土壌参照					
325	I-9	円形	(2.49)	(1.14)	0.10	SD11 より古
326	平安時代の土壌参照					
327	K-8	円形	0.64	0.59	0.58	
328	E-7	楕円形	1.69	0.95	0.14	
329	F-6, G-6 / 7	隅丸長方形	(4.41)	0.70	0.18	
330	G-7	隅丸長方形	4.40	(0.58)	0.24	SK331 より新 SD23 より古
331	G-7	隅丸長方形	2.44	(0.40)	0.22	SK330 より古
332	G-7	円形	(1.59)	—	0.17	SK177 より古 SD23 より新
333	H-5	楕円形	1.05	0.79	0.70	
334	H-6	隅丸長方形	4.18	0.49	0.15	SB6 より古
335	H-6	不整形	2.48	0.47	0.20	
336	H-7	隅丸長方形	1.37	0.62	0.29	

番号	グリッド	形態	長径 /m	短径 /m	深さ /m	備考
337	H-6	隅丸長方形	1.56	0.35	0.14	SB6 より古
338	G-6	楕円形	1.27	(0.60)	0.30	
339 平安時代の土壌参照						
340	I-8	楕円形	1.98	0.87	0.11	
341	H / I-8	不整形	(1.33)	1.00	0.30	SK342 より古
342	H-8	円形	0.81	0.80	0.35	SK341 より新
343	E-10	隅丸長方形	1.97	0.35	0.22	
344	E / F-10	隅丸長方形	(1.52)	0.59	0.20	
345	E-10	隅丸長方形	(1.48)	0.37	0.10	SK346 より古
346	E-10	隅丸長方形	2.27	0.59	0.30	SK345 より新
347	F-10	隅丸長方形	2.08	0.47	0.17	
348	F-10	隅丸長方形	3.34	0.48	0.13	
349	H-6	隅丸長方形	0.81	0.52	0.24	
350	F-10	隅丸長方形	2.70	0.48	0.09	
351	F-10	隅丸長方形	2.35	0.70	0.17	
352 縄文時代の土壌参照						
353	I-7	楕円形	3.26	0.48	0.12	SK230 の一部変更 更含 SK232, 303 より古
354	H-7	隅丸長方形	1.06	0.42	0.05	
355	F-6 / 7	隅丸長方形	(0.70)	0.50	0.20	
356	F-6	不明	(1.46)	0.42	0.18	
357	L / M-10	不整形	1.94	1.34	0.37	旧 SX2 から変更
358	G-7	隅丸長方形	(1.85)	0.54	0.22	
359	G-7	楕円形	1.25	0.82	0.28	

第 36 表 土壌出土遺物一覧表

遺構名	非掲載遺物 (点数は破片数)
SK1	京信鉄絵碗 (18c 中), かわらけ, 須恵器坏
SK2	瀬美鉄釉灯明皿 (受皿), 瓦質土器焙烙, 瀬美磁細片
SK3	志戸呂徳利 (17 後 -18c), 瀬美磁変形皿 (近代), 瓦質土器焙烙, 須恵器甕, 坯
SK5	土師器甕
SK16	須恵器皿, 須恵器坏 (南比企, 酸化焼成)
SK17	瀬美灰釉小杯 (近世), かわらけ, 瓦質土器焙烙, 土師器高坏 (古墳前期), 須恵器坏細片, 泥岩塊
SK18	須恵器細片 (酸化焼成)
SK20	須恵器坏, 甕 (南比企), 土師器甕
SK21	鉄釘 (角釘)3, 土師器坏, 甕, 須恵器坏
SK24	肥磁仏花瓶 (18c)
SK25	ロクロ土師器坏, 土師器甕, 須恵器杯細片
SK26	須恵器坏 (酸化焼成)
SK27	大堀相馬土瓶 (19c 中), 瀬美天目茶碗, 焼土塊
SK28	土師器甕片, 緑泥片岩片
SK29	須恵器坏細片 (南比企), 土師器甕細片
SK31	瀬美擂鉢 (18c), 肥前内野山窯系碗, 志野丸碗細片, 須恵器甕片, 銅錢 (錢種不明)
SK33	肥磁碗 (18c 後), 瀬美灰釉徳利 (高田徳利)
SK34	瓦質土器焙烙, ロクロ土師器坏
SK35	肥磁碗 (くらわんか手4, コンニヤク判1, 外面青磁釉碗1, 18c), 瀬美香炉 (18c 前), 煙硝摺, 灰釉反皿 (17c 後), 肥前内野山系皿, 瓦質土器焙烙, 瓦片, かわらけ, 緑泥片岩片3, 楠形甕
SK36	瓦質土器焙烙片 2, 須恵器坏片
SK40	須恵器坏片, 土師器甕片, ロクロ土師器坏片, 火打石 (石英)

遺構名	非掲載遺物 (点数は破片数)
SK47	土師器甕片, ロクロ土師器坏片, 緑泥片岩細片
SK48	かわらけ片
SK50	須恵器壺甕類片, 環状鉄製品
SK51	須恵器壺甕類片
SK55	土師器甕 (武蔵型), 須恵器甕, 坯 (南比企)
SK58	土師器甕 (武蔵型), 須恵器坏 (酸化焼成) ロクロ土師器坏 [中近世土壌]
SK59	須恵器坏, ロクロ土師器高台坏 [中近世土壌]
SK62	須恵器坏 2 (南比企含)
SK66	土師器甕
SK70	土師器甕 (武蔵型), ロクロ土師器坏 2, 焼土塊 2
SK73	土師器甕 (武蔵型)11, 土師器甕
SK75	土師器甕 (武蔵型)2, 台付甕, 須恵器坏 4 (南比企うち1酸化焼成), ロクロ土師器坏
SK76	土師器甕 (武蔵型), 緑泥片岩片
SK78	ロクロ土師器坏, 高台坏, 須恵器杯 (南比企), 鍛冶滓
SK79	土師器甕
SK83	土師器甕 2, 須恵器坏 (南比企, 酸化焼成)
SK85	棒状鉄製品 (U字状)
SK86	須恵器坏 2 (南比企)
SK93	土師器甕 (武蔵型), 須恵器細片
SK100	椀形滓
SK102	瓦質土器焙烙 (SK101, 102 一括), 環状鉄製品
SK103	瀬美天目茶碗
SK109	土師器甕片
SK111	ロクロ土師器坏片

遺構名	非掲載遺物（点数は破片数）
SK112	瓦質土器内耳鍋（15-16c）
SK115	瓦質土器焙烙（17c前），土師器甕（武藏型），須恵器坏
SK116	土師器細片
SK121	かわらけ，土師器甕片
SK136	かわらけ
SK137	鉄製品
SK143・ 144	土師器甕，須恵器皿
SK146	土師器甕片3
SK147	須恵器杯（酸化焼成）
SK148	土師器甕片2，ロクロ土師器皿1
SK153	土師器甕（武藏型）2，ロクロ土師器坏片2
SK154	須恵器坏（南比企）
SK159	土師器甕片，ロクロ土師器坏細片，土壁材
SK161	須恵器坏
SK163	瓦質土器焙烙，土師器甕片
SK168	須恵器坏細片2
SK170	瓦質土器焙烙，須恵器坏片（南比企），ロクロ土師器杯
SK172	砥石片
SK173	瓦質土器焙烙
SK174	瀬美碗（柿釉）
SK176	瀬美磁爛徳利細片，ロクロ土師器坏片
SK177	ロクロ土師器坏片
SK183	瓦質土器焙烙，砥石片
SK184	瓦質土器焙烙，かわらけ片2
SK185	瀬美灰釉丸碗（大窯段階），土器種不明細片
SK187	瓦質土器焙烙2
SK188	瓦質土器焙烙（17c前），鉄製品，須恵器坏片（南比企）
SK191	かわらけ2（砂質），砥石（流紋岩，丸のみ工具痕）
SK192	瀬美擂鉢（18c），かわらけ（砂質），瓦質土器内耳鍋片
SK194	土師器甕片
SK195	瀬美擂鉢（17c後），肥磁細片
SK196	土師器甕片
SK202	瓦質土器内耳鍋片（中世カ），土師器甕片
SK203	かわらけ片2，土師器甕片2
SK206	土師器甕片2（含武藏型）
SK208	肥前内野山窯系皿，土師器甕片2

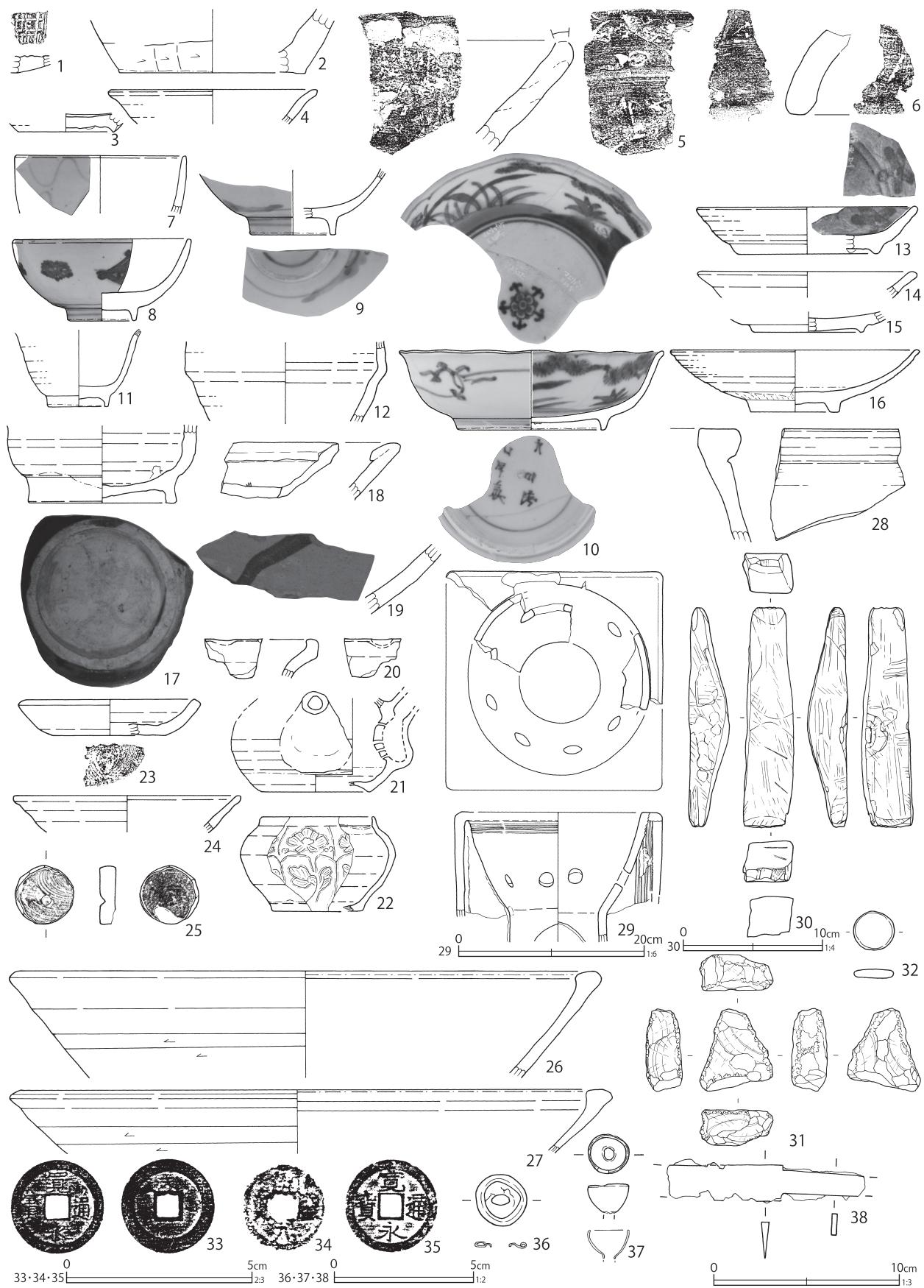
遺構名	非掲載遺物（点数は破片数）
SK210	鉄製品細片
SK212	肥磁碗（17c後-18c前），瓦質土器焙烙（18c）
SK214	志戸呂鉄釉徳利，肥磁細片，土師器甕片
SK215	鉄製品
SK216	瓦質土器焙烙，ロクロ土師器坏片
SK219	肥前吳器手碗
SK224	志戸呂鉄釉徳利，肥前吳器手碗片2，瓦質土器焙烙，かわらけ，土師器甕片，土師器内黒坏，須恵器坏片
SK228	かわらけ細片，土師器甕片
SK230	煙管
SK231	肥前吳器手碗片（被熱）
SK232	瓦質土器焙烙，瓦片
SK235	ロクロ土師器杯片，焼土塊
SK261	瓦質土器焙烙，肥磁細片，瀬美擂鉢（18c～）
SK265	京信灰釉碗片，板状鉄製品
SK267	土師器甕片
SK279	常滑甕片（15-16c）
SK288	瓦質土器焙烙，かわらけ（煤付着）
SK294	常滑甕，土師器甕片
SK296	須恵器甕片，ロクロ土師器杯片
SK298	肥磁細片，瓦質土器焙烙
SK299	瀬美香炉（18c前），石製硯，鉄釘（角釘）
SK308	土師器細片
SK309	志野皿（見込み輪剥），肥磁碗（くらわんか手）
Sk311	砥石（流紋岩，砥沢）
SK313	肥磁碗細片，砥石，鉄製品
SK314	肥磁酒杯
SK319	瀬美灰釉反皿（17c後），綠泥片岩
SK322	瓦質土器焙烙
SK323	瀬美反皿（17c後），瓦質土器焙烙
SK330	土師器甕片
SK332	瀬美天目茶碗細片，瓦質土器焙烙，かわらけ
SK333	瓦質土器焙烙，土師器甕（武藏型）
SK334	須恵器甕（南比企）
SK335	瀬美天目茶碗細片，肥磁碗（くらわんか手）
SK343	かわらけ片
SK348	土師器細片

（7）グリッド出土遺物

第116図にグリッドピットとグリッド出土の遺物を図示した。1～6は16世紀代までの遺物である。6は瓦片で胎土等の特徴より中世瓦と考えられる。7～11までは肥前系磁器、12～21は陶器である。12は所謂白天目だが、長石釉は透明感が強く光沢がある。17は瀬戸美濃系陶器の瓶類で、底部に「明暦元年・油入」等の墨書がある。明暦元年は西暦1656年にあたる。22は型押し成形の磁器である。25はロクロ土師器底部

の転用土製品である。26・27は施釉土器質の陶器鉢で、山王焼に類似する。28は在地産土師質土器の甕口縁部、29は三河産土器の焜炉と考えられる。30～32は石製品である。30は砥沢産と考えられる砥石、31は玉髓製の火打石である。

33～38は金属製品である。33～35は古銭で、33は寛永通寶の新寛永（文銭）、34は開元通寶、35は寛永通寶の古寛永である。36・37は煙管の雁首部分で、36は完全に潰れている。雁首銭の可能性がある。



第116図 グリッド出土遺物

第37表 グリッド出土遺物観察表(第116図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	グリッド・ Pit名	備考	図版
1	陶器	鉢	—	[0.9]	—	K	5	良好	灰黄	SJ18C	古瀬戸 内面鉢目 14~15c	38-1
2	陶器	甕	—	[3.4]	(10.0)	D E H I K	10	普通	灰白	J-7G	常滑 内面自然釉状に降灰 中世	
3	陶器	丸皿	—	[1.9]	(5.2)	C K	15	普通	灰	G-6G	瀬戸美濃系 内外面灰釉 高台内輪トチ痕	38-2
4	陶器	菱皿	(11.0)	[1.8]	—	I K	5	良好	灰黄褐	E-5G	瀬戸美濃系 内外面鉄釉 大窯第3~4階	38-3
5	瓦質土器	片口鉢	—	[5.9]	—	D E I K	5	普通	灰白	J-8G P21	瀬戸美濃系 内外面鉄釉 大窯第3~4階 段 外面煤付着 口縁部二次利用(転用砥具)	
6	瓦	丸瓦	高さ [4.4]cm、幅 [3.6]cm、長さ [4.5]cm			D I K	5	普通	にぶい黄	I-7G P9	凸面ヘラナデ 凹面布压痕 中世瓦	38-4
7	磁器	碗	(9.0)	[3.0]	—	H I K	10	良好	白	L,M-8G	肥前系 内外面施釉 外面染付(網目文)	38-5
8	磁器	碗	(9.4)	[4.3]	(3.7)	H I K	25	良好	白	拡張部 A区-2	肥前系 内外面施釉 外面染付(コンニヤク判) 18c前	
9	磁器	碗	—	[3.5]	(4.65)	H I K	25	良好	白	I-7G P9	肥前系 内外面施釉 外面染付 18c前	38-6
10	磁器	皿	(14.0)	4.2	(7.8)	K	30	良好	白	E-10G	肥前系 内外面施釉 染付(見込み五弁花文) 18c前	38-7
11	磁器	小杯	—	[4.1]	3.2	H I K	60	普通	白	J-7G	肥前系 内外面施釉 17c後	38-8
12	陶器	天目茶碗	—	[4.3]	—	H K	10	良好	灰白	K-9G	瀬戸美濃系 内外面長石釉 17c前~中(白天目)	38-9
13	陶器	丸皿	(11.0)	[2.5]	(7.5)	H I K	15	普通	灰黄褐	D-9G	瀬戸美濃系 内外面長石釉(志野鉄絵皿)	
14	陶器	皿	(11.5)	[1.2]	—	H K	5	普通	灰白	J-7G P13	瀬戸美濃系 内外面長石釉 17c初(志野丸皿)	
15	陶器	皿	—	[1.1]	(6.0)	H I K	20	普通	灰白	J-7G	瀬戸美濃系 内外面長石釉 17c初(志野丸皿)	38-10
16	陶器	皿	(13.2)	[3.3]	4.8	H K	60	良好	灰白	M-15G	肥前内野山窯系 内面銅緑釉 外面透明釉 17c末~18c初	
17	陶器	瓶類か	—	[4.1]	8.0	K	50	良好	灰白	D-10G	瀬戸美濃系 内外面鉄釉 底面墨書「明暦元年/油入/八月吉日」 内面窯道具痕	38-11
18	陶器	擂鉢	—	[3.0]	—	I	5	良好	にぶい黄	H-7G	瀬戸美濃系 内外面鉄釉 内面擂目	38-12
19	陶器	鉢	—	[3.7]	—	K	5	良好	橙灰	N-16G	瀬戸美濃系 内外面灰釉 内面鉄絵(大平鉢) 17c後	
20	陶器	鉢類か	—	[2.1]	—	I K	5	普通	浅黄橙	G-6G	瀬戸美濃系 内外面灰釉	38-13
21	陶器	急須	—	[5.3]	(6.0)	K	30	良好	灰黄	C-5G	大堀相馬系 内外面灰釉 19c後	
22	磁器	小壺	(6.0)	5.0	(4.8)	K	25	良好	灰白	H-11G	内外面施釉 型押成形	38-14
23	かわらけ	小皿	(9.8)	1.9	(6.0)	H I K	15	普通	にぶい黄	H-12G P5	底部糸切痕(左) 胎土砂質 内面油煙付着	
24	かわらけ	小皿	(12.0)	[1.9]	—	E H K	5	普通	にぶい橙	J-7G	胎土粉質	38-15
25	土製品	土製円盤	径 3.2cm、厚さ 0.85cm			K	100	普通	灰黄	J-6G	ロクロ土師器底部を転用 貫通しない孔あり	38-16
26	陶器	鉢	(30.7)	[5.7]	—	C E I K	10	普通	橙	D-6G	東松山山王焼か 内面施釉	38-17
27	陶器	鉢	(30.7)	[3.4]	—	D E K	10	良好	橙	C-5G, D-6G	東松山山王焼か 内面施釉 外面煤付着	38-18
28	土師質土器	甕	—	(6.0)	—	E H I K	5	良好	橙		内外面に黒色物質の付着	
29	土師質土器	焜炉	23.6	14.0	—	A E I K	30	普通	にぶい橙		三河産 19c後	38-19
30	石製品	砥石	長さ 15.8cm、幅 3.7cm、厚さ 2.9cm、重さ 202.7g					D-6G		流紋岩 完形 4面使用 丸ノミ(あるいは平ノミ)状工具痕		
31	石製品	火打石	長さ 4.4cm、幅 3.9cm、厚さ 1.9cm、重さ 37.1g					H-5G		玉髓 完形	38-20	
32	石製品	碁石	長さ 2.1cm、幅 2.2cm、厚さ 0.5cm、重さ 3.9g					H-6G P8		粘板岩 完形		
33	銅製品	錢貨	径 2.5mm、厚さ 1.0mm、重さ 13.11g					H-5G P14		寛永通寶(新寛永・文錢)		
34	銅製品	錢貨	径 23.0mm、厚さ 0.9mm、重さ 1.97g					J-6G		開元通寶 唐 960年	38-21	
35	銅製品	錢貨	径 24.8mm、厚さ 1.0mm、重さ 2.44g					K-7G		寛永通寶(古寛永)		
36	鉄製品	煙管	長さ 1.8cm、厚さ 0.05cm、重さ 2.2g					I-7G P14		火皿を押し潰す 雁首錢か	38-22	
37	鉄製品	煙管	外径 1.6 × 1.5cm、高さ [1.1]cm、厚さ 0.05cm、重さ 1.9g					N-15G P11		火皿		
38	鉄製品	刀子	長さ [7.7]cm、刃部分 [3.8]cm、刃部幅 1.5cm、背幅 0.3cm、重さ 10.3g									

V 調査のまとめ

縄文時代の前領家遺跡

縄文時代の特色として、柄鏡形の住居跡が複数軒検出されたことが挙げられる。出土した土器は、加曽利E III式後半からE IV式のものに限定されており、比較的短期間に集落が営まれた点が確認された。周辺地域には、加曽利E II式期頃までの住居跡が主体的に検出された諏訪野遺跡、これと並行しつつ、より遅い段階まで住居跡が認められる中井遺跡が所在し、中期中葉以降に拠点的集落が形成されてきた様子が明らかになりつつある。そういう地域にあって、加曽利E III式期以降に小規模な集落が確認された前領家遺跡や、大平遺跡・楽中遺跡の事例は大規模集落の解体と再編を踏まえて広い視点から分析していく必要がある。

古墳時代の前領家遺跡

古墳時代前期の遺構は、住居跡が1軒のみである。住居跡から出土した土器は極めて少なく、台付甕二個体と高坏坏部破片のみであった。このような遺構の在り方は、北側に近接する大平遺跡と似ており、各所で短期間の土地利用を繰り返す生活サイクルを想起させる。一方で、前領家遺跡から谷を挟んで南西に位置する三ツ木遺跡では、多くの住居跡が確認されており、この地域の拠点的集落と考えられる。熊野神社古墳のような首長墓形成の背景として、この地域の3～4世紀の地域史像を明らかにしていくことが今後の課題である。

平安時代の前領家遺跡

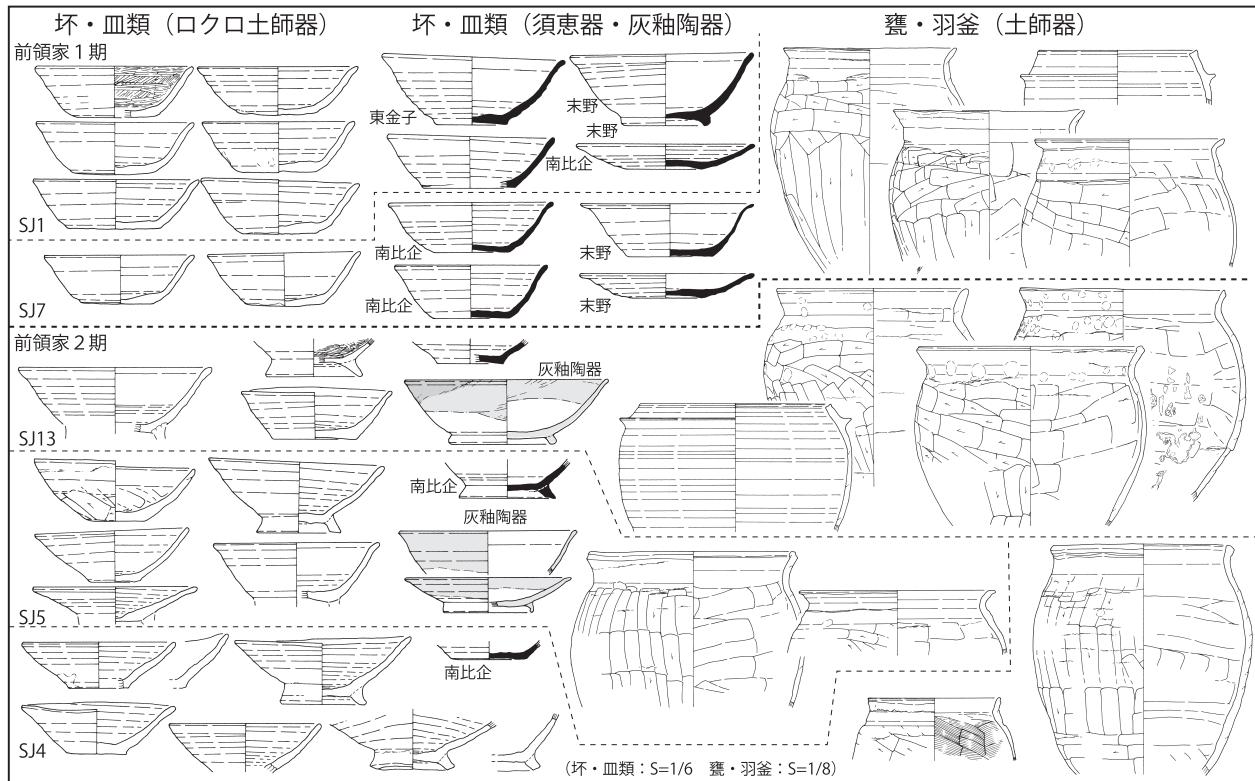
平安時代の集落では住居跡15軒が検出された。集落は9世紀後葉～10世紀前葉の限定された時期に営まれ、当該地域においては稀な時期の集落跡として位置付けられる。なかでも鍛冶関連の遺構が複数確認されたのは注目される。前領家遺跡に若干遡る領家・宮下遺跡（上尾市教育委員会・上尾市遺跡調査会2007）で鍛冶関連遺構が検出

されている点も踏まえて、留意する必要がある。律令期の足立郡域においては、主に元荒川流域において製鉄遺跡が展開した。時期的には8世紀中葉から9世紀代にピークがあるよう、前領家遺跡を中心とした荒川流域の遺跡とは少し時期差がある。ただし、このような足立郡内の製鉄技術が、領家・宮下遺跡や前領家遺跡における鍛冶技術導入の遠因となった可能性は否定できないだろう。

ところで、前領家遺跡では他の足立郡の遺跡には認められない特色もある。一つには、カマド構築材に緑泥片岩を多用する点である。緑泥片岩は荒川上流の秩父地域、入間川流域の比企地域北部に産出し、これらの地域から運ばれたものである。古墳石室材、石棺材からの転用も想定可能であるが、カマド石材に比企丘陵産とみられる凝灰岩も認められること、北武藏に多い土師器羽釜が多く出土する点を考慮すると、これらの地域から直接搬入された可能性も否めない。そもそもカマド構築材に緑泥片岩を用いる発想自体が、当地域では自発的に発生し得ないといえよう。

二つ目に、土師器羽釜が比較的豊富に出土している点である。羽釜が足立郡の遺跡から出土しないわけではないが、複数の住居跡から復元可能な羽釜が出土した事例は初めてであろう。その系譜については、今後の詳細な検討が必要だが、県北部や群馬県地域との交流も考慮しなければならない。このように前領家遺跡は足立郡域にありながら、その北部に所在する地理的特徴に応じて、比企・県北部からの影響を窺わせる事象が認められている。

一方で出土土器を概観すれば、足立郡域を中心とした大宮台地の地域性を顕著に表す点も無視できない。出土した土器は、第117図に示すように、前後大きく2時期のものが認められる。第1・7号住居跡では、各地の須恵器坏類とともに、体部



第 117 図 平安時代の遺物の様相

が緩やかに内湾して立ち上がるロクロ土師器壺が伴う。底部は放射状のヘラケズリによって調整される。共伴する甕は武藏型甕の範疇で捉えられる薄手のものが多い。このような第 1 期の土器群は 9 世紀後葉に位置付けられる。一方で、第 4・5 号住居跡では須恵器がほとんど伴わず、ロクロ土師器壺類も口径に対し底径が著しく小さいものが主体である。これに、口唇部が僅かに内側に折り返される寸胴の甕が伴う。これらの甕は末木が甕 C 類とした、外面に縦のヘラケズリを伴うものである（末木 2006）。第 1 期に後出する様相であり、

第 2 期は 10 世紀前葉に位置付けられよう。他に、内黒の土師器壺や羽釜を伴う第 13 号住居の例も第 2 期の範疇で捉えておくが、若干時期が遡る様相を示している。

前領家遺跡では、9～10 世紀の遺構・遺物が多く出土している。須恵器の減少やロクロ土師器の様相に、土器流通の大きな変化を読み取ることができる。地域を超えた交流と、地域的土器生産への変化という二面性をもった様相は、律令体制が大きく変容する時期を象徴する現象と言えるであろう。後日、再検討したい。

引用・参考文献

- 上尾市教育委員会・上尾市遺跡調査会 2007 『領家・宮下遺跡－第 1～3 次調査－』
- 桶川市 1979 『桶川市史』第 2 卷 原始・古代資料編
- 北本市 1990 『北本市史』第 3 卷 自然・原始資料編
- 公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2016 『諏訪野遺跡 II』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第 421 集
- 公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2016 『大平遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第 424 集
- 埼玉考古学会 2006 『古代武藏国の須恵器流通と地域社会』 埼玉考古別冊 9
- 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2011 『大山遺跡 第 13・14 次』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第 379 集
- 末木啓介 2004 「北武藏の羽釜」『研究紀要』第 26 号 埼玉県立歴史資料館
- 末木啓介 2006 「足立郡における九世紀から十世紀の煮沸具について」『埼玉の考古学 II』